

茨城県教育財団文化財調査報告第147集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 5

前田村遺跡 J・K区  
(上 卷)

平成 11 年 3 月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第147集

# 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画 整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 5

まえだむら  
前田村遺跡 J・K区  
(上 卷)

平成 11 年 3 月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、周辺環境との調和を重視し、多様なニーズに対応した住居環境を整備しつつ、新しいまちの形成を図るために、公共施設の整備改善と宅地の利用増進を進めております。

その一環として、「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業」を進めており、その予定地内に埋蔵文化財包蔵地である前田村遺跡、高野台遺跡、西ノ脇遺跡が確認されています。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と開発地域内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、平成4年4月から平成9年3月までの5か年間にわたって発掘調査を実施いたしました。その成果の一部は、既に「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1・2・3」として刊行したところであります。「調査報告書4」についても、本書と同時に刊行いたしました。

本書は、平成8年度に行った前田村遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深めると共に、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、伊奈町教育委員会、谷和原村教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成11年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 橋本 昌

# 例 言

- 1 本書は、平成8年度に茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した茨城県筑波郡谷和原村大字田字鴻巣690番地-1ほかに所在する前田村遺跡J・K区（32.2㌔）の発掘調査報告書である。
- 2 前田村遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	中 島 弘 光	平成7年4月～	
	齋 藤 住 郎	平成8年4月～平成10年3月	
	川 俣 勝 慶	平成10年4月～	
常 務 理 事	梅 澤 秀 夫	平成8年4月～平成9年3月	
	齋 藤 紀 彦	平成9年4月～	
事 務 局 長	小 林 隆 郎	平成8年4月～平成9年3月	
	西 村 敏 一	平成9年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	鈴 木 三 郎	平成10年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～
	係 長	清 水 薫	平成8年4月～平成9年3月
	主 任 調 査 員	小 高 五 十 二	平成8年4月～平成10年3月
	主 任 調 査 員	池 田 晃 一	平成10年4月～
	主 任	川 崎 敦 司	平成10年10月～（平成10年4月～9月主事）
経 理 課	課 長	河 崎 孝 典	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	佐 藤 健	平成10年4月～
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～平成9年3月
	課 長 代 理	清 水 薫	平成10年4月～
	主 任	小 池 孝 孝	平成7年4月～平成10年3月
	主 任	宮 本 勉	平成9年4月～
主 任 事	木 下 光 保	平成10年4月～	
	柳 沢 松 雄	平成8年4月～平成9年3月	



調査 第1課	課長(部長兼務)	沼田 文夫	平成8年4月～
	班 長	根本 康弘	平成8年4月～平成9年3月
	主任調査員	小林 孝	平成8年4月～平成9年3月 調査
	主任調査員	飯島 一生	平成8年4月～平成9年3月 調査
	副主任調査員	吹野 富美夫	平成8年4月～平成9年3月 調査
整理 課	課 長	川井 正一	平成10年4月～
	首席調査員	萩野谷 悟	平成10年4月～
	主任調査員	飯島 一生	平成10年4月～平成11年3月 整理・執筆・編集
	主任調査員	小林 孝	平成10年10月～平成11年3月 整理・執筆

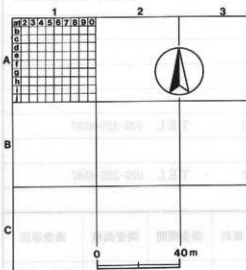
- 本書は、第3章第3節7、第4節を小林が、それ以外を飯島が執筆し、飯島が編集した。
- 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 人骨、獣骨等の鑑定・分析については国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏に依頼し、玉稱をいただいた。分析結果は付章として報告する。
- 本書の作成にあたり、中世の遺構について、笹生衛氏（千葉県教育庁文化課）；桃崎祐輔氏（筑波大学大学院）から御教示をいただいた。
- 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

## 8 遺跡の概略

ふりがな	いな・やわらまのうりようふとくていとらかくせりじぎょうちないまいぞうふんかざいらようさほうこくしよ							
書名	伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
副書名	前田村遺跡J・K区							
巻次	5							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第147集							
著者名	小林 孝 飯島 一生							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL 029-225-6587			
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL 029-225-6587			
発行日	1999 (平成11)年3月19日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
ままだわら 前田村遺跡	いばらきけんつくばごんやわら 茨城県筑波郡谷和原 ひらおのおざたあざごうのす 村大字田字鴻巣 690番地-11ほか	08483 — 19	36度 0分 11秒	140度 2分 6秒	20m — 22m	950401 — 960331	36,280㎡	伊奈・谷和 原丘陵部特 定土地区画 整理事業の 事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
前田村遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	16軒	縄文土器、石器	中世の土坑、地下式墳、井戸、溝等が遺構群として存在し、大きな墓域を形成する。		
			土坑	35基				
			古墳時代	竪穴住居跡			28軒	土師器、須恵器
	平安時代	竪穴住居跡	23軒	土師器				
墓跡	中世	土坑	496基	土師質土器				
			方形竪穴遺構	10軒	陶器			
			地下式墳	16基				
			井戸	5基				
			溝	4条				

# 凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅱ系座標に準拠し、X軸=+500m、Y軸=-+17,480mの交点を前田村遺跡の基準点とした。



大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a区」、「B2b区」のように呼称した。

なお、当遺跡は便宜上、A-Kに分けられており、その位置関係については第2図を参照されたい。

第1図 調査区呼称方法概念図

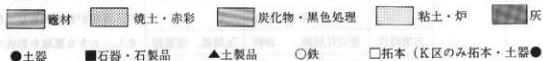
- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 土坑-SK 井戸-SE 溝-SD 焼土遺構-F ビット-P

遺物 土器・陶器-P 土製品-DP 石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本記録土器-TP

土層 擾乱-K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

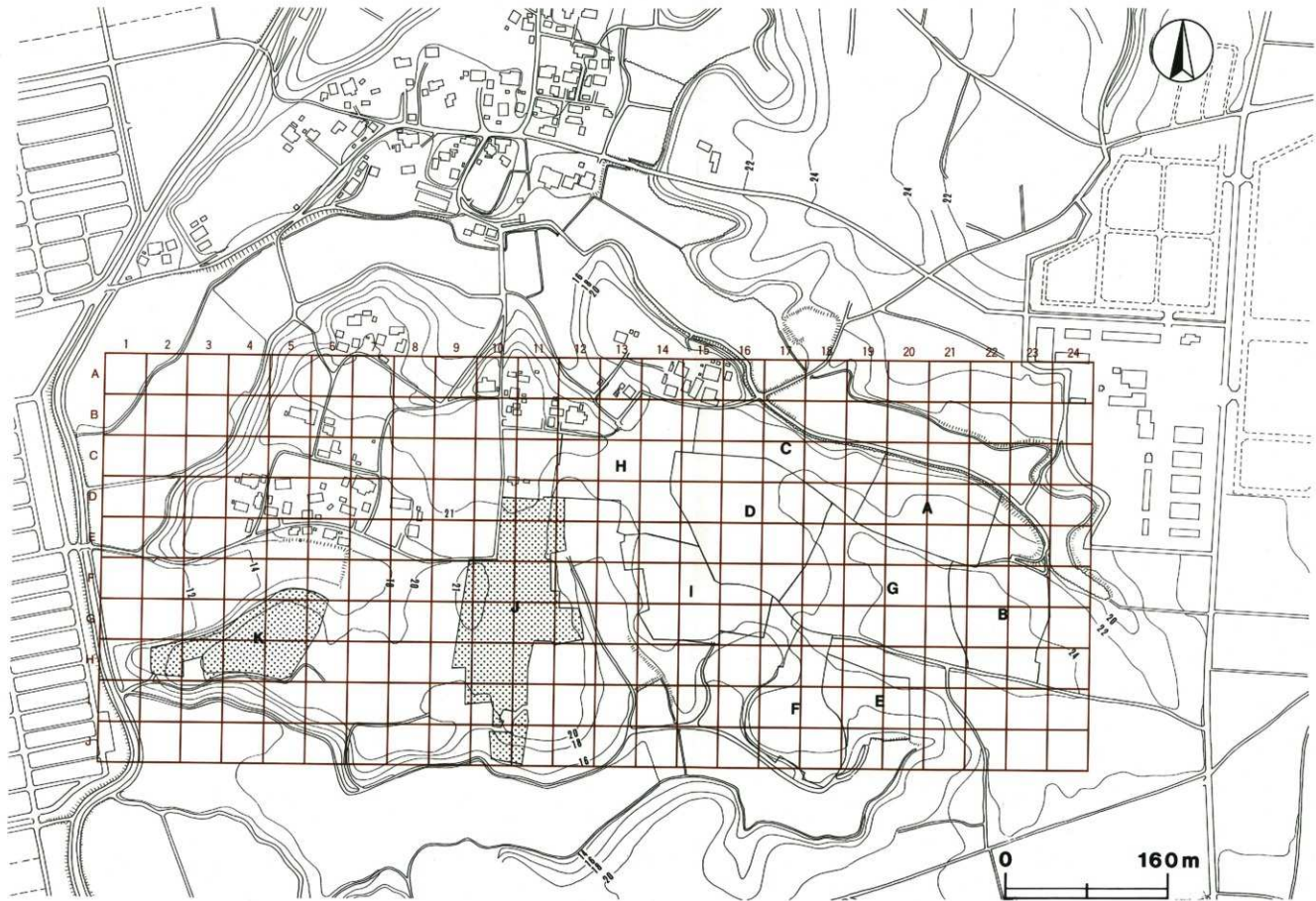
(1) 遺跡の全体図は250分の1、住居跡や土坑、不明遺構は60分の1に縮尺し掲載した。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もある。

(3) 「主軸方向」は、炉あるいは竈を持つ住居跡については、それらを通る軸線方向とし、炉あるいは竈がない住居跡やその他の遺構については、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E、N-10°-W）。なお、〔 〕を付したものは推定である。

(4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-体部径とし、単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

(5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測番号（P、DP、Q、M等）、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。



第2図 前田村遺跡地区設定図

# 目次

— 上 卷 —

序

例言

凡例

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 前田村遺跡	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 J区の遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
(2) 土坑	29
2 古墳時代の遺構と遺物	65
(1) 竪穴住居跡	65
3 平安時代の遺構と遺物	151
(1) 竪穴住居跡	151
4 中世の遺構と遺物	183
(1) 第4遺構群	183
ア 墓塚	183
イ 火葬土坑	186
ウ 地下式墳	188
エ 井戸跡	195
オ 溝	198
カ ビット群	200
キ 土坑	203
(2) 第5遺構群	225
ア 方形竪穴状遺構	225
イ 火葬土坑	229
ウ 地下式墳	234
エ 井戸跡	236
オ 土坑	238

(3) 第6遺構群	257
ア 方形竪穴状遺構	257
イ 火葬土坑	263
ウ 地下式竈	266
エ 井戸跡	272
オ 土坑	273
(4) その他の遺構	281
5 時期不明の遺構	283
(1) 竪穴住居跡	283
(2) 焼土遺構	284
(3) 溝	284
(4) ビット群	287
(5) 不明遺構	289
(6) 土坑	289
6 遺構外出土遺物	292
7 まとめ	303

— 下 巻 —

第4節 K区の遺構と遺物	1
1 縄文時代遺構と遺物	1
(1) 竪穴住居跡	1
(2) 土坑	11
2 平安時代の遺構と遺物	14
(1) 竪穴住居跡	14
3 中・近世の遺構と遺物	19
(1) 火葬土坑	19
(2) 地下式竈	20
(3) 土坑	22
4 時期不明の遺構	24
(1) 道路状遺構	24
(2) 溝	25
(3) その他の土坑	26
5 遺構外出土遺物	28
6 まとめ	34
第4章 前田村遺跡の変遷	36
付章	73
写真図版	75

# 插图目次

## — 上 卷 —

第1图	调查区称呼方法概念图	第36图	第2997号土坑实测图	37
第2图	前田村遺跡地区設定图	第37图	第2997号土坑出土遺物实测图	37
第3图	前田村遺跡周辺遺跡分布图	第38图	第2998号土坑实测图	38
第4图	K区基本土層图	第39图	第2998号土坑出土遺物实测图	39
第5图	第503号住居跡(炉)实测图	第40图	第3000号土坑实测图	39
第6图	第503号住居跡出土遺物实测图	第41图	第3000号土坑出土遺物实测图(1)	40
第7图	第506号住居跡实测图	第42图	第3000号土坑出土遺物实测图(2)	41
第8图	第507号住居跡实测图(1)	第43图	第3001号土坑实测图	42
第9图	第507号住居跡实测图(2)	第44图	第3001号土坑出土遺物实测图	43
第10图	第507号住居跡出土遺物实测图(1)	第45图	第3130号土坑实测图	44
第11图	第507号住居跡出土遺物实测图(2)	第46图	第3130号土坑出土遺物实测图	44
第12图	第508号住居跡实测图	第47图	第3131号土坑实测图	45
第13图	第508号住居跡炉实测图	第48图	第3131号土坑出土遺物实测图	46
第14图	第508号住居跡出土遺物实测图	第49图	第3133号土坑实测图	46
第15图	第524号住居跡实测图	第50图	第3133号土坑出土遺物实测图	46
第16图	第524号住居跡出土遺物实测图	第51图	第3135号土坑·出土遺物实测图	47
第17图	第535号住居跡(炉)·出土遺物实测图	第52图	第3237号土坑实测图	48
第18图	第536号住居跡实测图	第53图	第3237号土坑出土遺物实测图	49
第19图	第536号住居跡出土遺物实测图	第54图	第3248号土坑实测图	50
第20图	第550号住居跡实测图	第55图	第3248号土坑出土遺物实测图	50
第21图	第550号住居跡出土遺物实测图	第56图	第3250号土坑实测图	51
第22图	第553号住居跡(炉)实测图	第57图	第3250号土坑出土遺物实测图	51
第23图	第553号住居跡出土遺物实测图	第58图	第3269号土坑实测图	51
第24图	第2986号土坑实测图	第59图	第3269号土坑出土遺物实测图	52
第25图	第2986号土坑出土遺物实测图	第60图	第3273号土坑实测图	53
第26图	第2989号土坑实测图	第61图	第3273号土坑出土遺物实测图	53
第27图	第2989号土坑出土遺物实测图	第62图	第3323号土坑实测图	54
第28图	第2990号土坑实测图	第63图	第3323号土坑出土遺物实测图	55
第29图	第2990号土坑出土遺物实测图	第64图	第3325号土坑实测图	56
第30图	第2991号土坑实测图	第65图	第3325号土坑出土遺物实测图	57
第31图	第2991号土坑出土遺物实测图	第66图	第3326号土坑实测图	57
第32图	第2992·2993土坑实测图	第67图	第3326号土坑出土遺物实测图(1)	59
第33图	第2992号土坑出土遺物实测图	第68图	第3326号土坑出土遺物实测图(2)	60
第34图	第2993号土坑出土遺物实测图	第69图	第3389号土坑实测图	61
第35图	第2994号土坑实测图	第70图	第3389号土坑出土遺物实测图	61

第71図	その他の土坑実測図	63	第109図	第537号住居跡実測図	111
第72図	第505号住居跡実測図	66	第110図	第537号住居跡出土遺物実測図	112
第73図	第505号住居跡電実測図	67	第111図	第538号住居跡実測図	113
第74図	第505号住居跡出土遺物実測図	68	第112図	第538号住居跡出土遺物実測図	114
第75図	第511号住居跡実測図	70	第113図	第539号住居跡実測図	115
第76図	第511号住居跡電実測図	71	第114図	第539号住居跡電実測図	116
第77図	第511号住居跡出土遺物実測図	71	第115図	第539号住居跡出土遺物実測図	117
第78図	第513号住居跡実測図	73	第116図	第540号住居跡実測図	119
第79図	第514号住居跡実測図(1)	75	第117図	第540号住居跡出土遺物実測図	119
第80図	第514号住居跡実測図(2)	76	第118図	第544号住居跡実測図(1)	121
第81図	第514号住居跡出土遺物実測図(1)	77	第119図	第544号住居跡実測図(2)	122
第82図	第514号住居跡出土遺物実測図(2)	78	第120図	第544号住居跡出土遺物実測図(1)	123
第83図	第519号住居跡実測図	79	第121図	第544号住居跡出土遺物実測図(2)	124
第84図	第519号住居跡出土遺物実測図(1)	80	第122図	第544号住居跡出土遺物実測図(3)	125
第85図	第519号住居跡出土遺物実測図(2)	81	第123図	第545号住居跡実測図	126
第86図	第520号住居跡実測図	84	第124図	第545号住居跡出土遺物実測図	127
第87図	第520号住居跡出土遺物実測図(1)	85	第125図	第546号住居跡実測図	129
第88図	第520号住居跡出土遺物実測図(2)	87	第126図	第546号住居跡出土遺物実測図	130
第89図	第521号住居跡実測図	87	第127図	第547号住居跡実測図	132
第90図	第521号住居跡出土遺物実測図	87	第128図	第547号住居跡出土遺物実測図	133
第91図	第525号住居跡実測図	89	第129図	第548号住居跡実測図	134
第92図	第525号住居跡電実測図	90	第130図	第548号住居跡出土遺物実測図	135
第93図	第525号住居跡出土遺物実測図(1)	91	第131図	第549号住居跡実測図	136
第94図	第525号住居跡出土遺物実測図(2)	92	第132図	第549号住居跡出土遺物実測図	136
第95図	第526号住居跡実測図(1)	95	第133図	第551号住居跡実測図	137
第96図	第526号住居跡実測図(2)	96	第134図	第551号住居跡出土遺物実測図	138
第97図	第526号住居跡出土遺物実測図	97	第135図	第552号住居跡実測図	140
第98図	第527号住居跡実測図	98	第136図	第552号住居跡出土遺物実測図	141
第99図	第527号住居跡電実測図	99	第137図	第554号住居跡実測図	142
第100図	第527号住居跡出土遺物実測図(1)	100	第138図	第554号住居跡出土遺物実測図	143
第101図	第527号住居跡出土遺物実測図(2)	101	第139図	第555号住居跡実測図	145
第102図	第531号住居跡実測図	103	第140図	第555号住居跡出土遺物実測図	145
第103図	第531号住居跡電実測図	104	第141図	第560号住居跡実測図	146
第104図	第531号住居跡出土遺物実測図(1)	105	第142図	第560号住居跡出土遺物実測図	147
第105図	第531号住居跡出土遺物実測図(2)	106	第143図	第564号住居跡実測図	148
第106図	第532号住居跡実測図	108	第144図	第564号住居跡出土遺物実測図	149
第107図	第532号住居跡出土遺物実測図	109	第145図	第504号住居跡実測図	151
第108図	第537号住居跡実測図	110	第146図	第504号住居跡出土遺物実測図	152



第147图	第509号住居跡実測図	153	第185图	第3084号土坑出土遺物実測図	187
第148图	第509号住居跡出土遺物実測図	153	第186图	第3104号土坑実測図	187
第149图	第510号住居跡実測図	154	第187图	第32号地下式墳実測図	188
第150图	第510号住居跡出土遺物実測図	155	第188图	第32号地下式墳出土遺物実測図	189
第151图	第512号住居跡・出土遺物実測図	156	第189图	第33・34号地下式墳実測図	190
第152图	第515号住居跡実測図	157	第190图	第33号地下式墳出土遺物実測図	191
第153图	第516号住居跡実測図	158	第191图	第35号地下式墳実測図	192
第154图	第516号住居跡出土遺物実測図	159	第192图	第36号地下式墳実測図	193
第155图	第517号住居跡実測図	161	第193图	第36号地下式墳出土遺物実測図(1)	194
第156图	第517号住居跡出土遺物実測図	161	第194图	第36号地下式墳出土遺物実測図(2)	195
第157图	第518号住居跡実測図	162	第195图	第34号井戸跡出土遺物実測図	195
第158图	第518号住居跡出土遺物実測図	163	第196图	第34・35号井戸跡実測図	196
第159图	第522号住居跡・出土遺物実測図	164	第197图	第35号井戸跡出土遺物実測図	197
第160图	第533号住居跡実測図	165	第198图	第145・146・147号溝土層断面図	199
第161图	第534号住居跡実測図	166	第199图	第147号溝出土遺物実測図	199
第162图	第534号住居跡出土遺物実測図	167	第200图	第1号ピット群実測図(1)	200
第163图	第541号住居跡実測図	168	第201图	第1号ピット群実測図(2)	201
第164图	第542号住居跡実測図	169	第202图	第3003号土坑・出土遺物実測図	203
第165图	第543号住居跡実測図	170	第203图	第3007号土坑・出土遺物実測図	204
第166图	第543号住居跡出土遺物実測図	171	第204图	第3012号土坑・出土遺物実測図	205
第167图	第556号住居跡実測図	172	第205图	第3014号土坑実測図	206
第168图	第556号住居跡出土遺物実測図	172	第206图	第3014号土坑出土遺物実測図	206
第169图	第557号住居跡実測図	174	第207图	第3058a号土坑・出土遺物実測図	207
第170图	第558号住居跡実測図	174	第208图	第3067号土坑実測図	208
第171图	第559号住居跡実測図	175	第209图	第3067号土坑出土遺物実測図	209
第172图	第559号住居跡出土遺物実測図	176	第210图	第3089a号土坑実測図	209
第173图	第561号住居跡実測図	176	第211图	第3089a号土坑出土遺物実測図(1)	210
第174图	第561号住居跡出土遺物実測図	177	第212图	第3089a号土坑出土遺物実測図(2)	211
第175图	第562号住居跡実測図	178	第213图	第3093号土坑・出土遺物実測図	211
第176图	第562号住居跡出土遺物実測図	178	第214图	第3101号土坑実測図	212
第177图	第563号住居跡実測図	179	第215图	第3101号土坑出土遺物実測図	212
第178图	第563号住居跡出土遺物実測図	180	第216图	土坑実測図(1)	214
第179图	第4遺構群分布図	181	第217图	土坑実測図(2)	215
第180图	第3008号土坑実測図	183	第218图	土坑実測図(3)	216
第181图	第3008号土坑出土遺物実測図	184	第219图	土坑実測図(4)	217
第182图	第3025号土坑実測図	185	第220图	土坑実測図(5)	218
第183图	第3106号土坑実測図	186	第221图	土坑実測図(6)	219
第184图	第3084号土坑実測図	186	第222图	第5遺構群分布図	223

第225图	第17号方形竖穴状遗構実測図	225	第260图	第3278号土坑・出土遺物実測図	264
第224图	第20号方形竖穴状遗構実測図	226	第261图	第3296号土坑実測図	265
第225图	第22号方形竖穴状遗構実測図	227	第262图	第3493号土坑実測図	265
第226图	第23号方形竖穴状遗構出土遺物 実測図	228	第263图	第39号地下式塚実測図	266
第227图	第23号方形竖穴状遗構実測図	228	第264图	第40号地下式塚実測図	267
第228图	第3157号土坑実測図	229	第265图	第41号地下式塚実測図	268
第229图	第3424号土坑実測図	230	第266图	第42号地下式塚実測図	269
第230图	第3428号土坑実測図	230	第267图	第43号地下式塚実測図	270
第231图	第3429号土坑実測図	231	第268图	第44号地下式塚実測図	271
第232图	第3444号土坑実測図	232	第269图	第36号井戸跡実測図	272
第233图	第3445号土坑実測図	233	第270图	第3221号土坑実測図	273
第234图	第3450号土坑実測図	233	第271图	第3221号土坑出土遺物実測図	273
第235图	第3458号土坑実測図	234	第272图	第3267号土坑実測図	274
第236图	第45号地下式塚実測図	234	第273图	第3267号土坑出土遺物実測図	274
第237图	第46号地下式塚実測図	235	第274图	土坑実測図09	275
第238图	第37号井戸跡実測図	236	第275图	土坑実測図00	276
第239图	第38号井戸跡実測図	236	第276图	土坑実測図01	277
第240图	土坑実測図(7)	238	第277图	土坑実測図02	278
第241图	土坑実測図(8)	239	第278图	土坑実測図03	279
第242图	土坑実測図(9)	240	第279图	第37号地下式塚実測図	282
第243图	土坑実測図00	241	第280图	第38号地下式塚実測図	283
第244图	土坑実測図01	242	第281图	第523号住居跡実測図	284
第245图	土坑実測図02	243	第282图	第4号焼土遺構実測図	284
第246图	土坑実測図03	244	第283图	第154号溝土層断面図	285
第247图	土坑実測図04	245	第284图	第154号溝出土遺物実測図	285
第248图	土坑実測図05	246	第285图	その他の溝土層断面図(1)	286
第249图	土坑実測図06	247	第286图	その他の溝土層断面図(2)	287
第250图	土坑実測図07	248	第287图	第2号ピット群実測図	288
第251图	土坑実測図08	249	第288图	第1号不明遺構実測図	289
第252图	第6遺構群分布図	255	第289图	第3390号土坑・出土遺物実測図	290
第253图	第14号方形竖穴状遺構実測図	257	第290图	遺構外出土遺物実測図(1)	293
第254图	第15号方形竖穴状遺構実測図	258	第291图	遺構外出土遺物実測図(2)	294
第255图	第16号方形竖穴状遺構実測図	259	第292图	遺構外出土遺物実測図(3)	295
第256图	第18号方形竖穴状遺構実測図	260	第293图	遺構外出土遺物実測図(4)	296
第257图	第19号方形竖穴状遺構実測図	261	第294图	遺構外出土遺物実測図(5)	296
第258图	第21号方形竖穴状遺構実測図	262	第295图	遺構外出土遺物実測図(6)	297
第259图	第3261号土坑実測図	263	第296图	遺構外出土遺物実測図(7)	298
			第297图	遺構外出土遺物実測図(8)	299

## 表 目 次

表1 前田村遺跡周辺遺跡一覧表 ..... 6	表6 土坑一覧表(第4遺構群) .....220
表2 縄文時代住居跡一覧表 ..... 28	表7 土坑一覧表(第5遺構群) .....250
表3 縄文時代土坑一覧表 ..... 64	表8 土坑一覧表(第6遺構群) .....280
表4 古墳時代住居跡一覧表 .....150	表9 その他の土坑一覧表 .....291
表5 平安時代住居跡一覧表 .....180	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

伊奈・谷和原丘陵部における土地区画整理事業は、常磐新線による伊奈町、谷和原村の玄関口として都市性の高い街を計画的に整備するために、駅を中心とした商業・業務機能や住宅地及び誘致施設などを中心として計画された。

この事業の実施に先立ち、茨城県常磐新線整備推進課は、茨城県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする。）に、伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対し県教育委員会は、伊奈町には高野台遺跡が、谷和原村には西ノ脇遺跡、前田村遺跡が存在することを確認し、常磐新線整備推進課に、開発地域内に埋蔵文化財の包蔵地が存在することを回答した。平成3年11月、県教育委員会と常磐新線整備推進課は、その取り扱いについて協議を重ねた結果、記録保存の措置を講ずることとし、県教育委員会は事務手続きが常磐新線整備推進課から移った土浦土木事務所に対し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成4年度からは、伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業の取り扱いについては、土浦土木事務所から今回の開発のために組織された茨城県南都市建設事務所に移行された。

茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成4年4月1日から前田村遺跡の調査を開始した。平成4年度にはA区・B区と西ノ脇遺跡、平成5年度にはC区・D区・E区、平成6年度にはD区の残りとF区・高野台遺跡、平成7年度にはG区・H区・I区、平成8年度には、J区・K区の発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

前田村遺跡J区・K区の発掘調査は、平成8年4月1日から平成9年3月31日までの1年間にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を記述する。

- 4月 1日から調査のための諸準備を行った。8日に県南都市建設事務所区画整理課と今後の調査についての打ち合わせを行った。10日から補助員を投入し、J区から試掘調査を開始した。
- 5月 前月に引き続きJ区の試掘調査をした。降雨により現場作業を中止する日が多く、調査の進行が遅る。雨天の日は、遺物洗浄を実施した。8日から補助員休憩所と倉庫を移設する準備を開始し、13日には移設を完了させた。J区に仮のグリッドを設定し、遺構の分布状況の確認を開始した。
- 6月 J区では、北部の台地上に縄文時代の竪穴住居跡、中央部から南部にかけて古墳時代後期から奈良・平安時代と思われる竪穴住居跡を確認した。下旬から、J区の試掘調査と並行して、K区の試掘を開始した。下旬から伐開作業及び表土除去作業のための仮設道路を設置し、J区南端部とK区において業者による伐開作業を開始した。
- 7月 前月に引き続き伐開作業を続け、同時に防塵ネット設置を業者に委託して実施した。防塵ネット設置作業上の理由から、J区の事務所前の遺構調査を一部並行して実施した。10日から重機による表土除去と遺構確認調査を実施した。K区において縄文時代前期の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、土坑、

道路状遺構を確認し、遺構確認状況の写真撮影を実施した。

- 8月 前月に引き続き、重機による表土除去及び遺構確認調査を実施した。J区では、遺構確認調査の結果、竪穴住居跡、土坑、溝、地下式墳、井戸を確認した。J区北部（第4号遺構群）、中央部（第6号遺構群）、西部（第5号遺構群）には方形竪穴状遺構、土坑、地下式墳、井戸、溝等が複雑に絡み合う大きな遺構群の存在を確認した。28日に同時に遺構確認状況の写真撮影を実施し、J区の遺構確認調査を終了した。27日から、基準点の方眼杭打ちを実施した。
- 9月 2日から、J区北部より遺構調査を開始した。台地上に位置する縄文中期の遺構と谷津に位置する第4号遺構群を並行して調査した。第4号遺構群の調査において中世の土坑から埋葬人骨を確認した。調査が進むにつれ、地下式墳や土坑、ピット群が複雑に重複していることがわかった。
- 10月 前月に引き続き、第4号遺構群の調査をした。遺構が広範囲にわたり重複しているため、土層観察用のベルトを縦横に設定して調査した。遺物は人骨片、内耳鍋、陶器片等を少量確認した。29日には、第4号遺構群の完掘写真撮影を行い遺構調査を終了した。
- 11月 J区西部の第5号遺構群を中心に遺構調査をした。調査が進むにつれ、第5号遺構群は第4号遺構群以上に重複が多いこと、第4号遺構群と同様な性格を持つことがわかってきた。調査の進捗状況をふまえ、第6号遺構群も並行して調査を開始した。また、古墳時代前期・後期、奈良・平安時代の竪穴住居跡の調査を行った。
- 12月 前月に引き続き、第5号遺構群と第6号遺構群の遺構調査を進めた。第6号遺構群も第4号遺構群・第5号遺構群と同様な性格を持つこと、何軒かの方形竪穴状遺構を持つことがわかってきた。13日には、第5号遺構群の完掘全景写真を撮影し、調査を終了した。
- 1月 第6号遺構群の調査と並行して、南部の住居跡の調査を開始した。28日には、第6号遺構群の完掘写真を撮影し、調査を終了した。降雪や強風のために現場作業を中止しなければならない日が続いた。
- 2月 J区南部の遺構調査と並行して、K区の遺構調査を開始した。縄文時代前期の竪穴住居跡と土坑、地下式墳を確認した。20日に遺跡全景写真撮影と航空写真撮影を実施し、28日にはK区の完掘写真撮影を行い調査を終了した。なお、18日に委託者に対する報告会を行い、22日には現地説明会を開催して今年度の調査成果を公開した。
- 3月 3日から17日まで遺構群を中心に補足調査を実施した。12日から撤収準備を始め、安全対策を含め、31日には現地調査を終了した。これにより、当遺跡ほか2遺跡についての一連の調査が終了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

前田村遺跡J・K区は、茨城県筑波郡谷和原村大字田字湯薬690番地-1ほかに所在している。

茨城県の地形は、北部の八溝山塊と南部の常総台地に大区分され、常総台地はさらに中央部に連なる筑波山塊を境に東部台地と南部台地と西部台地とに区分することができる。筑波山塊の南に広がる南部台地には、北東部に新治台地、中央部に筑波・稲敷台地、南西部に北相馬台地が展開している。南部台地の標高は、筑波山麓から南東方向へ40mから20m前後まで徐々に低下している。筑波山麓西側を南流してきた桜川は、新治台地と筑波・稲敷台地の間に入るとその流れを南から南東に変え、霞ヶ浦に注いでいる。茨城県西部を南流してきた小貝川は、筑波・稲敷台地西側付近で最大幅8kmに達する鬼怒川・小貝川低地を発達させ、北相馬台地に接しながら東流している。なお、鬼怒川は、江戸時代まで北相馬台地北端の小絹北側で東流して小貝川と合流していたため洪水の原因となっていた。江戸時代初期に治水事業が行われ、猿島・北相馬台地の一部を開削し小貝川と分流させたことにより、利根川に注ぎ込むようになった。

前田村遺跡が所在する谷和原村は、茨城県の南西部に位置し、東部は伊奈町、西部は水海道市、南部は守谷町、北部はつくば市に接している。当村の中央部には鬼怒川と小貝川によって形成された沖積低地があり、北東側に筑波・稲敷台地が広がり、南西側に北相馬台地が、南東側には結城台地が連なっている。筑波・稲敷台地は、標高は30～20mで、北から南へ傾斜している。小貝川低地沿いの台地西側縁辺部では、西へ開口する樹枝状の小支谷が発達している。台地南部では西谷田川と東谷田川の開折谷が南南東方向に発達し、台地は併走する谷によって短冊状に分断されている。これらの谷を流れる川は、牛久沼に流入している。北相馬台地は、標高20m前後の細長い台地である。この台地は、周辺の台地に比べ開折が進んでおり、谷の長さに対して谷幅が広いことが特徴である。谷和原村における多くの遺跡は、低地に面した両台地上の縁辺部に立地している。

筑波・稲敷台地の地層は、貝化石を産する見和層（成田層）を基盤層として、その上に砂まじりのロームから、クロスラミナの顕著な砂あるいは砂礫層である竜ヶ崎砂礫層へ漸移する。そして、その上層は所によってさまざまに変化するが、総じてローム層下に火山灰質粘土層である常総粘土層がみられる。その上は褐色の関東ローム層におおわれており、ローム層中の下位に厚さ10～20cmの黄色軽石層が観察される。

前田村遺跡は小貝川低地沿いの筑波・稲敷台地縁辺部に位置し、遺跡の周辺は樹枝状の小支谷が発達している。前田村遺跡は、小支谷に挟まれた標高20～22mの舌状台地中央部に立地している。台地と低地の比高は10mである。

#### 参考文献

- ・茨城県農地部農地計画課 「土地分類基本調査 土浦」 1983年12月
- ・茨城県農地部農地計画課 「土地分類基本調査 龍ヶ崎」 1987年12月

## 第2節 歴史的環境

前田村遺跡(1)周辺には、多くの遺跡が確認されている。「茨城県遺跡地図」<sup>(11)</sup>によれば、谷和原村には17遺跡が周知されており、今後の調査でさらに多くの遺跡が発見されることが考えられる。遺跡の分布をみると、小貝川低地では今のところ皆無に近く、筑波・稲敷台地と北相馬台地の縁辺部及び結城台地の先端部に集中している。

谷和原村周辺では近年開発が進み、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査が増加している。今までに、洞坂畑遺跡<sup>(12)</sup>、ひがしならだ<sup>(13)</sup>、おおやつ<sup>(14)</sup>、つつど<sup>(15)</sup>、おおやつ<sup>(16)</sup>、にしのおき<sup>(17)</sup>、ほら<sup>(18)</sup>、ぬまさき<sup>(19)</sup>、まはら<sup>(20)</sup>、だいらもんどおき<sup>(21)</sup>、さんばんまつ<sup>(22)</sup>、こうやだい<sup>(23)</sup>、高野台遺跡等が調査され、報告書が刊行されている。ここでは、前田村遺跡と密接な関係が窺われる周辺の遺跡等を中心に、各時代ごとに概観していきたい。

旧石器時代の遺跡は確認例が少なく、前田村遺跡(1)と伊奈町の高野台遺跡(2)とで調査されたにすぎない。前田村遺跡からは平成4年度に調査したB区でメノウの剥片等が出土している。高野台遺跡からは平成6年度の調査で旧石器の集中地点が2か所確認されている。

縄文時代は、谷和原村周辺で遺跡数が多く、早期から晩期まで確認されている。早期の遺跡としては、西下宿遺跡(3)がある。西下宿遺跡からは、主として早期中葉の沈線文土器群と早期後葉の条痕文土器群が出土している。伊奈町の高野台遺跡からも早期の土器片が出土している。前期の遺跡は、前田村遺跡に隣接する関山式期の田村貝塚(4)、北相馬台地に立地する谷和原村の浅間山貝塚(5)と守谷町の郷州原遺跡(6)が知られている。原遺跡(7)と高野台遺跡からも前期の遺構が確認され、今回調査した前田村遺跡K区でも浮島Ⅱ式期の住居跡が確認されている。中期になると遺跡数は増加し、前田村遺跡(1)をはじめ大谷津A遺跡(8)、大谷津B遺跡(9)、筒戸A遺跡(10)、筒戸B遺跡(11)、福岡新宿遺跡(12)がある。大谷津A遺跡は、阿玉台I b式期から加曾利EⅢ式期の集落跡である。大谷津B遺跡は、加曾利EⅢ・Ⅳ式期の集落跡である。また、大谷津B遺跡の南側に隣接する筒戸A・B遺跡もほぼ同時期の集落跡である。これらの4遺跡は、いずれも鬼怒川左岸にある北相馬台地上の平坦地に立地しており、隣接することから同一遺跡の可能性がある。筑波・稲敷台地西部の縄文時代中期集落をみると、大規模でかつ長期に渡り存続する遺跡は当前田村遺跡以外に、前田村遺跡が縄文時代中期の拠点の集落であることが考えられる。後・晩期の遺跡としては、北相馬台地に立地する谷和原村の洞坂畑遺跡(13)、筑波・稲敷台地に立地する苗代山A遺跡(14)と苗代山B遺跡(15)がある。洞坂畑遺跡では、B地区から竪穴住居跡1軒が調査され、遺物の主体は安行I～Ⅲd式期である。その他、伊奈町西部の筑波・稲敷台地では、鹿島神社遺跡(16)、上街遺跡(17)、真瀬新田谷津遺跡(18)、小張貝塚(19)、南太田貝塚(20)が確認されている。海老道市東部の結城台地先端部では、横曾根貝塚(21)、西坪貝塚(22)、中坪遺跡(23)、館遺跡(24)が確認されている。守谷町北部の北相馬台地では、同地貝塚(25)が確認されている。

弥生時代の遺跡は、現在のところ谷和原村では確認されていない。伊奈町では高野台遺跡から中期の土器片が数点出土している。

古墳時代の遺跡は古墳及び古墳群が多く、台地縁辺で確認されている。小貝川左岸の筑波・稲敷台地では、福岡古墳群(26)、並木古墳(27)、東楡戸古墳(28)、宮後古墳(29)が確認されている。鬼怒川左岸の結城台地先端部では、飯沼古墳群(31)、権現塚古墳(32)、七ツ塚古墳群(33)、豊岡古墳(34)、志部古墳(35)が確認されている。小貝川右岸の北相馬台地では、原遺跡(7)と同地古墳群(36)が確認されている。東楡戸古墳は円墳で、1978年に調査されている。埋葬施設は、長軸8m、短軸2.35mの粘土椁である。原遺跡

は1995年に調査され、墳長26.20mの前方後円墳1基が確認されている。埋葬施設は、雲母片岩を用いた箱式石棺である。集落跡は、近年の調査で増加している。前期の遺跡は、水海道市の前原遺跡(38)があり、前田村遺跡H区・J区からも竪穴住居跡が確認されている。中期の遺跡は、大谷津A遺跡(8)と大門通遺跡(39)がある。大谷津A遺跡では竪穴住居跡3軒が、大門通遺跡では竪穴住居跡6軒が調査されている。後期の遺跡は、守谷町の郷州原遺跡(6)、水海道市の三本松遺跡(40)、谷和原村の西ノ脇遺跡(41)がある。三本松遺跡では竪穴住居跡1軒が調査され、西ノ脇遺跡では竪穴住居跡5軒が調査されている。前田村遺跡F・H・J区からも竪穴住居跡が確認されており、近接して立地する西ノ脇遺跡との関連が窺われる。

奈良・平安時代の遺跡は少なく、谷和原村の大谷津A遺跡と筒戸A・B遺跡から数軒の竪穴住居跡が調査されているにすぎない。前田村遺跡では、F・I・J区から平安時代の住居跡が確認されている。また、谷和原村福園の大楽寺には、定朝様とされる平安時代末期の阿弥陀如来像及び脇侍像が安置されている。

中世の遺跡は、集落跡と墓地と城館跡がある。集落跡と墓地の調査例は少なく、三本松遺跡(40)と西ノ脇遺跡(41)だけである。三本松遺跡では、方形竪穴状遺構5軒、土坑墓43基、火葬土坑墓1基、井戸3基等が調査され、土坑墓と火葬土坑墓と井戸は傾斜したくぼ地にまともまつて確認されている。西ノ脇遺跡では、掘立柱建物跡2棟、土坑55基、地下式墳7基、井戸2基、溝14条が調査され、それらが溝によって区画されている。前田村遺跡においても、掘立柱建物跡や方形竪穴状遺構、地下式墳、土坑等が確認されている。特に、平成6年度に調査したD区と今回調査したJ区の低地部では、区画された溝の内部に土坑と地下式墳が配置された墓域が形成されていた。前田村遺跡に隣接する田の集落では、田の古屋敷は前田村遺跡内にある八幡神社付近にあったという古くからの伝承があり、これらの遺構との関係が考えられる。城館跡としては、筑波・稲敷台地には小張城跡(42)、板橋城跡(43)、三條院城跡(44)等があり、北相馬台地には相馬氏系の城跡といわれる守谷城跡(45)、筒戸城跡(46)等がある。

※ 本文中の( )内の番号は、表1・第2図中の該当番号と同じである。

## 註

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図(2版)』1990年3月
- (2) 河坂畑遺跡発掘調査会 『河坂畑遺跡』1979年9月
- (3) 茨城県教育財団 『常磐自動車遺関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 東楕戸古墳』 『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅻ』1981年3月
- (4) 茨城県教育財団 『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 大谷津B遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第18集』1981年3月
- (5) 茨城県教育財団 『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 筒戸A・B遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第24集』1984年3月
- (6) 茨城県教育財団 『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第28集』1985年3月
- (7) 茨城県教育財団 『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 西ノ脇遺跡 前田村遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第87集』1994年3月
- (8) 茨城県教育財団 『常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書1 原遺跡 沼崎遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第112集』1996年3月
- (9) 茨城県教育財団 『一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事内埋蔵文化財調査報告書 前原遺跡大



- 門通遺跡 三本松遺跡」 「茨城県教育財団文化財調査報告第114集」 1996年6月
- 04 茨城県教育財団 「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3  
高野台遺跡 前田村遺跡D区・F区」 「茨城県教育財団文化財調査報告第127集」 1997年9月
- 01) 註7文献と同じ  
02) 註9文献と同じ
- 03 茨城県教育財団 「年報1」 1982年3月
- 04 斉藤弘道 「茨城の縄文時代草創期・早期の土器群について(一)」 「年報3」  
茨城県教育財団 1984年3月
- 05 守谷町教育委員会 「郷州原遺跡」 1981年
- 06) 註2文献と同じ  
07) 註3文献と同じ  
08) 註8文献と同じ
- 09 茨城県歴史館 「茨城の仏教美術-鎌倉・室町時代の仏像と仏画-」 1996年10月
- 10) 註9文献と同じ  
11) 註7文献と同じ

表1 前田村遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	県 遺 跡 番 号	時 代					番 号	遺 跡 名	県 遺 跡 番 号	時 代				
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良・ 平安				中 近 世 以 降	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳
①	前田村遺跡	—	○	○	○	○	○	24	館 遺 跡	6044	○				
2	高野台遺跡	—	○	○	○			25	岡地貝塚	2576	○				
3	西下宿遺跡	5854		○				26	福岡古墳群	2137				○	
4	田村貝塚	2135		○				27	並木古墳	2136				○	
5	浅間山貝塚	2140		○				28	東櫓戸古墳	4092				○	
6	郷州原遺跡	—		○		○		29	宮後古墳	2124				○	
7	原 遺 跡	6041		○				30	大房地遺跡	2129				○	
8	大谷津A遺跡	5852		○			○	31	飯沼古墳群	6047				○	
9	大谷津B遺跡	5853		○				32	権現塚古墳	2356				○	
10	箭戸A遺跡	5855		○			○	33	七ツ塚古墳群	2358				○	
11	箭戸B遺跡	5856		○			○	34	豊岡古墳	2359				○	
12	福岡新宿遺跡	5850		○				35	志部古墳	6045				○	
13	洞坂畑遺跡	2139		○				36	岡地古墳群	2575				○	
14	苗代山A遺跡	4090		○				37	庚塚遺跡	2580				○	
15	苗代山B遺跡	4091		○				38	前原遺跡	—				○	
16	鹿島神社遺跡	2122		○				39	大門通遺跡	—				○	
17	上街遺跡	2123		○				40	三本松遺跡	—				○	○
18	真瀬新田谷津遺跡	2916		○				41	西ノ脇遺跡	—				○	○
19	小張貝塚	2130		○				42	小張城跡	5848					○
20	南太田貝塚	2131		○				43	坂橋城跡	5847					○
21	横曽根貝塚	2364		○				44	三條院城跡	4014					○
22	西坪貝塚	6050		○				45	守谷城跡	2578					○
23	中坪遺跡	6048		○				46	箭戸城跡	5851					○



第3図 前田村遺跡周辺遺跡分布図

## 第3章 前田村遺跡

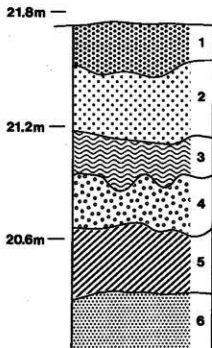
### 第1節 遺跡の概要

前田村遺跡は、茨城県筑波郡谷和原村大字田に所在し、小貝川左岸にある標高約20~22mの筑波・稲敷台地上に立地している。当遺跡の総面積は約130,000㎡であり、現況は畑地と山林である。

当遺跡は、これまでの調査の過程で便宜上A~K区に分けている。これは、道路等の現況と調査年度の順に従って呼称してきたものである。平成4年度から平成7年度にかけてはA~I区を調査してきた。今回の調査区はJ・K区で、調査面積はJ区が17,496㎡、K区が11,715㎡である。

今回の調査区からは、縄文時代、古墳時代、平安時代、中世の遺構を確認した。調査した遺構は、堅穴住居跡68軒、土坑496基、方形堅穴状遺構10軒、地下式墳16基、井戸5基、溝55条である。縄文時代の遺構は、堅穴住居跡16軒、土坑35基を確認した。当遺跡が立地する丘陵地の西端部に位置するK区からは、前期の住居跡を7軒確認した。古墳時代においては堅穴住居跡28軒（前期16軒、後期12軒）を確認した。後期の堅穴住居跡は大形のものが多く、軸線と同じくして存在する。平安時代の遺構は調査区内に散在し、堅穴住居跡23軒を確認した。中世の遺構は、地下式墳16基、方形堅穴状遺構10軒、土坑約400基、井戸5基、溝4条を確認した。土坑の中には人骨を伴う墓塚、または墓塚と思われるものが多く存在し、地下式墳・井戸・溝等とともに遺構群として確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に100箱出土している。縄文時代の遺物は、縄文時代中期の土器がほとんどである。古墳時代前期の遺物も土師器が主体で、装飾壺、壺、甕、甌、高坏、塔、ミニチュア土器等が出土している。古墳時代後期の遺物は土師器が主体で、甕、甌、坏等が出土している。平安時代後期の遺物は、甕、坏等が出土している。中世の遺物は、土師質土器の小皿、内耳鍋、瀬戸美濃系の陶器片等が出土している。



第4図 K区基本土層図

### 第2節 基本層序

前田村遺跡J・K区の基本土層については、K区H4b区付近にテストピットを設定し、観察を行った。遺構は第2層上面で確認している。

- 第1層 黒褐色。厚さ23~36cmの耕作土である。
- 第2層 暗褐色。厚さ28~30cmの均質なソフトローム層である。
- 第3層 におい褐色。厚さ7~32cmの火山ガラス粒子を微量含む層である。始良Tn火山灰(AT)を含む層と考えられる。
- 第4層 暗褐色。厚さ20~28cmの粘性の強いハードローム層である。赤褐色スコリアを微量に含む。
- 第5層 褐色。厚さ30~34cm。第4層より締まりのある均質なハードローム層である。
- 第6層 褐色。厚さは30cm以上あり、未掘のため本来の厚さは不明である。締まりは第5層より強い。

### 第3節 J区の遺構と遺物

J区は、当遺跡の西部の台地上に立地し、南端部は谷津に面する傾斜地となっている。当区からは竪穴住居跡56軒、土坑496基、地下式塚15基、方形竪穴状遺構10軒、井戸5基、溝10条、火葬土坑13基、焼土遺構1基を検出した。ここでは、これらの遺構について記述する。

なお、J区の遺構番号はI区からの続きとし、住居跡は第503号から、土坑は第2986号から、方形竪穴状遺構は第14号から、地下式塚は第32号から、井戸は第34号から、溝は第145号からそれぞれ付した。

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

##### (1) 竪穴住居跡

##### 第503号住居跡（第5図）

位置 調査区の北部、D10i区。

規模と平面形 遺存状況が悪かったが、炉と柱穴と思われるピットを検出したことにより、住居跡とした。規模や平面形は不明である。

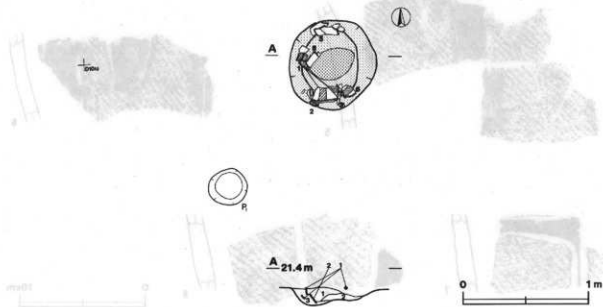
炉 長径60cm、短径50cmの楕円形で、ロームを15cmほど掘り込み、2個体以上の深鉢の胴部片、口縁部片を巡らした土器片囲い炉である。炉床はわずかに赤変し、硬化している。

##### 炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量

ピット P<sub>1</sub>は炉の南西に位置し、径62cmの円形、深さ42cmで柱穴と思われる。

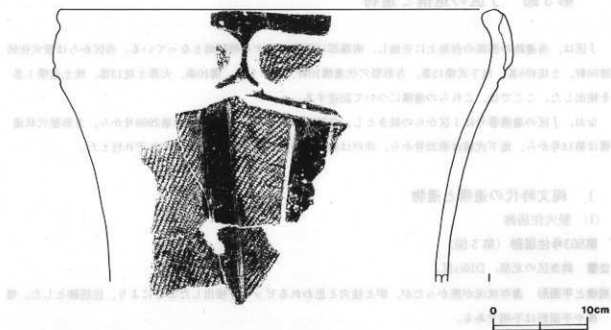
遺物 炉を囲むように縄文土器片が出土している。第6図1は深鉢の胴部から口縁部の破片である。2は深鉢の胴部から口縁部の破片で、無節縄文を地文に、上位に沈線が施されている。3・4は深鉢の口縁部片である。3は単節縄文LRを地文に、上位に沈線が施されている。4は単節縄文RLを地文に、垂下する沈線間に磨り消しが施されている。5・6は深鉢の胴部片で同一個体である。単節縄文RLを地文に、垂下する沈



第5図 第503号住居跡(炉)実測図

岡崎実録出土資料調査報告書 図5第

【区】の遺物と遺物



【区】の遺物の外観と文様

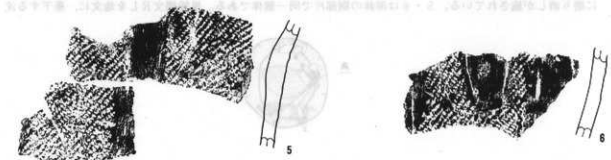
横長出大屋 (1)

図2(表) 横長出大屋(2)裏

図2(裏) 横長出大屋(1)表

図2(表) 横長出大屋(1)裏

図2(裏) 横長出大屋(2)表



第6図 第503号住居跡出土遺物実測図

図2(裏) 横長出大屋(2)裏 図2(表)

に磨り消しが施されている。7・8は深鉢の胴部片で同一個体である。見所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期（加曾利EⅡ～Ⅲ式期）と考えられる。

### 第503号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	目録表(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	深鉢 縄文土器	B(20.1)	胴部～口縁部片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は内彎する。 単筋縄文R.Lを地文に、口縁部は隆帯により楕円形に区画される。 胴部には、垂下する沈線周に磨り消しが施されている。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P1, P.L4, 10% 伊達段土器 加曾利EⅢ式

### 第506号住居跡（第7図）

位置 調査区の西北部、Elles区。

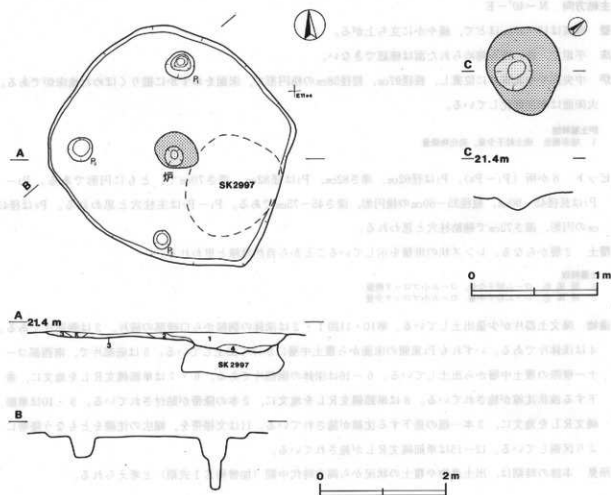
重複関係 東部において第2997号土坑と重複する。土坑の覆土上に貼床しており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.80m、短軸3.50mの隅丸方形である。

主軸方向 N-55°-W

壁 壁高は5～7cmほどで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦で、第2997号土坑と重複する部分は貼床である。



第7図 第506号住居跡実測図

炉 中央部に位置し、長径70cm、短径56cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉の中央にはピット状のくぼみがあり、周りは赤変硬化している。

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は径45cmの円形で深さ84cm、P<sub>2</sub>は径40cmの円形で深さ43cmである。いずれも支柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は径25cmの円形、深さ10cmで、性格は不明である。

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と思われる。4層は貼床の部分である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、練まり者

遺物 縄文土器片が少量出土しているが、小片のため図示できるものはない。

所見 本跡の時期は、出土遺物や覆土の状況、住居跡の形状から縄文時代中期と考えられるが、詳細な時期は特定できない。

### 第507号住居跡 (第8~11図)

位置 調査区の北部、E11d区。

重複関係 本跡の北東部において、第508号住居跡に掘り込まれているため、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸5.96m、短軸4.64mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-40°-E

壁 壁高は18~25cmほどで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み締められた面は確認できない。

炉 中央部やや北寄りに位置し、長径97cm、短径58cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。火床面は赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化物微量

ピット 8か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>)。P<sub>1</sub>は径62cm、深さ82cm、P<sub>2</sub>は径82cm、深さ70cmで、ともに円形である。P<sub>3</sub>~P<sub>7</sub>は長径45~90cm、短径35~60cmの楕円形、深さ45~75cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>は支柱穴と思われる。P<sub>8</sub>は径43cmの円形、深さ72cmで補助柱穴と思われる。

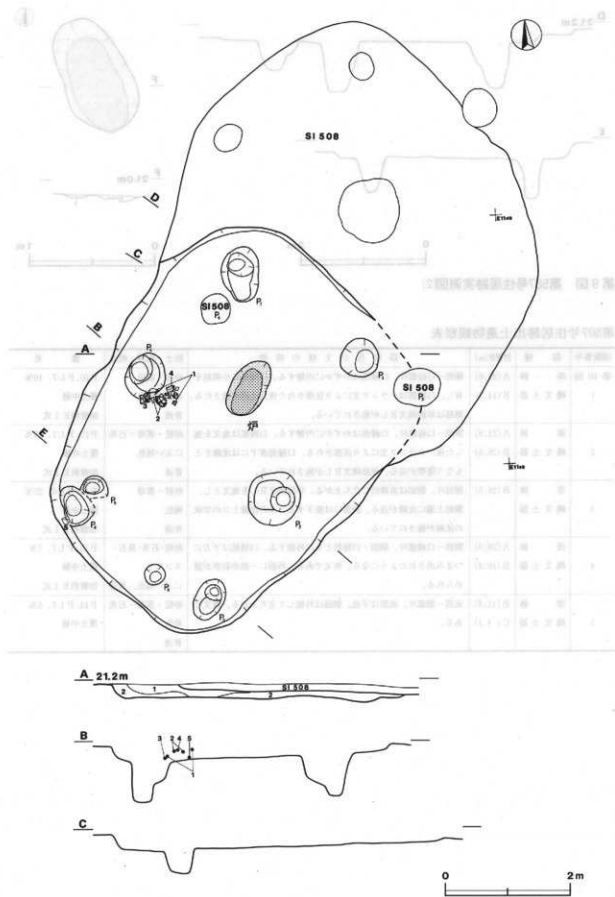
覆土 2層からなる。レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

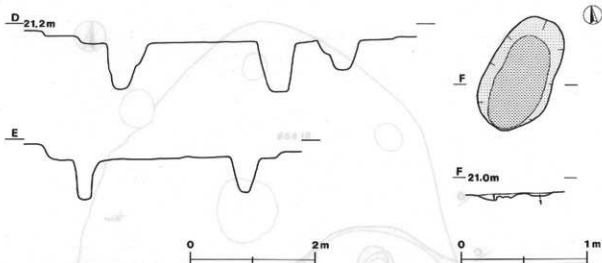
遺物 縄文土器片が少量出土している。第10・11図1・2は深鉢の胴部から口縁部の破片、3は胴部片である。4は浅鉢片である。いずれもP<sub>8</sub>東側の床面から覆土中層にかけて出土している。5は底部片で、西南部コーナー壁際の覆土中層から出土している。6~16は深鉢の胴部片である。6・7は単節縄文R Lを地文に、垂下する波状沈線が施されている。8は単節縄文R Lを地文に、2本の隆帯が貼付されている。9・10は単節縄文R Lを地文に、3本一組の垂下する沈線が施されている。11は文様帯を、幅広の沈線をともなう隆帯により区画している。12~15は単節縄文R Lが施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物や覆土の状況から縄文時代中期 (加曾利E I式期) と考えられる。



第 8 图 第507号住居跡实测图(1)





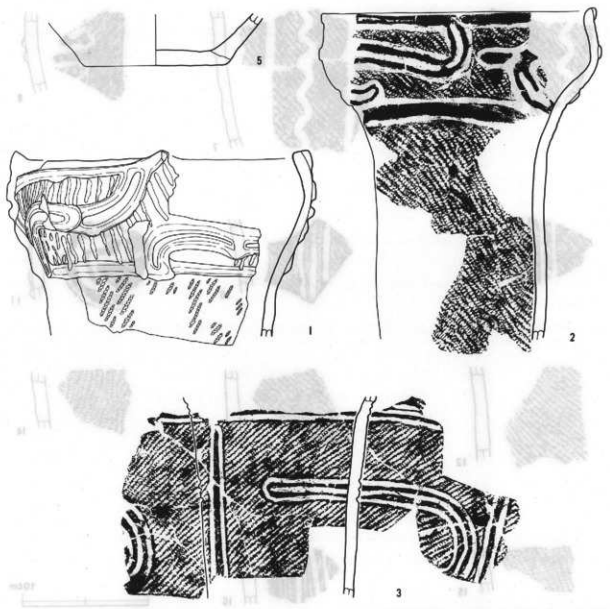
第9図 第507号住居跡実測図(2)

第507号住居跡出土遺物観察表

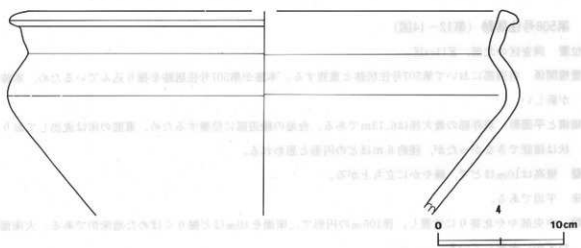
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	深鉢	A(23.6)	胴部-口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。口唇部に小突起を有し。口縁部はクランク文により区画された後、沈線が施される。胴部は半筋縄文Rしが施されている。	砂粒・雲母にぶい褐色 普通	P10、PL7、10% 覆土中層 加曾利EⅠ式
	縄文土器	B(14.3)			
2	深鉢	A(21.6)	胴部-口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。口縁部は地文を施した後、クランク文により区画される。口縁部直下には沈線をともなう隆帯が巡る。半筋縄文Rしを施されている。	砂粒・雲母・石英にぶい褐色 普通	P12、PL7、25% 覆土中層 加曾利EⅠ式
	縄文土器	B(26.5)			
3	深鉢	B(26.5)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。半筋縄文Rしを地文とし、胴部上端に沈線が巡る。胴部には垂下する2本の沈線とコの字状の沈線が施されている。	砂粒・雲母 褐色 普通	P13、PL6、20% 覆土中層 加曾利EⅠ式
	縄文土器				
4	浅鉢	A(38.0)	胴部-口縁部片。胴部・口縁部ともに外傾する。口唇部は下方につまみ出されたようになる。無文である。外面に一部赤彩痕が認められる。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい褐色、普通	P15、PL7、5% 覆土中層 加曾利EⅠ式
	縄文土器	B(16.4)			
5	深鉢	B(11.4)	底部-胴部片。底部は平底。胴部は外傾して立ち上がる。無文である。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通	P14、PL7、5% 覆土中層
	縄文土器	C(4.1)			



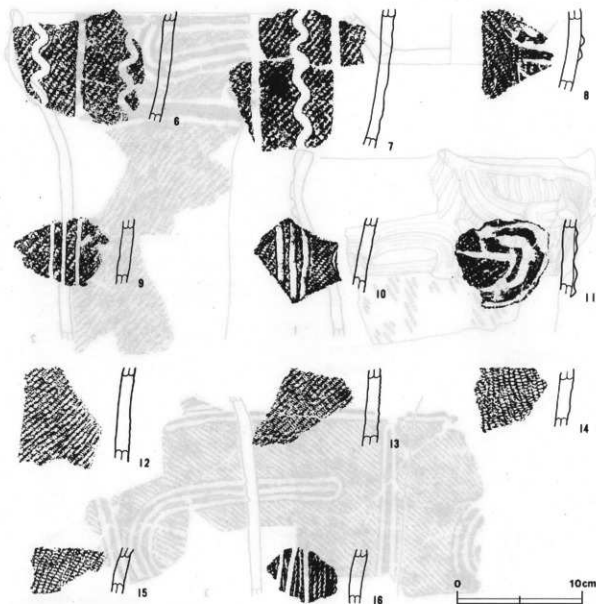
(1) 調査実施箇所と計測箇所 図8第



（図10）第507号住居跡出土遺物実測図（1）



第10図 第507号住居跡出土遺物実測図(1)



第11図 第507号住居跡出土遺物実測図(2)

第508号住居跡 (第12~14図)

位置 調査区の北部, Elles区。

重複関係 南西部において第507号住居跡と重複する。本跡が第507号住居跡を掘り込んでいるため, 本跡の方が新しい。

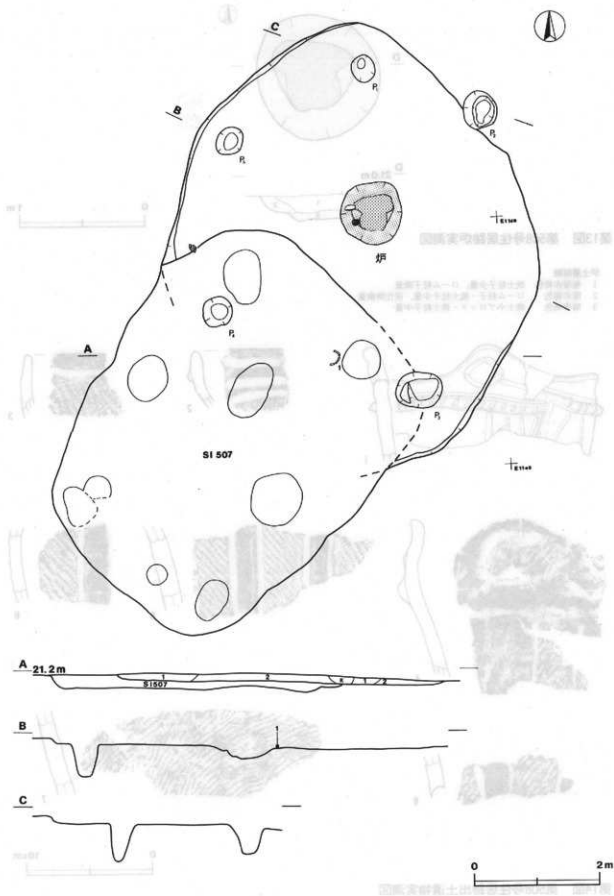
規模と平面形 現存部の最大径は6.13mである。台地の縁辺部に位置するため, 東部の床は流出しており, 形状は確認できなかったが, 径約6mほどの円形と思われる。

壁 壁高は10cmほどで, 緩やかに立ち上がる。

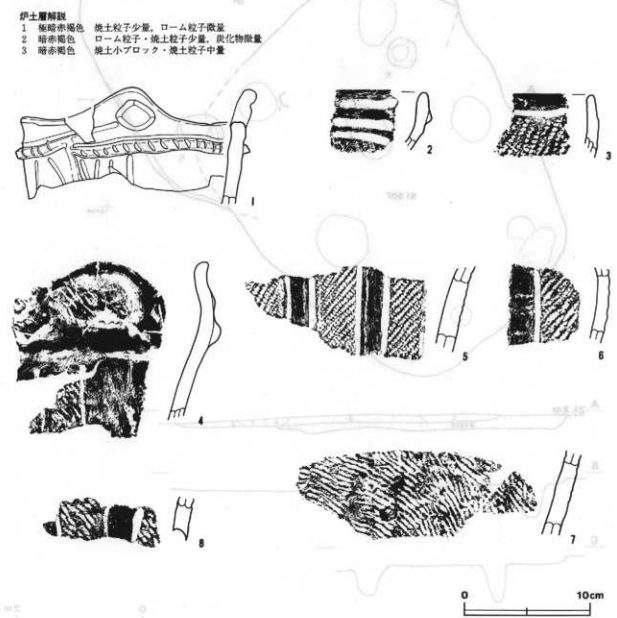
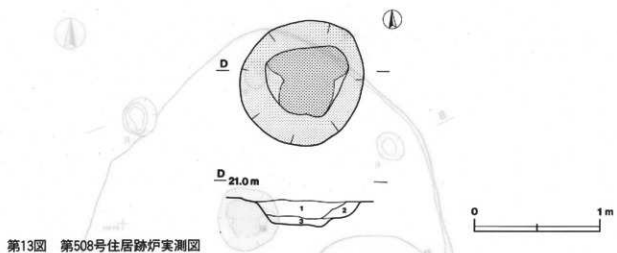
床 平坦である。

炉 中央部やや北寄りに位置し, 径105cmの円形で, 床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。火床面は, わずかに赤変している。

〔図解資料館出土品番号〕02庫 0501葉



第12图 508号住居跡実測图



ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>は長径45~75cm, 短径40~50cmの楕円形で深さ42~61cm, P<sub>4</sub>は径51cmの円形で深さ42cmである。いずれも主柱穴と思われる。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量  
2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第14図1は深鉢の胴部から口縁部の破片で, P<sub>3</sub>西側の床面から出土している。2~4は深鉢の口縁部片である。3は沈線の下に単節縄文RLが施されている。4は単節縄文RLを地文に, 把手部は隆帯により楕円区画され, 胴部は沈線間に磨り消しが施されている。5~8は胴部片である。5・6は単節縄文RLを地文に, 垂下する沈線間に磨り消しが施されている。7は無節縄文が施され, 8は磨り消しが見られる。

所見 本跡の時期は, 出土遺物や覆土の状況から縄文時代中期(加曾利EⅢ式期)の住居跡と考えられる。

第508号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第14図 1	深鉢 縄文土器	A 18.0 B (9.1)	胴部~口縁部片。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。 口唇部には沈線が通る。キザミを有するシ字状の隆帯が貼付されている。胴部には垂下する沈線が施されている。	粘土・雲母 砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P11, P L7, 10% 床面 加曾利EⅢ式

第524号住居跡(第15・16図)

位置 調査区の西部, G10h区。

重複関係 北部を第3149号土坑に, 東部を第3150・3151号土坑に, 南部を第3171・3176・3177号土坑に, 西部を第3146号土坑に掘り込まれており, いずれよりも本跡の方が古い。

規模と平面形 現存部の最大径は5.47mである。東部は土坑群に掘り込まれているために残存しないが, 柱穴の位置等から径約5.5mの円形と思われる。

壁 壁高は17cmほどで, 緩やかに立ち上がる。

床 はほぼ平坦である。炉から南壁にかけて硬化面が認められる。

炉 中央部やや北寄りに位置し, 長径50cm, 短径44cmの楕円形で, 床面を掘りくぼめた地床炉である。火床面はわずかに赤変している。

ピット 7か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>は長径29~50cm, 短径18~44cmの楕円形または円形で, 深さ21~71cmである。いずれも主柱穴と思われる。

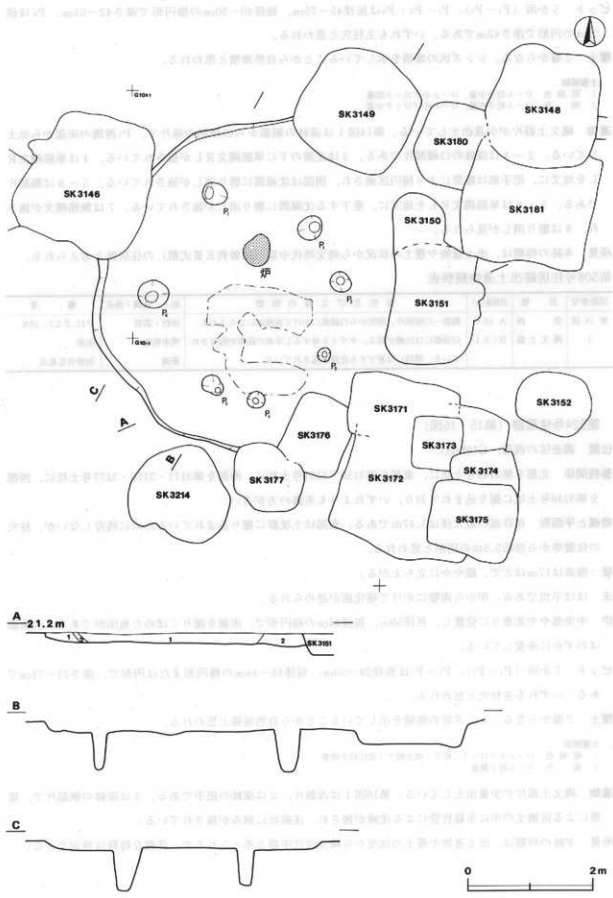
覆土 2層からなる。レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と思われる。

土層解説

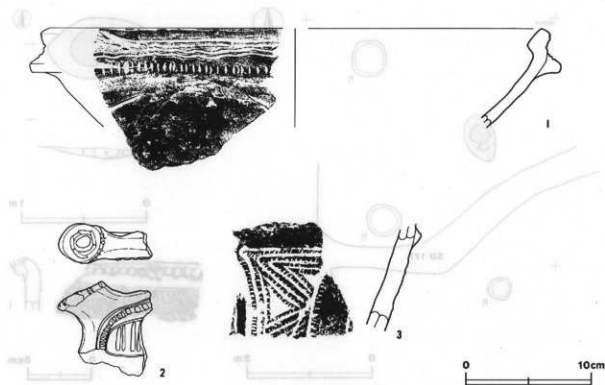
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・粒子・炭土粒子・炭化粒子微量  
2 褐色 ローム粒子微量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第16図1は浅鉢片, 2は深鉢の把手である。3は深鉢の胴部片で, 隆帯による区画文の中に半截竹管による沈線が施され, 沈線状に刻みが施されている。

所見 本跡の時期は, 出土遺物や覆土の状況から縄文時代中期と考えられるが, 詳細な時期は特定できない。



第15図 第524号住居跡実測図



第16図 第524号住居跡出土遺物実測図

第524号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法表(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	検考
第16図 1	浅鉢 縄文土器	A(39.4) B(8.0)	胴部～口縁部片。口縁部には沈線が高る。口縁部と胴部の間には、キザミを持つ隆帯が高る。黒文である。	砂粒・雲母・石英・ 長石 にふい褐色。普通	P88, P.L10, 5% 覆土
2	深鉢 縄文土器	B(8.5)	口縁部および把手。口縁部は、沈線をともなう隆帯により区画される。隆帯上にはキザミ、区画内には沈線が推されている。	砂粒・雲母・石英・ 長石 明赤褐色。普通	P89, P.L10, 5% 覆土

### 第535号住居跡（第17図）

位置 調査区の西部、G12b<sub>2</sub>区。

重複関係 第3305号土坑及び第177号溝と重複している。それらに本跡が掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 傾斜地に位置し、掘り込みも浅いために壁や床は検出できなかったが、炉と柱穴の位置関係から住居跡とした。規模・平面形ともに不明である。

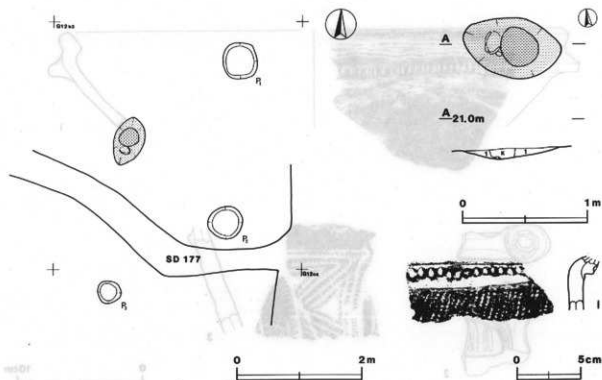
炉 長径82cm、短径48cmの楕円形で、深鉢の上半部を埋設する土器埋設炉である。埋設位置は中心よりもやや南寄りである。土器周辺にはわずかに赤変した面があるが、土器内に焼土は確認できない。

ピット 3か所（P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は長径42～56cm、短径44～49cmの楕円形または円形、深さ40～56cmで、主柱穴と思われる。

遺物 縄文土器片がわずかに出土している。第17図1は広口壺の胴部片で、隆帯上に棒状工具による刺突が巡らされている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期と考えられるが、詳細な時期は特定できない。





第17図 第535号住居跡(炉)・出土遺物実測図

岡部家跡出土遺物実測図(2) 図17

丸形土器出土遺物実測図(2)

第536号住居跡(第18・19図)

位置 調査区の東部, F12i区。

規模と平面形 長径5.63m, 短径4.63mの楕円形である。

長径方向 N-25°E

壁 壁高は12~18cmほどで, 緩やかに立ち上がる。

床 はほぼ平坦である。

炉 中央部やや北西寄りに位置している。長径95cm, 短径85cmの楕円形で, 床面を15cmほど掘りくぼめ, 深鉢の上半部を埋設した土器埋設炉である。

炉土層解説

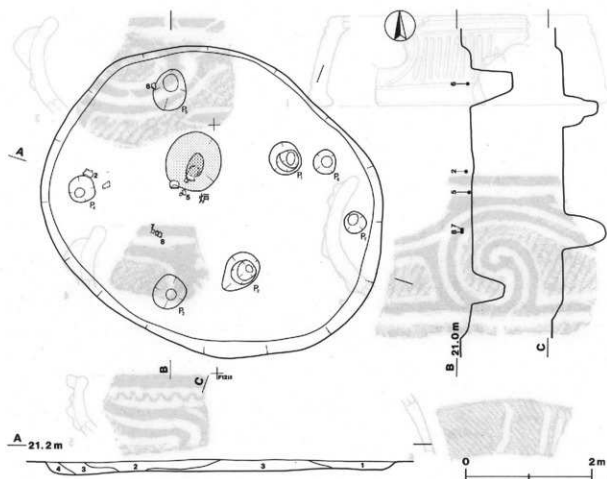
- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子少量, 炭土粒子微量

ピット 7か所(P1~P7)。P1~P3は長径43~65cm, 短径40~55cmの楕円形, 深さ58~76cmで支柱穴と思われる。P6・P7は東壁際に位置し, 径45cmの円形, 深さ51~60cmであり性格は不明であるが, 柱穴の可能性もある。

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積を示していることから, 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量



第18図 第536号住居跡実測図

遺物 縄文土器片少量と石器（磨製石斧）が出土している。第19図1は器台である。2～5は深鉢の口縁部片である。2～4は同一個体と思われる、単節縄文RLを地文に、渦巻き状の沈線をともなう隆帯により区画されている。5は上位に連続コの字文が施されている。6～8は胴部片で、いずれも単節縄文RLを地文としている。6・7は沈線をともなう隆帯が施されている。8は波状沈線が施されている。9は把手である。9は隆帯上にキザミ、10は端部に渦巻状の隆帯、口縁部文様帯には沈線が施されている。11は磨製石斧である。

所見 本跡の時期は、出土遺物や覆土の状況、住居の形状から縄文時代中期（加曾利EⅡ式期）と考えられる。



第19図 第536号住居跡出土遺物実測図

第536号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	陶文土器	A 20.6	底部から内傾して立ち上がる。台部は平坦である。胴部上端と下端には沈線が走り、さらに沈線間には沈線により楕円形に区画される。楕円形区画内は、大きく穿孔されている。	砂粒・スコリア・長石にふい褐色普通	P132, P.L.8, 20% 覆土
		B 7.3			
		C 24.0			

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第19図11	磨製石斧	8.0	2.4	1.5	44.0	7+627エ6ス	Q5, P.L.9, 覆土

第550号住居跡 (第20・21図)

位置 調査区の中央部, H11i区。

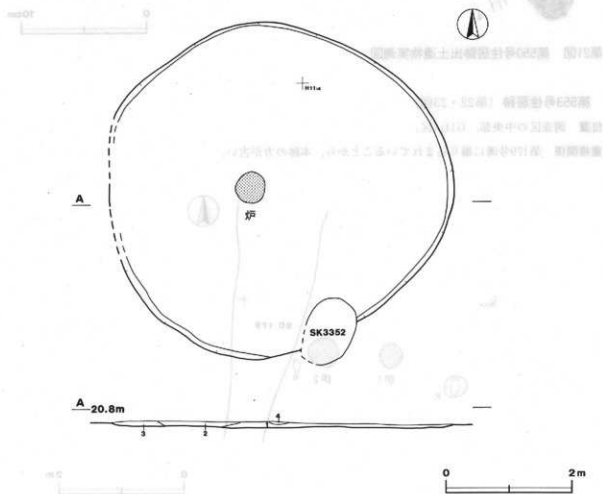
重複関係 南部を第3352号土坑に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 径5.43mの円形である。

壁 壁高は4~10cmで緩やかに立ち上がる。耕作による攪乱のため、壁の一部は確認できない。

床 平坦で、硬化面は確認できない。

炉 中央部に位置し、径が47cmの円形である。火床面はわずかに赤変している。



第20図 第550号住居跡実測図

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積を示していることから、自然堆積と思われる。

土層解	色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量
1	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
2	褐色	ローム粒子中量
3	赤褐色	ローム粒子微量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第21図1・2は深鉢の口縁部片で同一個体と思われる。単節縄文R Lを地文に、沈線をともなう隆帯が施されている。3・4は胴部片である。3は単節縄文R Lを地文にし、沈線が施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期（加曾利E II 式期）と考えられる。

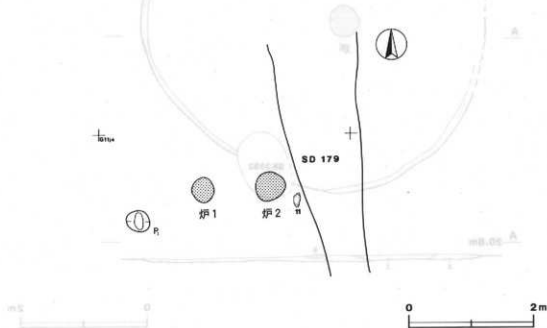


第21図 第550号住居跡出土遺物実測図

### 第553号住居跡（第22・23図）

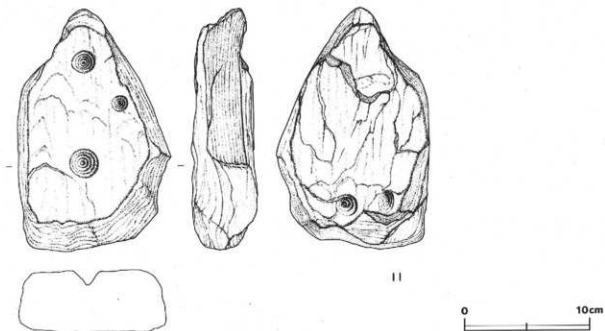
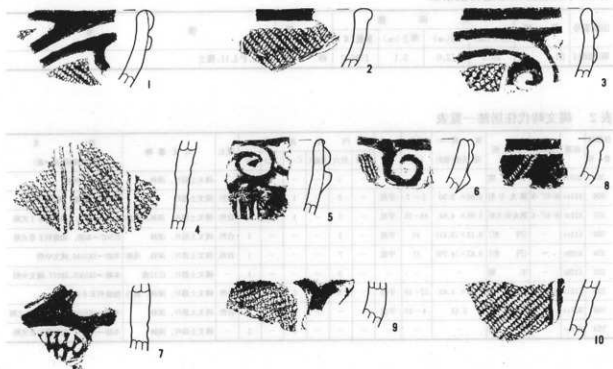
位置 調査区の中央部, G11j区。

重複関係 第179号溝に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。



第22図 第553号住居跡(炉)実測図

規模と平面形。壁や床面は削平により遺存していないが、炉と柱穴と思われるピットが検出されたことから住居跡とした。規模や平面形は不明である。炉 炉1・炉2を検出した。炉1は長径20cm、短径17cmの楕円形、炉2は径25cmの円形であり、わずかに焼土が認められる。ピット P<sub>1</sub>は炉1の西側に位置し、長径22cm、短径16cmの楕円形、深さ45cmであり、柱穴の可能性がある。



第23図 第553号住居跡出土遺物実測図

遺物 縄文土器片が少量出土している。第23図1～3, 5・6・8は深鉢の口縁部片である。1・2は同一個体と思われ, 単節縄文R Lを地文に, 3は単節縄文LRを地文に沈線をともなう隆帯が施されている。5・6はともに隆帯の端部が渦巻文であり, 5は沈線を垂下させている。7は沈線による楕円区画文の中に棒状工具による押圧がみられる。8は半截竹管による結節沈線文が施されている。9・10は胴部片, 11は凹石である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期(加曾利EⅡ式期)と考えられる。

#### 第553号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第23図11	凹石	19.3	12.0	5.1	1780.0	砂岩	Q11, P L11, 覆土

#### 表2 縄文時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	築構(m) (径, 長径×短径)	壁高(m)	床面	内 部 施 設					覆土	出土遺物	備 考 新田関係(古→新)	
							竈溝	柱穴	貯蔵穴	ドット	入口				伊
503	D101s	—	不 明	—	—	—	—	1	—	—	1	—	縄文土器片, 漆鉢	加曾利EⅡ式期	
505	E11es	N-55°-E	楕丸方形	3.80×3.50	5-7	平垣	—	2	—	1	—	1	自然	縄文土器片	SK2997→本跡, 縄文中期
507	E11e	N-40°-E	楕丸長方形	5.96×4.64	18-25	平垣	—	7	—	1	—	1	自然	縄文土器片, 漆鉢, 浅鉢	本跡→S1508, 加曾利EⅡ式期
508	E11es	—	[円形]	6.13×(3.41)	10	平垣	—	5	—	—	—	1	自然	縄文土器片, 漆鉢	S1507→本跡, 加曾利EⅡ式期
524	G10b	—	[円形]	5.47×(4.70)	17	平垣	—	7	—	—	—	1	自然	縄文土器片, 漆鉢, 浅鉢	本跡→SK3146, 縄文中期
535	G12a	—	不 明	—	—	—	—	3	—	—	—	1	—	縄文土器片, 広口甕	本跡→SK3305, S3177, 縄文中期
536	F121s	N-25°-E	楕円形	5.63×4.63	12-18	平垣	—	5	—	2	—	1	自然	縄文土器片, 漆鉢, 器台	加曾利EⅡ式期
560	H141s	—	円形	5.43	4-10	平垣	—	—	—	—	—	1	自然	縄文土器片, 漆鉢	本跡→SK3352, 加曾利EⅡ式期
553	G11js	—	不 明	—	—	—	—	—	—	1	—	2	—	縄文土器片, 漆鉢	本跡→SD179, 加曾利EⅡ式期

(2) 土坑 調査区北部のD11b区に、直径約2.25m、深さ約95cmの土坑が発見された。ここでは、時期や性格の分かるものについて解説を加え、その他の土坑については、一覧表に記載する。また、出土遺物については実測図でその一部を掲載する。

第2986号土坑 (第24・25図)

位置 調査区の北部, D11b区。

規模と平面形 径 [2.25] mの円形で、深さ95cmである。

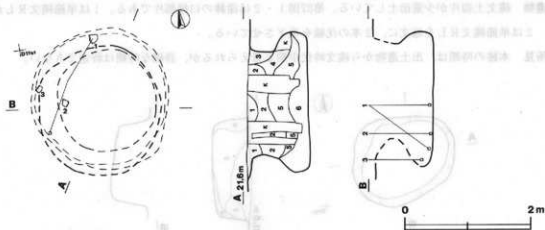
壁面 壁面は、内傾して立ち上がり、土坑内部は袋状を呈する。上位は、一部崩壊している。

底面 平坦である。

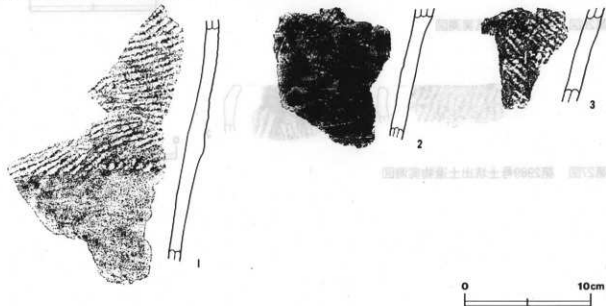
覆土 6層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 色 ローム粒子少量
- 3 褐色 色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 色 ローム小ブロック・粒子微量
- 5 黒褐色 色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 6 褐色 色 ローム粒子多量



第24図 第2986号土坑実測図



第25図 第2986号土坑出土遺物実測図



遺物 縄文土器片が少量出土している。第25図1・2は同一個体と思われる深鉢の胴部片で、上位には単節縄文R Lが施され、下位は無文である。3の胴部片は、単節縄文L Rが施されている。

所見 本跡は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期（加曾利E 1式期）と考えられる。

第2989号土坑（第26・27図）

位置 調査区の北部、D10es区。

規模と平面形 長径1.75m、短径1.45mの楕円形で、深さ57cmである。

長径方向 N-54°-W

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

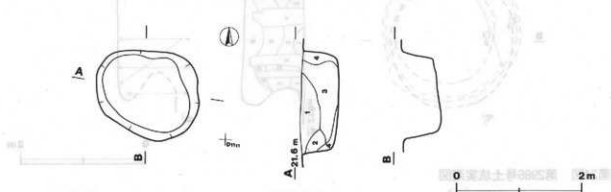
覆土 4層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

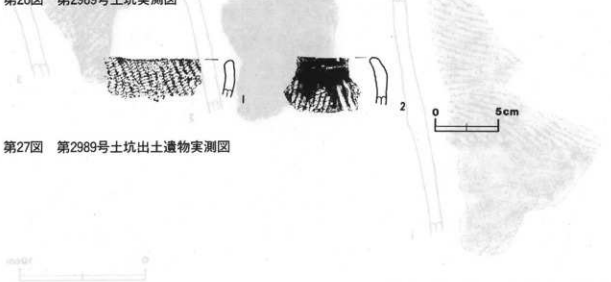
- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第27図1・2は深鉢の口縁部片である。1は単節縄文R Lが施され、2は単節縄文R Lを地文に、2本の沈線を垂下させている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期と考えられるが、詳細な時期は特定できない。



第26図 第2989号土坑実測図



第27図 第2989号土坑出土遺物実測図

### 第2990号土坑 (第28・29図)

位置 調査区の北部, E10e区。

規模と平面形 西部は調査区外のため不明であるが, 径3.07mの円形と思われ, 深さ64cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は中央に位置し, 長径42cm, 短径32cmの楕円形で深さ66cm, P<sub>2</sub>は北壁寄りに位置し, 径32cmの円形で深さ36cmである。いずれも性格は不明である。

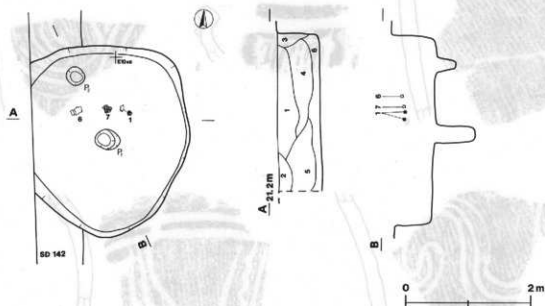
覆土 6層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

#### 土層解説

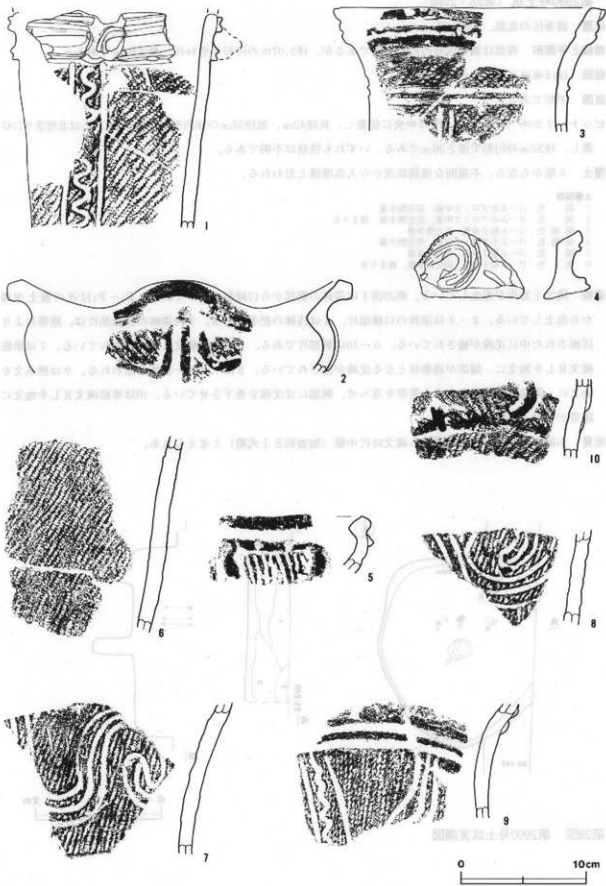
- |   |     |                         |
|---|-----|-------------------------|
| 1 | 褐色  | ローム小ブロック中量, 炭化物少量       |
| 2 | 褐色  | ローム小ブロック中量, 炭化物少量, 締まり有 |
| 3 | 明褐色 | ローム粒子多量, 炭化物少量          |
| 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック中量, 炭化物少量       |
| 5 | 褐色  | ローム粒子中量, 炭化物少量          |
| 6 | 褐色  | ローム粒子中量, 炭化物少量, 締まり有    |

遺物 縄文土器片が出土している。第29図1は深鉢の胴部から口縁部の破片である。P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>付近の覆土中層から出土している。2・3は深鉢の口縁部片, 4は浅鉢の把手である。5の深鉢の口縁部片は, 陸帯により区画された中に沈線が施されている。6~10は胴部片である。6は単節縄文R.Lが施されている。7は単節縄文R.Lを地文に, 端部が渦巻状となる沈線が施されている。8は7と同一個体と思われる。9は捺糸文を地文に, 頸部には沈線を有する陸帯を巡らせ, 胴部には沈線を垂下させている。10は単節縄文R.Lを地文に, 陸帯が貼付されている。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期(加曾利E I式期)と考えられる。



第28図 第2990号土坑実測図



第29图 第2990号土坑出土遗物实测图

第2990号土坑出土遺物観察表

図数番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	深鉢 縄文土器	B(17.2)	胴部から直線的に立ち上がる。口縁部は、沈線をともなう隆帯により長方形に区画されている。胴部は単節縄文R Lを地文とし、垂下する沈線間に波状文が施されている。	赤粒・長石・スコリア・褐色 普通	P229, P L16, 10% 覆土中層 加曾利E I式
2	深鉢 縄文土器	B(7.4)	口縁部片。口縁部はわずかに内彎し、波状口縁である。波状部は無文である。口縁部は単節縄文R Lを地文に、3本の隆帯が貼付されている。	砂粒・雲母・長石・明褐色 普通	P230, P L16, 5% 覆土 加曾利E I式
3	深鉢 縄文土器	A(21.8) B(10.0)	胴部—口縁部片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部上端には隆帯が貼付され、直下に2本の沈線と刺突が施される。胴部は単節縄文を地文に縦横に2本の沈線が施されている。	砂粒・雲母・石英・長石、 明褐色 普通	P231, P L16, 5% 覆土 加曾利E I式
4	浅鉢 縄文土器	B(5.4)	口縁部および把手。波状部に「C」字状の沈線をともなう隆帯が貼付されている。上端にはキズミが施されている。	砂粒・雲母・石英・長石・スコリア にぶい褐色、普通	P233, P L16, 5% 覆土

第2991号土坑 (第30・31図)

位置 調査区の北部, E10c9区。

規模と平面形 長径1.86m, 短径1.60mの楕円形で、深さ46cmである。

長径方向 N-0°

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

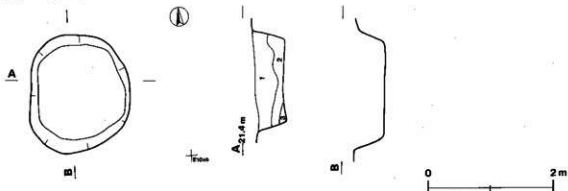
覆土 3層からなる。堆積状況から、自然堆積と思われる。

土層解説

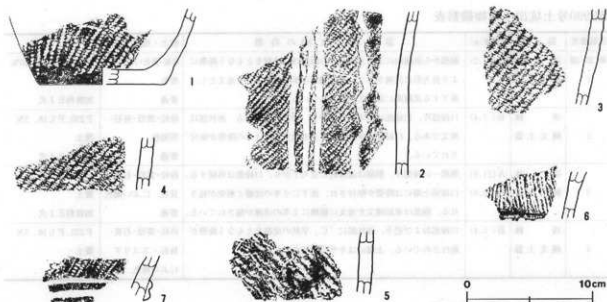
- 1 褐色 ローム中ブロック・粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器細片が少量出土している。第31図1は深鉢の底部から胴部の破片である。2-7は胴部片である。2は単節縄文R Lを地文に、沈線を垂下させている。3・4は単節縄文R L, 5は無節縄文が施されている。7は単節縄文R Lを地文に、上位には沈線を有する隆帯が巡らされている。

所見 本跡の時期は、出土遺物や覆土の状況から縄文時代中期(加曾利E I式期)と考えられる。



第30図 第2991号土坑実測図



第31図 第2991号土坑出土遺物実測図

第2991号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色面・焼成	備考
第31図	深鉢	B(6.1)	底部一割部片。底部から外縁して立ち上がる。甲部横文R.L.が施	胎土・色面・焼成	P234, P.L15, 5%
1	縄文土器	C[10.2]	されている。	棕色	覆土
				普通	

第2992号土坑 (第32・33図)

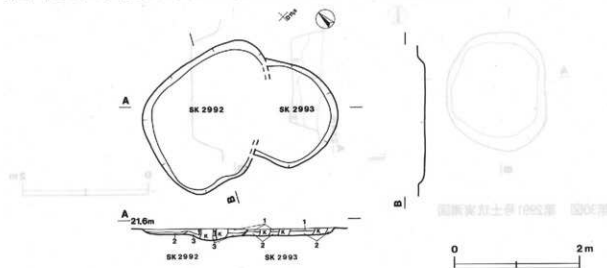
位置 調査区の北部, D11j4区。

重複関係 南東部において第2993号土坑と重複しており、本跡が掘り込んでいることから本跡の方が新しい。規模と平面形 長軸2.30m, 短軸2.00mの不定形で、深さ11cmである。

長軸方向 N-10°-E

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。北壁寄りに長径100cm, 短径80cmの楕円形をした、赤変硬化している面がある。



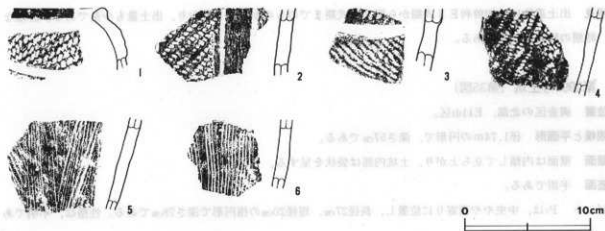
第32図 第2992・2993号土坑実測図

覆土 3層からなる。堆積状況から自然堆積と思われる。

土層解説

- |        |                    |
|--------|--------------------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 2 暗褐色  | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量       |

遺物 縄文土器片が出土している。第33図1は、深鉢の口縁部片で、単節縄文LRを地文に、太い沈線が施されている。2-4の深鉢の胴部片は、単節縄文RLを地文としている。2は、垂下する沈線間に磨り消しが施されている。5・6は、条線文が施されている。7-8は、単節縄文LRを地文としている。9は、単節縄文RLを地文としている。出土遺物は、加曽利EⅢ式期から堀之内式期までのものが混在しており、出土量も少量である。詳細な時期の特定は困難である。



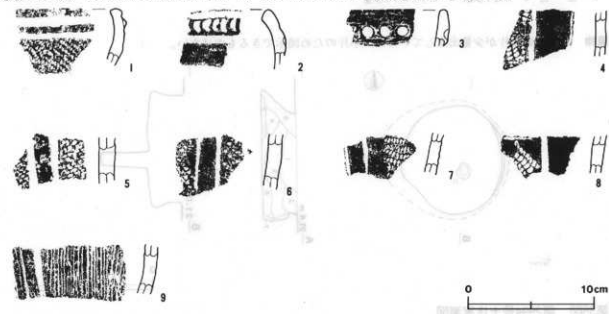
第33図 第2992号土坑出土遺物実測図

第2993号土坑 (第32・34図)

位置 調査区の北部, D11j4区。

重複関係 北西部において第2992号土坑と重複しており、本跡が掘り込まれていることから本跡の方が古い。

規模と平面形 長径1.68m, 短径(1.40)m, 深さ10cmである。平面形は楕円形と思われる。



第34図 第2993号土坑出土遺物実測図

長径方向 N-45°-W

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。堆積状況から自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

遺物 縄文土器片が出土している。第34図1-3は深鉢の口縁部片で、1は沈線をともなう隆帯、2は半截竹管による刺突、3は円形刺突が施されている。4-8の深鉢の胴部片は、単節縄文を地文に、沈線間は磨り消しが施されている。

所見 出土遺物は、加曾利EⅡ式期から堀之内式期までのものが混在しており、出土量も少量である。詳細な時期の特定は困難である。

### 第2994号土坑 (第35図)

位置 調査区の北部, E11d区。

規模と平面形 径1.74mの円形で、深さ57cmである。

壁面 壁面は内傾して立ち上がり、土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。

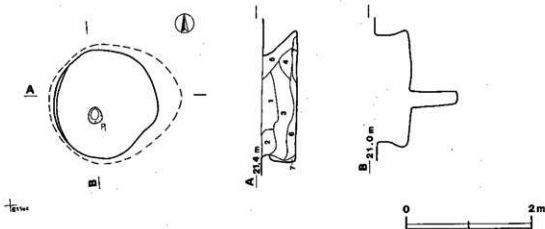
ピット P1は、中央やや西寄りに位置し、長径27cm、短径20cmの楕円形で深さ78cmである。性格は、不明である。

覆土 7層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

遺物 縄文土器細片が少量出土しているが、小片のため図示できるものはない。



第35図 第2994号土坑実測図

所見 本跡は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物、覆土の状況から縄文時代中期（加曾利E I 式期）と考えられる。

### 第2997号土坑（第36・37図）

位置 調査区の北部，E11e区。

重複関係 第506号住居跡が本跡の上に構築されていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 径1.97mの円形で、深さ70cmである。

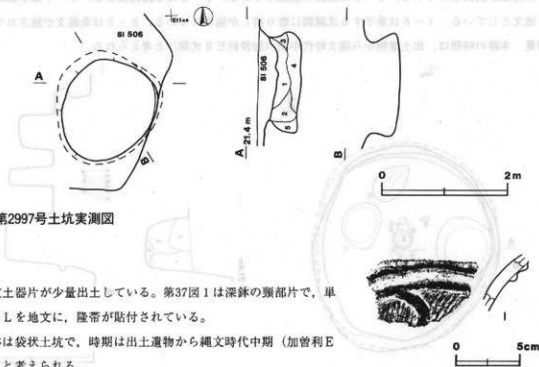
壁面 壁面は内傾して立ち上がり、土坑内部は袋状を呈する。

底面 凹凸がある。全体に硬化面が広がっている。

覆土 5層からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、絡まり有
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量



第36図 第2997号土坑実測図

遺物 縄文土器片が少量出土している。第37図1は深鉢の頸部片で、単節縄文RLを地文に、隆帯が貼付されている。

所見 本跡は袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期（加曾利E I 式期）と考えられる。

第37図 第2997号土坑  
出土遺物実測図

層	色	土質	特徴	厚さ	備考
1	暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量		1.5m	
2	暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、絡まり有		1.5m	
3	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量		1.5m	
4	黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量		1.5m	
5	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量		1.5m	



第2998号土坑 (第38・39図) 調査区の北部, D11j区。

位置 調査区の北部, D11j区。

規模と平面形 長径3.32m, 短径2.89mの楕円形で, 深さ64cmである。

長径方向 N-36°-W

壁面 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は中央部に位置し, 径30cmの円形で深さ72cm, P<sub>2</sub>は東部に位置し, 長径74cm, 短径58cmの楕円形で深さ55cm, P<sub>3</sub>は西壁際に位置し, 長径104cm, 短径94cmの楕円形で深さ76cm, P<sub>4</sub>は北部に位置し, 長径73cm, 短径43cmの楕円形で深さ33cmである。いずれも性格は不明である。

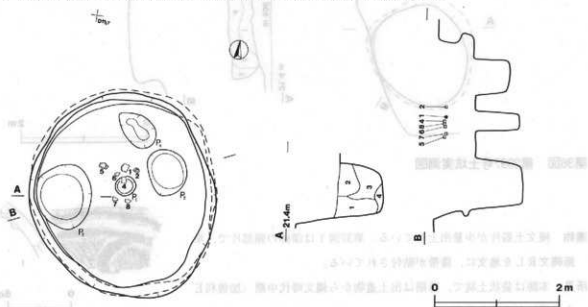
土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量

遺物 縄文土器片が出土している。第39図1は, 深鉢の胴部から底部で, 中央部の覆土上層から出土している。

2・3は深鉢の口縁部片である。2は単節縄文LRを地文に沈線が施され, 3は沈線をともなう隆帯により口縁部が区画されている。4-9は深鉢の胴部片である。4・5は単節縄文LR, 6・7は単節縄文RLを地文としている。4-6は垂下する沈線間に磨り消しが施されている。8・9は条線文が施されている。

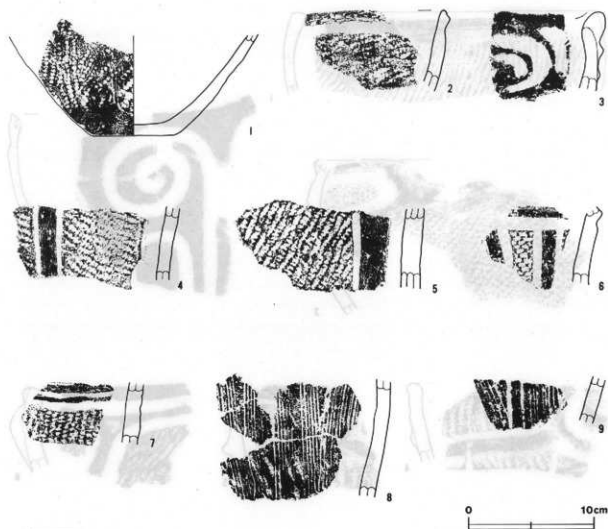
所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期 (加曾利E II式期) と考えられる。



第38図 第2998号土坑実測図

第2998号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	容積(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図	深鉢	B (8.1)	底部一胴部片。底部から外傾して立ち上がる。	砂粒・長石	P235, P L15, 5%
1	縄文土器	C (6.8)	されている。	にぶい黄褐色	覆土上層
				普通	普通

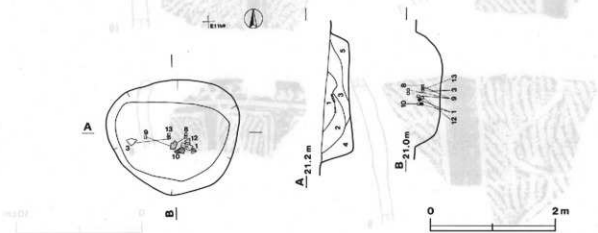


第39図 第2998号土坑出土遺物実測図

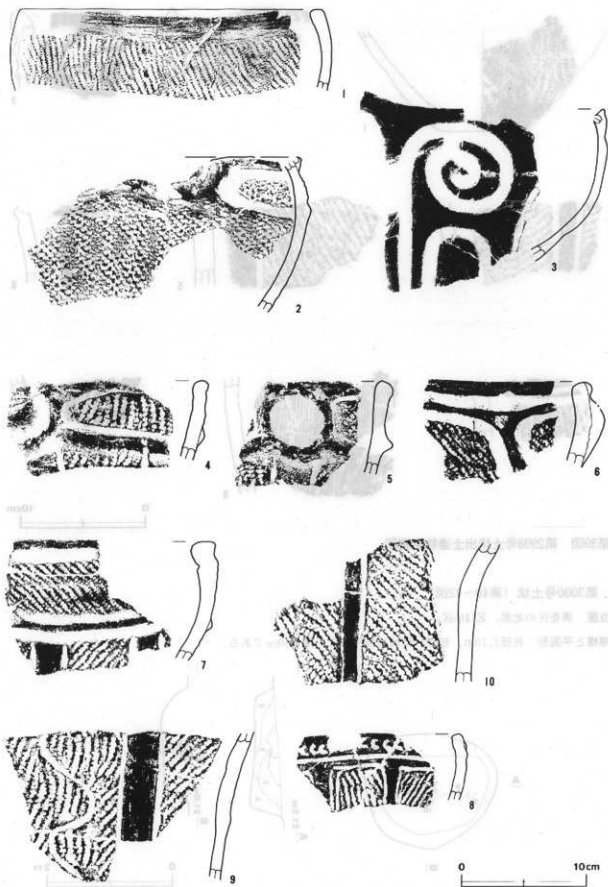
第3000号土坑 (第40～42図)

位置 調査区の北部, E11b区。

規模と平面形 長径2.10m, 短径1.82mの楕円形で、深さ50cmである。



第40図 第3000号土坑実測図



第41图 第3000号土坑遗物实测图(1)

图例表见土坑0000图 图例表

長径方向 N-88°-W

壁面 壁面は緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

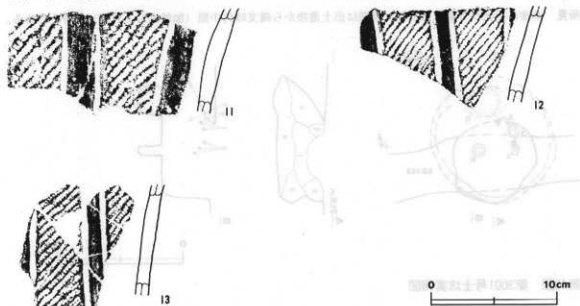
覆土 5層からなる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム中ブロック・小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック少量
- 5 暗褐色 黒色粒子微量

遺物 縄文土器片が出土している。第41・42図1は深鉢の口縁部片で、中央部の覆土上層から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部である。3～8は深鉢の口縁部から胴部の破片である。3の口縁部には端部が渦巻状となる沈線、頭部には垂下する沈線が施されている。4～8は口縁部片で、いずれも単節縄文R Lを地文としている。4～7は、口縁部が隆帯により楕円、または円形に区画されている。8は口縁部上位に半截竹管による刺突が巡らされている。9～13は胴部片で、いずれも単節縄文R Lを地文に、垂下する沈線間に磨り消しが施されている。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代中期（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第42図 第3000号土坑出土遺物実測図(2)

第3000号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	深鉢 縄文土器	A(24.2) B(6.5)	内脣する。上位は無文帯が巡る。その他は単節縄文R Lが施されている。	砂粒・石英・長石 に濃い褐色 普通	P236, P.L17, 5% 覆土上層
2	深鉢 縄文土器	B(12.7)	口縁部一胴部片。口縁部は沈線をともなう隆帯により、楕円形に区画される。区画内および胴部には単節縄文L R Lが施されている。	砂粒・長石 に濃い褐色 普通	P237, P.L17, 5% 覆土

### 第3001号土坑 (第43・44回)

位置 調査区の北部, D11j1区。

重複関係 西部を第143号溝に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 径1.31mの円形で, 深さ85cmである。

壁面 壁面は内傾して立ち上がり, 土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>はほぼ中央部に位置し, 径20cmの円形で深さ48cm, P<sub>2</sub>は東壁際に位置し, 径52cmの円形で深さ40cmである。いずれも性格は不明である。

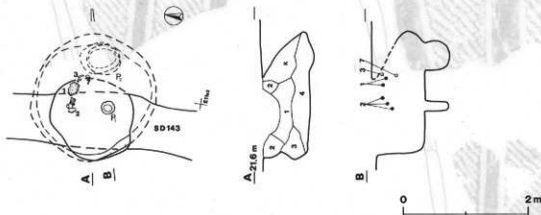
覆土 4層からなる。ブロック状の堆積状況をしていることから人為堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第44回1の深鉢の口縁部から胴部の破片, 2の口縁部片は, いずれも中央部の覆土上層から出土している。3・4は深鉢の口縁部片で, 3は波状口縁である。6・7は深鉢の胴部片で単節縄文RLを地文に, 沈線が施されている。

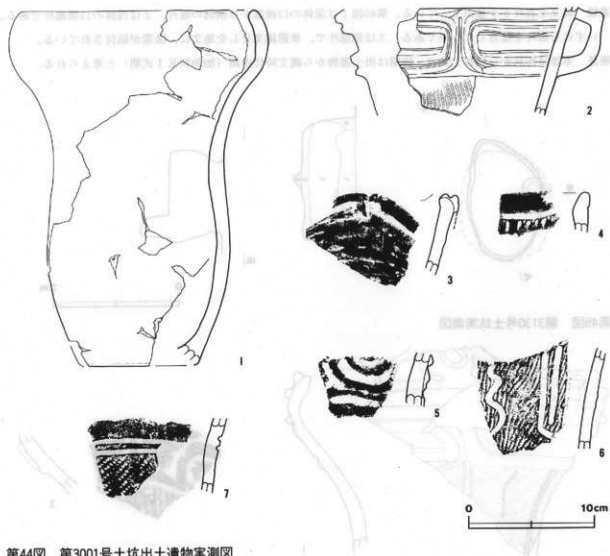
所見 本跡は形状から袋状土坑で, 時期は出土遺物から縄文時代中期 (加曾利E I式期) と考えられる。



第43回 第3001号土坑実測図

#### 第3001号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44回 1	深鉢	A (18.6)	底部一口縁部。胴部・口縁部は内傾して立ち上がる。全面無文で	砂粒・雲母・石英	P238, P.L18, 25%
	縄文土器	B 28.7	ある。	赤褐色	覆土上層
		C (9.4)		普通	
第44回 2	深鉢	B (9.6)	口縁部一胴部片。口縁部は沈線をともなう隆帯により, 4等分に楕円区画される。区画内無文。胴部には単節縄文RLが施されている。	砂粒・雲母・石英	P239, P.L18, 5%
	縄文土器			長石 明赤褐色, 普通	覆土上層



第44図 第3001号土坑出土遺物実測図

第3130号土坑 (第45・46図)

位置 調査区の西部, E10ha区。

規模と平面形 長径2.01m, 短径1.22mの楕円形で, 深さ89cmである。

長径方向 N-71°-E

壁面 壁面は内傾して立ち上がり, 土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。中央部にくぼみがある。

ピット P<sub>1</sub>は北壁際にあり, 長径42cm, 短径32cmの楕円形で, 深さ47cmである。性格は不明である。

覆土 6層からなる。レンズ状の堆積状況をしていることから自然堆積と思われる。

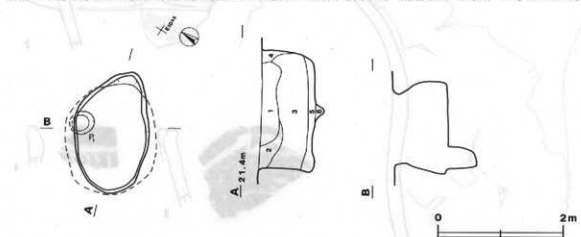
土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第46図1は深鉢の口縁部から胴部の破片、2は浅鉢の口縁部片である。

いずれも細片を接合したものである。3は頸部片で、単筋縄文R Lを地文に、隆帯が貼付されている。

所見 本跡は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期（加曾利E I式期）と考えられる。



第45図 第3130号土坑実測図

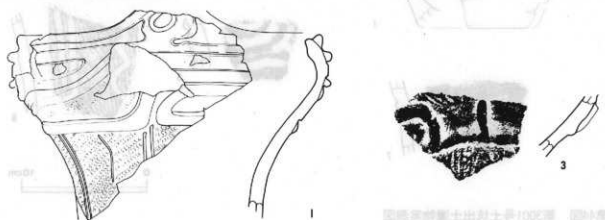
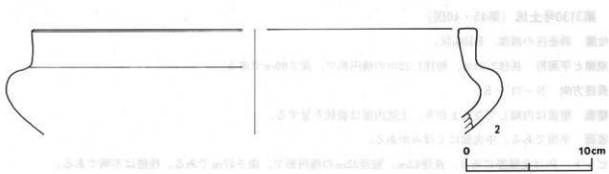


図45 第3130号土坑出土土器実測図



第46図 第3130号土坑出土遺物実測図

第3130号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46回 1	深鉢	A(24.0)	口縁部一割部片。口縁部は波状を呈する。単節縄文RLを地文とする。口縁部は沈線をともなう隆帯により楕円形に区画されている。胴部は2本一組の沈線と波状沈線が垂下している。	砂粒・石英・長石 赤褐色	P261, P.L18, 10% 覆土 加曾利E I式
	縄文土器	B(16.7)			
2	浅鉢	A(35.6)	口縁部一割部片。口縁部は直線的である。無文である。	砂粒・霏母・石英・スコリア	P262, P.L18, 5% 覆土
	縄文土器	B(8.4)			

第3131号土坑 (第47・48図)

位置 調査区の西部, E10is区。

重複関係 第152号溝に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長径2.30m, 短径1.91mの楕円形で, 深さは61cmである。

長径方向 N-43°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

ピット P1は, 長径44cm, 短径36cmの楕円形で, 深さ37cmである。性格は不明である。

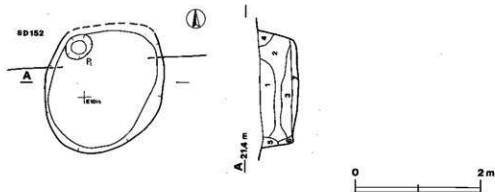
覆土 7層からなる。不規則な堆積状況や覆土中にロームブロックが多く含まれることから人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 7 褐色 ローム粒子中量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第48図1は深鉢の口縁部片で, 2本の隆帯間は無文である。2は深鉢の頸部から胴部の破片で, 単節縄文RLを地文に, 隆帯が貼付され, 棒状工具による沈線と押圧文が施されている。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期(加曾利E I式期)と考えられる。



第47図 第3131号土坑実測図





第48図 第3131号土坑出土遺物実測図

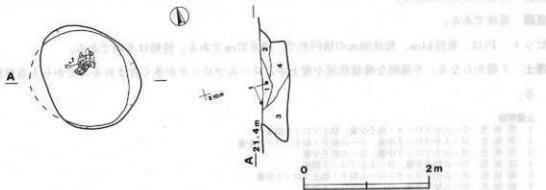
第3133号土坑 (第49・50図)

位置 調査区の西部, E10is区。

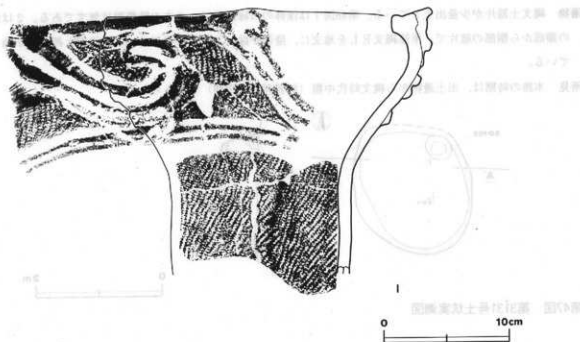
規模と平面形 長径1.78m, 短径1.20mの楕円形で, 深さ42cmである。

長径方向 N-11°-W

壁面 壁面は内傾して立ち上がり, 土坑内部は袋状を呈する。



第49図 第3133号土坑実測図



第50図 第3133号土坑出土遺物実測図

底面 平坦である。

覆土 4層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第50図1は深鉢の口縁部から胴部で、覆土上層から出土している。

所見 本跡は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期（加曾利E I式期）と考えられる。

第3133号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図	深鉢	A 24.5	口縁部一胴部片。単節縄文Rしを地文とする。口縁部は沈線をと	砂粒・雲母・長石・スズリア	P263, P.L18, 30%
1	縄文土器	B (22.1)	もう一端が袋巻き状となる隆帯により、4分割されている。胴部は、波状沈線が垂下している。	にぶい褐色、普通	覆土上層 加曾利E I式

第3135号土坑（第51図）

位置 調査区の西部，E10j区。

規模と平面形 東部は調査区外のため不明であるが、径1.95mの円形と思われる、深さ74cmである。

壁面 壁面は内傾して立ち上がり、土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。

ピット P<sub>1</sub>は中央に位置するものと思われる、径40cmの円形で、深さ24cmである。

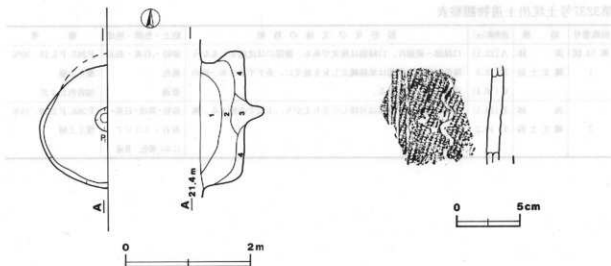
覆土 4層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・中ブロック・粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・粒子少量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第51図1は深鉢の胴部片で、単節縄文Rしを地文に、沈線が施されている。

所見 本跡は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期と考えられる。



第51図 第3135号土坑・出土遺物実測図

第3237号土坑 (第52・53図)

位置 調査区の中央部, F10h区。

規模と平面形 径1.81mの円形で, 深さ51cmである。

壁面 壁面は内傾して立ち上がり, 土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は北寄りに位置し, 長径42cm, 短径36cmの楕円形で, 深さ53cm, P<sub>2</sub>は東壁際に位置し, 長径36cm, 短径20cmの楕円形で, 深さ20cmである。いずれも性格は不明である。

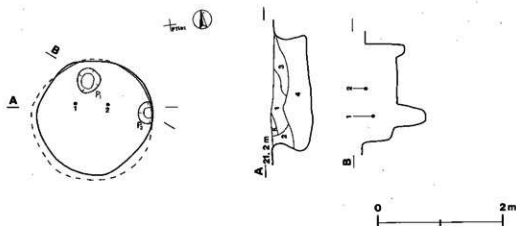
覆土 4層からなる。堆積状況から自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第53図1の深鉢の口縁部から底部の破片, 2の浅鉢片は, P<sub>1</sub>南側の覆土上層から出土している。3は深鉢の胴部片で, 単節縄文RLを地文に, 沈澱が施されている。

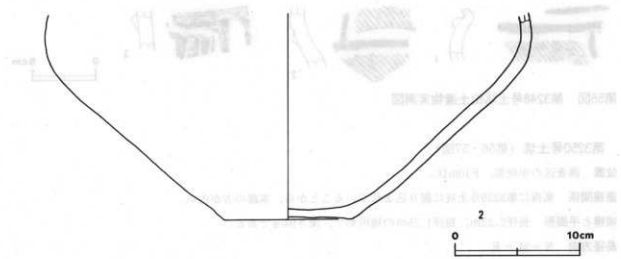
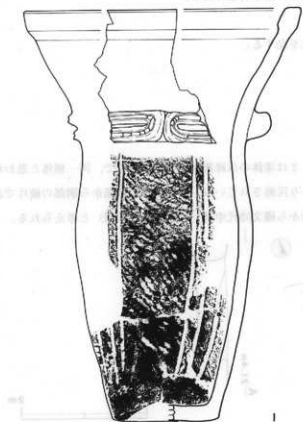
所見 本跡は形状から袋状土坑で, 時期は出土遺物から縄文時代中期 (加曾利E I式期) と考えられる。



第52図 第3237号土坑実測図

第3237号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	深鉢 縄文土器	A (22.1)	口縁部一底部片。口縁部は無文である。胴部には沈澱をともなう	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P265, P.L.19, 30% 覆土上層 加曾利E I式
		B (33.3)	隆帯が巡る。胴部は単節縄文LRを地文に, 垂下する3本一組の		
		C (8.4)	沈澱が施されている。		
2	浅鉢 縄文土器	B (16.5)	胴部一底部片。胴部は外傾して立ち上がり, 上位で内傾する。無	砂粒・雲母・石英・ 長石・スコリア にぶい褐色, 普通	P266, P.L.19, 15% 覆土上層
		C 10.2	文。		



第53图 第327号土坑出土遺物実測図

### 第3248号土坑 (第54・55図)

位置 調査区の中央部, F10is区。

重複関係 北部を第159号溝に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長径1.81m, 短径1.67mのはほぼ円形で, 深さ49cmである。

長径方向 N-38°-W

壁面 壁面は内傾して立ち上がり, 土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。自然堆積と思われる。

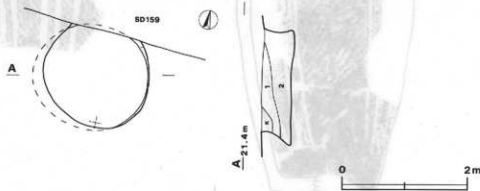
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第55図1・2は深鉢の口縁部から頸部の破片で, 同一個体と思われる。

単筋縄文RLを地文に, 沈線をともなう隆帯により区画されている。3は深鉢の頸部から胴部の破片である。

所見 本跡は形状から袋状土坑で, 時期は出土遺物から縄文時代中期(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第54図 第3248号土坑実測図



第55図 第3248号土坑出土遺物実測図

### 第3250号土坑 (第56・57図)

位置 調査区の中央部, F10hs区。

重複関係 東西に第3239号土坑に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長径2.22m, 短径1.75mの楕円形で, 深さ94cmである。

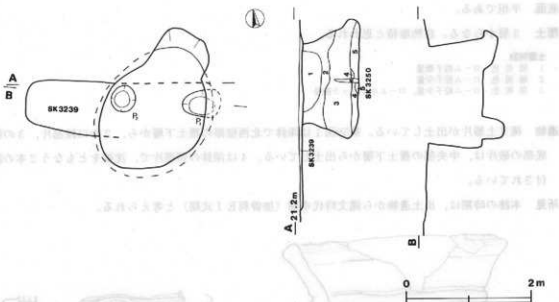
長径方向 N-34°-E

壁面 壁面は内傾して立ち上がり, 土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。

ビット 2か所(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は東壁際に位置し, 長径64cm, 短径41cmの楕円形で, 深さ22cm, P<sub>2</sub>は西壁際に位置し, 径40cmの円形で, 深さ34cmである。いずれも性格は不明である。

図面実測土坑出土土器式群 302系

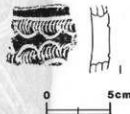


第56図 第3250号土坑実測図

覆土 5層からなる。堆積状況から自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量



遺物 縄文土器片が少量出土している。第57図1は深鉢の頸部片で、半截竹管による連続刺突が施されている。

所見 本跡は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期と考えられる。

第57図 第3250号土坑出土遺物実測図

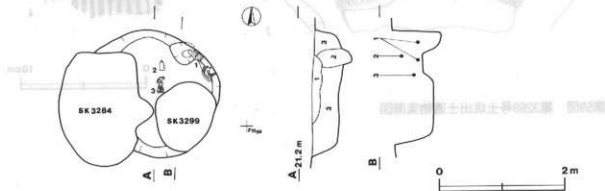
第3269号土坑 (第58・59図)

位置 調査区の中央部、F11fa区。

重複関係 西部を第3284号土坑に、東部を第3299号土坑に掘り込まれていることから、両者より本跡の方が古い。

規模と平面形 他の土坑に掘り込まれ、一部不明であるが、径2.05mの円形と思われ、深さ43cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。



第58図 第3269号土坑実測図

底面 平坦である。

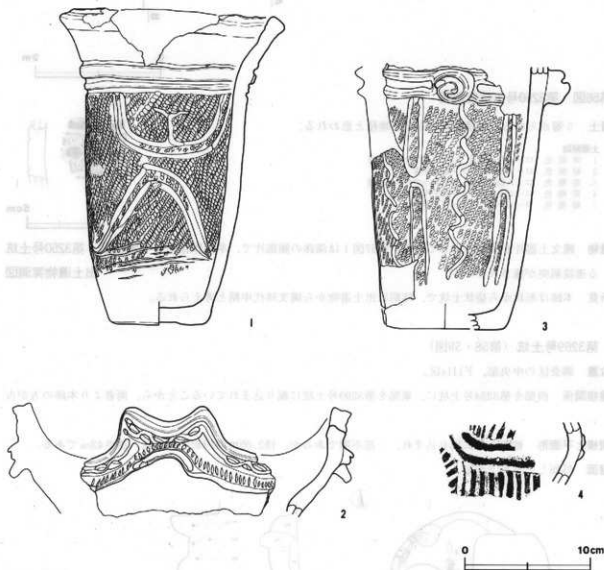
覆土 3層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量

遺物 縄文土器片が出土している。第59図1は深鉢で北西壁際の覆土下層から、2の口縁部片、3の胴部から底部の破片は、中央部の覆土下層から出土している。4は深鉢の頸部片で、沈線をともなう2本の隆帯が貼付されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期（加曾利E I式期）と考えられる。



第59図 第3269号土坑出土遺物実測図

第3269号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	縄文土器	A 18.2	口縁部一部欠損。口縁部は無文で胴部との境に隆帯と沈線が高る。胴部は単節縄文R.Lを地文に、垂下する波状沈線と2本一組の沈線による曲線的なモチーフが描かれている。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P268, P.L20, 85% 覆土下層 加曾判E I式
		B 25.2			
		C 7.5			
2	縄文土器	A (35.6)	口縁部一割部片。反頸の波状口縁を呈する。口縁部上位には左右から交互に刺突された隆帯が巡る。口縁部下位にはキザミを有する隆帯が貼付されている。胴部は無文。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P269, P.L20, 5% 覆土下層 中砂式
		B (8.4)			
3	縄文土器	B (21.0)	頸部～底部。頸部は沈線をともなう2本の隆帯が巡る。隆帯の端部は渦巻状となり、突出する。胴部は単節縄文R.Lを地文に、楕円形に区画する沈線と波状沈線が施されている。	砂粒・雲母・長石・スコリア 普通	P270, P.L20, 40% 覆土下層
		C 9.5			

第3273号土坑 (第60・61図)

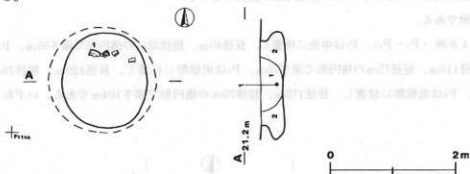
位置 調査区の中央部, F11go区。

規模と平面形 長径1.52m, 短径1.36mの楕円形で、深さ41cmである。

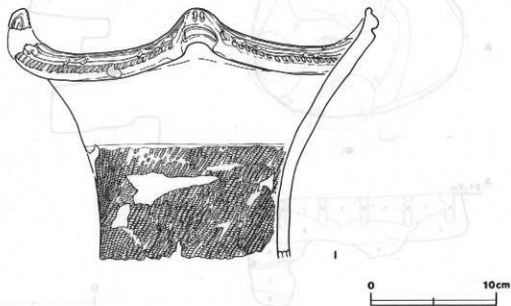
主軸方向 N-0°

壁面 壁面は内傾して立ち上がり、土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。



第60図 第3273号土坑実測図



第61図 第3273号土坑出土遺物実測図



覆土 2層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 腐植色 ローム中ブロック・稜子少量  
2 腐植色 ローム稜子少量、ローム中ブロック微量

遺物 縄文土器片が少量出土している。第61図1は深鉢の口縁部から胴部であり、北部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期（加曾利E I式期）と考えられる。

第3273号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第61図 1	深鉢	A 29.7	口縁部～胴部。波状口縁上部には刺突が施され、波状により口縁部は4分割される。口縁部には2本の沈線とキザミが施される。頸部は無文、胴部は単節縄文R.L.が施されている。	砂粒・雲母・石英・ 長石・スコリア にぶい褐色、普通	P271, P.L19, 65% 覆土下層 加曾利E I式
	縄文土器	B (30.1)			

第3323号土坑 (第62・63図)

位置 調査区の中央部, G11d2区。

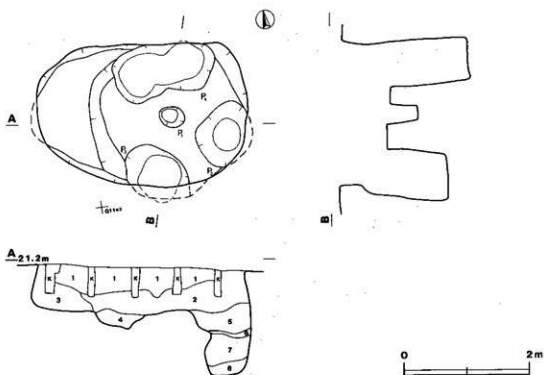
規模と平面形 長径3.55m, 短径2.24mの楕円形で、深さ65cmである。

長径方向 N-84°-W

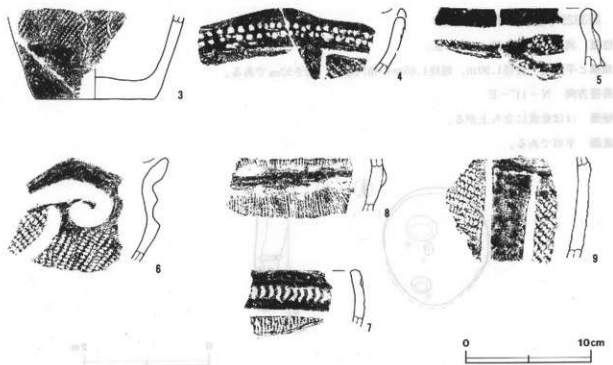
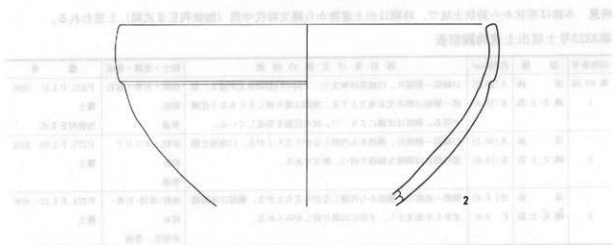
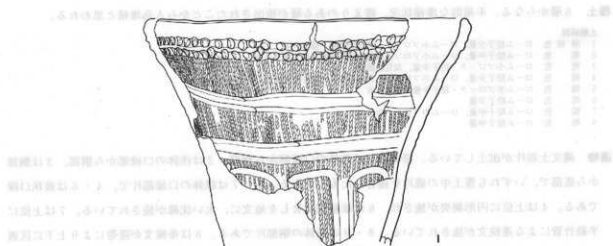
壁面 壁面は内傾して立ち上がり、土坑内部は袋状を呈する。

底面 平坦である。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は中央に位置し、長径40cm, 短径32cmの楕円形で深さ55cm, P<sub>2</sub>は東壁際に位置し、長径110cm, 短径75cmの楕円形で深さ70cm, P<sub>3</sub>は南壁際に位置し、長径120cm, 短径76cmの楕円形で深さ70cm, P<sub>4</sub>は北壁際に位置し、長径170cm, 短径70cmの楕円形で深さ104cmである。いずれも性格は不明である。



第62図 第3323号土坑実測図



第63図 第3323号土坑出土遺物実測図

國史館藏土器之図録 第三卷

覆土 8層からなる。不規則な堆積状況、締まりのある層が検出されたことから人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物微量、締まり有
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、炭化物少量、締まり有
- 3 褐色 ローム小ブロック・粒子少量、炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物微量、締まり有
- 5 褐色 ローム中ブロック・粒子少量、締まり有
- 6 褐色 ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 8 褐色 ローム粒子中量

遺物 縄文土器片が出土している。第63図1は深鉢の口縁部から胴部、2は浅鉢の口縁部から胴部、3は胴部から底部で、いずれも覆土中の破片を接合したものである。4-7は深鉢の口縁部片で、4・6は波状口縁である。4は上位に円形刺突が施され、6は単節縄文RLを地文に、太い沈線が施されている。7は上位に半截竹管による連続文が施されている。8・9は深鉢の胴部片である。8は条線文が隆帯により上下に区画されている。9は単節縄文RLを地文に、沈線間に磨り消しが施されている。

所見 本鉢は形状から袋状土坑で、時期は出土遺物から縄文時代中期（加曽利EⅡ式期）と思われる。

第3323号土坑出土遺物観察表

図説番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	深鉢	A(26.2)	口縁部～胴部片。口縁部は無文で、2列の円形刺突文が巡る。胴部～胴部は熟赤文を地文とする。胴部は磨り消しをともなう沈線が巡る。胴部は沈線により「冂」状の区画を形成している。	砂粒・石英・長石	P272, P L 21, 20%
	縄文土器	B(18.4)		褐色 普通	覆土 加曽利EⅡ式
2	浅鉢	A(30.2)	口縁部～胴部片。胴部から内傾しながら立ち上がる。口縁部と胴部の間には明確な稜線を持つ。無文である。	砂粒・スコリア	P273, P L 20, 10%
	縄文土器	B(14.6)		褐色 普通	覆土
3	深鉢	B( 6.8)	胴部～底部片。胴部から外傾しながら立ち上がる。胴部は単節縄文RLを地文とし、下位には磨り消しがみられる。	砂粒・雲母・石英・長石	P274, P L 21, 10%
	縄文土器	C 9.6		赤褐色。普通	覆土

第3325号土坑（第64・65図）

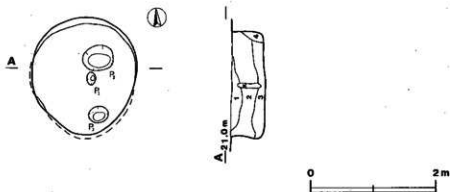
位置 調査区の中央部、G11a区。

規模と平面形 長径1.90m、短径1.65mの楕円形で、深さ52cmである。

長径方向 N-11°-E

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。



第64図 第3325号土坑実測図

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は中央に位置し、  
 長径21cm、短径14cmの楕円形で深さ43cm、P<sub>2</sub>は  
 北東寄りに位置し、長径50cm、短径43cmの楕円形  
 で深さ48cm、P<sub>3</sub>は南壁際に位置し、長径33cm、短  
 径26cmの楕円形で深さ39cmである。いずれも性格  
 は不明である。

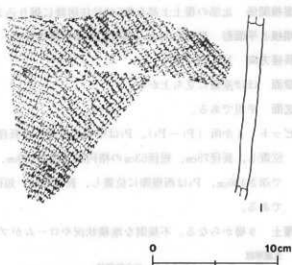
覆土 4層からなる。レンズ状の堆積状況から自然  
 堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・粒子少量

遺物 縄文土器細片がわずかに出土している。第65  
 図1は深鉢の胴部片で、単節縄文RLを地文とし  
 ている。

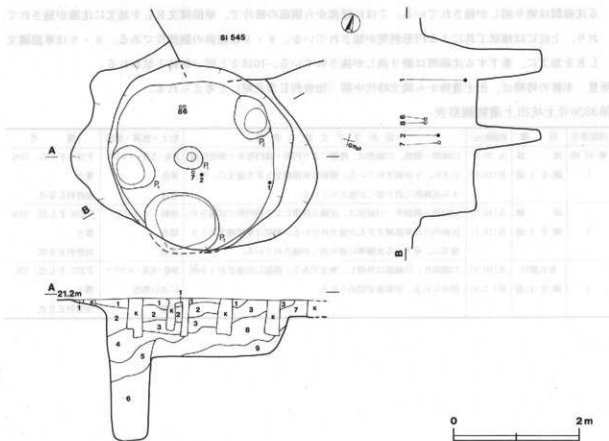
所見 本跡の時期は、形状や覆土の状況から縄文時代と考えられる。



第65図 第3325号土坑出土遺物実測図

第3326号土坑 (第66~68図)

位置 調査区の中央部、G11g区。



第66図 第3326号土坑実測図

重複関係 北部の覆土上部を第545号住居跡に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長径4.08m, 短径2.83mの楕円形で、深さ97cmである。

長径方向 N-70°-W

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は中央に位置し、長径45cm, 短径36cmの楕円形で深さ103cm, P<sub>2</sub>は北東壁際に位置し、長径75cm, 短径53cmの楕円形で深さ109cm, P<sub>3</sub>は南壁際に位置し、長径124cm, 短径100cmの楕円形で深さ130cm, P<sub>4</sub>は西壁際に位置し、長径72cm, 短径58cmの楕円形で深さ130cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 9層からなる。不規則な地積状況やロームがブロック状に含まれることから人為堆積と思われる。

土層解説

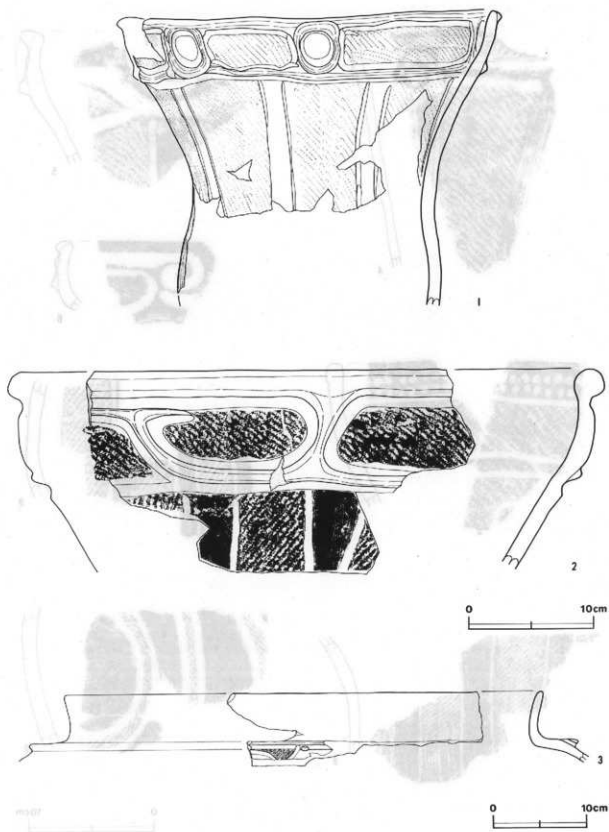
- |   |    |                        |
|---|----|------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量          |
| 2 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化物微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子・炭化物少量、ローム小ブロック微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム大ブロック微量     |
| 5 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック微量     |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック微量     |
| 7 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量          |
| 8 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量     |
| 9 | 褐色 | ローム粒子・大ブロック微量          |

遺物 縄文土器片が出土している。第67・68図1は深鉢の口縁部から胴部で、北東壁際の覆土下層から、2の深鉢の口縁部から胴部の破片は、中央部の覆土中層から出土している。3は有孔罇付土器の口縁部片である。4~7は深鉢の口縁部片である。4~6は単節縄文RLを地文に、沈線をともなう隆帯が貼付され、垂下する沈線間は磨り消しが施されている。7は口縁部から胴部の破片で、単節縄文RLを地文に沈線が施されており、上位には棒状工具による円形利突が施されている。8・9は深鉢の胴部片である。8・9は単節縄文LRを地文に、垂下する沈線間は磨り消しが施されている。10は3と同一個体と思われる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期(加曾利EⅢ式期)と考えられる。

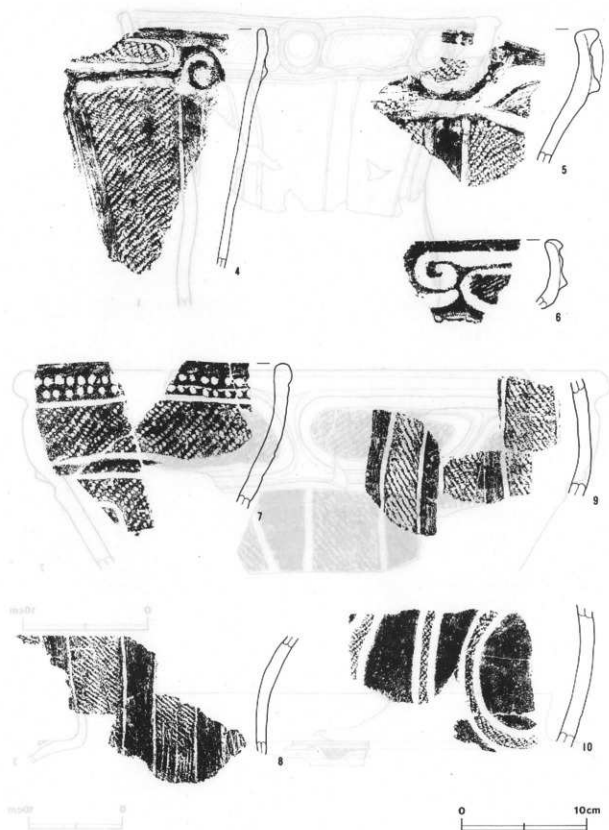
第3326号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	深鉢 縄文土器	A 30.9	口縁部~胴部。口縁部は、隆帯により円形・楕円形を1単位区画にされ、6分割されている。胴部は単節縄文LRを地文に、垂下する沈線間に磨り消しが施されている。	砂粒・石英・スコリア 褐色 普通	P275, P.L21, 10% 覆土 加曾利EⅢ式
		B (23.6)			
2	深鉢 縄文土器	A (46.0)	口縁部~胴部片。口縁部は、沈線と隆帯により楕円形に区画され、区画内には単節縄文RLが施されている。胴部は単節縄文RLを地文に、垂下する沈線間に磨り消しが施されている。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P276, P.L22, 10% 覆土 加曾利EⅢ式
		B (16.1)			
3	有孔罇付 縄文土器	A (50.4)	口縁部片。口縁部は外傾し、無文である。罇部には穿孔が1か所認められる。赤形痕が認められる。	砂粒・石英・スコリア ふい褐色 普通	P277, P.L22, 5% 覆土 加曾利EⅢ式
		B (7.8)			



第67图 第3326号土坑出土遗物实测图(1)

《殷周青铜器》上册 1955年 100页



第68图 第3326号土坑出土文物实测图(2)

1. 陶器类 2. 玉器类 3. 铜器类 4. 铁器类 5. 石器类 6. 骨器类 7. 其他类

第3389号土坑 (第69・70図)

位置 調査区の南部, I11b区。

重複関係 東部覆土上を第554号住居跡に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長径2.27m, 短径1.74mの楕円形で, 深さ54cmである。

長径方向 N-14°-E

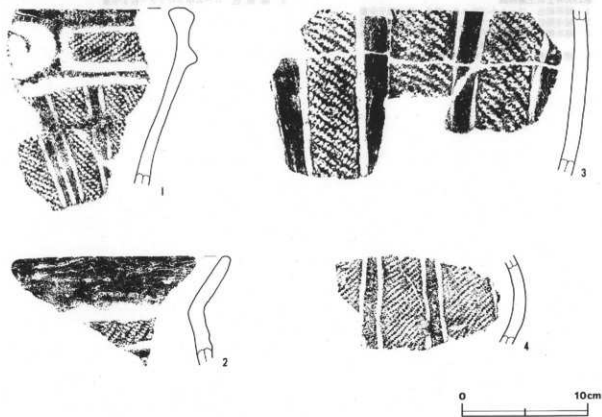
壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 5層からなる。1・2層は混貝土層である。覆土中の含有物から人為堆積と思われる。



第69図 第3389号土坑実測図



第70図 第3389号土坑出土遺物実測図



#### 土層解説

- 1 洗貝土層 ローム粒子中量、ヤマトシジミ少量
- 2 洗貝土層 炭化物少量、ローム粒子微量、ヤマトシジミ少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

遺物 覆土中から、縄文土器片が少量出土している。第70図1は深鉢の口縁部から胴部の破片で、単節縄文LRを地文に、口縁部は隆帯により楕円区画され、胴部に垂下する沈線間は磨り消しが施されている。2は壺の口縁部から頸部の破片で、口縁部は無文、頸部は単節縄文RLが施されている。3・4は深鉢の胴部片で、3は単節縄文LR、4は単節縄文RLを地文にし、それぞれ垂下する沈線間は磨り消しが施されている。1・2層にヤマトシジミが少量含まれていた。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期（加曾利EⅡ式期）と考えられる。埋没の過程で貝が捨てられ、地点貝塚が形成された。貝についての分析結果は、付章を参照された。

#### その他の土坑

##### 第2968号土坑土層解説

- 1 明赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 6 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 7 褐色 ローム小ブロック・粒子少量

##### 第2995号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

##### 第2996号土坑土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム小ブロック・粒子・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム小ブロック・粒子・焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・粒子中量

##### 第3272号土坑土層解説

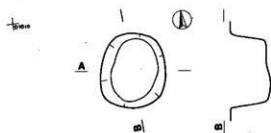
- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子極少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量

##### 第3289号土坑土層解説

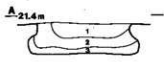
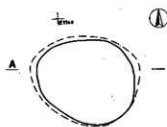
- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子極少量

##### 第3316号土坑土層解説

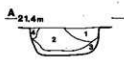
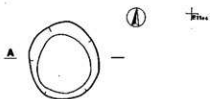
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量



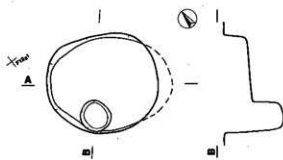
SK 2988



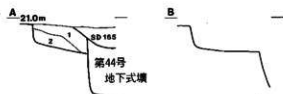
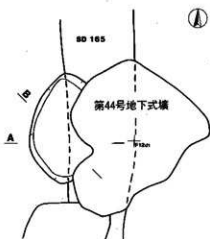
SK 2995



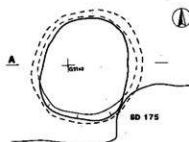
SK 2986



SK 3272



SK 3289



SK 3316



第71図 その他土坑実測図

表3 縄文時代土坑一覽表

土坑 番号	位置 (長軸方向)	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		深さ (cm)	壁面	底面	覆土	時 期	出 土 遺 物	備 考 新田関係(古→新)
				径、長径×短径 (m)	径 (m)							
2986	D11b	—	円 形	[2.25]	95	袋状	平坦	自然	加曾利E I式期	縄文土器片	袋状土坑	
2988	D10f	N-21°-E	楕 円 形	1.24×1.06	63	外傾	平坦	人為	縄文中期	縄文土器片		
2989	F10e	N-54°-W	楕 円 形	1.75×1.45	57	外傾	段状	人為	縄文中期	縄文土器片		
2990	E10e	—	(円 形)	(3.07)	64	垂直	平坦	人為	加曾利E I式期	縄文土器片、深鉢、浅鉢	ピット有	
2991	E10c	N-0°	楕 円 形	1.86×1.60	46	外傾	平坦	自然	加曾利E I式期	縄文土器片、深鉢		
2992	D11j	N-10°-E	不 定 形	2.30×2.00	11	外傾	平坦	自然	縄文中期	縄文土器片	SK2993→本跡	
2993	D11j	N-45°-W	(楕 円 形)	1.68×(1.40)	10	緩斜	平坦	自然	縄文中期	縄文土器片	本跡→SK2992	
2994	E11d	—	円 形	1.74	57	袋状	平坦	人為	加曾利E I式期		袋状土坑、ピット有	
2995	E11e	N-63°-W	楕 円 形	1.61×1.36	47	袋状	平坦	自然	縄文	縄文土器片	袋状土坑	
2996	E11e	N-4°-E	楕 円 形	1.24×1.10	45	垂直	段状	人為	縄文			
2997	E11e	—	円 形	1.97	70	袋状	凹凸	人為	加曾利E I式期	縄文土器片	袋状土坑、本跡→S1506	
2998	D11j	N-36°-W	楕 円 形	3.32×2.89	64	袋状	平坦	不明	加曾利E II式期	縄文土器片、深鉢	ピット有	
3000	F11b	N-80°-W	楕 円 形	2.10×1.82	40	緩斜	平坦	自然	加曾利E III式期	縄文土器片、深鉢		
3001	D11j	—	円 形	1.31	85	袋状	平坦	人為	加曾利E I式期	縄文土器片、深鉢、浅鉢	袋状土坑、ピット有、本跡→SD143	
3130	E10h	N-71°-E	楕 円 形	2.01×1.22	89	袋状	平坦	自然	加曾利E I式期	縄文土器片	袋状土坑、ピット有	
3131	E10i	N-43°-E	楕 円 形	2.30×1.91	61	外傾	段状	人為	加曾利E I式期	縄文土器片、深鉢	本跡→SD152、ピット有	
3133	E10i	N-11°-W	楕 円 形	1.78×1.20	42	袋状	平坦	自然	加曾利E I式期	縄文土器片	袋状土坑	
3135	E10j	—	(円 形)	1.95×(1.08)	74	袋状	平坦	自然	縄文中期	縄文土器片、深鉢	袋状土坑、ピット有	
3237	F10h	—	円 形	1.81	51	袋状	平坦	自然	加曾利E I式期	縄文土器片	袋状土坑、ピット有	
3248	F10i	N-38°-W	楕 円 形	1.81×1.67	49	袋状	平坦	自然	加曾利E II式期	縄文土器片	袋状土坑、本跡→SD159	
3250	F10h	N-34°-E	楕 円 形	2.22×1.75	94	袋状	平坦	自然	縄文中期	縄文土器片、深鉢	本跡→SK3230、ピット有	
3269	F11f	—	(円 形)	(2.05)	43	外傾	平坦	自然	加曾利E I式期	縄文土器片	本跡→SK3284、3299	
3272	F12g	—	円 形	1.58×1.54	41	緩斜	凹凸	自然	縄文中期	縄文土器片、深鉢		
3273	F11i	N-0°	楕 円 形	1.52×1.36	41	袋状	平坦	自然	加曾利E I式期	縄文土器片	袋状土坑	
3289	F11d	N-1°-E	(楕 円 形)	1.79×(0.89)	39	外傾	平坦	自然	縄文	縄文土器片		
3316	G11a	N-12°-E	楕 円 形	1.64×1.37	70	袋状	平坦	人為	縄文	縄文土器片、深鉢、浅鉢		
3323	G11d	N-84°-W	楕 円 形	3.55×2.24	65	袋状	平坦	人為	加曾利E II式期	縄文土器片	袋状土坑、ピット有	
3325	G11a	N-11°-E	楕 円 形	1.90×1.65	52	垂直	平坦	自然	縄文	縄文土器片	袋状土坑、ピット有	
3326	G11g	N-70°-W	楕 円 形	4.08×2.83	97	垂直	平坦	人為	加曾利E III式期	縄文土器片、深鉢	ピット有、本跡→S1545	
3389	I11b	N-14°-E	楕 円 形	2.27×1.74	54	外傾	段状	人為	加曾利E II式期	縄文土器片、貝	本跡→S1554、地点貝塚	

## 2 古墳時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

#### 第505号住居跡（第72～74図）

位置 調査区の北部，E11d区。

規模と平面形 長軸6.09m，短軸6.07mの方形である。

主軸方向 N-47°-W

壁 壁高は36～46cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁溝は全周し，上幅20～35cm，下幅3～9cm，深さ6～15cmで，断面形はU字状である。

床 平坦で，南壁から竈，貯蔵穴にかけて，踏み固められている。

竈 北西壁の中央部を壁外に20cmほど掘り込み，砂泥じりの粘土で構築されている。袖の補強材として土師器焼片が出土している。竈上部と煙道部の一部は耕作により攪乱され，下半部のみが遺存している。規模は長さ125cm，幅115cmで，火床部は浅く皿状に掘り込まれており，亦変硬化している。

#### 覆土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量，粘土粒子・炭化物少量
- 2 暗赤褐色 粘土粒子・ローム粒子中量，炭化物少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子中量，炭化物少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子少量，炭化物微量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子中量
- 6 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 8 灰褐色 灰白色粘土粒子中量

ピット 6か所（P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径23～28cmの円形で，深さはP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が82～86cm，P<sub>4</sub>が39cmで，いずれも柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は南東壁際にあり，径35cmの円形，深さ24cmで，出入り口施設に伴うものと思われる。P<sub>6</sub>は北西コーナー部にあり，径42cmの円形，深さ19cmで，性格は不明である。

貯蔵穴 竈の東側にあり，長軸98cm，短軸65cmの隅丸長方形で，深さは63cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，砂礫微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量，炭化物微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・粒子中量

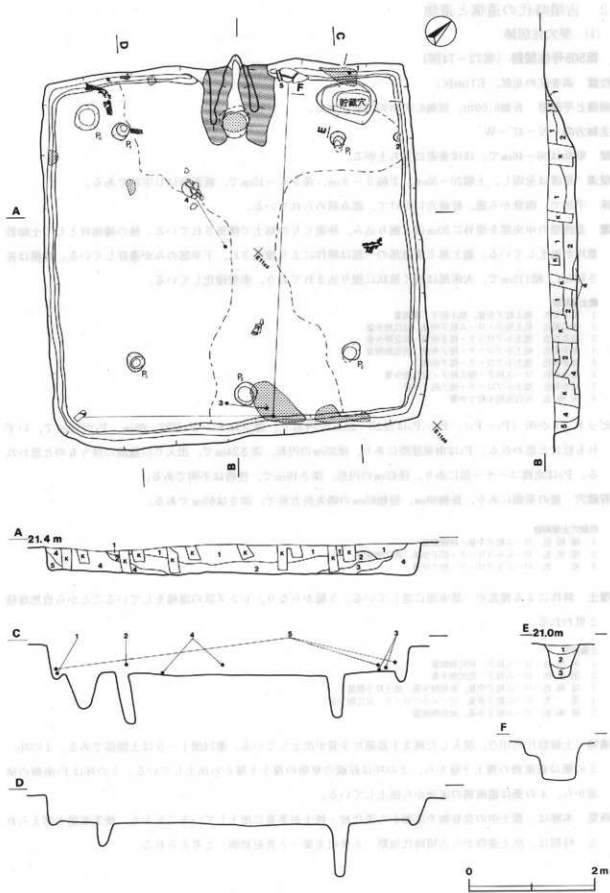
覆土 耕作による攪乱が一部床面に達している。5層からなり，レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

#### 土層解説

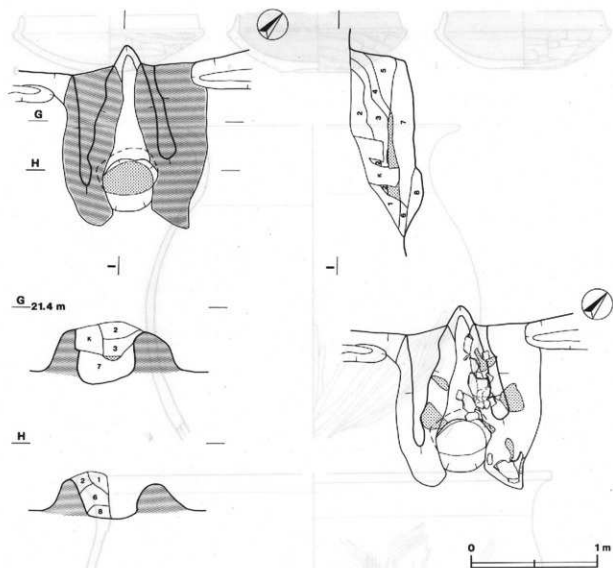
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，炭化物少量，焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量，炭化物微量

遺物 土師器片約50点，混入した縄文土器細片少量が出土している。第74図1～5は土師器である。1の坏，5の甕は竈東側の覆土下層から，2の坏は貯蔵穴東側の覆土下層から出土している。3の坏はP<sub>5</sub>南側の床面から，4の甕は竈南側の床面から出土している。

所見 本跡は，覆土中の含有物や床面から炭化材・焼土が多量に出土していることから，焼失家屋と考えられる。時期は，出土遺物から古墳時代後期（6世紀末葉～7世紀初頭）と考えられる。



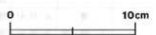
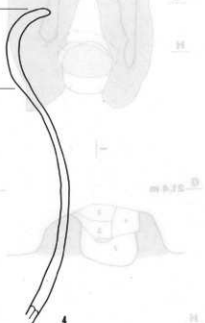
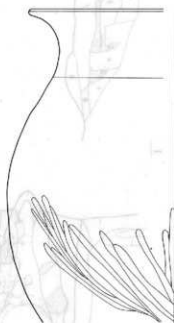
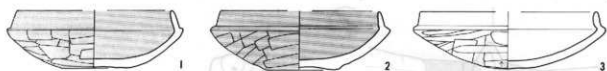
第72図 第505号住居跡実測図



第73図 第505号住居跡竈実測図

第505号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	坏	A(12.3)	口縁部一部欠損。平底。体部は	体部外面へう削り後、一部ナデ、	石英・スコリア	P5. P.L.24
	土師器	B 4.6	内壁して立ち上がり、口縁部は	内面ナデ。口縁部内・外面横ナ	黒色	80%
		C 5.2	やや内傾する。	デ。内・外面黒色処理。	普通	竈東側覆土下層
2	坏	A(12.7)	一部欠損。平底。体部は内壁し	体部外面へう削り後、一部ナデ、	石英・スコリア	P6. P.L.24
	土師器	B 4.8	て立ち上がり、口縁部はやや内	内面ナデ。口縁部内・外面横ナ	黒色	60%
		C 5.6	傾する。	デ。内・外面黒色処理。	普通	貯蔵穴東側覆土下層
3	坏	A(14.2)	一部欠損。丸底。体部は内壁し	体部外面へう削り後、ナデ、内	長石・スコリア	P7. P.L.25
	土師器	B 4.6	て立ち上がり、口縁部はやや内	面ナデ。口縁部内・外面横ナデ、	にぶい棕色	40%
			傾する。		普通	P <sub>1</sub> 南側床面
4	甕	A(23.2)	底部欠損。体部は内壁して立ち	口縁部内・外面横ナデ。体部外	長石・雲母	P8. P.L.25
	土師器	B(25.3)	上がる。頸部でくびれ、口縁部	面へう削り後、へう磨き、内面	にぶい棕色	40%
			は外反する。	ナデ。	普通	竈南側床面
5	甕	A(37.8)	体部から口縁部にかけての破片、	口縁部内・外面横ナデ。体部外	長石・石英・雲母・	P9. P.L.25
	土師器	B(29.8)	体部は緩やかに内壁して立ち上	面へう削り後、へう磨き、内面	スコリア	30%。外面煤付着
			がり、口縁部は外反する。	ナデ。	明藍色、普通	片跡石、竈東側壁部



第74图 第505号住居跡出土遺物実測图

### 第511号住居跡（第75～77図）

位置 調査区の西部，E10ha区。

重複関係 北部を第152号溝に掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸6.42m，短軸6.22mの方形である。

主軸方向 N-48°-W

壁 壁高は40～46cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周し，上幅15～36cm，下幅5～8cm，深さ5～10cmで，断面形はU字状である。

床 平坦である。

竈 北西壁の中央部を壁外に15cmほど掘り込み，砂泥じりの粘土で構築されている。竈上部と煙道部の一部は耕作による擾乱を受け，下半部のみ遺存している。規模は長さ145cm，幅114cmで，火床部は浅い皿状になっており，少量の焼土が残っている。

#### 竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量

ピット 5か所（P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径40～56cm，短径38～47cmの円形または楕円形，深さ46～58cmで，柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は南東壁際にあり，径75cmの円形，深さ20cmで出入り口施設に伴うものと思われる。

貯蔵穴 竈の東側にあり，長径123cm，短径96cmの楕円形で深さは55cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量，炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量，炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・粒子，炭化物少量

覆土 5層からなり，レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

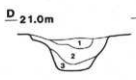
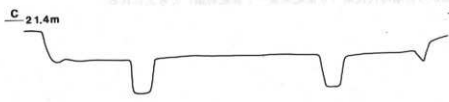
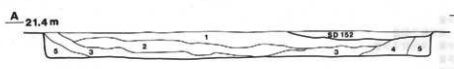
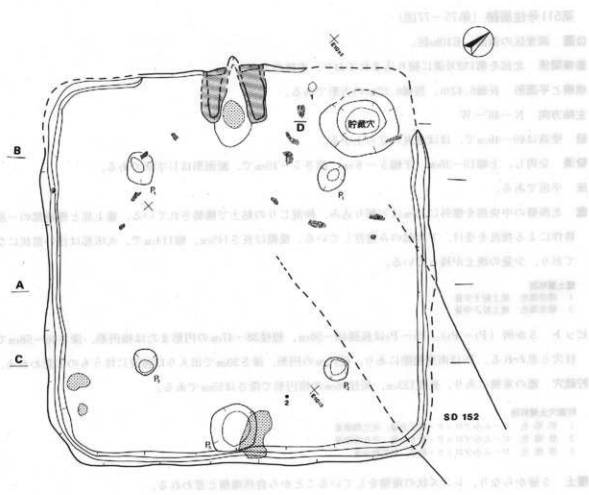
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

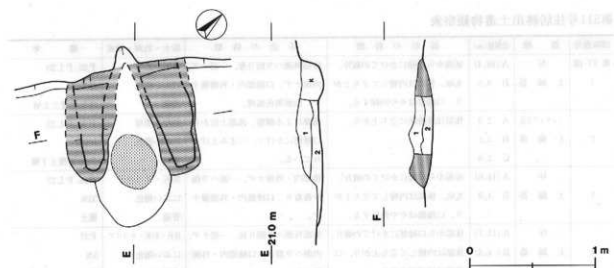
遺物 土師器片約110点，混入した縄文土器細片少量，陶器片少量，石器1点（石斧）が出土している。第77図1から7は，いずれも土師器である。1の坏は竈東側の覆土上層から，2のミニチュア土器はP<sub>5</sub>東側の覆土下層から出土している。3・4の坏，5の甕，6のミニチュア土器，7の土製鏡は，それぞれ覆土中から出土している。

所見 本跡は，覆土中の含有物や床面から炭化材・焼土が大量に出土していることから，焼失家屋と考えられる。時期は，出土遺物から古墳時代後期（6世紀末葉～7世紀初頭）と考えられる。

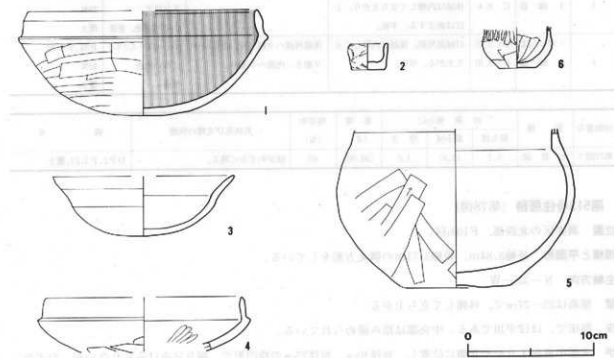




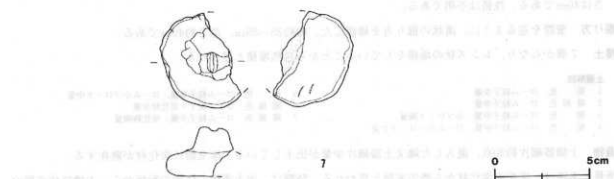
第75図 第511号住居跡実測図



第76图 第511号住居跡實測図



虎洞遗址出土陶器统计图



第77图 第511号住居跡出土遺物実測図

第511号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 77 図 1	土 器 器	A (18.4)	底部から口縁にかけての破片。 丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部はやや内傾する。	体部外面へうり後、一部ナデ、 内面ナデ。口縁部内・外面横ナ デ。内面黒色処理。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P25, P L23 20% 産東側覆土上層
		B 8.5				
2	土 器 器	A 2.9	体部は直線的に立ち上がる。	指領による調整。体部上位から 口縁部にかけて、つまみ上げら れている。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P30, P L23 100% P <sub>1</sub> 東側覆土下層
		B 2.1				
		C 2.6				
3	土 器 器	A (14.6)	底部から口縁にかけての破片。 丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部はやや外反する。	体部内・外面ナデ、一部へうり削 り痕有り。口縁部内・外面横ナ デ。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P26, P L23 30% 覆土
		B 4.8				
4	土 器 器	A (15.7)	底部から口縁部にかけての破片。 丸底。体部は内彎して立ち上がり、口 縁部はほぼ直立する。	体部外面へうり後、一部ナデ、 内面へうり磨き。口縁部内・外面 横ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P27 5% 覆土
		B (4.3)				
5	土 器 器	B (12.7)	底部から体部にかけての破片。 丸底。体部は内彎して立ち上がり、上 位は直立する。平底。	体部外面へうり削り。	砂粒・長石・石英・ スコリア にぶい褐色。普通	P28, P L23 20% 覆土
		C 8.4				
6	土 器 器	B (3.2)	口縁部欠損。体部は内彎して立 ち上がる。平底。	体部外面へうり削り後、上位はへ うり磨き。内面へうり削り。	長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P31, P L23 40% 覆土
		C (3.0)				

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備 考
		最大径	最小径	厚 さ				
第77図7	土 製 鏡	5.2	(3.6)	1.0	(30.00)	60	鏡がわずかに残る。	D P2, P L23, 覆土

第513号住居跡 (第78図)

位置 調査区の北西部, F10d区。

規模と平面形 長軸3.84m, 短軸3.71mの隅丸方形をしている。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は25-27cmで、外傾して立ち上がる。

床 貼床で、ほぼ平坦である。中央部は踏み締められている。

炉 床面中央部よりやや北側に位置し、長径40cm, 短径25cmの楕円形で、掘り込みはみられないが、わずかに赤変硬化している。

ピット P1は、掘り方の中から検出された。南西コーナー部に位置する。長径28cm, 短径18cmの楕円形、深さは40cmである。性格は不明である。

掘り方 壁際を巡るように、溝状の掘り方を確認した。幅約35-85cm, 深さ約40cmである。

覆土 7層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1. 褐色 ローム粒子少量             | 5. 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量 |
| 2. 暗褐色 ローム粒子中量            | 6. 暗褐色 ローム粒子・炭化材少量        |
| 3. 褐色 ローム粒子中量・小ブロック微量     | 7. 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化材微量     |
| 4. 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |                           |

遺物 土器器細片約30点, 混入した縄文土器細片少量が出土している。床全面に炭化材が散在する。

所見 本跡は、床面の炭化材から焼失家屋と思われる。時期は、出土遺物、住居の形状から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第514号住居跡（第79～82図）

位置 調査区の西部，F10a区。

規模と平面形 長軸7.66m，短軸7.63mの方形である。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高は36～52cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅20～36cm，下幅8～14cm，深さ5～8cmで，断面形はU字状である。

床 平坦で，中央部から竈にかけて，若干踏み固められている。

竈 北西壁の中央部を壁外に30cmほど掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。竈上部と煙道部の一部は耕作により攪乱され，下半部のみが遺存している。規模は長さ125cm，幅134cmで，火床部は浅く皿状に掘り込まれており，焼土がわずかに残る。

竈土層解説

- |        |                       |        |                     |
|--------|-----------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子・粘土粒子微量          | 6 暗赤褐色 | 粘土中ブロック少量，焼土粒子微量    |
| 2 暗赤褐色 | 粘土粒子中量，ローム粒子微量        | 7 暗赤褐色 | 粘土小ブロック少量・焼土粒子微量    |
| 3 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・粘土粒子少量        | 8 暗赤褐色 | 焼土中ブロック少量           |
| 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子中量              |
| 5 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土粒子少量        | 10 暗褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット 13か所（P<sub>1</sub>～P<sub>13</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径30～45cm，短径30～35cmの円形または楕円形で，深さはP<sub>1</sub>が82cm，P<sub>2</sub>が37cm，P<sub>3</sub>が104cm，P<sub>4</sub>が96cm，P<sub>5</sub>が24cm，P<sub>6</sub>が92cmで，柱穴と思われる。P<sub>7</sub>は南東壁際であり，長径56cm，短径46cmの楕円形，深さ35cmである。出入り口施設に伴うものと思われる。P<sub>8</sub>は竈の南側にあり，径30cmの円形で，深さ46cm，P<sub>13</sub>は北西コーナーにあり，径46cmの円形で深さは27cmである。P<sub>9</sub>～P<sub>12</sub>は中央部にあり，径24～40cmの円形または楕円形で，深さは16～24cmである。いずれも性格は不明である。

貯蔵穴 竈の西側にあり，長径105cm，短径60cmの楕円形で，深さは51cmである。

貯蔵穴土層解説

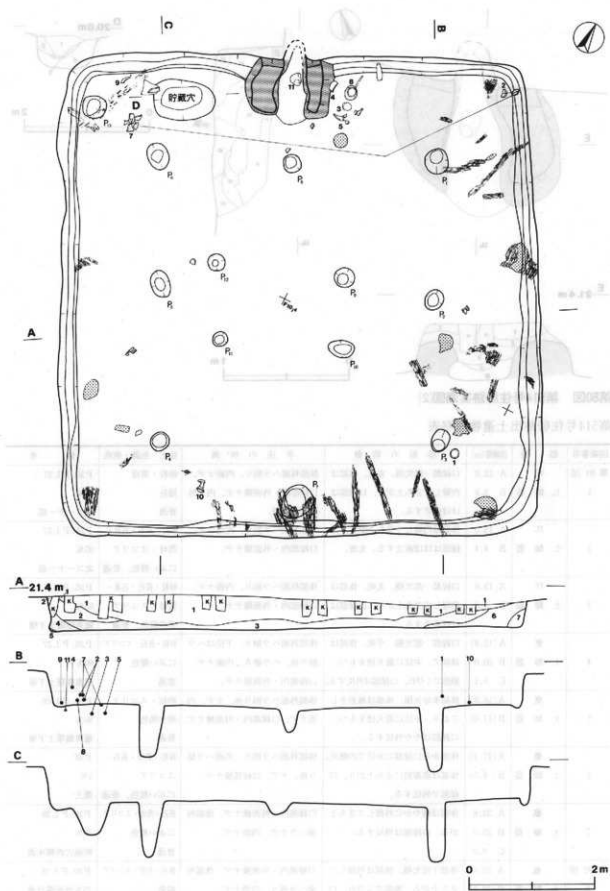
- |       |                    |
|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック少量，ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子微量     |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量       |
| 4 褐色  | ローム粒子中量            |

覆土 7層からなり，レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

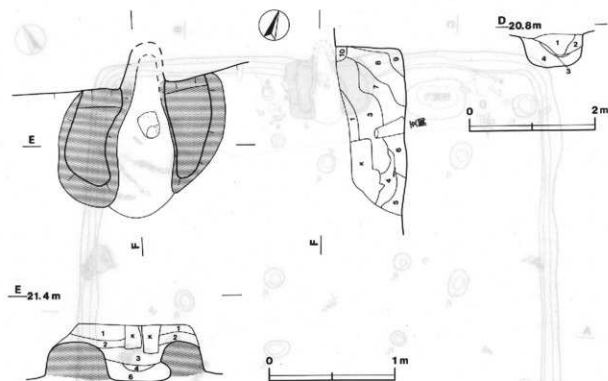
土層解説

- |       |                     |
|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量             |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子微量      |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 6 暗褐色 | 焼土・炭化粒子中量，ローム粒子少量   |
| 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量   |

遺物 土師器片約560点，須恵器1点，土製品2点（支脚），混入した縄文土器細片少量が出土している。東コーナーおよび西コーナー付近を中心に，壁面から床面にかけて，多量の炭化材が出土している。第81・82図の坏は東コーナー付近から正位で，2の坏は北コーナー部から出土している。3の坏と8の甗は逆位で，4・5の甗とともに竈東側の覆土下層から出土している。7と9の甗は貯蔵穴の西側の床面から出土している。7の甗は炭化材の下になっていた。10の高坏は，P<sub>7</sub>西側の床面から横位で出土している。11は土製支脚で，竈内から出土している。また，同様の支脚が竈東側の壁に立てかけられたような状況で出土している。所見 本跡は，覆土中の含有物，床面の炭化材・焼土から焼失家屋と思われる。時期は，出土遺物から古墳時代後期後半（6世紀末葉～7世紀初頭）と考えられる。



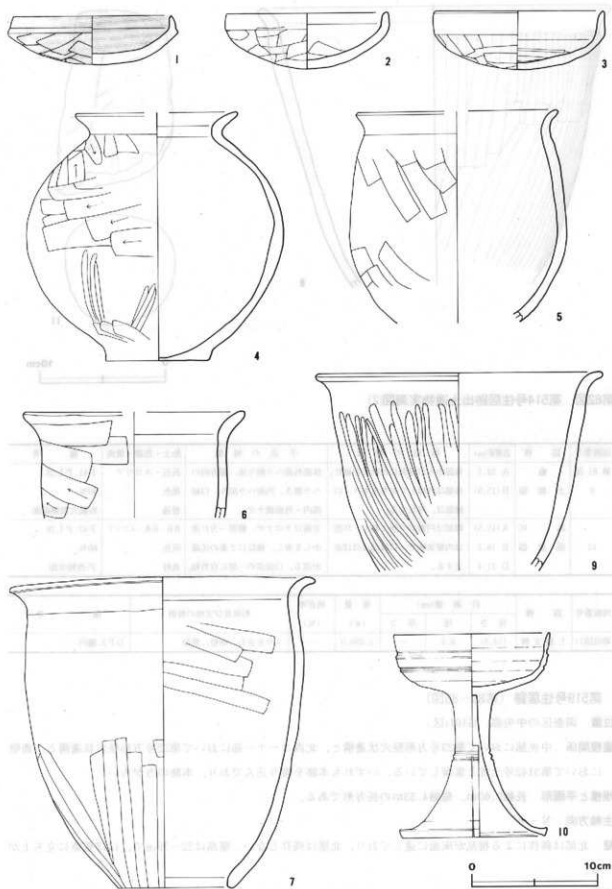
第79图 第514号住居跡实测图(1)



第80図 第514号住居跡実測図(2)

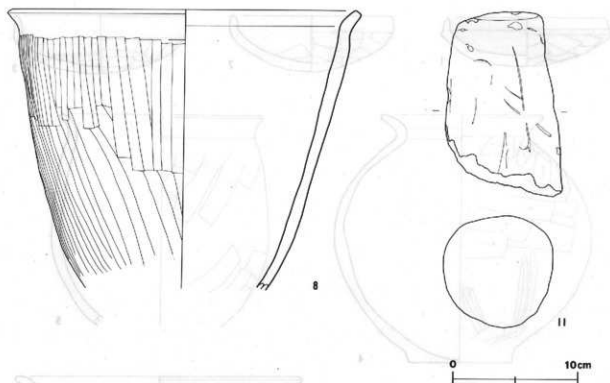
第514号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	土 師 器	A 12.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・雲母	P33, P.L.27
		B 3.9	内壁して立ち上がり、口縁部は ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外 面黒色処理。	雲母 普通	95% 東コーナー部
2	土 師 器	A 13.0	体部は内壁して立ち上がり、口	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・	P34, P.L.27
		B 4.4	縁部はほぼ直立する。丸底。	口縁部内・外面横ナデ。	雲母・スコリア	95%
3	土 師 器	A 13.6	口縁部一部欠損。丸底。体部は	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	砂粒・長石・石英・	P35, P.L.27
		B 4.8	内壁して立ち上がり、口縁部は ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	雲母・スコリア	95%
4	土 師 器	A [12.8]	口縁部一部欠損。平底。体部は	体部外面ヘラ削り、下位はヘラ	砂粒・長石・スコリア	P36, P.L.27
		B 20.0	球状で、中に最大径をもつ。	削り後、ヘラ磨き。内面ナデ。	にぶい棕色	60%
		C 8.1	頸部でくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	普通	壺東側覆土下層
5	土 師 器	A [16.0]	体部半分欠損。体部は壺形をして	体部外面ヘラ削り後、ナデ。内	砂粒・スコリア	P37, P.L.28
		B [17.0]	ており、下位に最大径をもつ。 口縁部はやや外反する。	面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	明赤褐色 普通	30% 壺東側覆土下層
6	土 師 器	A [17.4]	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ削	砂粒・雲母・長石・	P38
		B ( 8.5)	体部は直線的に立ち上がり、口 縁部で外反する。	り後、ナデ。口縁部横ナデ。	スコリア	5%
7	土 師 器	A 23.8	体部は緩やかに外傾して立ち上	口縁部内・外面横ナデ。体部外	長石・雲母・スコリア	P39, P.L.38
		B 25.0	がる。口縁部は外反する。	面ヘラナデ、内面ナデ。	にぶい棕色	70%
		C 9.3			普通	貯蔵穴西側床面
第82図 8	土 師 器	A 27.6	体部下位欠損。体部は外傾して	口縁部内・外面横ナデ。体部外	長石・石英・スコリア	P40, P.L.28
		B [22.5]	立ち上がる。頸部でくびれ、口 縁部は外反する。	面ヘラ削り、内面ナデ。	棕色 普通	75%外面塚付着 壺東側覆土下層



第81图 第514号住居跡出土遺物実測図(1)





第82図 第514号住居跡出土遺物実測図②

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 9	土器 鉢	A 22.5	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がり、口 縁部は、外反する。	体部外面へう削り後、縦方向の へう磨き。内面へう削り。口縁 部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 褐色 普通	P41, P L 28 40% 貯蔵穴西側床面
		B (15.9)				
10	高須 壺	A (12.5)	脚部は円錐形で強く開く。坏部 は内壁気味で、口縁部はほぼ直 立する。	全面ロクロナデ。脚部一方に透 かしを有し、横位に2条の沈線 が走る。口縁部の一部に自然釉。	長石・石灰・スコリア 灰色 良好	P42, P L 28 80% P <sub>2</sub> 西側床面
		B 16.3				
		D 11.4				

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	径	厚さ				
第82図11	土製支脚	(14.8)	8.8	—	1,030.0	—	スサを含む。砂粒、雲母	DP3.壺内

### 第519号住居跡（第83～85図）

位置 調査区の中央部、G10f区。

重複関係 中央部において第23号方形竪穴状遺構と、北西コーナー部において第22号方形竪穴状遺構と、西壁において第3142号土坑と重複している。いずれも本跡を掘り込んでおり、本跡の方が古い。

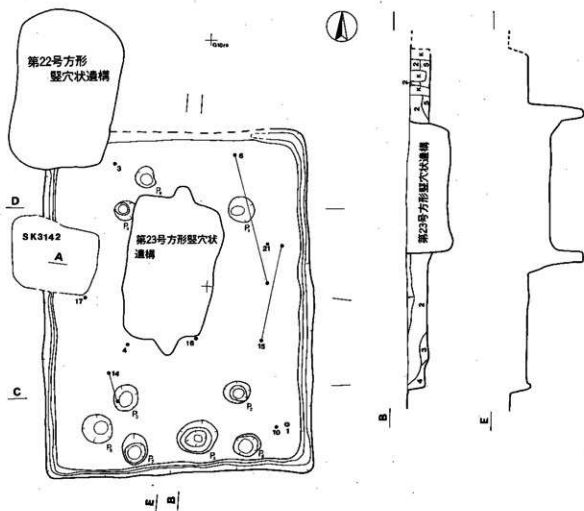
規模と平面形 長軸5.60m、短軸4.33mの長方形である。

主軸方向 N-0°

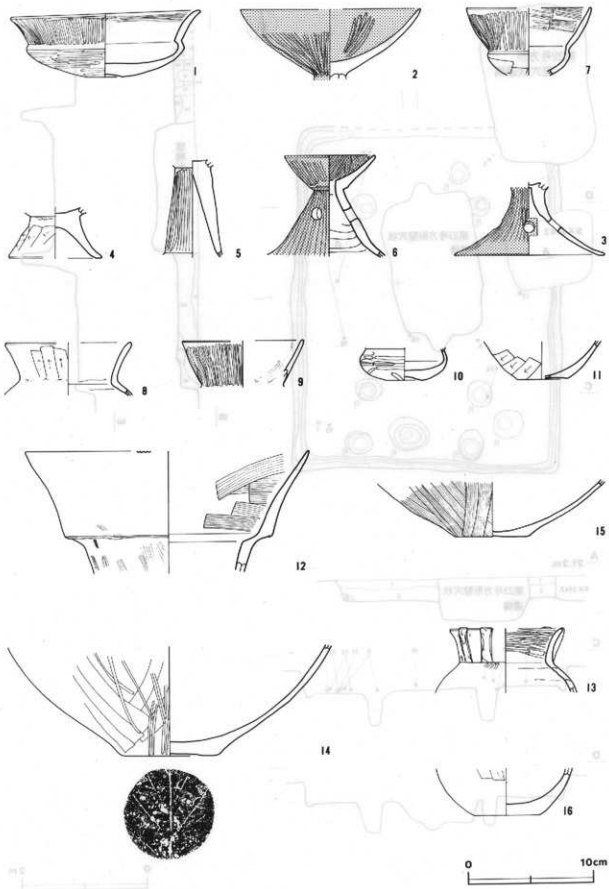
壁 北部は耕作による攪乱が床面に達しており、北壁は残存しない。壁高は32～39cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周すると思われる。上幅15～25cm、下幅5～12cm、深さ3cmである。

図版実測遺土出物番号42番 図15番

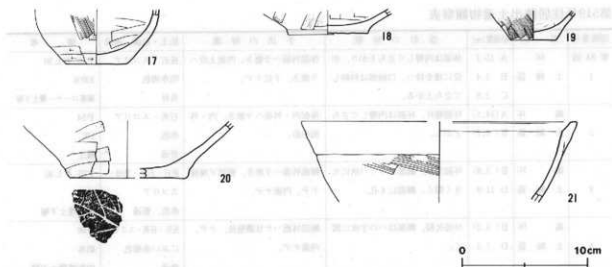


第83図 第519号住居跡実測図



第84图 第519号住居跡出土遺物実測図(1)

国文学研究資料館蔵 2025.12



第85図 第519号住居跡出土遺物実測図2)

床 平坦である。硬化面は確認できない。中央部を第23号方形竪穴状遺構に掘り込まれており、一部焼土が見られることから知が付設されていたと考えられるが、遺存しない。

ピット 9か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>9</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は各コーナー寄りに位置し、径30~45cmの円形で、深さ41~56cmである。

P<sub>5</sub>は南壁際中央部にあり長径70cm、短径36cmの楕円形、深さ61cmで、出入り口施設に伴うものと思われる。

P<sub>6</sub>~P<sub>8</sub>は南壁際にあり長径45cm、短径40cmの楕円形で、深さはP<sub>6</sub>が35cm、P<sub>7</sub>が50cm、P<sub>8</sub>が38cmである。

P<sub>9</sub>は径35cmの円形で、深さ62cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- |   |     |                    |
|---|-----|--------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子微量            |
| 2 | 黒褐色 | ローム小アロック・粒子少量      |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小アロック微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小アロック微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム小アロック・粒子少量      |
| 6 | 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小アロック微量 |

遺物 土師器片約200点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第84・85図1の坏、10の罫は南東コーナー付近から、3の高坏、6の器台は北部から出土している。それぞれ覆土下層からの出土である。4の高坏、14・16の甕は中央部から南西コーナー付近にかけて、覆土下層から出土している。15の甕、21の甌は東部の、17の甕は西部の覆土下層から出土している。2の坏、5の高坏、7・9の罫、13の裝飾壺、18~20の甕は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

第519号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	土 師 器	A 15.1	体部は内彎して立ち上がり、中位に段を持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラ磨き。内面上位へラ磨き、下位ナデ。	長石・スコリア 明赤褐色 良好	P53, P.L.30 100% 南東コーナー覆土下層
		B 5.4				
		C 2.8				
2	高土 師 器	A(14.5)	坏部破片。坏部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面へラ磨き。内・外面赤影。	石英・スコリア 赤色 普通	P54 5% 覆土
		B(5.7)				
3	高土 師 器	B(5.8)	坏部欠損。脚部はラッパ状に大きく開く。脚部に4孔。	脚部外面へラ磨き、裾部下端横ナデ。内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 赤色、普通	P55, P.L.30 45% 北部覆土下層
		D 11.9				
4	高土 師 器	B(4.2)	坏部欠損。脚部はハの字状に開く。	脚部外面ハケ目調整後、ナデ。内面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	P56 45% 中央部覆土下層
		D 7.3				
5	高土 師 器	B(7.9)	脚部片。脚部は中空の円筒状で、中位にわずかな膨らみを持つ。	脚部外面ハケ目調整後、へラ磨き。	石英・スコリア 赤褐色 普通	P57 20% 覆土
6	器 台 土 師 器	A 7.2	裾部欠損。脚部はハの字状に開く。脚部3孔。器受部は外傾して立ち上がる。	脚部外面へラ磨き、内面ハケ目調整後有り。器受部内・外側へラ磨き。内・外面赤影有り。	長石・石英・スコリア 赤褐色 普通	P58, P.L.30 70% 北部覆土下層
		B(8.2)				
7	埴 土 師 器	A 10.1	底部欠損。体部は扁平な球形を呈する。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面調整後有り。口縁部外面磨き、内面ハケ目調整。	長石・スコリア にぶい橙色 普通	P59, P.L.30 40% 覆土
		B(5.4)				
8	埴 土 師 器	A(9.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部下層でぐびれ、口縁部はやや外反する。	口縁部下層ハケ目調整。口縁部はへラナデ。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P60, P.L.31 10% 覆土
		B 4.2				
9	埴 土 師 器	A(9.8)	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面へラ磨き。	長石・雲母 褐色 普通	P61 5% 覆土
		B(3.0)				
10	埴 土 師 器	B(2.5)	体部片。平底。体部は扁平なそろばん玉状である。	体部内・外面へラ磨き。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい褐色。普通	P62 30% 南東コーナー覆土下層
		C 3.0				
11	埴 土 師 器	B(3.0)	体部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P63 10% 覆土
		C(4.2)				
12	装 飾 壺 土 師 器	A 22.4	頸部から口縁部にかけての破片。頸部と口縁部の境に明瞭な段を持つ。口唇部はキザミ。	頸部・口縁部外面ハケ目調整後ナデ。頸部・口縁部外面ハケ目調整。	長石・スコリア 明赤褐色 普通	P64, P.L.31 10% 覆土
		B(9.8)				
13	装 飾 壺 土 師 器	A(9.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は、ほぼ直立する。	体部外面ハケ目調整後、ナデ。上位はまばらな磨き。口縁部横ナデ後、棒状浮文の貼付。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P65, P.L.31 10% 覆土
		B(5.2)				
14	埴 土 師 器	B(8.8)	底部から体部にかけての破片。平底でやや突出する。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部木炭痕。体部外面ハケ目調整後、へラ磨き。	長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P66, P.L.31 10%、二次焼成痕 中央部覆土下層
		C 7.0				
15	埴 土 師 器	B(4.5)	底部から体部にかけての破片。平底でやや突出する。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部へラ磨り。体部外面ハケ目調整。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P67 20% 東部覆土下層
		C 6.0				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第84図 16	甕 土 師 器	B (3.8) C 5.2	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面ハケ目調整。	スコリア にぶい褐色 普通	P68 10% 中央部覆土下層
第85図 17	甕 土 師 器	B (4.5) C 5.0	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面上位ハケ目調整。下位ヘラナデ。内面ヘラ削り。	長石・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P69 10% 西部覆土下層
18	甕 土 師 器	B (2.0) C 6.4	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面ハケ目調整。内面ヘラ削り。	長石・石英・雲母・ スコリア にぶい赤褐色、普通	P70 10% 覆土
19	甕 土 師 器	B (2.2) C 3.6	底部から体部にかけての破片。 平底。体部はやや内彎気味に立ち上がる。	体部外面ハケ目調整。内面ナデ。	スコリア にぶい褐色 普通	P71 10% 覆土
20	甕 土 師 器	B (4.7) C (9.4)	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ハケ目調整。	長石・石英 褐色 普通	P72 10% 覆土
21	甌 土 師 器	A (22.0) B (6.5)	体部から口縁部にかけての破片。 下位はやや内彎し、上位は直線的に立ち上がる。	体部外面ハケ目調整後、ナデ。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P73, P L31 10% 東部覆土下層

#### 第520号住居跡 (第86～88図)

位置 調査区の西部、G9h9区。

規模と平面形 南北3.98m、東西(2.66)mである。西部は調査区域外のために、平面形は不明である。

壁 壁高は31～43cmで、緩やかに立ち上がる。

壁溝 調査した部分では全周しており、上幅20～25cm、下幅4～14cm、深さ5～12cmである。

床 平坦で、中央部から南部にかけて踏み固められている。

炉 2か所確認された。炉1は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>間にあり、長径56cm、短径48cmの楕円形である。床面を浅く掘りくはめており、全面が赤変硬化している。炉2は、P<sub>2</sub>の南側にあり、長径30cm、短径22cmの楕円形で、わずかに焼土が認められる。

##### 炉1土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 粘土粒子中量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は長径50cm、短径35cmの楕円形で、深さ38cm、P<sub>2</sub>は長径43cm、短径38cmの楕円形、深さ62cmである。それぞれ北東コーナー、南東コーナーに寄った位置にあり、柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は長径54cm、短径48cmの楕円形で、深さ90cm、P<sub>4</sub>は長径56cm、短径48cmの楕円形、深さ38cmで、性格は不明である。

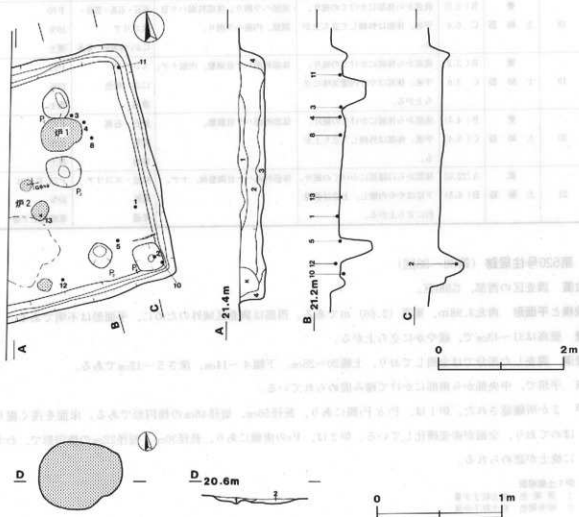
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

##### 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量

遺物 土師器片約50点、土製品1点(管状土鉢)、石製品1点(砥石)、混入した縄文土器細片少量が出土している。第87・88図1の坏、11の甕は東側の壁溝付近から、3・4の高坏、8の埴は埴1東側の床面から出土している。2の高坏、10の甕はP<sub>1</sub>内から、12の甕、13の管状土鉢はP<sub>2</sub>西側の床面から出土している。5の高坏は東コーナー部の床面から出土している。6・7の高坏、9の埴は覆土中からの出土である。

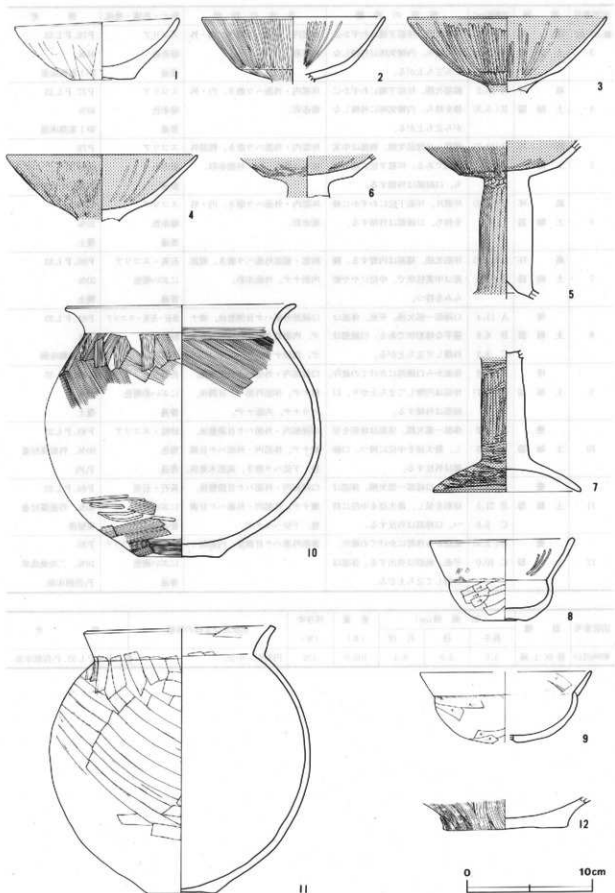
所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第86図 第520号住居跡実測図

第520号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・造成	備考
第87図 1	坏	A 13.2	口縁部一部欠損。底部は平底で、やや突出する。坏部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ハケ目調整、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリアに多い黄褐色	P74, P.L.32 95% 東摩溝
	土師器	B 4.9			普通	
	高坏	C 5.1				
第88図 2	坏	A 14.8	脚部欠損。坏部下腹に横を持ち、内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。	長石・石炭・スコリア 褐色	P75, P.L.32 50% P <sub>1</sub> 内
	土師器	B (5.3)			普通	



第87图 第520号住居跡出土遺物実測図(1)

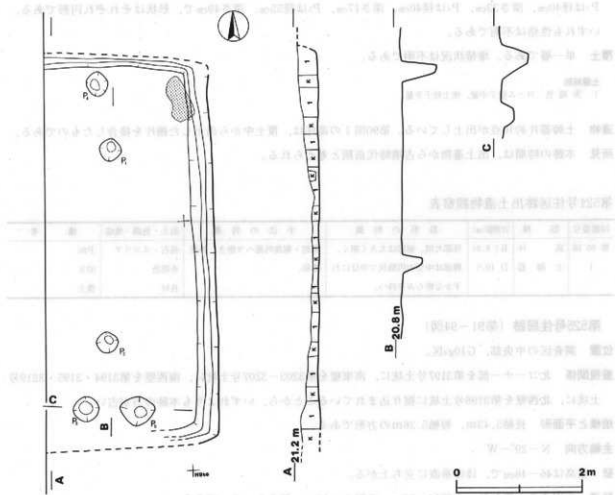


図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 87 図 3	高 土 師 器	A 15.8	脚部欠損。坏部下端にわずかに稜を持ち、内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	坏部内・外面へラ磨き。内・外面赤彩。	スコリア 暗赤色 普通	P76, P.L.33 40% 伊1東側床面
		B ( 6.0)				
4	高 土 師 器	A 15.2	脚部欠損。坏部下端にわずかに稜を持ち、内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	坏部内・外面へラ磨き。内・外面赤彩。	スコリア 暗赤色 普通	P77, P.L.33 40% 伊1東側床面
		B ( 5.3)				
5	高 土 師 器	B (12.7)	裾部・口縁部欠損。脚部は中実柱状である。坏部下位に稜を持ち、口縁部は外傾する。	坏部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き。内・外面赤彩。	スコリア 暗赤色 普通	P78 45% 東コーナー床面
		B ( 3.2)				
6	高 土 師 器	B ( 3.2)	坏部片。坏部下位にわずかに稜を持ち、口縁部は外傾する。	坏部内・外面へラ磨き。内・外面赤彩。	スコリア 暗赤色 普通	P79 10% 覆土
		B (11.3)				
7	高 土 師 器	B (11.3)	坏部欠損。裾部は内彎する。脚部は中実柱状で、中位にやや膨らみを持つ。	脚部・裾部外面へラ磨き。裾部内面ナデ。外面赤彩。	石英・スコリア にぶい褐色 普通	P80, P.L.33 50% 覆土
		D 11.8				
8	増 土 師 器	A 11.4	口縁部一部欠損。平底。体部は扁平な球形状である。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面ハケ目調整後、横ナデ、内面磨き。体部外面へラナデ、内面ナデ。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P81, P.L.33 90% 伊1東側床面
		B 6.6				
		C 3.2				
9	増 土 師 器	A 12.8	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面ハケ目調整後、へラナデ、内面ナデ。	長石・スコリア にぶい赤褐色 普通	P82, P.L.33 50% 覆土
		B ( 5.7)				
10	壺 土 師 器	A 18.2	体部一部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部内・外面ハケ目調整、下位へラ磨き。底部本裏皮。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P83, P.L.33 90%、外面煤付着 P <sub>1</sub> 内
		B 20.3				
		C 6.6				
11	壺 土 師 器	A [14.6]	体部・口縁部一部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部内・外面ハケ目調整、下位へラナデ。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P84, P.L.33 80%、外面煤付着 東壁溝
		B 21.5				
		C 5.6				
12	壺 土 師 器	B ( 2.4)	底部から体部にかけての破片。平底。底部は突出する。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ハケ目調整、内面削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P85 10%、二次焼成痕 P <sub>2</sub> 西側床面
		C 10.0				

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備 考
		長さ	径	孔 径				
第88図13	管状土埴	5.9	3.9	0.3	105.0	100	円筒形、中空。	DP4, P.L.32, P <sub>2</sub> 西側床面

第521号住居跡 (第89・90図)

位置 調査区の西部, H9as区。  
 規模と平面形 南北 (3.15) m, 東西 (2.76) mである。西部は調査区域外であるため平面形は不明である。  
 南北の規模は、壁溝により推定した。

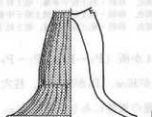


第89図 第521号住居跡実測図



0 5cm

第88図 第520号住居跡  
 出土遺物実測図(2)



0 5cm

第90図 第521号住居跡  
 出土遺物実測図

壁 耕作による擾乱のために南北の壁は確認できない。東壁の壁高は25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁際と北側、南側の一部で確認できた。上幅20-36cm、下幅5-10cm、深さ5cmほどである。

床 耕作による擾乱が全面にみられるが、残存部分から平坦と考えられる。

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>-P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は径35cmの円形で深さ58cm、P<sub>2</sub>は径30cmの円形、深さ35cmで柱穴と思われる。

P<sub>3</sub>は径40cm、深さ23cm、P<sub>4</sub>は径40cm、深さ17cm、P<sub>5</sub>は径55cm、深さ49cmで、形状はそれぞれ円形である。

いずれも性格は不明である。

覆土 単一層である。堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量

遺物 土師器片約10点が出土している。第90図1の高坏は、覆土中から出土した細片を接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

### 第521号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図	高坏	B(8.9)	坏部欠損。裾部は大きく開く。	脚部・裾部外面へラ磨き。外面	灰石・スコリア	P86
1	土師器	D 10.5	脚部は中空の円筒状で中にわずかな膨らみを持つ。	赤彩。	赤褐色 良好	50% 覆土

### 第525号住居跡 (第91-94図)

位置 調査区の中央部、G10g区。

重複関係 北コーナー部を第3197号土坑に、南東壁を第3203-3207号土坑に、南西壁を第3194・3195・3219号土坑に、北西壁を第3196号土坑に掘り込まれていることから、いずれよりも本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸5.43m、短軸5.36mの方形である。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高は46-48cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周すると思われ、上幅14-30cm、下幅5-16cm、深さ5-8cmである。

床 平坦である。

竈 北西壁の中央部を壁外に15cmほど掘り込み、砂混じりの粘土で構築されている。規模は長さ120cm、幅103cmで、火床部は浅く皿状になっている。

#### 覆土層解説

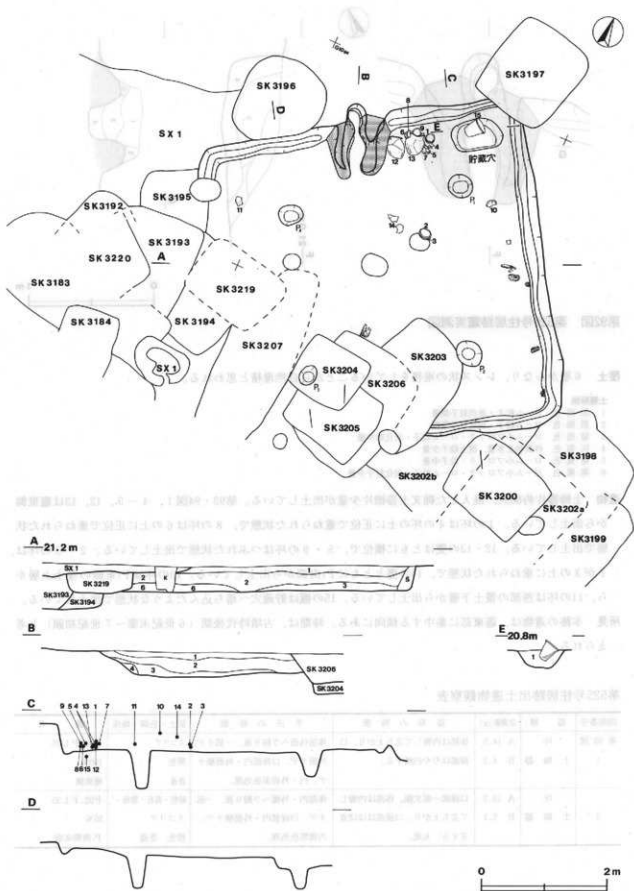
- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子少量
- 3 灰黄褐色 砂粒・粘土粒子多量、焼土粒子少量
- 4 暗赤褐色 砂粒・粘土粒子・焼土粒子中量
- 5 暗赤褐色 砂粒・粘土粒子中量、焼土粒子少量

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>は長径32-46cm、短径26-37cmの楕円形で、深さはP<sub>1</sub>が66cm、P<sub>2</sub>が42cm、P<sub>3</sub>が36cm、P<sub>4</sub>が56cmで、柱穴と思われる。

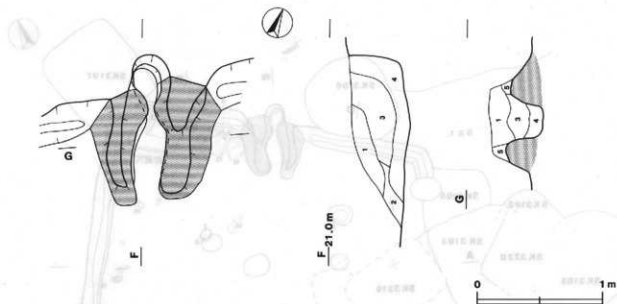
貯蔵穴 竈の東側にあり、長軸85cm、短軸46cmの長方形で、深さは30cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量



第91图 第525号住居跡実測图



第92図 第525号住居跡遺実測図

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

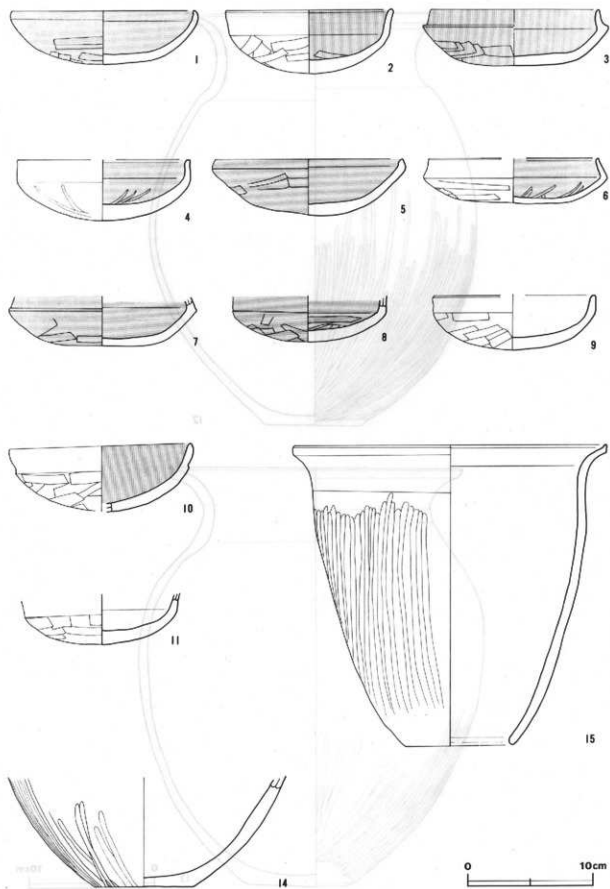
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物中量
- 4 灰褐色 砂質粘土多量、焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片約80点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第93・94図1, 4-9, 12, 13は甕東側から出土している。1の坏は4の坏の上に正位で重ねられた状態で、8の坏は6の上に正位で重ねられた状態で出土している。12・13の甕はともに横位で、5・9の坏はつぶれた状態で出土している。2・3の坏は、2が3の上に重ねられた状態で、14の甕とともにP<sub>1</sub>南側から出土している。10の坏はP<sub>1</sub>東側の覆土上層から、11の坏は西部の覆土下層から出土している。15の甕は貯蔵穴へ落ち込んだような状態で出土している。所見 本跡の遺物は、甕東部に集中する傾向にある。時期は、古墳時代後期（6世紀末葉～7世紀初頭）と考えられる。

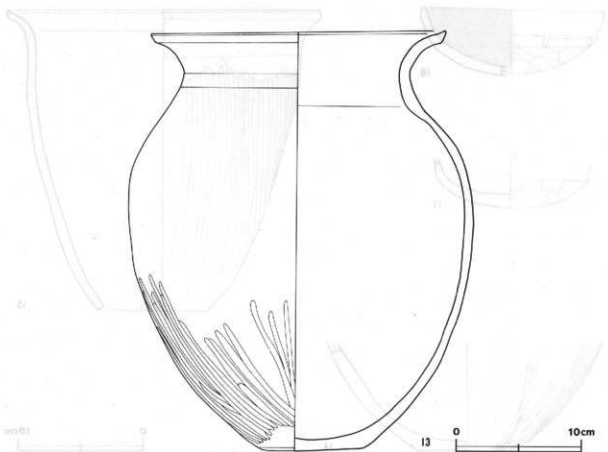
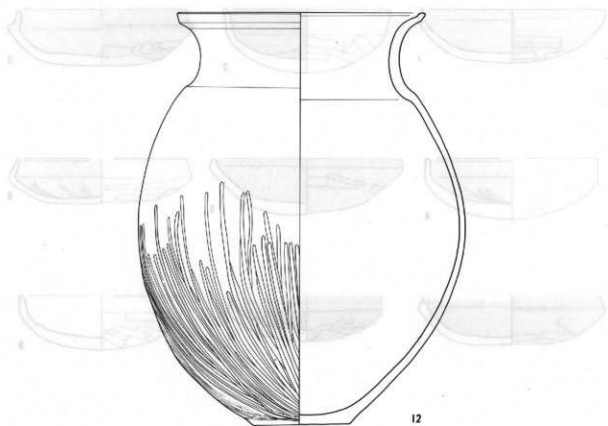
第525号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 1	坏	A 14.5	体部は内増して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り後、一部ナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	スコリア 黒色 普通	P91, P L35 100% 甕東側
	土師器	B 4.3				
2	坏	A 13.2	口縁部一部欠損。体部は内増して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。丸底。	体部内・外面へラ削り後、一部ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 褐色、普通	P92, P L35 95% P <sub>1</sub> 南側床面
	土師器	B 5.1				



第93图 第525号住居跡出土遺物実測図(1)

5 国統実林墓出土磁器器群525番 図93(第1)



第94図 第525号住居跡出土遺物実測図(2)

[[ 國史館藏出土品 第525号 第94号 ]]

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 93 図 3	土 師 器	A 13.5	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り後、ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	長石 黒色 普通	P93, P L 35 80% P <sub>1</sub> 南側床面
		B 4.5				
4	土 師 器	A (13.8)	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。丸底。	体部内・外面へラ削り後、へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 黒褐色、普通	P94, P L 35 90% 龍東側
		B 4.9				
5	土 師 器	A 15.0	口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	スコリア 黒褐色	P95, P L 35 90% 龍東側
		B 4.0				
6	土 師 器	A (15.6)	口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。平底。	体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ後、まばらな磨き。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色、普通	P96, P L 35 75% 龍東側
		B 3.7				
7	土 師 器	B (4.0)	口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	スコリア 黒褐色	P97, P L 35 75% 龍東側
		C 6.0				
8	土 師 器	B (3.8)	口縁部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	長石・石英・スコリア 黒褐色 普通	P98, P L 35 75% 龍東側
		C 6.0				
9	土 師 器	A (12.8)	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P99, P L 36 70% 龍東側
		B 4.5				
10	土 師 器	A 14.6	口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部まで内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P100, P L 36 60% P <sub>1</sub> 東側覆土上層
		B 5.4				
11	土 師 器	B (4.1)	口縁部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P101 40% 西部覆土下層
第 94 図 12	土 師 器	A 14.9	口縁部一部欠損。体部は倒卵形で、最大径を中位に持つ。口縁部は外反し、端部はつまみ上げ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き、内面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P102, P L 36 95%外面残付着 龍東側
		B 33.0				
		C 7.7				
13	土 師 器	A 25.0	口縁部一部欠損。体部はわずかに内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き、内面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P103, P L 36 95%内面刺摩多 龍東側
		B 24.1				
		C 8.6				
第 93 図 14	土 師 器	B (8.6)	底部から体部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上げている。底部平底。	体部外面へラ削り後、へラ磨き。	砂粒・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P104 10%、二次焼成痕 P <sub>1</sub> 南側床面
		C 7.8				
15	土 師 器	A 22.2	口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は外傾し、端部はつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色、普通	P105, P L 36 90%外面残付着 貯蔵穴
		B 36.5				
		C 8.5				



## 第526号住居跡（第95～97図）

位置 調査区の中央部，F10e区。

重複関係 北東壁を第40号地下式竈に，南東壁を第41号地下式竈に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸7.71m，短軸7.66mの方形である。

主軸方向 N-27°-W

壁 壁高は50～58cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周すると思われ，上幅18～35cm，下幅5～18cm，深さ5～8cmである。

床 平坦である。特に踏み固められた面は確認できない。

竈 北西壁の中央部を壁外に20cmほど掘り込み，砂泥じりの粘土で構築されている。規模は長さ130cm，幅130cmで，火床部にはわずかに焼土が認められる。

### 竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量
- 2 灰褐色 粘土ブロック中量，焼土粒子微量
- 3 褐色 粘土ブロック・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 粘土粒子少量，焼土粒子微量
- 5 暗赤褐色 粘土粒子・焼土粒子少量

ピット 4か所（P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径50～72cm，短径48～55cmの円形または楕円形で，深さはP<sub>1</sub>が70cm，P<sub>2</sub>が73cm，P<sub>3</sub>が58cm，P<sub>4</sub>が56cmである。いずれも柱穴と思われる。

貯蔵穴 竈の東側にあり，長軸102cm，短軸82cmの長方形で，深さは54cmである。

### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

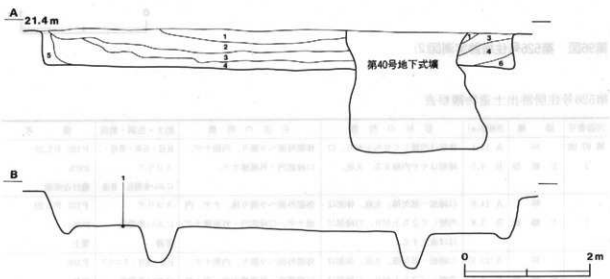
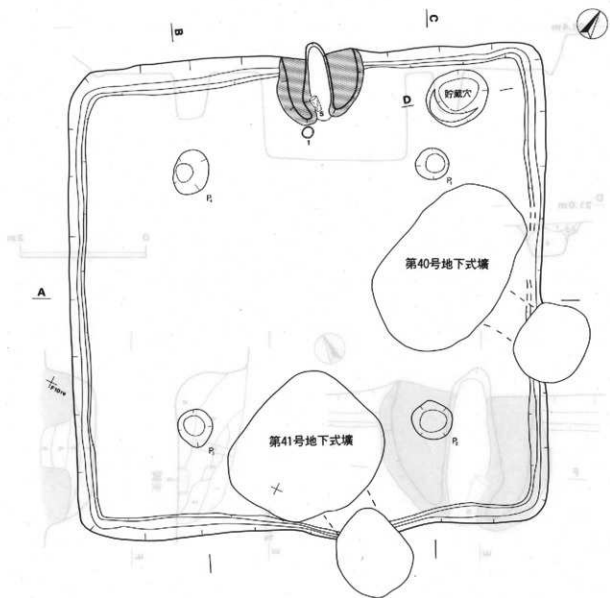
覆土 6層からなり，レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

### 土層解説

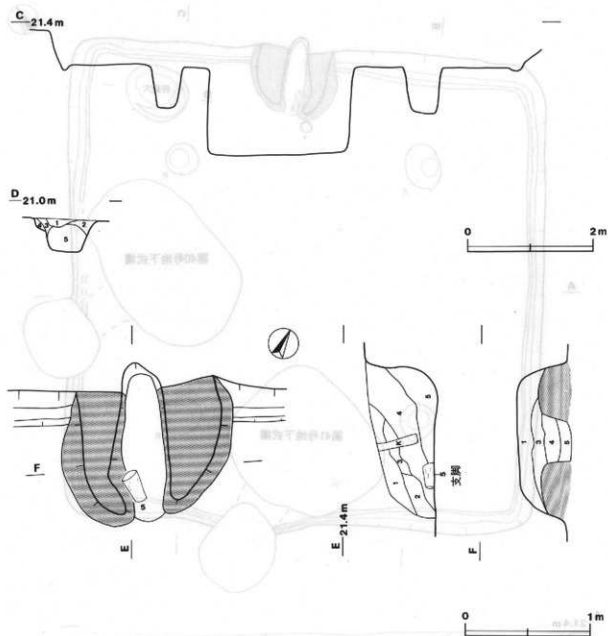
- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子多量，炭化物微量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片約200点，土製品1点（支脚），石製品2点（砥石），混入した縄文土器細片少量が出土している。第97図1の坏は竈付近の床面から，5の土製支脚は竈内から出土している。2・3の坏，4の甗，6の砥石は，覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は，出土遺物から古墳時代後期（6世紀末葉～7世紀初頭）と考えられる。



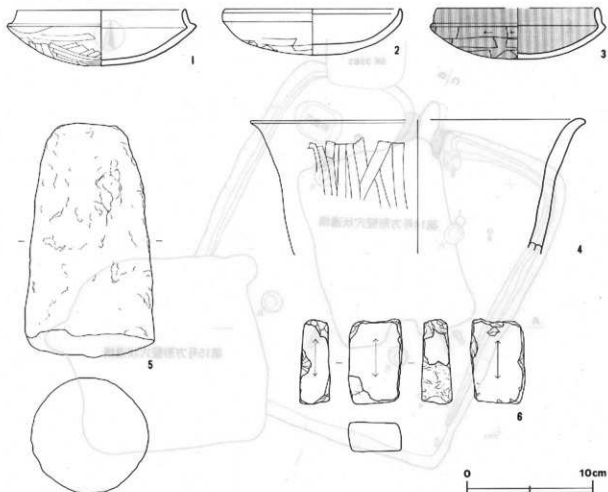
第95图 第526号住居跡実測图(1)



第96図 第526号住居跡実測図(2)

第526号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	目録順(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	土師器	A 13.4	体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。丸底。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	灰石・石英・雲母・スコリア	P106, P L29 100%
		B 4.5			にぶい赤褐色。普通	甍付近床面
2	土師器	A 14.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	スコリア	P107, P L29
		B 3.8			にぶい赤褐色。普通	甍土
第98図 3	土師器	A [12.9]	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	石英・雲母・スコリア	P108
		B 4.2			にぶい赤褐色。普通	甍土



第97図 第526号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 4	土師器	A(26.8)	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面へク削り、内面ナデ。	灰石・石炭・スコリア 褐色 普通	P109 10% 覆土
		B(10.8)	体部は内層気味に立ち上がり、 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。		

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	径	厚さ				
第97図5	土製支脚	(18.7)	9.5	—	1,160.0	80	円筒状。砂粒、雲母を含む	D P 6, P L 29, 覆内

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第97図6	砥石	(6.8)	4.3	2.4	116.0	安山岩	Q2, P L 29, 覆土

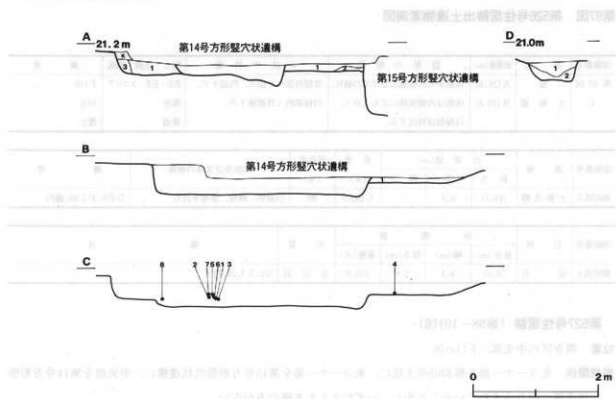
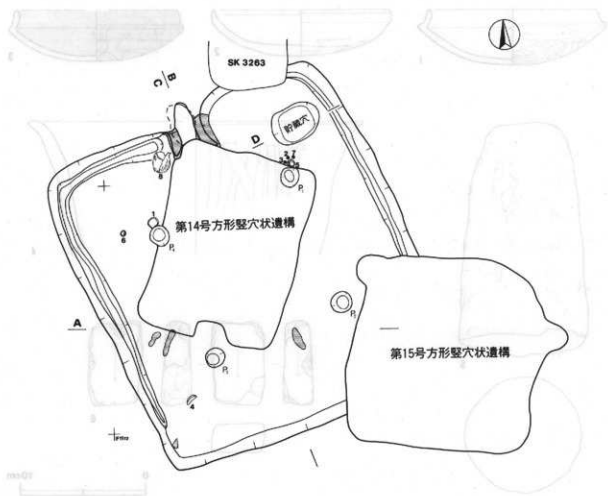
### 第527号住居跡（第98～101図）

位置 調査区の中央部，F11es区。

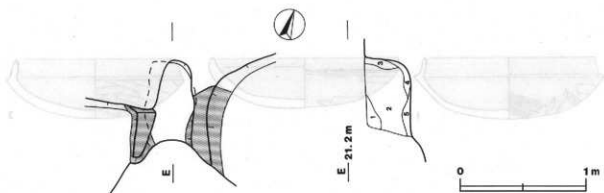
重複関係 北コーナー部を第3263号土坑に，東コーナー部を第15号方形堅穴状遺構に，中央部を第14号方形堅穴状遺構に掘り込まれていることから，いずれよりも本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸5.31m，短軸5.12mの方形である。

図説 縄文時代前期 3000年



第98図 第527号住居跡実測図



第99図 第527号住居跡竈実測図

主軸方向 N-19°-W

壁 壁高は33-43cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁際を除き確認され、上幅10-34cm、下幅5-13cm、深さ5-7cmである。

床 平坦である。

竈 両袖部端と火床部前面は、第14号方形堅穴状遺構に掘り込まれている。北西壁の中央部を壁外に20cmほど掘り込み、砂泥じりの粘土で構築されている。規模は長さ85cm、幅75cmである。

竈土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子中量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土粒子微量
- 3 灰褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量
- 4 暗赤褐色 粘土粒子・焼土粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子少量、粘土粒子微量

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>は径34cmの円形で、深さはP<sub>1</sub>が34cm、P<sub>2</sub>が46cm、P<sub>3</sub>が42cm、P<sub>4</sub>が42cmである。いずれも柱穴と思われる。

貯蔵穴 竈の東側にあり、長軸82cm、短軸58cmの長方形で、深さは35cmである。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

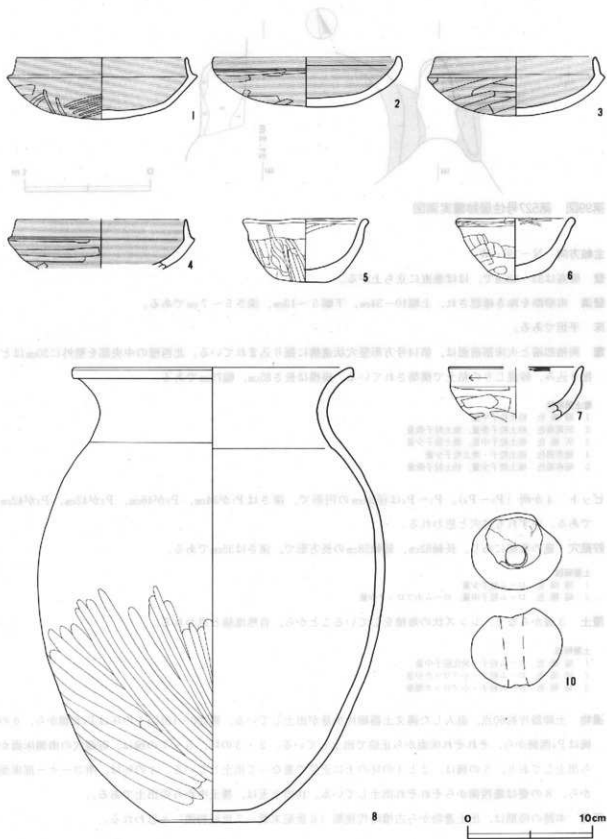
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから、自然堆積と思われる。

土層解説

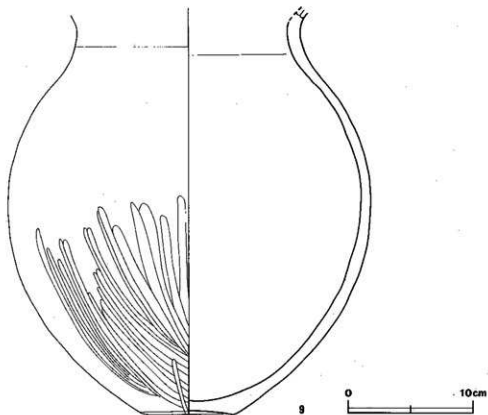
- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・小ブロック少量

遺物 土師器片約60点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第100・101図1の坏はP<sub>4</sub>北側から、6の碗はP<sub>4</sub>西側から、それぞれ床面から正位で出土している。2・3の坏、5・7の碗は、貯蔵穴の南側床面から出土しており、5の碗は、2と3の坏の上に正位で重なって出土している。4の坏は、南コーナー部床面から、8の甕は竈西側からそれぞれ出土している。10の土玉は、覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期(6世紀末葉-7世紀初頭)と思われる。



第100図 第527号住居跡出土遺物実測図(1)



第101図 第527号住居跡出土遺物実測図(2)

第527号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	土師器	A 13.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は	体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・雲母	P110, P.L.38
		B 5.0	内響気味に立ち上がり、口縁部 はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外 面黒色処理。	黒褐色 普通	90% P.北側床面
2	土師器	A 14.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は	体部外面へラ削り、内面ナデ。	スコリア	P111, P.L.38
		B 4.0	内響気味に立ち上がり、口縁部 はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外 面黒色処理。	黒色 普通	90% 貯蔵穴南側床面
3	土師器	A 13.0	口縁部から体部一部欠損。丸底。	体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・雲母	P112, P.L.38
		B 4.7	体部は内響気味に立ち上がり、 口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外 面黒色処理。	黒褐色 普通	45% 貯蔵穴南側床面
4	土師器	A (13.6)	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面へラ削り、内面ナデ。	スコリア	P113
		B (4.0)	体部は内響気味に立ち上がり、 口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外 面黒色処理。	黒色 普通	10% 南コーナー床面
5	土師器	A 9.6	体部は内響気味に立ち上がり、	体部外面へラ削り後、へラ磨き。	長石・スコリア	P114, P.L.39
		B 5.2	口縁部は外反する。口縁部下層	口縁部外面横ナデ、内面磨き。	棕色 普通	100% 貯蔵穴南側床面
		C 4.0	にくびれを持つ。			
6	土師器	A 9.3	体部は外傾して立ち上がり、口	体部外面へラ削り後、へラ磨き、	長石・スコリア	P115, P.L.39
		B 4.9	縁部はわずかに外反する。	内面ナデ。口縁部外面横ナデ、 内面磨き。	棕色 普通	100% P.西側床面
7	土師器	A (11.0)	体部は内響気味に立ち上がり、	体部外面へラ削り後、ナデ、内	長石・スコリア	P116
		B (4.2)	口縁部はわずかに外反する。	面ナデ。口縁部外面横ナデ、内 面磨き。	棕色 普通	10% 貯蔵穴南側床面



図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 8	甕 土器器	A 22.2	口縁部一部欠損。体部は倒卵形を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色。普通	P117, P.L.39 90% 蔵西側
		B 36.5				
		C 8.5				
第101図 9	甕 土器器	B 32.7	口縁部と体部の一部欠損。体部は倒卵形を呈し、最大径を中位に持つ。	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き、内面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色。普通	P118, P.L.39 45% 覆土
		C 7.1				

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	径	孔径				
第100図10	土玉	2.1	2.4	0.6	7.65	80	球形。外面磨付着	D P7, P.L.39, 覆土

### 第531号住居跡 (第102～105図)

位置 調査区の中央部, F11c.区。

重複関係 中央部を第3234号土坑に、東部を第3227号土坑に、北コーナー部を第3230～3232号土坑に、南壁を第3221号土坑に、西壁を第3235号土坑に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。第3227・3234号土坑の掘り込みは、床面まで達している。

規模と平面形 長軸6.63m, 短軸6.59mの方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高は25～36cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。

竈 北壁の中央部を壁外に12cmほど掘り込み、砂泥じりの粘土で構築されている。規模は長さ130cm, 幅115cmで、火床部は浅く皿状に掘り込まれており、わずかに焼土が確認できる。

#### 竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子多量, 粘土粒子中量, 焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, 粘土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径65～82cm, 短径55～71cmの楕円形で、深さはP<sub>1</sub>が45cm, P<sub>2</sub>が66cm, P<sub>3</sub>が43cm, P<sub>4</sub>が49cmである。いずれも柱穴と思われる。

貯蔵穴 竈の東側にあり、長軸148cm, 短軸90cmの長方形で、深さは60cmである。

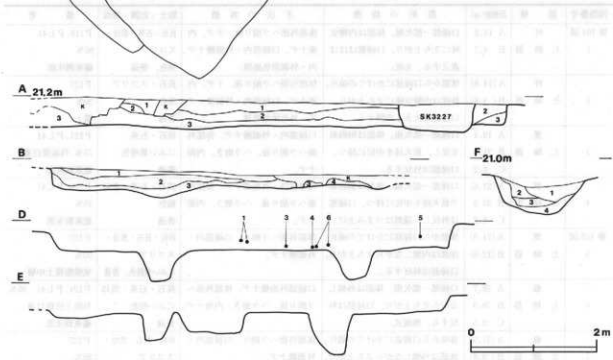
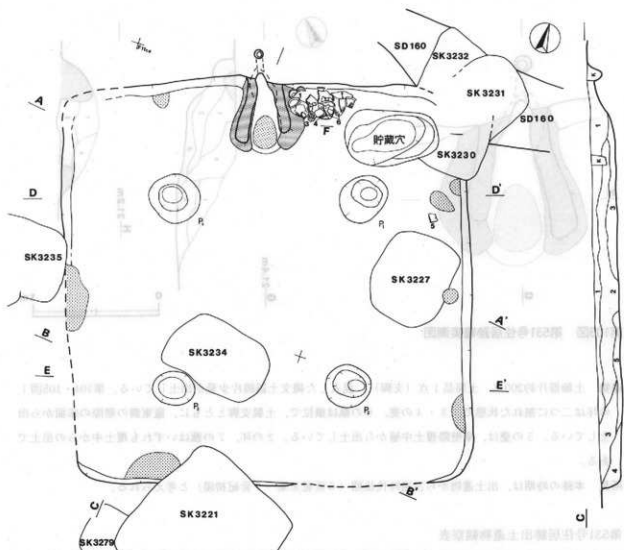
#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量

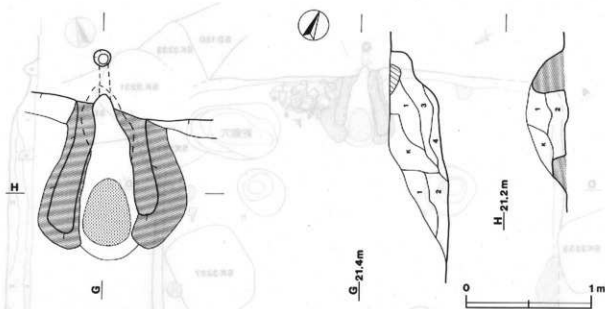
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 炭化物中量, ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量



第102図 第531号住居跡実測図



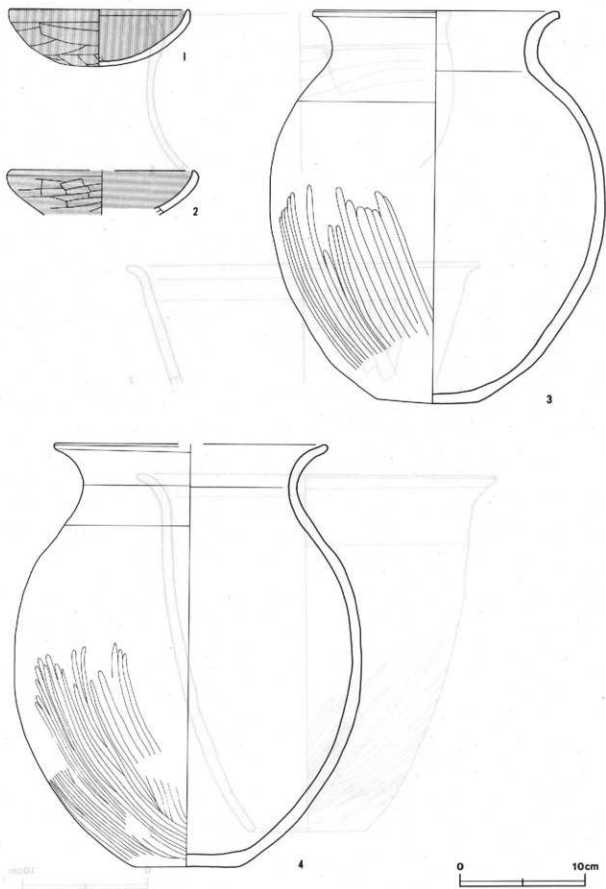
第103図 第531号住居跡竈実測図

遺物 土師器片約200点，土製品1点（支脚），混入した縄文土器細片少量が出土している。第104・105図1の坏は二つに割れた状態で，3・4の甗，6の甗は横位で，土製支脚とともに，竈東側の壁際の床面から出土している。5の甗は，東壁際覆土中層から出土している。2の坏，7の甗はいずれも覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は，出土遺物から古墳時代後期（6世紀末葉～7世紀初頭）と考えられる。

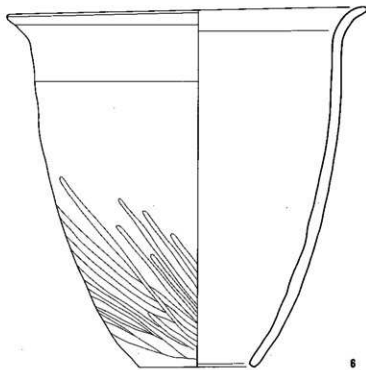
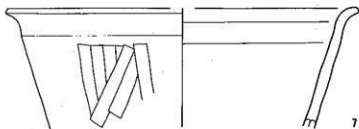
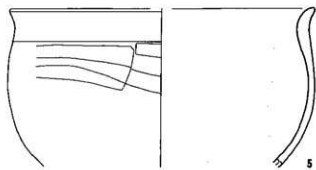
第531号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 1	土師器 坏	A 14.2	口縁部一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。丸底。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ，内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 黒色，普通	P119, P.L.41 95% 竈東側床面
		B 4.7				
2	土師器 坏	A [14.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は大きく内傾する。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ，内・外面黒色処理。	長石・スコリア 黒色 普通	P120 20% 覆土
		B (3.6)				
3	土師器 甗	A 19.4	口縁部一部欠損。体部は倒卵形を呈し，最大径を中位に持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。内面ナデ。	長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P121, P.L.41 75% 外側灰付着 竈東側床面
		B 31.6	口縁部は外反する。			
		C 8.2				
4	土師器 甗	A (21.6)	口縁部一部欠損。体部は倒卵形で最大径を中位に持つ。口縁部は外反し，踵部はつまみ上げ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。内面ナデ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P122, P.L.41 45% 竈東側床面
		B 33.9				
		C 8.2				
第105図 5	土師器 甗	A [24.3]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい黄褐色，普通	P123 20% 東壁際覆土中層
		B (12.8)				
6	土師器 甗	A 28.7	口縁部一部欠損。体部は外傾しながら立ち上がり，口縁部は外反する。無底式。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。内面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P124, P.L.41, 85% 外面上位灰付着 竈東側床面
		B 28.9				
		C 9.5				
7	土師器 甗	A [27.9]	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい黄褐色，普通	P125 85% 覆土
		B (9.8)				



第104图 第531号住居跡出土遺物実測図(1)

以國史館藏出土遺物照片(2)為原 圖201第



6



第105图 第531号住居跡出土遺物実測図(2)

### 第532号住居跡 (第106・107図)

位置 調査区の東部, F12c区。

重複関係 西部を第168号溝に, 東部を第161号溝に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸 (5.36) m, 短軸5.24mの方形と思われる。

主軸方向 N-13°-W

壁 傾斜地に位置するために, 北壁から東壁にかけて覆土は流出している。壁高は15~22cmで, 緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。床面中央部は, 踏み固められている。

竈 北壁の中央部に位置する。上部を耕作により掘り込まれており, 火床部のみ検出された。規模・形状とも不明である。火床部は, 浅く皿状に掘り込まれており, 焼土がブロック状に確認できる。

#### 覆土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック多量, ローム粒子微量

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径33~46cmの円形で, 深さはP<sub>1</sub>が100cm, P<sub>2</sub>が67cm, P<sub>3</sub>が83cm, P<sub>4</sub>が83cmである。いずれも柱穴と思われる。西部に位置するP<sub>5</sub>は, 径30cmの円形, 深さ32cmで性格は不明である。

覆土 2層からなる。堆積状況は不明である。

#### 土層解説

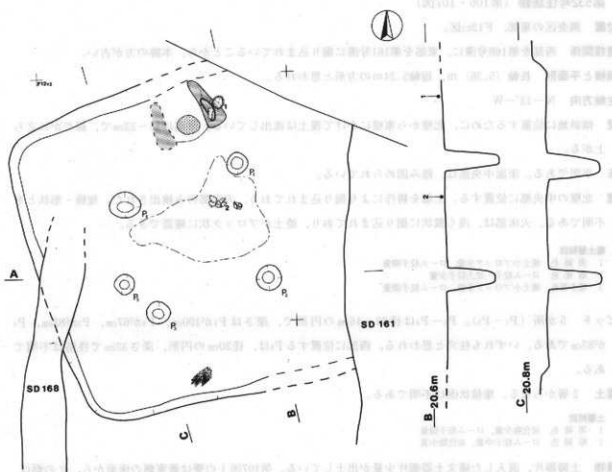
- 1 黒褐色 炭化物少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量

遺物 土師器片, 混入した縄文土器細片少量が出土している。第107図1の甕は竈東側の床面から, 2の甕は中央部の床面からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代後期 (6世紀末葉~7世紀初頭) と考えられる。

第532号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	土師器	A 16.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内帯して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部外面へう削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア	P126, P.L42
		B 18.6			褐色, 普通	65%, 二次焼成直
		C 7.5				竈東側床面
2	土師器	A 26.7	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り, 内面へう削り後, ナデ。	長石・スコリア	P127, P.L42
		B 27.0			にぶい赤褐色	50%
		C 9.4			普通	中央部床面

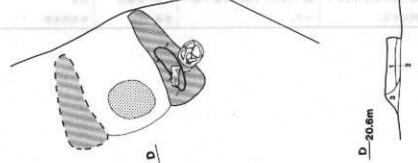


A 21.0m



0 2m

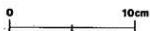
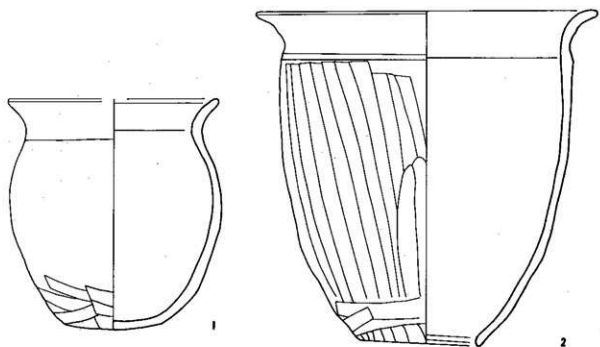
位置	形状・構造・土質	調査の目的	調査の結果	調査の時期	調査者
11.11.1979	一部 土質不明	基礎調査	一部 土質不明	11.11.1979	奥村 隆夫
12.11.1979	一部 土質不明	基礎調査	一部 土質不明	12.11.1979	奥村 隆夫



D 20.6m

0 1m

第106図 第532号住居跡実測図



第107図 第532号住居跡出土遺物実測図

第537号住居跡 (第108-110図)

位置 調査区の東部, F11e区。

重複関係 東部を第3286・3287号土坑に、南壁を第3301・3302号土坑に掘り込まれていることから、いずれより本跡の方が古い。第3286・3287号土坑の掘り込みは、床面まで達している。

規模と平面形 長軸6.59m, 短軸5.80mの長方形である。

主軸方向 N-8°-E

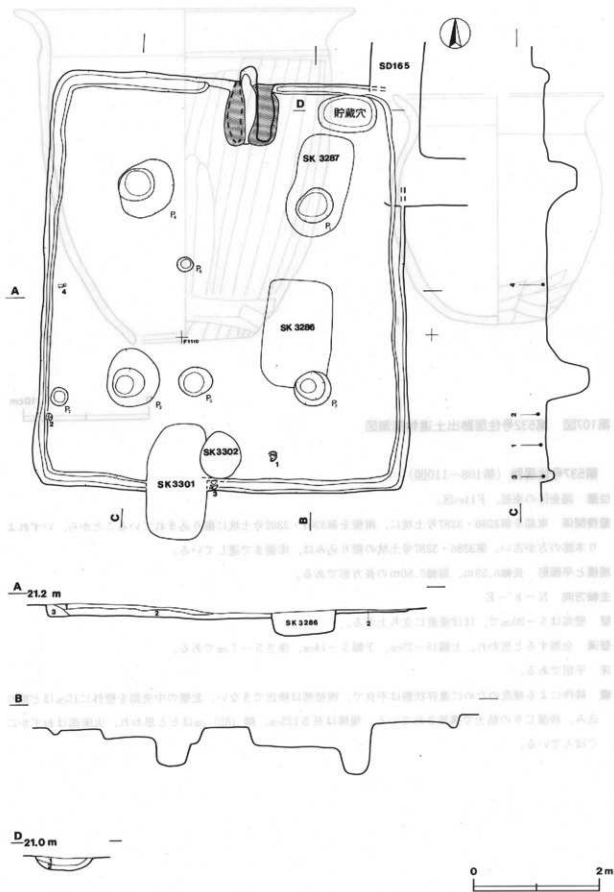
壁 壁高は5-20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周すると思われ、上幅15-25cm, 下幅5-14cm, 深さ5-7cmである。

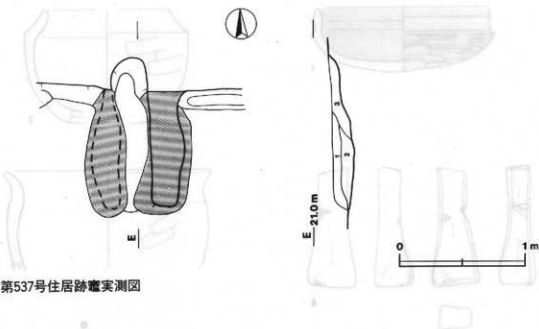
床 平坦である。

竈 耕作による擾乱のために遺存状態は不良で、西袖部は検出できない。北壁の中央部を壁外に15cmほど掘り込み、砂泥じりの粘土で構築されている。規模は長さ125cm, 幅(85)cmほどと思われ、火床部はわずかにくぼんでいる。





第108図 第537号住居跡実測図



第109図 第537号住居跡電実測図

電土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子極少量
- 2 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、炭化粒子極少量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子極少量

ピット 7か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径52~60cm、短径50cmの楕円形で、深さはP<sub>1</sub>が58cm、P<sub>2</sub>が43cm、P<sub>3</sub>が66cm、P<sub>4</sub>が48cmである。いずれも柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は長径54cm、短径46cmの楕円形で深さ18cm、P<sub>6</sub>は径20cmの円形で深さ25cm、P<sub>7</sub>は径30cmの円形で深さ22cmである。いずれも性格は不明である。

貯蔵穴 竈の東側の北壁際にあり、長軸96cm、短軸60cmの長方形で、深さは20cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

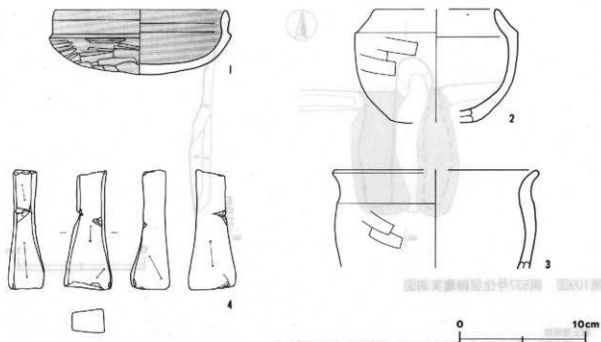
覆土 3層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片10点、石製品1点(砥石)、混入した縄文土器細片少量が出土している。第110図1の坏、3の甕は南壁際の覆土下層から、2の甕は南西コーナー際の覆土下層から、4の砥石は西壁際の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期(6世紀末葉~7世紀初頭)と考えられる。



第110図 第537号住居跡出土遺物実測図

第537号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色面・焼成	備考
第110図 1	坏 土師器	A 13.5	口縁部一部欠損。九底。体部は	体部外面へう割り後、ナデ。内	長石・雲母 黒褐色 普通	P138, P L37 85% 南壁階覆土下層
		B 5.3	内彎して立ち上がり、口縁部は ほぼ直立する。	面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。		
2	碗 土師器	A〔9.6〕	底部から口縁部にかけての破片。	体部外面へう割り。口縁部内・	長石・スコリア 褐色 普通	P139, P L37 30%、二次焼成痕 南西コーナー覆土下層
		B 9.2	体部は内彎しながら立ち上がり、	外面横ナデ。		
		C〔6.2〕	口縁部は大きく内傾する。			
3	羹 土師器	A〔16.0〕	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面へう割り。口縁部内・	長石・石英・雲母・ スコリア 暗赤褐色、普通	P140 10%、二次焼成痕 南壁階覆土下層
		B〔7.9〕	体部は内彎気味に立ち上がり、 口縁部は外反する。	外面横ナデ。		

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第110図4	砥石	9.6	3.8	1.9	107.0	凝灰岩	Q6, P L37, 西壁階覆土下層

第538号住居跡 (第111・112図)

位置 調査区の中央部、F11j区。

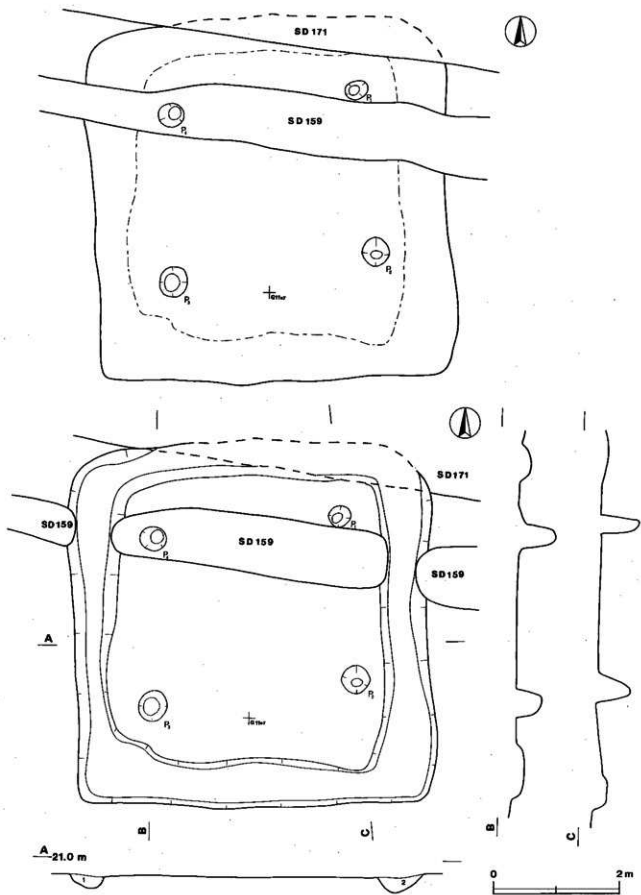
重複関係 床面北部を第159・171号溝に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸5.84m、短軸5.73mの隅丸方形である。

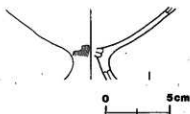
主軸方向 N-3°-W

壁 確認面に床が露出するような状況で検出されたことから、覆土・壁は遺存していない。

床 平坦である。中央部は、踏み固められている。床面に焼土が薄く堆積している。



第111图 第538号住居跡实测图



第112図 第538号住居跡  
出土遺物実測図

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径35~46cm, 短径30~45cmの円形または楕円形で、深さはP<sub>1</sub>が61cm, P<sub>2</sub>が52cm, P<sub>3</sub>が43cm, P<sub>4</sub>が45cmである。いずれも柱穴と思われる。

掘り方 壁際を巡るように、溝状の掘り方を確認した。幅50~80cm, 深さ約25cmである。

掘り方土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子少量

遺物 土師器片約20点, 混入した縄文土器細片少量が出土している。また, 床面から多量の炭化物が出土した。

第112図1の高坏は, 床面から出土した細片が接合したものである。

所見 本跡は, 床面上から多量の炭化物が出土し, 焼土が薄く堆積していることから焼失家屋と考えられる。

時期は, 出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

第538号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第112図 1	高坏 土師器	B(5.7)	坏部片は内厚しながら大きく外側に立ち上がる。	坏部内・外面ハケ目調整後, ナデ。	砂粒, スコリア にぶい褐色 普通	P141, P142 15% 床面

第539号住居跡 (第113~115図)

位置 調査区の中央部, G11b区。

重複関係 東壁を第3320号土坑に, 南部を第154号溝に掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸8.33m, 短軸8.28mの方形である。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高は42~45cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周すると思われ, 上幅13~38cm, 下幅4~9cm, 深さ5~6cmである。

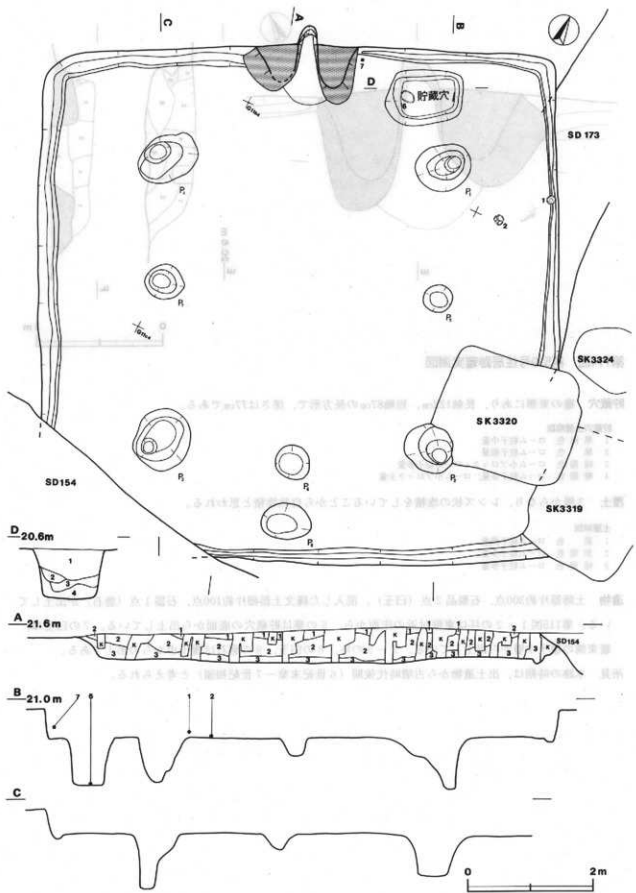
床 平坦である。

竈 上部は耕作による攪乱を受け, 下部のみ遺存している。北壁の中央部を壁外に26cmほど掘り込み, 砂混じりの粘土で構築されている。規模は長さ122cm, 幅170cmで, 火床部はわずかに掘り込まれている。

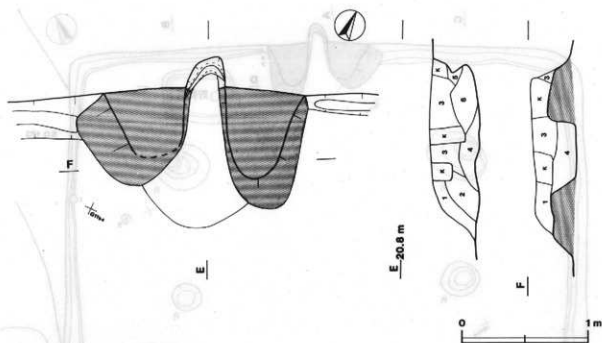
竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量, 粘土粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 5 にぶい褐色 粘土粒子多量
- 6 暗赤褐色 粘土粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子少量

ピット 8か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径86~97cm, 短径73~86cmの楕円形で、深さはP<sub>1</sub>が73cm, P<sub>2</sub>が82cm, P<sub>3</sub>が64cm, P<sub>4</sub>が90cmである。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は径45~55cmの円形で、深さはP<sub>5</sub>が30cm, P<sub>6</sub>が52cm, P<sub>7</sub>が32cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>はコーナー寄りに位置し, P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の間に位置することから, いずれも柱穴と思われる。P<sub>8</sub>は長径80cm, 短径58cmの楕円形で、深さ42cmで南壁寄りに位置しており, 出入り口施設に伴うものと思われる。



第113図 第539号住居跡実測図



第114図 第539号住居跡竈実測図

貯蔵穴 竈の東側にあり、長軸122cm、短軸87cmの長方形で、深さは77cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小アロック・ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小アロック少量

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

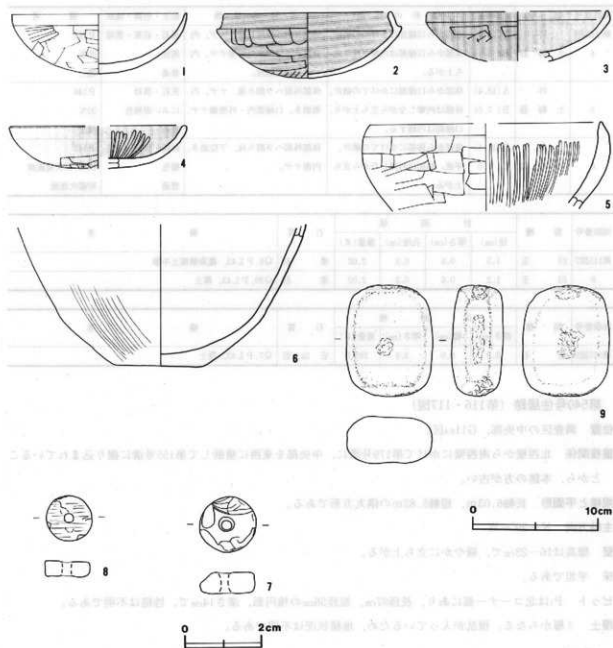
土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片約300点、石製品2点(白玉)、混入した縄文土器細片約100点、石器1点(磨石)が出土している。第115図1・2の坏は東壁付近の床面から、6の甕は貯蔵穴の底面から出土している。7の白玉は、竈東側の覆土中層から出土している。3～5の坏、8の白玉、9の磨石は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期(6世紀末葉～7世紀初頭)と考えられる。





第115図 第539号住居跡出土遺物実測図

第539号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 1	坏	A 14.1	体部は内彎しながら立ち上がり、	体部および口縁部外面ヘラ削り 後、磨き、内面ナデ。	雲母 明赤褐色 普通	P142, P.L43 100% 東屋付近床面
	土師器	B 4.8	口縁部はほぼ直立する。			
2	坏	A 13.4	口縁部一部欠損。体部は内彎気	体部外面ヘラ削り後、ナデ。内 面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	石英・雲母 黒色 普通	P143, P.L43 75% 東屋付近床面
	土師器	B 5.3	味に立ち上がり、口縁部は内傾 する。丸底。			
3	坏	A [14.4]	体部から口縁部にかけての破片、	体部外面ヘラ削り後、ナデ。内 面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	石英・雲母 黒色 普通	P144 30% 覆土
	土師器	B (4.0)	体部は内彎気味に立ち上がり、 口縁部はほぼ直立する。			



図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第115図 4	坏 土師器	A(14.4) B(3.4)	底部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面磨き。口縁部外面横ナデ。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母 黒色 普通	P145 20% 覆土
5	坏 土師器	A(18.4) B(7.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P146 20% 覆土
6	甕 土師器	B(11.4) C 7.0	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後、下位磨き、内面ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P147 35%、二次焼成済 貯蔵穴底面

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第115図7	白玉	1.5	0.6	0.3	2.02	滑石	Q8, P L 43, 竈車側覆土中層
8	白玉	1.2	0.6	0.3	2.02	滑石	Q39, P L 43, 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第115図9	磨石	8.9	6.9	3.8	393.0	安山岩	Q7, P L 43, 覆土

#### 第540号住居跡(第116・117図)

位置 調査区の中央部, G11e区。

重複関係 北西壁から南西壁にかけて第179号溝に、中央部を東西に横断して第155号溝に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸6.03m, 短軸5.82mの隅丸方形である。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高は16-23cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。

ピット P1は北コーナー部にあり、長径97cm, 短径56cmの楕円形、深さ14cmで、性格は不明である。

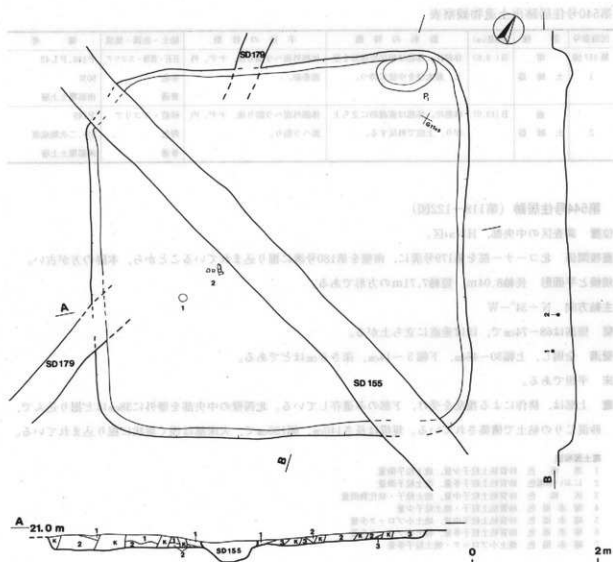
覆土 3層からなる。攪乱が入っているため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

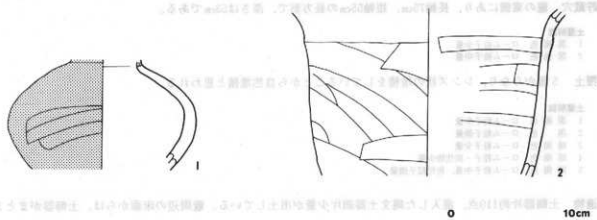
- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片約60点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第117図1の埴, 2の甗は南部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第116図 第540号住居跡実測図



第117図 第540号住居跡出土遺物実測図

第540号住居跡出土遺物観察表

図説番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第117図 1	埴 土 師 器	B(5.6)	体部片。体部は扁平な球形を呈し、最大径を中位に持つ。	体部外面へラ削り後、ナデ。外面赤影。	灰石・雲母・スコリア 赤色 普通	P148, P.L42 50% 南部覆土上層
2	甕 土 師 器	B(13.0)	体部片。体部は直線的に立ち上がり、上位で外反する。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面へラ削り。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P149 5%、二次焼成灰 南部覆土上層

第544号住居跡（第118～122図）

位置 調査区の中央部, H11a区。

重複関係 北コーナー部を第179号溝に、南壁を第180号溝に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸8.04m, 短軸7.71mの方形である。

主軸方向 N-34°-W

壁 壁高は68～74cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周し、上幅30～45cm, 下幅5～14cm, 深さ6cmほどである。

床 平坦である。

竈 上部は、耕作による擾乱を受け、下部のみ遺存している。北西壁の中央部を壁外に38cmほど掘り込んで、砂混じりの粘土で構築されている。規模は長さ140cm, 幅130cmで、火床部は浅く皿状に掘り込まれている。

竈土層解説

- 1 黒 褐色 砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 砂質粘土粒子多量, 焼土粒子微量
- 3 灰 褐色 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗 赤 褐色 砂質粘土粒子・焼土粒子少量
- 5 暗 赤 褐色 砂質粘土粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 6 暗 赤 褐色 砂質粘土粒子多量, 焼土小ブロック中量
- 7 暗 赤 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径40～45cmの円形で、深さはP<sub>1</sub>が81cm, P<sub>2</sub>が62cm, P<sub>3</sub>が90cm, P<sub>4</sub>が78cmである。いずれも柱穴と思われる。

貯蔵穴 竈の東側にあり、長軸75cm, 短軸55cmの長方形で、深さは53cmである。

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子中量

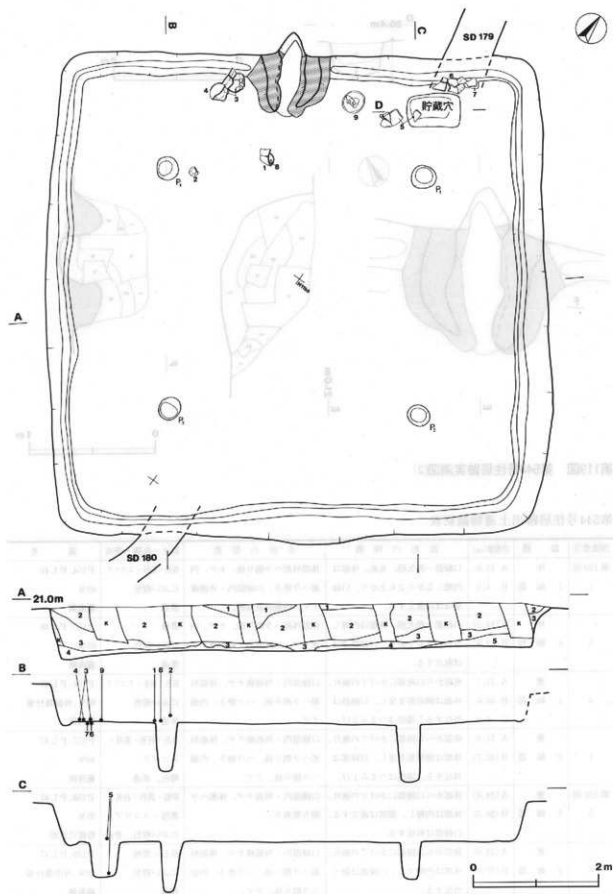
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

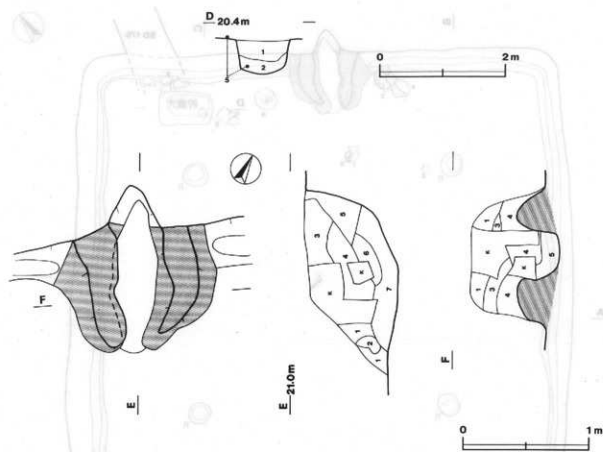
- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒 色 ローム粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗 褐色 ローム粒子・炭化物少量
- 5 暗 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

遺物 土師器片約110点, 混入した縄文土器細片少量が出土している。竈周辺の床面からは、土師器がまともって出土した。第120～122図1・2の埴, 8の甕は竈南側から, 3・4の甕は竈西側から, 6・7の甕, 9の甕は竈東側から, いずれも床面から出土している。5の甕は貯蔵穴の底面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期（6世紀末葉～7世紀初頭）と考えられる。



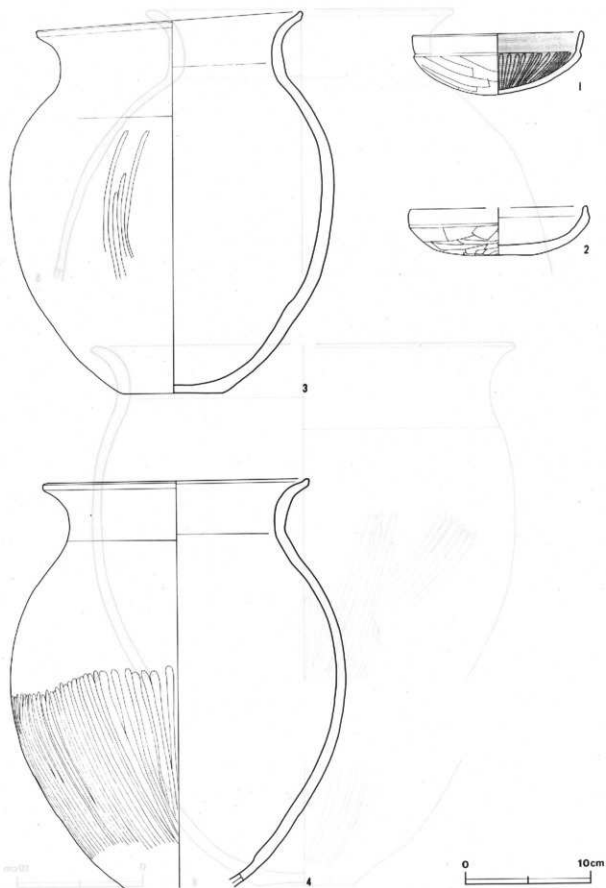
第118图 第544号住居跡実測图(1)



第119図 第544号住居跡実測図(2)

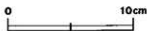
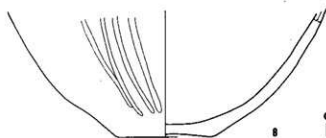
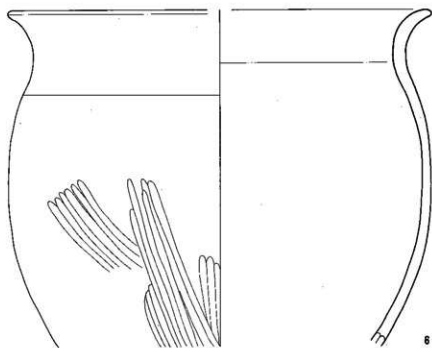
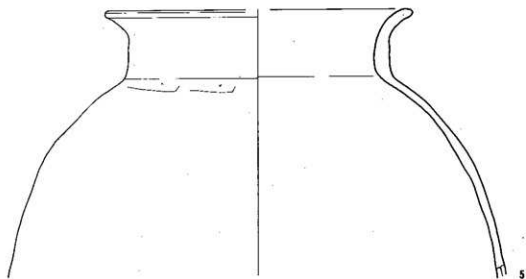
第544号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼域	備考
第120図	1	坏 A 13.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P154, P.L.46 80% 壺内側
		土師器 B 4.5				
2	土師器	坏 A [14.0]	口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい褐色 普通	P155, P.L.46 65% 壺内側
		B 3.9				
3	土師器	甕 A 21.1	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き。内面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P156, P.L.47 60%・外面煤付 壺西側
		B 30.6	体部は倒卵形を呈し、口縁部は外反する。肩部はつまみ上げ。			
		C 9.0				
4	土師器	甕 A 21.0	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き。内面へラ削り後、ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色、普通	P157, P.L.47 40% 壺内側
		B [32.7]	体部は倒卵形を呈し、口縁部は外反する。肩部はつまみ上げ。			
第121図	5	甕 A [24.8]	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面ナデ。体部へラ削り直り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい褐色、普通	P158, P.L.47 35% 貯蔵火底面
		土師器 B [20.3]	体部は内彎し、頸部は直立する。口縁部は外反する。			
6	土師器	甕 A [33.0]	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き。内面へラ削り後、ナデ。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P159, P.L.47 30%・外面煤付 壺取側
		B [27.0]	体部は内彎する。口縁部は強く外反する。			

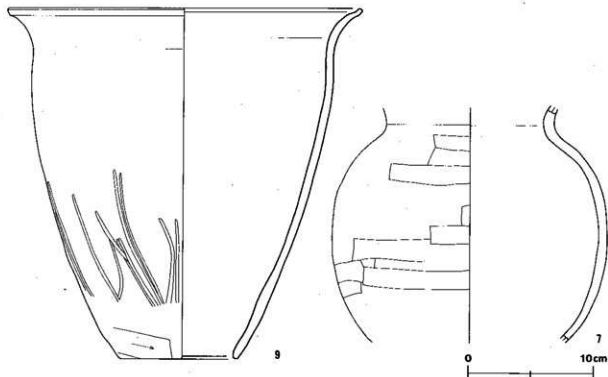


第120图 第544号住居跡出土遺物実測図(1)

1000年以前出土の陶器の形制と年代 図151



第121図 第544号住居跡出土遺物実測図(2)



第122図 第544号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 7	甕 土師器	B 19.0	体部から口縁部にかけての破片。 体部は球形を呈し、最大径を中 位に持つ。口縁部は外反する。	体部外面へラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	長石・石英・炭粉・ スコリア に多い褐色。普通	P160 20% 龍東側
第121図 8	甕 土師器	B 10.0 C 7.5	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は外傾しながら立ち 上がる。	体部外面へラ削り後、下位磨き、 内面ナデ。	長石・石英・炭粉・ スコリア 褐色。普通	P161 15% 龍南側
第122図 9	甕 土師器	A 28.5 B 28.2 C 9.4	口縁部一部欠損。体部は内彎気 味に立ち上がる。口縁部は外反 し、端部はつまみ上げている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 面へラ削り後、へラ磨き。内面 ナデ。	長石・石英・炭粉 に多い褐色 普通	P162, P L47 75% 龍東側

### 第545号住居跡 (第123・124図)

位置 調査区の中央部, G11f1区。

重複関係 北西壁を第3334号土坑に掘り込まれ、南コーナー部において本跡が第3326号土坑を掘り込んでいる。

本跡は第3334号土坑より古く、第3326号土坑より新しい。

規模と平面形 長軸6.43m, 短軸5.60mの隅丸長方形である。

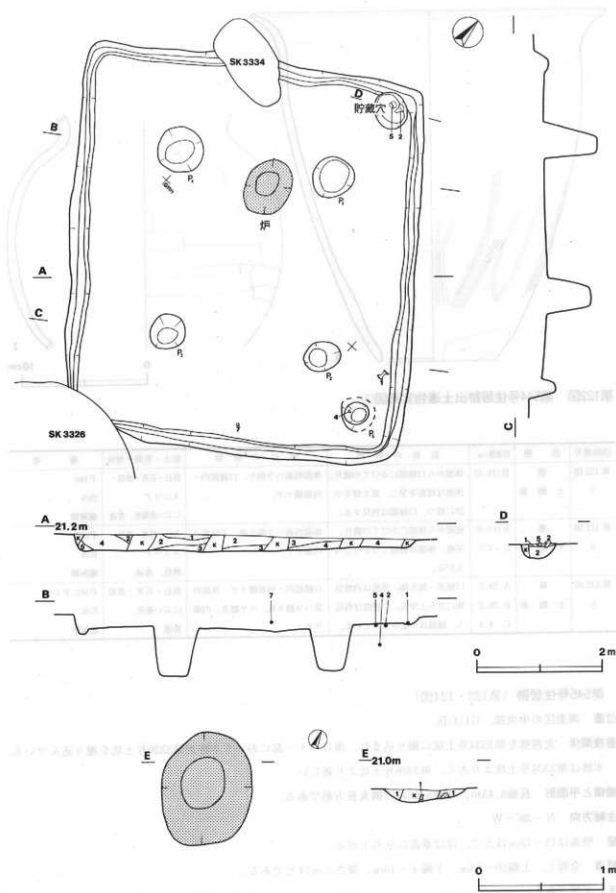
主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は15~18cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周し、上幅20~33cm, 下幅4~10cm, 深さ5cmほどである。

床 平坦である。





第123图 第545号住居跡実測图

炉 中央部よりやや北寄りに位置する。長径88cm, 短径71cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床型である。火床面は赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>-P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>は長径56-78cm, 短径48-68cmの円形または楕円形で、深さはP<sub>1</sub>が69cm, P<sub>2</sub>が88cm, P<sub>3</sub>が72cm, P<sub>4</sub>が80cmである。いずれも柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は南東コーナー部に位置し、径52cmの円形で、深さは60cmである。性格は、貯蔵穴の可能性も考えられるが、不明としておく。

貯蔵穴 竈の東側にあり、長径60cm, 短径50cmの楕円形で、深さは24cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量  
2 黒褐色 ローム粒子中量

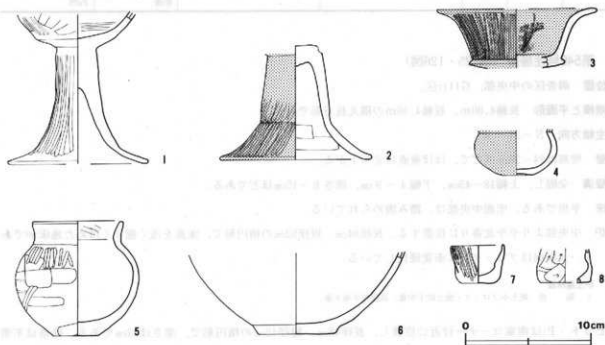
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量  
2 黒色 ローム粒子・炭化物微量  
3 黒褐色 ローム粒子少量  
4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量  
5 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量

遺物 土師器片約50点, 混入した縄文土器細片少量が出土している。第124図1の高坏は東部の床面から、2の高坏, 5の小形甕, 6の甕は貯蔵穴から出土している。4の埴, 8のミニチュア土器はP<sub>5</sub>から、7のミニチュア土器は南部の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第124図 第545号住居跡出土遺物実測図

第545号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第124図 1	高 坏 土 師 器	B(12.2) D(10.7)	口縁部一部欠損。胴部はハの字に開く。坏部は外傾して開く。	胴部外面へラ磨き、内面ナデ。 坏部内・外面へラ磨き。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P163, P L 44 50% 東部覆土面
2	高 坏 土 師 器	B( 9.1) D 12.1	坏部欠損。胴部はハの字に開く。	胴部外面へラ磨き、内面へラ削り。外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 赤色 普通	P164, P L 44 50% 貯蔵穴
3	高 坏 土 師 器	A(12.8) B( 4.8)	坏部片。坏部下端に稜を持つ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	坏部内・外面ハケ目調整後、へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 赤色 普通	P170, P L 45 15% 覆土
4	埴 土 師 器	B( 3.6) C 2.3	底部から体部にかけての破片。体部は扁平な球形を呈する。平底。	体部内・外面ナデ。底部にわずかなハケ目痕。外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P165, P L 45 50%二次焼成痕 P <sub>1</sub> 内
5	小形 甕 土 師 器	A 7.2 B 9.2 C 3.7	口縁部一部欠損。体部は球形を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部はわずかに外反する。平底。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ。口縁部外面横ナデ。内面ハケ目調整後、横ナデ。	長石・スコリア にぶい橙色 普通	P166, P L 45 90% 貯蔵穴
6	要 土 師 器	B( 6.5) C 6.3	底部から体部にかけての破片。体部は内傾しながら立ち上がる。底部は平底で、突出する。	体部外面ハケ目調整後、ナデ。内面ナデ。	長石・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P167 10%二次焼成痕 覆土
7	ミニチュア土 土 師 器	A 2.2 B 3.1 C 2.6	体部はやや外傾しながら立ち上がる。平底。	体部外面指痕による調整後、へラ磨き。内面ナデ。底部にへラ磨き痕有り。わずかに輪積み痕。	長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P168, P L 45 100% 南部覆土中層
8	ミニチュア土 土 師 器	B( 2.7) C( 4.0)	口縁部欠損。体部はやや内傾しながら立ち上がる。平底。	体部外面へラ削り、内面指痕による調整。	長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P169 45% P <sub>1</sub> 内

## 第546号住居跡 (第125・126図)

位置 調査区の中央部, G11j区。

規模と平面形 長軸4.80m, 短軸4.36mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高は24~28cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周し、上幅18~43cm, 下幅4~9cm, 深さ8~15cmほどである。

床 平坦である。床面中央部は、踏み固められている。

炉 中央部よりやや北寄りに位置する。長径84cm, 短径52cmの楕円形で、床面を浅く掘りくぼめた地床炉である。火床面はブロック状に赤変硬化している。

## 伊土層解説

1 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子極少量

ピット P<sub>1</sub>は南東コーナー付近に位置し、長径48cm, 短径42cmの楕円形で、深さは33cmである。性格は不明である。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と思われる。

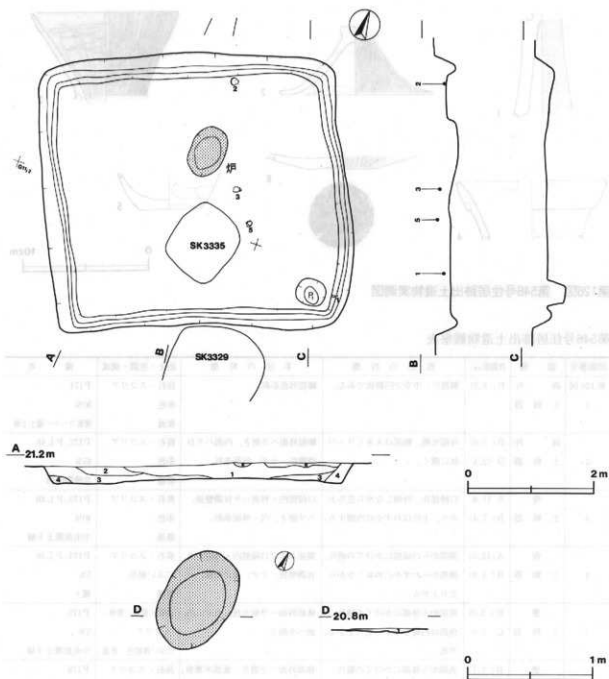
## 土層解説

1 黒色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

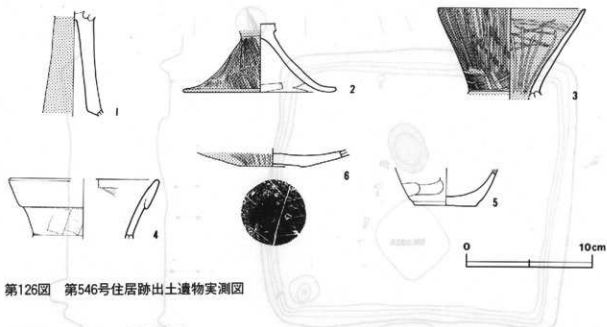
4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量



第125図 第546号住居跡実測図

遺物 土師器片約50点，混入した縄文土器細片少量が出土している。第126図2の高坏は北壁際の床面から出土している。1の高坏は南東コーナー部，3の埴，5の甕は中央部のそれぞれ覆土下層から出土している。4の甕，6の甕は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は，出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第126図 第546号住居跡出土遺物実測図

第546号住居跡出土遺物観察表

国取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	高土師器	B(8.5)	脚部片。中空で円筒状である。	脚部外面赤彩。	長石・スコリア 赤色 普通	P171 30% 南東コーナー覆土下層
2	高土師器	B(5.6) D 12.1	坏部欠損。脚部は大きくラップ状に開く。	脚部外面へう磨き。内面ハケ目調整後。ナデ。外面赤彩。	長石・スコリア 赤色 普通	P172, P.L48 45% 北壁際床面
3	埴土師器	A 11.8 B(7.4)	口縁部片。外傾しながら立ち上がり。上位はわずかに内傾する。	口縁部内・外面ハケ目調整後。へう磨き。内・外面赤彩。	長石・スコリア 赤色 普通	P173, P.L48 40% 中央部覆土下層
4	壺土師器	A(12.0) B(4.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部からわずかに外反しながら立ち上がる。	頸部および口縁部内・外面ハケ目調整後。ナデ。複合口縁。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P174, P.L48 5% 覆土
5	甕土師器	B(3.0) C 5.0	底部から体部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。平底。	体部外面へう削り後、ナデ。内面へう削り。	稗砂・長石・雲母・スコリア にぶい黄褐色。普通	P175 5% 中央部覆土下層
6	甕土師器	B(1.1) C 5.2	底部から体部にかけての破片。体部は大きく外傾する。平底。	体部外面へう磨き。底部木炭痕。外面赤彩。	長石・スコリア 赤色 普通	P176 5% 覆土

### 第547号住居跡(第127・128図)

位置 調査区の南部, H10d9区。

規模と平面形 長軸6.12m, 短軸4.63mの長方形である。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は13~25cmで, ほゞ垂直に立ち上がる。西壁は耕作のため攪乱され, 確認できなかった。

床 平坦である。

竈 北壁の中央部を壁外に48cmほど掘り込み, 砂混じりの粘土で構築されている。規模は, 長さ114cm, 幅108cmで, 火床部はわずかにくぼんでいる。

#### 竈土層解説

- 1 暗赤褐色 砂質粘土・焼土粒子中量
- 2 暗赤褐色 炭土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は長径56cm, 短径50cmの楕円形で深さ45cm, P<sub>2</sub>は径36cmの円形で深さ80cmである。いずれも柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は径46cmの円形で深さは33cm, P<sub>4</sub>は長径30cm, 短径21cmの楕円形で, 深さは30cmである。いずれも性格は不明である。

貯蔵穴 東コーナー部にあり, 長軸70cm, 短軸58cmの長方形で, 深さは57cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

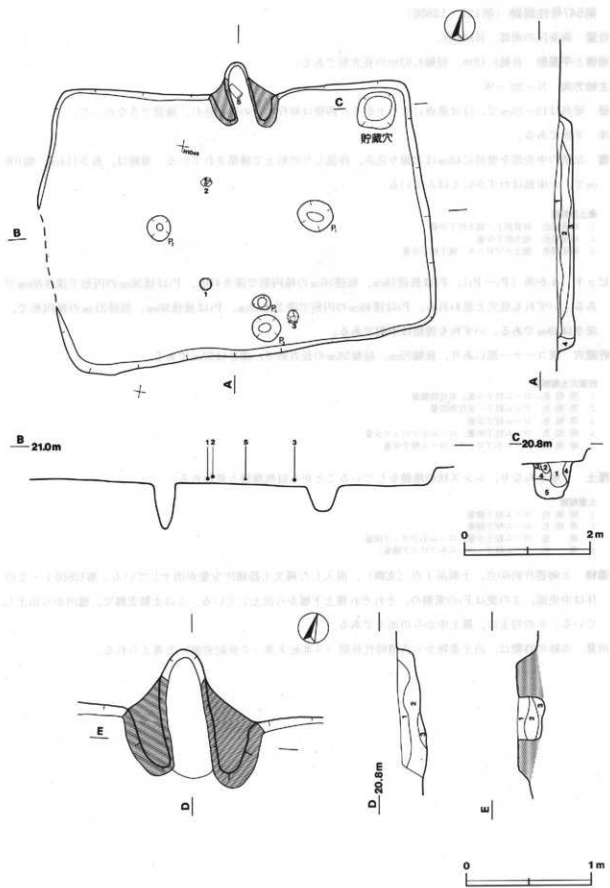
覆土 4層からなり, レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

#### 土層解説

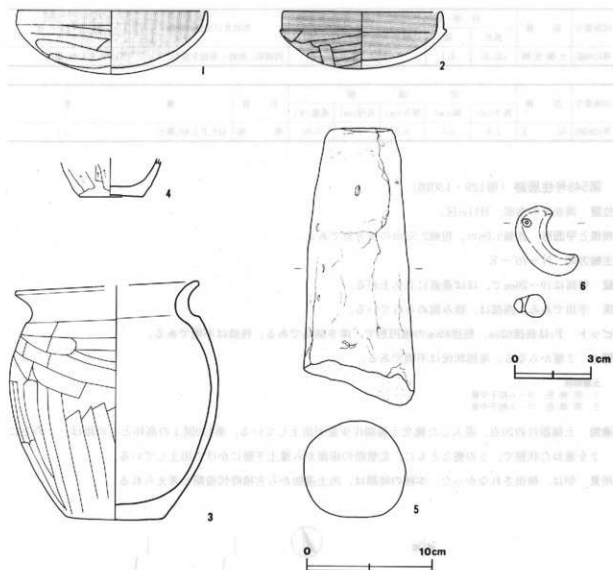
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片約60点, 土製品1点(支脚), 混入した縄文土器細片少量が出土している。第128図1・2の坏は中央部, 3の甕はP<sub>3</sub>の東側の, それぞれ覆土下層から出土している。5は土製支脚で, 竈内から出土している。6の勾玉は, 覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代後期(6世紀末葉~7世紀初頭)と考えられる。



第127图 第547号住居跡实测图



第128図 第547号住居跡出土遺物実測図

第547号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	土師器	A 15.1	体部は内彎しながら立ち上がり、	体部内・外面ヘラ削り後、ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	長石・雲母 黒色 普通	P177, P.L48 100% 中央部覆土下層
		B 5.1	口縁部はほぼ直立する。丸底。			
2	土師器	A 12.6	体部は内彎しながら立ち上がり、	体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 黒色 普通	P178, P.L48 95% 中央部覆土下層
		B 4.6	口縁部はほぼ直立する。丸底。			
3	土師器	A [14.3]	体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 ・スコリア 棕色。普通	P179, P.L49 85%、二次焼成痕 P <sub>1</sub> 東側覆土下層
		B 19.2	体部上端で大きくびれ、口縁部は外反する。			
		C 8.9				
4	土師器	B (3.1)	底部から体部にかけての破片。	体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。	長石・雲母・スコリア にぶい黄棕色 普通	P180 10% 覆土
		C 5.1	体部は外傾して立ち上がる。平底。			



図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備 考
		長さ	径	厚さ				
第128図5	土製支脚	(22.3)	8.1	—	1,550.0	80	円筒形。砂粒・炭母を含む。	D P9, P L49, 蔵内

図版番号	器 種	計 測 値					石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第128図6	勾 玉	2.9	2.5	0.9	0.1	5.95	瑪 璃	Q9, P L49, 蔵内

### 第548号住居跡 (第129・130図)

位置 調査区の南部, H115区。

規模と平面形 長軸3.06m, 短軸2.55mの長方形である。

主軸方向 N-70°-E

壁 壁高は19~26cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。西部は, 踏み固められている。

ピット P1は長径62cm, 短径49cmの楕円形で, 深さ38cmである。性格は不明である。

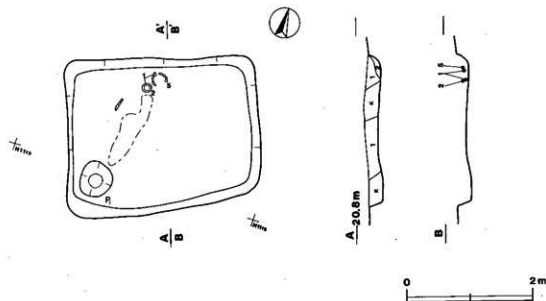
覆土 2層からなる。堆積状況は不明である。

土層解説

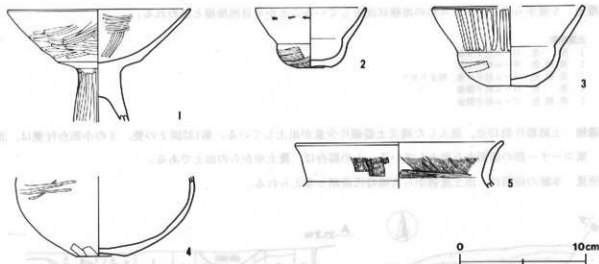
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片約20点, 混入した縄文土器細片少量が出土している。第130図1の高坏と2の埴は, 1の上に2を重ねた状態で, 5の壁とともに, 北壁際の床面から覆土下層にかけて出土している。

所見 炉は, 検出されなかった。本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第129図 第548号住居跡実測図



第130図 第548号住居跡出土遺物実測図

第548号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	高土師器	A 14.6	脚部下位欠損。脚部中空。坏部下層に稜を持ち、内彎気味に外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母にふい褐色	P181, P L 50 60% 北壁際床面
		B (9.1)				
2	土師器	A 8.8	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。平底。	体部および口縁部内・外面ハケ目調整後、ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリアにふい褐色。普通	P 182, P L 50 95% 北壁際床面
		B 4.9				
		C 2.5				
3	土師器	A (11.4)	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ヘラ磨り後、ナデ。口縁部外面ヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・長石にふい赤褐色	P 183, P L 50 55% 覆土
		B 6.5				
		C 3.8				
4	土師器	B (6.4)	底部から体部片。体部は扁平な球形を呈する。平底。	体部外面ヘラ磨り後、ヘラ磨き。内面ナデ。外面赤彩痕有り。	砂粒・長石・スコリアにふい褐色	P 185 30% 覆土
		C 3.9				
5	土師器	A 16.6	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり、端部は外反する。	内・外面ハケ目調整。	砂粒・長石・雲母 明褐色	P 184 5%、外面煤付着 北壁際床面
		B (3.7)				

第549号住居跡 (第131・132図)

位置 調査区の南部、H11c3区。

重複関係 北部において、第180号溝に東西に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 南北 (2.66) m、東西 (3.41) mである。北東コーナーを検出しているが、ほとんどが調査区

域外であるため、平面形は不明である。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は40cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁際の一部で検出した。上幅約30cm、下幅5-8cm、深さ4cmほどである。

床 平坦である。P1南部は、踏み固められている。

ピット P1は径26cmの円形である。性格は不明である。

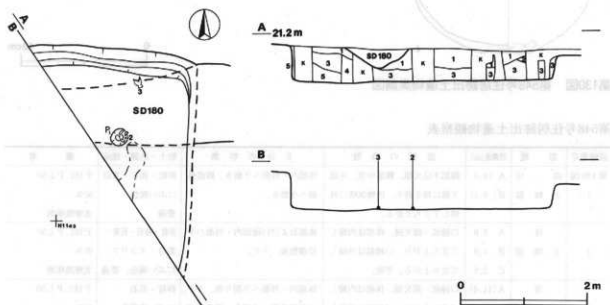
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

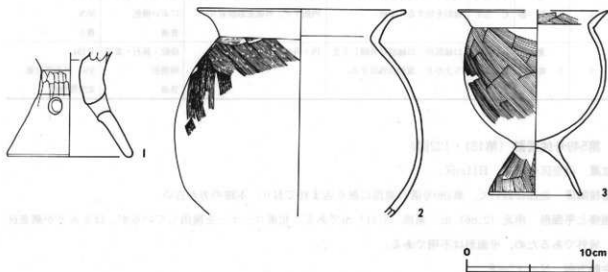
- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、締まり有り
- 4 黒色 ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量

遺物 土師器片約10点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第132図2の甕、3の小形台付甕は、北東コーナー部の床面から出土している。1の器台は、覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第131図 第549号住居跡実測図



第132図 第549号住居跡出土遺物実測図

第549号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第132図 1	器台	B(8.3)	器受部欠損。脚部はハの字状に	脚部外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色	P186, P L 50
	土師器	D 10.1	開く。脚部に3孔。		普通	40% 覆土
2	壺	A 16.6	底部欠損。体部は球形を呈し、	体部外面ハケ目調整。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母	P187, P L 50
	土師器	B(16.5)	最大径を中位に持つ。口縁部は 外傾し、肩部は強く外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、 横ナデ。	にぶい黄褐色 普通	60%、外面黒付着 北東コーナー床面
3	小形台付壺	A(12.1)	体部・口縁部一部欠損。台部は	口縁部内・外面ハケ目調整後、	長石・雲母	P188, P L 50
	土師器	B 14.8	ハの字状に開き、体部は球形を	横ナデ。体部・台部外面ハケ目	褐色	70%
		D 7.4	呈する。口縁部は外反する。	調整、内面ナデ。	普通	北東コーナー床面

第551号住居跡 (第133・134図)

位置 調査区の南部, H111区。

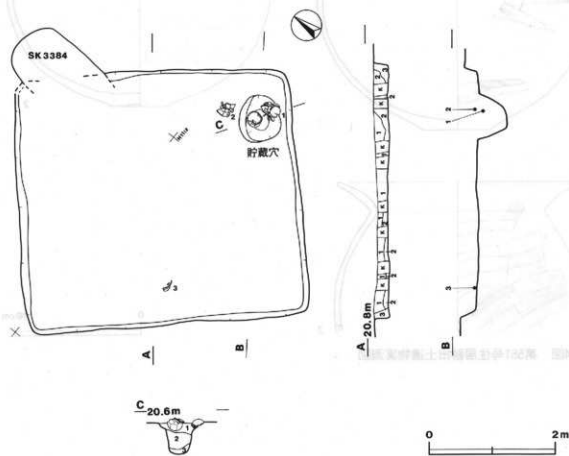
重複関係 北コーナー付近を第3384号土坑に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸4.51m, 短軸4.19mの方形である。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高は20-24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。



第133図 第551号住居跡実測図

貯蔵穴 東コーナー付近にあり、長径75cm、短径66cmの楕円形で、深さは49cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

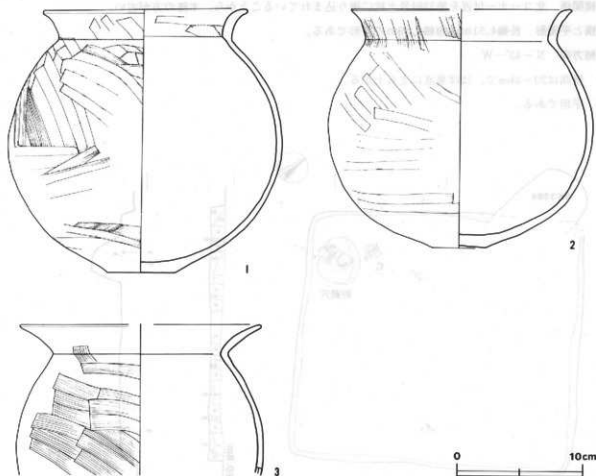
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

遺物 土師器片約60点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第134図1の甕は貯蔵穴から、2の甕は貯蔵穴の西側から、3の甕は南西部の床面から出土している。

所見 炉、ピットは検出されなかった。本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第134図 第551号住居跡出土遺物実測図

第551号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 1	甕 土師器	A 15.9	胴部一部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾し、端部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面ハケ目調整。	長石・黄母・スコリア にぶい橙色 普通	P189, P.L51 85%, 下位窯付着 貯蔵穴
		B 21.3				
		C 5.4				
2	甕 土師器	A [17.6]	体部・口縁部一部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾し、端部は外反。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面ハケ目調整。	長石・黄母・スコリア にぶい橙色 普通	P190, P.L51 60% 貯蔵穴西側
		B 19.2				
		C [ 4.3]				
3	甕 土師器	A [19.2]	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈する。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面ハケ目調整。	長石・黄母・スコリア にぶい橙色 普通	P191, P.L51 10% 南西部床面
		B [12.1]				

## 第552号住居跡 (第135・136図)

位置 調査区の南部, H11f区。

重複関係 北西コーナー付近を第3350・3351号土坑に、南部を東西に第188・191号溝に掘り込まれていることから、いずれより本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸6.13m, 短軸5.45mの長方形である。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は12~26cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦で、北部は一部貼り床である。

炉 中央やや北寄りに位置し、長径123cm, 短径58cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。火床面は、ロームがブロック状に赤変硬化している。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径33~42cm, 短径32~38cmの円形または楕円形で、深さは67~88cmである。いずれも柱穴と思われる。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況をしていることから自然堆積と思われる。

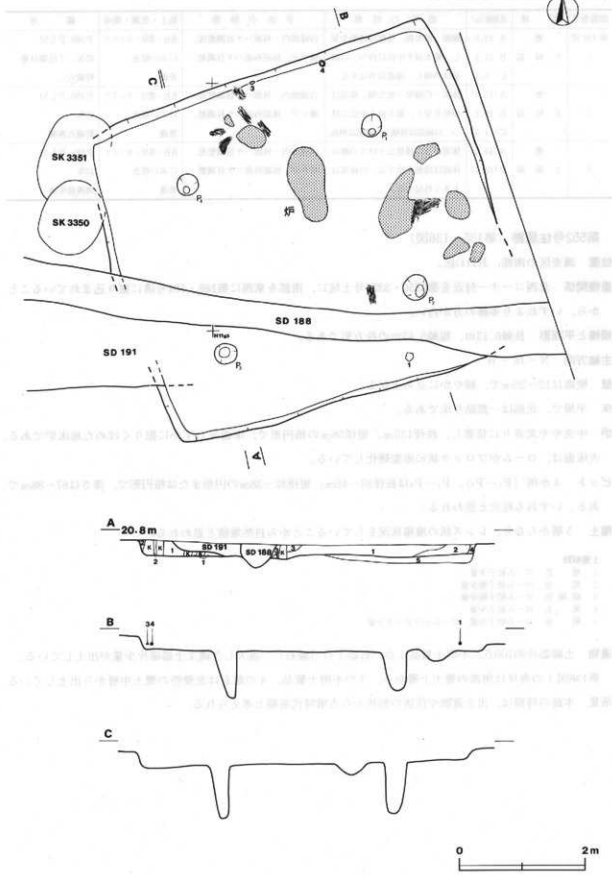
## 土層解謎

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子極少量
- 3 暗褐色 ローム粒子極少量
- 4 褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

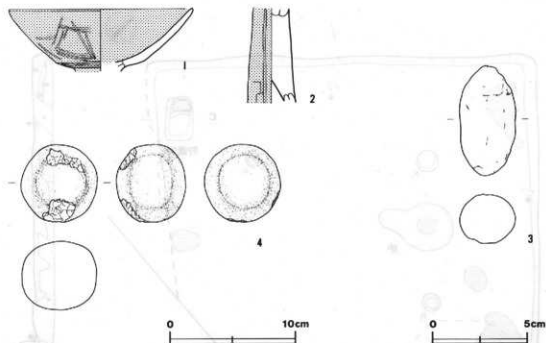
遺物 土師器片約100点, 不明土製品1点, 石器1点(敲石), 混入した縄文土器細片少量が出土している。

第136図1の高坏は南部の覆土上層から、3の不明土製品、4の敲石は北壁際の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物や住居の形状から古墳時代前期と考えられる。



第135図 第552号住居跡実測図



第136図 第552号住居跡出土遺物実測図

第552号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	高土師器	A 14.7 B (5.0)	脚部欠損。坏部下端に稜を持ち、内唇気味に立ち上がる。	坏部外面へラ磨き、内面ナデ。内・外面赤彩。	長石・雲母・スコリア 赤色 普通	P192, P L52 30% 南部覆土上層
	高土師器	B (7.6)	脚部片。脚部は中実で、上位になるにつれ、細くなる。	外面へラ削り後、へラ磨き。外面赤彩。	長石・スコリア 赤色 普通	P193 30% 覆土

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	幅	厚さ				
第136図3	不明土製品	5.9	2.9	-	47.0	100	卵形を呈する。無地、無文である。	D P10, P L52, 北壁階覆土中層

図版番号	器種	計測値			重量(g)	石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第136図4	散石	6.2	6.1	5.5	305.0	安山岩	Q10, P L52, 北壁階覆土中層

### 第554号住居跡 (第137・138図)

位置 調査区の南部, I11b2区。

重複関係 北西コーナー付近で、本跡が第3389号土坑を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

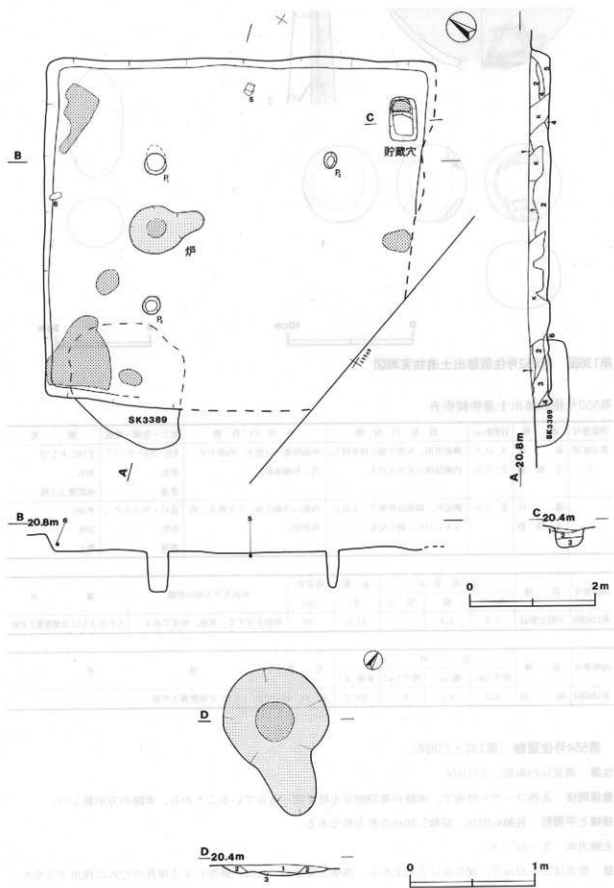
規模と平面形 長軸6.07m, 短軸5.50mの長方形である。

主軸方向 N-60°-E

壁 壁高は26~32cmで、緩やかに立ち上がる。西壁と南壁の一部は、耕作による擾乱のために検出できなかった。

床 平坦である。第3389号土坑上は一部貼床である。床面に多量の炭化物、焼土が検出された。





第137图 第554号住居跡实测图

炉 中央や北寄りに位置し、長径123cm、短径73cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた床炉である。

火床面は、わずかに赤変している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化物微量

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は長径26~36cm、短径22~35cmの円形または楕円形で、深さは60~67cmである。いずれも柱穴と思われる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長軸72cm、短軸45cmの長方形で、深さは31cmである。

貯蔵穴土層解説

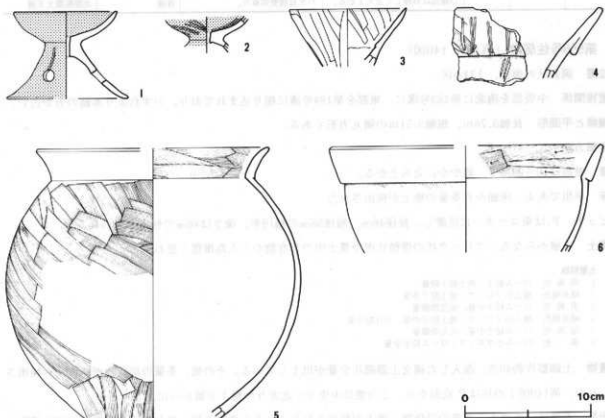
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子極少量

覆土 6層からなる。全面に耕作による攪乱が入るが、壁際の堆積状況から自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片約200点、混入した縄文土器細片約110点が出土している。その他、多量の炭化物、焼土が床面から検出されている。第138図5の甕は東壁際の床面から、6の甕は北壁際の覆土下層から出土している。



第138図 第554号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、床面から多量の炭化物や焼土が検出されたことから、焼失家屋と思われる。時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

#### 第554号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	器台	A 8.1	脚部一部欠損。脚部はハの字状に開く。脚部に3孔。坏部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。脚部外面ヘラ書き、内面ナデ。内・外面赤彩。	長石	P199, P.L54
	土師器	B 7.0			赤色	50%
		D(9.6)			普通	覆土
2	器台	B(2.3)	脚部および口縁部欠損。器受部は内彎気味に立ち上がる。	器受部内・外面ヘラ書き。内・外面赤彩。	長石	P200
	土師器				赤色	20%
					普通	覆土
3	埴	A 9.4	体部欠損。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母	P201, P.L54
	土師器	B(4.4)			明褐色	45%
					普通	覆土
4	埴	B(5.6)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて、大きく外傾して立ち上がる。複合口縁。	頸部および口縁部外面ハケ目調整後、ヘラ書き。内面ハケ目調整後、ナデ。	雲母・スコリア	P202, P.L54
	土師器				明褐色	5%
					普通	覆土
5	甕	A(18.4)	体部半分欠損。体部は球形を呈し、上位に最大径を持つ。口縁部は反外して立ち上がる。	口縁部外面ハケ目調整、内面ハケ目調整後、ナデ。体部外面ハケ目調整、内面ナデ。	長石・スコリア	P203, P.L54
	土師器	B(21.8)			褐色	30%, 外面煤片着
					普通	東壁際床面
6	瓶	A(21.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目調整後、ナデ。体部内・外面ナデ。外面ハケ目調整痕有り。	長石・スコリア	P204
	土師器	B(8.6)			ぶい褐色	5%
					普通	北壁際覆土下層

#### 第555号住居跡（第139・140図）

位置 調査区の南部，I11a区。

重複関係 中央部を南北に第183号溝に、東部を第184号溝に掘り込まれており、いずれより本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸3.76m，短軸3.51mの隅丸方形である。

主軸方向 N-47°-E

壁 壁高は16~26cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。床面から多量の焼土が検出された。

ピット P<sub>1</sub>は東コーナーに位置し、長径46cm，短径38cmの楕円形、深さは46cmで柱穴と思われる。

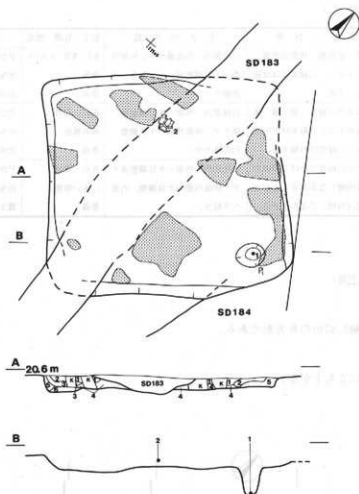
覆土 6層からなる。ブロック状の堆積状況や覆土中の含有物から人為堆積と思われる。

##### 土層解説

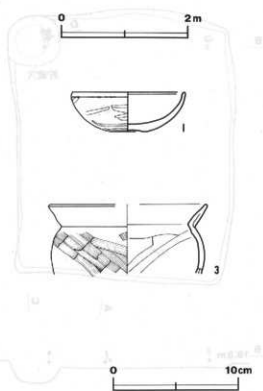
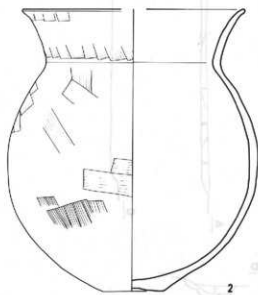
- 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化物少量
- 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 土師器片約40点，混入した縄文土器細片少量が出土している。その他，多量の炭化物が床面から検出された。第140図1の坏はP<sub>1</sub>底部から，2の甕は中央やや北寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡は，床面から多量の炭化物・焼土が検出されたことから焼失家屋と思われる。時期は，出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第139图 第555号住居跡実測图



第140图 第555号住居跡出土遺物実測图

第555号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第140図 1	土 師 器	A 9.0	口縁部一部欠損。体部は内壁して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。平底。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハケ目調整後、ヘラ磨き。内面横ナデ。	長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P206, P L53 95% P,内
		B 3.2				
		C 2.6				
2	土 師 器	A (17.8)	体部および口縁部一部欠損。体部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、横ナデ。体部外面ハケ目調整、内面横ナデ。	長石・雲母 暗赤褐色 普通	P206, P L53 60% 北側覆土下層
		B 22.7				
		C 4.8				
3	土 師 器	A (12.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。体部外面ハケ目調整、内面ヘラ削り。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P207, P L53 10% 覆土
		B ( 5.6)				

第560号住居跡 (第141・142図)

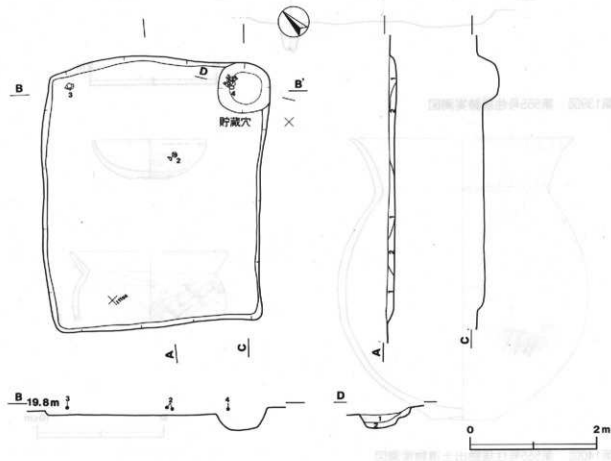
位置 調査区の南部, I11f6区。

規模と平面形 長軸4.33m, 短軸3.47mの長方形である。

主軸方向 N-44°-E

壁 壁高は8~12cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。



第141図 第560号住居跡実測図

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、一辺が80cmの隅丸方形で、深さ22cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、白色粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

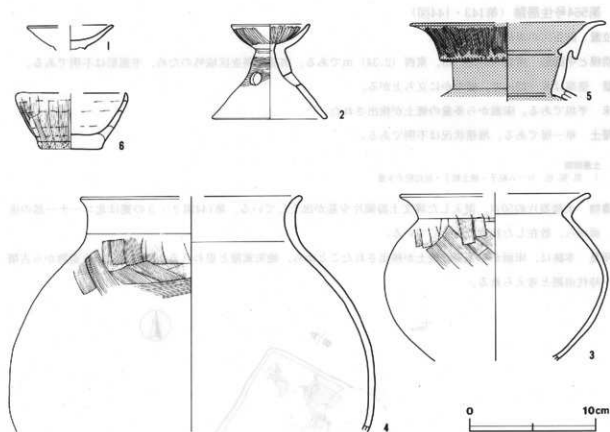
覆土 2層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片約40点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第142図2の器台は東部の覆土中層から3の堯は北コーナー部の覆土上層から、4の甕と6のミニチュア土器は貯蔵穴から、それぞれ出土している。

所見 炉・ピットは検出されなかった。本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第142図 第560号住居跡出土遺物実測図

第560号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第142図 1	高  环	A( 6.9)	环部片。环部は外傾して立ち上がり、口縁端部はやや外反する。	环部内・外面ナデ。	灰石・雲母・スコリア	P215
	土  脚 器	B( 2.9)			にぶい褐色 普通	10% 覆土
2	器  台	A 6.2	脚部一部欠損。脚部はハの字状に開く。脚部に3孔。器受部はやや内彎気味に立ち上がる。	环部内・外面ヘラ磨き。脚部外部へラ磨き、内面へラ削り後、ナデ。	赤粒・雲母・スコリア	P216, P L 53
	土  脚 器	B 7.6			褐色	90%
		D 9.2			普通	東部覆土中層
3	堯	A [15.0]	体部から口縁部の破片。体部は扁平な球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後、ナデ。体部外面ハケ目調整。内面ナデ。	赤粒・雲母・スコリア	P217, P L 53
	土  脚 器	B [13.0]			にぶい黄褐色 普通	30%, 下位層行着 北コーナー部覆土上層

図版番号	器 種	正測図(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
4	甕 土 師 器	A (17.5) B (18.9)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口 縁部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面 ハケ目調整後、ナデ。	長石・雲母 にぶい褐色 普通 貯蔵穴	P218, P.L53 15%
5	装 飾 甕 土 師 器	A (15.6) B ( 6.3)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部はほぼ直立する。口縁部は 外傾し、端部は外反する。	口縁部外面へラ磨き、内面ナデ。 口縁部下端に刻み。頸部内・外 面ナデ。内・外面赤彩。	長石・雲母 赤色 普通	P219, P.L53 5% 覆土
6	ミニチュア土甕 土 師 器	A ( 8.8) B 4.5 C 5.0	体部から口縁部一部欠損。底部 は突出する。体部から口縁部に かけて内彎気味に立ち上がる。	外面ハケ目調整、内面ナデ。輪 積み痕有り。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通 貯蔵穴	P220, P.L53 60%

### 第564号住居跡 (第143・144図)

位置 調査区の南部、I11c区。

規模と平面形 南北 (2.20) m, 東西 (2.34) mである。南部が調査区域外のため、平面形は不明である。

壁 壁高は6~12cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。床面から多量の焼土が検出された。

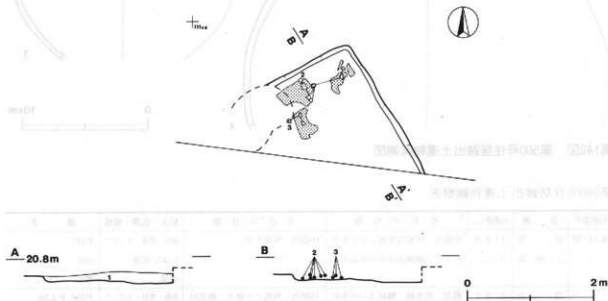
覆土 単一層である。堆積状況は不明である。

#### 土層解説

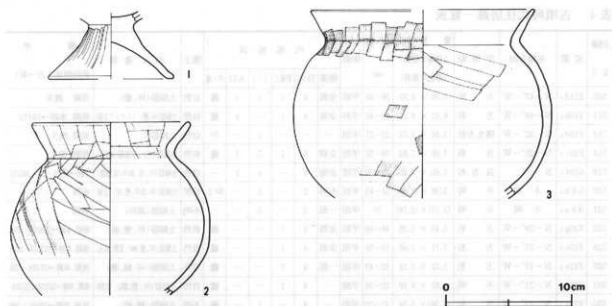
- 1 黒褐色 ローム粒予・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片約50点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第144図2・3の甕は北コーナー部の床  
面から、散在した状態で出土している。

所見 本跡は、床面から多量の焼土が検出されたことから、焼失家屋と思われる。時期は、出土遺物から古墳  
時代前期と考えられる。



第143図 第564号住居跡実測図



第144図 第564号住居跡出土遺物実測図

第564号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	高 土 罍 器	B ( 5.4) D ( 9.8)	坏部欠損。脚部はハの字に大き く開く。	脚部外面へラ削り後、ヘラ磨き。 内面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P225, P L 45 15% 覆土
2	罍 土 罍 器	A 12.5 B (14.0)	底部・口縁部一部欠損。体部は 球形を呈し、口縁部は外傾して 立ち上がる。	口縁部内・外面ハケ目調整。体 部外面ハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P226, P L 45 75%、外面蓮付着 北コーナー床面
3	罍 土 罍 器	A (17.8) B (15.2)	体部半分欠損。体部は球形を呈 し、口縁部は外傾して立ち上が る。	口縁部外面ハケ目調整、端部ナ デ、内面ハケ目調整後、ナデ。 体部内・外面ハケ目調整。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P227, P L 45 35% 北コーナー床面



表4 古墳時代住居跡一覽表

古墳跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸) (南北×東西)	登高 (m)	床版	内部施設					覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
							竪溝	柱穴	貯蔵穴	ピット	入口			
505	El1d	N-47°-W	方形	6.09 × 6.07	36-46	平垣	全周	4	1	1	1	竈	自然 土師器(坏, 甕)	後期, 焼失
511	El0b	N-48°-W	方形	6.42 × 6.22	40-45	平垣	全周	4	1	—	1	竈	自然 土師器(坏, 甕, ミコトナ7土師)	後期, 本跡→S0152
513	Fl0d	N-32°-W	隅丸方形	3.84 × 3.71	25-27	平垣	—	—	—	1	—	炉	自然 土師器片	前期, 焼失
514	Fl0i	N-25°-W	方形	7.66 × 7.63	30-33	平垣	全周	6	1	5	1	竈	自然 土師器(坏, 甕, 土師器(高坏))	後期, 焼失
519	Gl0f	N-0°	長方形	5.60 × 4.33	32-39	平垣	全周	4	—	4	1	—	自然 土師器(坏, 甕, 土師器(高坏))	本跡→S1570-S71-S8342
520	G9ha	不明	不明	3.98 × (2.66)	31-43	平垣	不明	2	—	2	—	伊2	自然 土師器(坏, 甕, 土師器(高坏))	前期
521	H9aa	不明	不明	(3.15) × (2.76)	25	平垣	一部	2	—	3	—	—	不明 土師器(高坏)	前期
525	Gl0g	N-29°-W	方形	5.43 × 5.36	46-48	平垣	全周	4	1	—	—	竈	自然 土師器(坏, 甕, 甕)	後期, 本跡→S83107-S8318
526	Fl0e	N-27°-W	方形	7.71 × 7.66	50-58	平垣	全周	4	1	—	—	竈	自然 土師器(坏, 甕, 土師器(高坏))	後期, 本跡→S83217-S8318
527	Fl1e	N-19°-W	方形	5.31 × 5.12	33-43	平垣	一部	4	1	—	—	竈	自然 土師器(坏, 甕, 甕)	後期, 本跡→S1528-S59
531	Fl1c	N-21°-W	不明	6.63 × 6.69	25-36	平垣	—	4	1	—	—	竈	自然 土師器(坏, 甕, 甕, 支脚)	後期, 本跡→S8323N-S83118
532	Fl2c	N-13°-W	方形	(5.36) × 5.24	15-22	平垣	—	4	—	1	—	竈	不明 土師器(甕, 甕)	後期, 本跡→S0161-168
537	Fl1e	N-8°-E	長方形	6.59 × 5.80	5-20	平垣	全周	4	1	3	—	竈	自然 土師器(坏, 甕, 甕, 甕石)	後期, 本跡→S8306-S8311
538	Fl1j	N-3°-W	隅丸方形	5.84 × 5.73	—	平垣	—	4	—	—	—	—	土師器(高坏)	後期, 本跡→S0159-171
539	Gl1b	N-26°-W	方形	8.33 × 8.28	42-45	平垣	全周	7	1	—	1	竈	自然 土師器(坏, 甕, 甕, 白土, 甕石)	後期, 本跡→S8330-S8354
540	Gl1e	N-29°-W	隅丸方形	5.03 × 5.82	16-23	平垣	—	—	—	1	—	—	不明 土師器(甕, 甕)	前期, 本跡→S0155-179
544	H11a	N-34°-W	方形	3.04 × 7.71	68-74	平垣	全周	4	1	—	—	竈	自然 土師器(坏, 甕, 甕)	後期, 本跡→S0179-180
545	Gl1f	N-38°-W	隅丸方形	6.43 × 5.60	15-18	平垣	全周	4	1	1	—	炉	自然 土師器(甕, 甕, ミコトナ7)	前期, S8326-本跡→S8338
546	Gl1ja	N-21°-W	隅丸方形	4.80 × 4.36	24-28	平垣	全周	—	—	1	—	炉	自然 土師器(高坏, 甕, 甕)	前期
547	H10d	N-20°-W	長方形	6.12 × 4.63	13-25	平垣	—	2	1	2	—	竈	自然 土師器(坏, 甕), 支脚	後期
548	H11e	N-70°-E	長方形	3.06 × 2.55	19-26	平垣	—	—	—	1	—	—	不明 土師器(高坏, 甕)	前期
549	H11c	N-2°-E	不明	(3.41) × (2.66)	40	平垣	一部	—	—	1	—	—	自然 土師器(甕台, 台付甕, 甕)	前期, 本跡→S0180
551	H11i	N-43°-W	方形	4.51 × 4.19	20-24	平垣	—	—	1	—	—	—	自然 土師器(甕)	前期, 本跡→S83384
552	H11fa	N-16°-W	長方形	6.13 × 5.45	12-26	平垣	—	4	—	—	—	炉	自然 土師器(甕, 甕, 甕, ミコトナ7)	前期, 本跡→S83351
554	H11ba	N-60°-E	長方形	6.07 × 5.50	26-32	平垣	—	3	1	—	—	炉	自然 土師器(甕台, 甕)	前期, 本跡→S8380-本跡
555	H11aa	N-47°-E	隅丸方形	3.76 × 3.51	16-26	平垣	—	—	—	1	—	—	人為 土師器(坏, 甕)	前期, 本跡→S0183-184
560	H11fa	N-44°-E	長方形	4.33 × 3.47	8-12	平垣	—	—	1	—	—	—	自然 土師器(甕台, 甕, ミコトナ7)	前期
564	H11ca	不明	不明	(2.20) × (2.34)	6-12	平垣	—	—	—	—	—	—	不明 土師器(甕)	前期, 焼失

### 3 平安時代の遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第504号住居跡 (第145・146図)

位置 調査区の北部, D11g区。

規模と平面形 一边が2.86mほどの隅丸方形である。

主軸方向 N-92°-E

壁 壁高は17-19cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。中央部から竈にかけて踏み固められている。

竈 東壁の中央部に壁外に35cmほど掘り込み、砂粒混じりの粘土で構築されている。耕作による攪乱を受け、遺存状態は不良である。規模は長さ75cm、幅70cmで、火床部にわずかに焼土が残る。

#### ■土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化物少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量

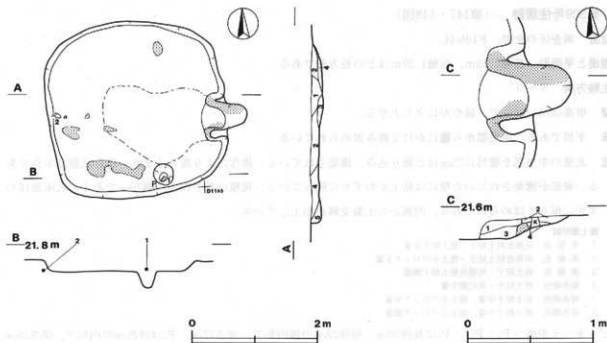
ピット P<sub>1</sub>は径35cmの円形で、深さ25cmである。柱穴と思われる。

覆土 5層からなる。覆土中に焼土および炭化物(材)を多量に含み、ブロック状の堆積をしていることから人為堆積と考えられる。

#### ■土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 炭化物・焼土粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子中量、ローム小ブロック・粒子・炭化物少量
- 5 褐色 ローム粒子多量、炭化物少量

遺物 土師器片約30点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第146図1の坏はP<sub>1</sub>の覆土上層から、2の高台付坏は西壁際の床面から出土している。



第145図 第504号住居跡実測図

所見 本跡は、覆土中に焼土および炭化物(材)を多量に含むことから、焼失家屋と考えられる。時期は、出土遺物から平安時代(9世紀後半)と考えられる。



第146図 第504号住居跡出土遺物実測図

第504号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第146図 1	土 器	A (12.8)	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部、体部内・外面備ナデ。	長石・石英・スコリア	P2, P L55
		B (3.6)	体部。口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へく切り。	褐色	15%
		C (5.2)	がら。		普通	P <sub>1</sub> 覆土上層
2	土 器	A (14.7)	底部から口縁部にかけての破片。	口縁から体部外面ロクロナデ。	長石・スコリア	P3, P L55
		B (5.3)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面丁寧なへく焼き。内面黒色処理。	にぶい褐色	30%
3	土 器	A (18.9)	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部、体部内・外面ヘラナデ。	長石・スコリア	P4
		B (10.9)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。		にぶい褐色	10%
					普通	覆土

第509号住居跡 (第147・148図)

位置 調査区の北部、F10b区。

規模と平面形 長軸2.95m, 短軸1.39mほどの長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は23~26cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。中央部から竈にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部を壁外に55cmほど掘り込み、構築されている。耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良である。袖部が構築されていた壁には粘土がわずかに残っている。規模は長さ75cm, 幅70cmである。火床部はわずかに掘りくぼめられており、内部から土製支脚が出土している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 灰褐色粘土粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 灰褐色粘土粒子・焼土小ブロック少量
- 3 黒褐色 粘土粒子・灰褐色粘土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗赤褐色 粘土粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量

ビット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は長径30cm, 短径23cmの楕円形で、深さ77cm, P<sub>2</sub>は径25cmの円形で、深さ25cmである。いずれも柱穴と思われる。P<sub>3</sub>~P<sub>5</sub>は長径45~80cm, 短径30~45cmの楕円形で、性格は不明である。

覆土 2層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と考えられる。

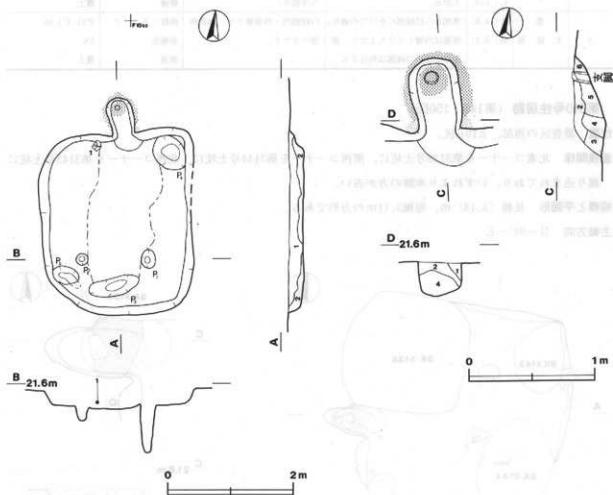
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

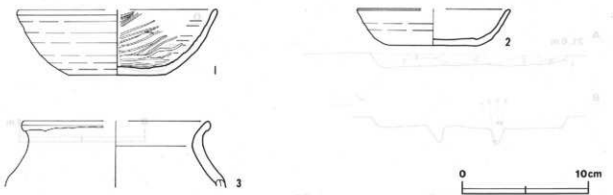
2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片約20点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第148図1の坏は竈南部の床面から出土している。2の坏、3の甕は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（9世紀後半）と考えられる。



第147図 第509号住居跡実測図



第148図 第509号住居跡出土遺物実測図

第509号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 1	土 師 器	A (15.8)	口縁部一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁から体部外面ロクロナデ。内面ロクロナデ後、丁家なへつ磨き。底部へつ切り。	長石・石英 明赤褐色	P18, P L 56 50% 甕南側床面
		B 5.3			普通	
		C 7.7			普通	
2	土 師 器	A (12.2)	底部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ロクロナデ、内面ナデ。底部へつ切り。	長石・雲母・スコリア 褐色	P19 15%
		B 2.9			普通	覆土
		C (7.0)			普通	
3	土 師 器	A (14.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部でぐれ口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつナデ。	砂粒・スコリア 赤褐色	P21, P L 56 5%
		B (5.3)			普通	覆土

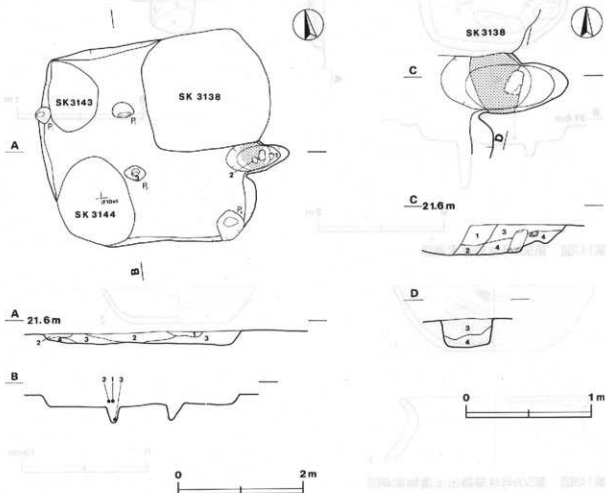
第510号住居跡 (第149・150図)

位置 調査区の西部, E10j区。

重複関係 北東コーナーを第3138号土坑に、南西コーナーを第3144号土坑に、北西コーナーを第3143号土坑に掘り込まれており、いずれより本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸 3.18 m, 短軸 3.11 m の方形である。

主軸方向 N-94°-E



第149図 第510号住居跡実測図

壁 壁高は14~19cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。

竈 東壁を壁外に60cmほど掘り込み構築されている。左袖は第3138号土坑に掘り込まれ現存しない。規模は長さ65cm、幅〔50〕cmで、火床部は浅く掘り込まれており、わずかに焼土が確認できる。土製支脚が燃焼部の奥から出土している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子少量

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は長径36cm、短径26cmの楕円形、深さ25cmで、柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は径25cmの不定形、P<sub>4</sub>は南東コーナー部にあり径40cmほどの不定形である。いずれも性格は不明である。

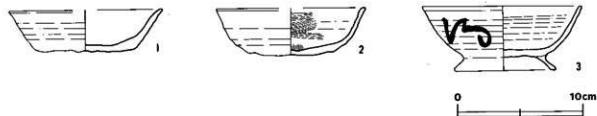
覆土 4層からなり、レンズ状の準積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片約40点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第150図1・2の坏は竈から、3の高台付坏はP<sub>2</sub>から、それぞれ出土している。3の高台付坏の体部には「得」と墨書されている。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代(9世紀後半~10世紀前半)と考えられる。



第150図 第510号住居跡出土遺物実測図

第510号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	土師器	A〔12.3〕	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部、体部外面ロクロナデ。	長石・スコリア	P22、P L57
		B 3.4	体部は外傾して立ち上がり、口	口縁部から体部内面ナデ。底部	褐色	30%
		C 7.7	縁部はわずかに外反する。	ヘラ切り。	普通	竈内
2	土師器	A〔12.0〕	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。体部外	長石・スコリア	P23、P L57
		B 3.8	体部から口縁部は外傾して立ち	面ロクロナデ、内面磨き。底部	いぶい褐色	25%
		C〔6.8〕	上がる。	ヘラ切り。	普通	竈内
3	高台付土師器	A 12.1	口縁部一部欠損。平底にハの字	体部内・外面ロクロナデ。底部	長石・雲母・スコリア	P24、P L57
		B 5.1	状の高台が付く。体部は外傾し	回転ヘラ切り。体部外面に「得」	褐色	95%
		D 8.1	て立ち上がる。	の墨書。	良好	P <sub>2</sub> 内
		E 1.3				

第512号住居跡（第151図）

位置 調査区の西部，F10es区。

規模と平面形 南北3.74m，東西（1.23）mである。東部は調査区域外であり，平面形は不明である。

壁 壁高は14cmほどで，緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。

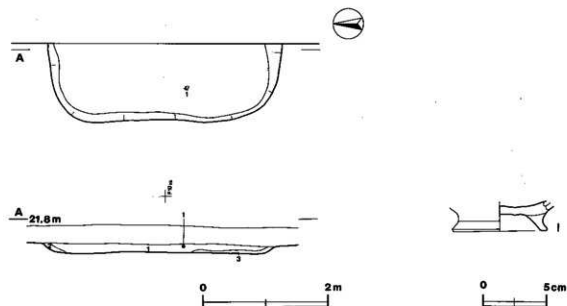
覆土 3層からなり，レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物 土師器片，混入した縄文土器細片少量が出土している。第151図1の高台付環は，西部の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考えられる。



第151図 第512号住居跡・出土遺物実測図

第512号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図	高台付環	B(2.4)	高台部から底部にかけての破片。	底部内・外面ナデ，高台部貼り	長石・スコリア	P32
1	土師器	D 7.5	高台は短くハの字状に開く。	付け後，ナデ。	にぶい褐色	25%
		E 1.2			普通	西側覆土中層

第515号住居跡 (第152図)

位置 調査区の西部, F10e区。

重複関係 北西コーナー部を第3153号土坑に掘り込まれており, 本跡の方が古い。

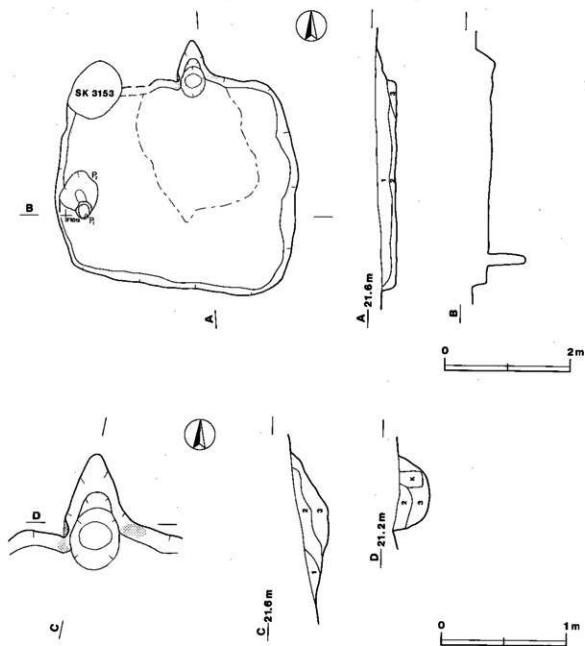
規模と平面形 長軸3.45m, 短軸3.79mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は23~34cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で, 南壁から竈にかけて踏み固められている。耕作による擾乱が床面まで達している。

竈 北壁の中央部を壁外に65cmほど掘り込み, 構築されている。耕作により掘り込まれ, 遺存状態は不良である。規模は長さ85cm, 幅70cmで, 火床部は浅く皿状に掘り込まれており, わずかに焼土が確認できる。袖部と袖部前面と推定される付近に粘土が散在することから, 粘土を竈材としていたと考えられる。



第152図 第515号住居跡実測図



覆土層解説

- 1 暗赤褐色 灰褐色粘土粒子・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 灰褐色粘土粒子・焼土粒子中量、ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 灰褐色粘土粒子・焼土粒子中量

ピット 2か所 (P1・P2)。P1は径28cmの円形、深さ65cmで、柱穴と思われる。P2は径65cmの不定形で、性格は不明である。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・炭化物微量

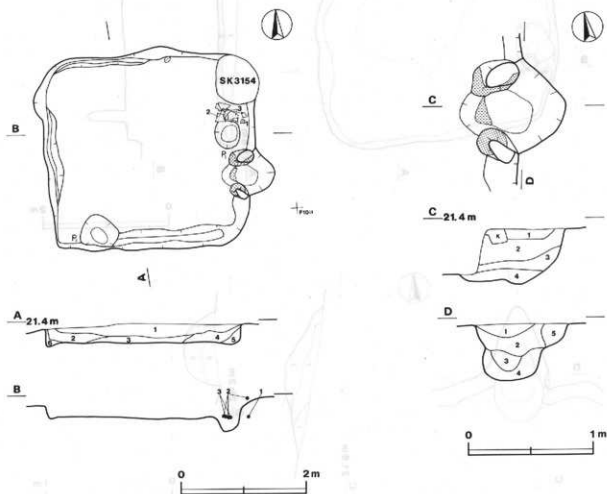
遺物 土師器細片約30点、混入した縄文土器細片少量が出土している。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。

第516号住居跡 (第153・154図)

位置 調査区の西部、F9ha区。

重複関係 北東コーナーを第3154号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。



第153図 第516号住居跡実測図

規模と平面形 長軸3.50m、短軸3.26mの方形である。

主軸方向 N-92°-E

壁 壁高は22~32cmでほぼ垂直に立ち上がる。南壁と北壁の一部に壁溝を検出した。

壁溝 南壁と西壁の一部に残存し、上幅20~25cm、下幅8~12cm、深さ5~8cmほどである。

床 平坦である。耕作による攪乱が床面まで達している。

竈 東壁の中央部を壁外に45cmほど掘り込み、構築されている。耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良である。規模は長さ85cm、幅80cmで、火床部は床面を浅く皿状に掘り込んでおり、わずかに焼土が確認できる。

袖部と袖部前面と推定される付近に粘土が散在することから、粘土を竈材としていたと考えられる。

竈土層解説

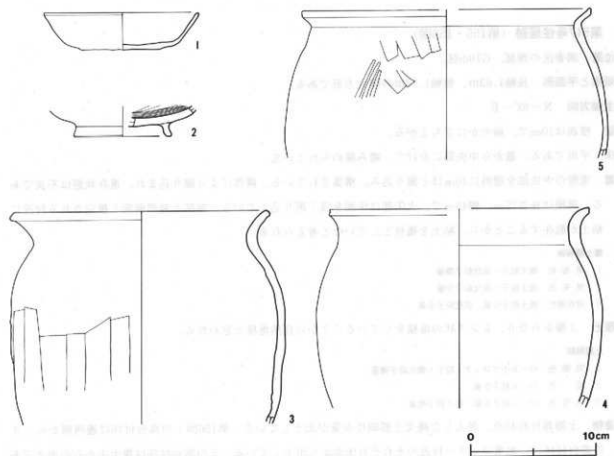
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・灰白色粘土粒子少量
- 3 暗赤褐色 灰白色粘土粒子・焼土粒子中量
- 4 暗赤褐色 灰褐色粘土粒子・炭化物中量
- 5 暗赤褐色 灰褐色粘土粒子・焼土粒子少量

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は東北側に位置し、径43cmの円形で、深さ25cm、P<sub>2</sub>は南東コーナー付近に位置し、径55cmの不定形で、深さ15cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- |       |                |       |                |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量   | 4 褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量        | 5 褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 3 褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量        |



第154図 第516号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片約60点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第154図1の皿は、覆土中の破片を接合したものである。2の高台付坏、3・5の甕は竈北側の床面から出土している。4は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考えられる。

第516号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第154図 1	皿 土師器	A 12.3	体部一部欠損。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。 平底。	体部、口縁部内・外面クロロナデ。底部回転ヘラ切り。	粘土・色調・焼成 長石・雲母 褐色 普通	P264, P.L59 75% 覆土
		B 3.0				
		C 8.2				
2	高台付坏 土師器	B (2.4)	高台部から底部にかけての破片。高台は短くハの字状に開く。	底部外面ナデ、内面ヘラ磨き。高台部貼り付け後、ナデ。底部回転ヘラ切り。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P43, P.L59 30% 竈北側床面
		D 8.0				
		E 1.2				
3	甕 土師器	A 20.2	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨り。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色、普通	P44, P.L59 35% 二次焼成済 竈北側床面
		B (17.1)				
4	甕 土師器	A (20.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨り後、ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P45, P.L59 15% 覆土
		B (16.0)				
5	甕 土師器	A (23.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨り後、ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P46 5% 竈北側床面
		B (12.0)				

### 第517号住居跡（第155・156図）

位置 調査区の西部、G10地区。

規模と平面形 長軸1.63m、短軸1.53mの隅丸方形である。

主軸方向 N-93°-E

壁 壁高は10cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。竈から中央部にかけて、踏み締められている。

竈 東壁の中央部を壁外に40cmほど掘り込み、構築されている。耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良である。規模は長さ75cm、幅43cmで、火床部は床面を浅く掘り込んでいる。袖部と袖部前面と推定される付近に粘土が散在することから、粘土を竈材としていたと考えられる。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量

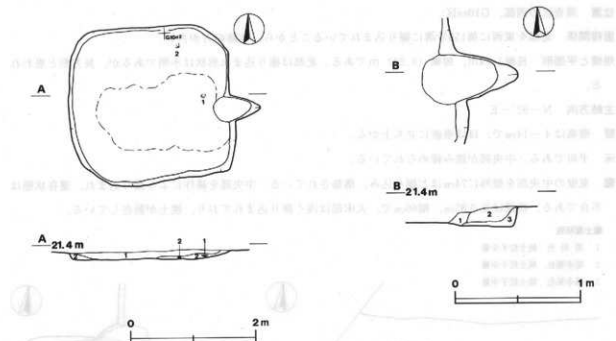
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

#### 土層解説

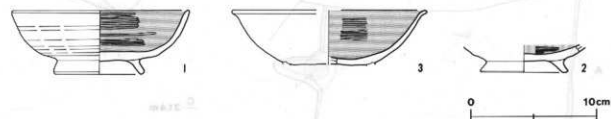
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子・焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片約40点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第156図1の高台付坏は竈西側から、2の高台付坏は、北東コーナー付近のそれぞれ床面から出土している。3の高台付坏は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代（9世紀後半～10世紀前半）と考えられる。



第155図 第517号住居跡実測図



第156図 第517号住居跡出土遺物実測図

第517号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第156図 1	高台付坏	A 14.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。体部から口縁部にかけて内壁しながら立ち上がる。高台は短くハの字状に開く。	体部外面ロクロナテ、内面ロクロナテ後、ヘラ磨き。内面黒色処理。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母	P48, P.L59	
	土 師 器	B 5.2			褐色	80%	襷西側床面
		D 7.1					
		E 1.3					
2	高台付坏	B (2.2)	高台部から底部にかけての破片。高台は短くハの字状に開く。	底部外面ナテ、内面ヘラ磨き。高台部貼り付け後、ナテ。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	長石・雲母	P50	
	土 師 器	D 6.9			にぶい橙色	30%	
		E 1.1					
3	高台付坏	A (13.4)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内磨しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ナテ、内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナテ。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	長石・雲母	P49	
	土 師 器	B (4.4)			にぶい橙色	30%	覆土

第518号住居跡 (第157・158図) 調査区西部、G10c区。

位置 調査区の西部、G10c区。

重複関係 北部を東西に第155号溝に掘り込まれていることから、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸4.14m、短軸(4.24)mである。北部は掘り込まれ形状は不明であるが、長方形と思われる。

主軸方向 N-92°-E

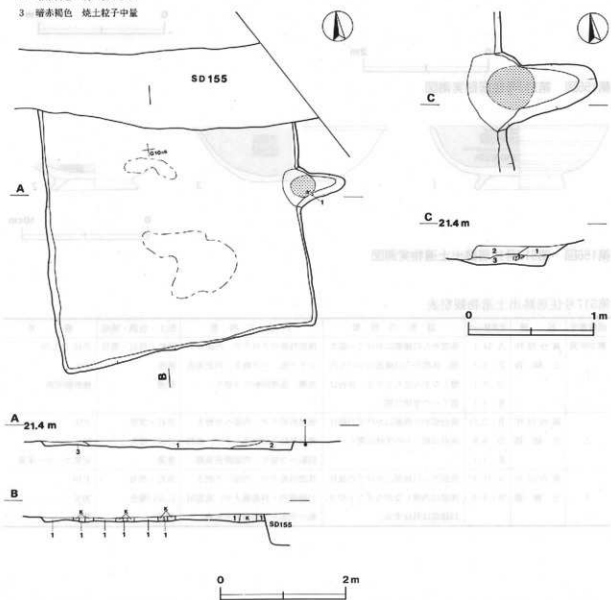
壁 壁高は4~14cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。中央部が踏み締められている。

竈 東壁の中央部を壁外に74cmほど掘り込み、構築されている。中央部を耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良である。規模は長さ85cm、幅66cmで、火床部は浅く掘り込まれており、焼土が散在している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量



第157図 第518号住居跡実測図

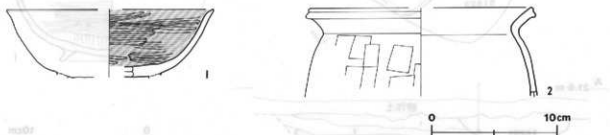
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片約40点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第158図1の高台付坏は蓋から、2の甕は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考えられる。



第158図 第518号住居跡出土遺物実測図

第518号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第158図 1	高台付坏 土師器	A(16.4)	底部から口縁部にかけての破片。	体部外面ナデ、内面へう磨き。	長石・雲母	P51, P L59
		B 5.5	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	棕色	
2	甕 土師器	A(17.8)	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り。	長石・石英・雲母	P52, P L59
		B(7.2)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。		スコリア	
					普通	覆土

第522号住居跡（第159図）

位置 調査区の中央部、G10b区。

重複関係 第523号住居跡を掘り込み、第3155・3156号土坑に掘り込まれていることから、第523号住居跡より新しく、第3155・3156号土坑より古い。

規模と平面形 南北（2.80）m、東西（3.00）mである。東部は調査区域外であるため、平面形は不明である。

壁 壁高は20～35cmである。

床 平坦である。

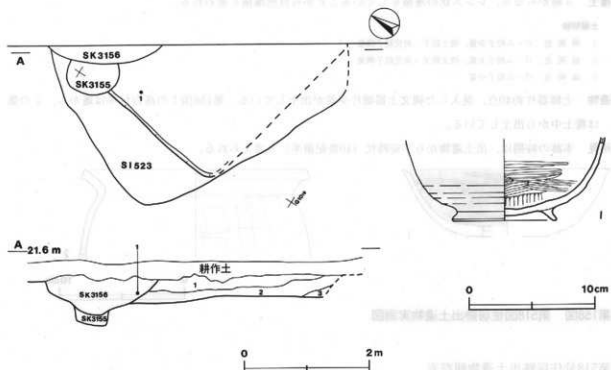
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒色 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片約50点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第159図1の高台付碗は、西部の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀中葉）と考えられる。



第159図 第522号住居跡・出土遺物実測図

第522号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色面・焼成	備考
第159図	高台付椀	B (6.6)	体部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内壁して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部底部内面へラ磨き。底部内・外面に「十」の結書。	赤母・スコリア 褐色	P87, PL60
I	土師器	D 8.3			褐色	70%
		E 1.1			普通	西側床面

### 第533号住居跡 (第160図)

位置 調査区の東部, G12d区。

規模と平面形 傾斜地に位置し、掘り込みも浅いため東半分の覆土は流出し、壁・床面は検出できない。長軸が(3.72) m, 短軸4.00mであるが、一辺が4.00mほどの方形と考えられる。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 現存部は平坦である。

竈 北壁の中央部を壁外に30cmほど掘り込み構築されている。耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良であり、規模・形状ともに不明である。わずかに火床部の掘り込みだけが確認できた。

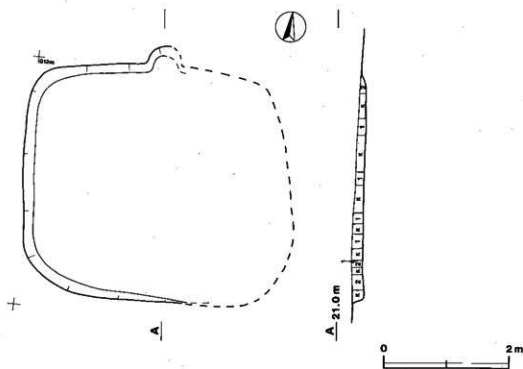
覆土 2層からなる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

遺物 土師器片約20点, 混入した縄文土器細片少量が出土している。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。



第160図 第533号住居跡実測図

#### 第534号住居跡 (第161・162図)

位置 調査区の東部、G11d区。

規模と平面形 長軸4.53m、短軸4.52mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は13~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。耕作による攪乱が床面まで達している。

竈 北壁の中央部を壁外に20cmほど掘り込み、構築されている。耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良である。袖部と推定される付近に粘土が散在することから、粘土を竈材としていたと考えられる。規模は長さ75cm、幅73cmで、火床部は浅く皿状に掘り込まれている。

#### 竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子微量

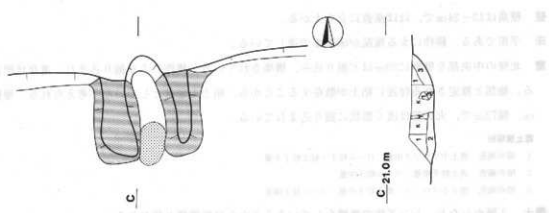
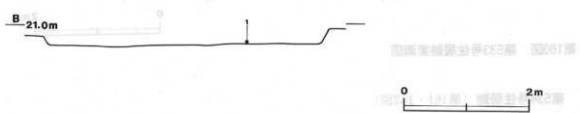
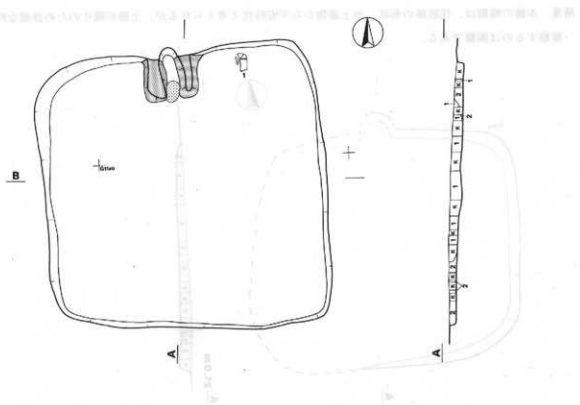
覆土 2層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 黒暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

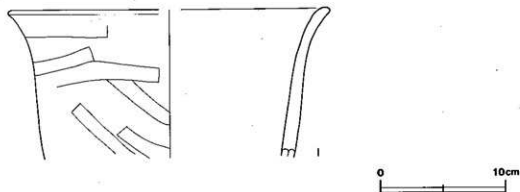
遺物 土師器片約40点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第162図1の瓶は竈東側の床面から出土している。





第161图 第534号住居跡実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。



第162図 第534号住居跡出土遺物実測図

第534号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図	甗	A (25.2)	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面ナデ。体部外面	長石・石英・雲母・	P128, P.L60
1	土師器	B (12.1)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。	ヘラナデ、内面ナデ。	スコリア にぶい褐色。普通	20% 龜東須床面

#### 第541号住居跡 (第163図)

位置 調査区の東部、G11b区。

規模と平面形 耕作による攪乱のために、北壁と西壁の一部は検出できなかった。一辺が3.10mの方形である。

壁 壁高は8cmほどで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。耕作による攪乱が床面まで達している。

竈 東壁の南部を壁外に50cmほど掘り込み、構築されている。耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良である。

規模は長さ90cm、幅70cmで、火床部は浅く掘り込まれている。

##### 竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 粘土粒子・焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 粘土粒子・焼土粒子微量

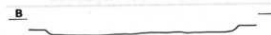
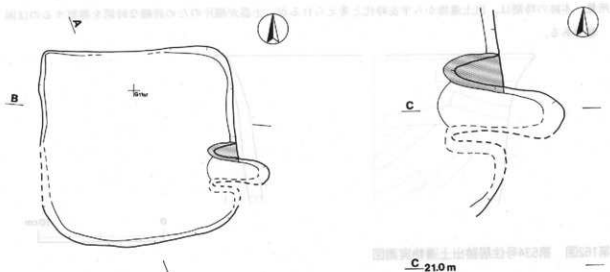
覆土 3層からなる。地積状況は不明である。

##### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

遺物 土師器片約10点、混入した縄文土器細片少量が出土している。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。



第163図 第541号住居跡実測図

第542号住居跡 (第164図)

位置 調査区の中央部, G10b区。

重複関係 南部を第154号溝に掘り込まれており, 本跡の方が古い。

規模と平面形 南北 (2.35) m, 東西 (3.27) mである。南部は掘り込まれており, 平面形は不明である。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁高は33~39cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。耕作による攪乱が床面まで達している。

竈 北壁のやや東寄りを壁外に25cmほど掘り込み, 粘土を使用して構築されている。耕作により掘り込まれ, 西袖部は遺存せず, 遺存状態は不良である。規模は長さ75cm, 幅74cmで, 火床部は浅く皿状に掘り込まれており, わずかに焼土が確認できる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 砂質粘土粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 3 黒褐色 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化物微量
- 4 灰褐色 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量

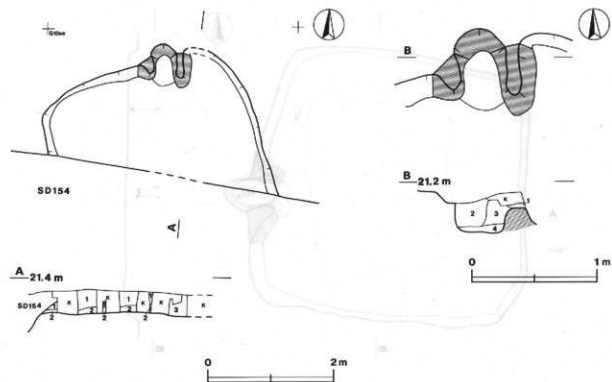
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量

遺物 土器器片約20点、混入した縄文土器細片少量が出土している。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。



第164図 第542号住居跡実測図

第543号住居跡 (第165・166図)

位置 調査区の中央部, G11hs区。

規模と平面形 長軸4.45m, 短軸4.30mの方形である。

主軸方向 N-86°-E

壁 壁高は25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。耕作による攪乱が床面まで達している。

竈 東壁の中央部を壁外に44cmほど掘り込み、構築されている。耕作により掘り込まれ、遺存状態は不良である。袖部と推定される付近に粘土が散在することから、粘土を竈材としていたと考えられる。規模は長さ110cm, 幅134cmで、火床部は浅く皿状に掘り込まれており、わずかに焼土が確認できる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子極少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子極少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子極少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

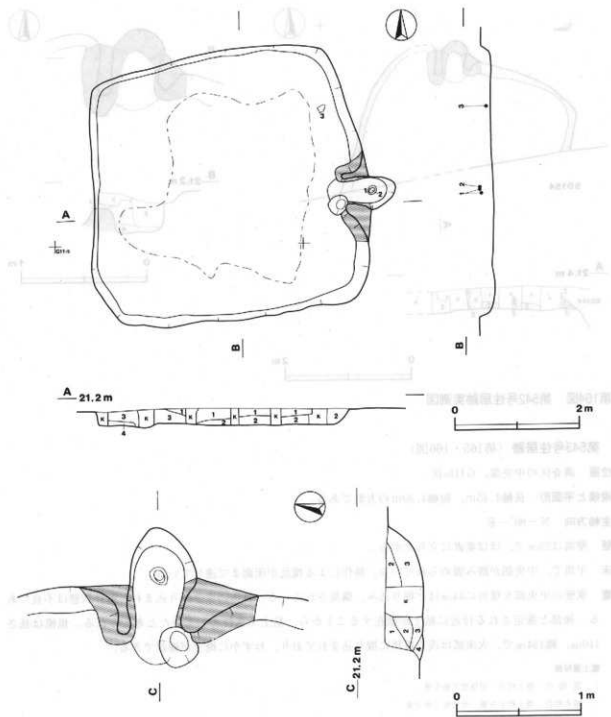
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

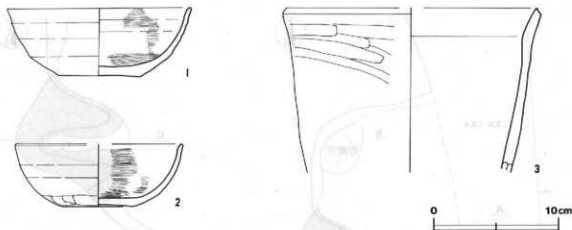
- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片約90点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第166図1・2の坏は竈から、3の甗は北東コーナー寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考えられる。



第165図 第543号住居跡実測図



第166図 第543号住居跡出土遺物実測図

第543号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第166図 1	土 鉢	A 14.7	口縁部一部欠損。体部は内彎気	体部外面ロクロナデ、内面ロク	長石・スコリア にぶい褐色 普通 壺内	P150, P.L.61 60%
		B 5.7	味に立ち上がり、口縁部はやや	ロナデ後、ヘラ磨き。		
		C 6.5	外反する。平底。			
2	土 鉢	A [13.3]	口縁部一部欠損。体部は内彎気	体部外面ロクロナデ、下位ヘラ	長石・スコリア にぶい褐色 普通 壺内	P151, P.L.61 45%
		B 5.1	味に立ち上がり、口縁部はやや	削り、内面ロクロナデ後、ヘラ		
		C 5.7	外反する。平底。	磨き。		
3	土 罎	A (20.0)	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナ	長石・石英・雲母・ スコリア にぶい褐色、普通	P153 5% 北東コーナー置土下層
		B (13.3)	体部から口縁部にかけて外傾し て立ち上がる。	デ。		

### 第556号住居跡 (第167・168図)

位置 調査区の南部，I11j区。

重複関係 西部を第184号溝に掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形 南北3.31m，東西(2.45)mである。西部を第184号溝に掘り込まれているため，平面形は不明である。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は15-20cmで，緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。

貯蔵穴 北東コーナーにあり，長径95cm，短径62cmの楕円形で，深さ26cmである。

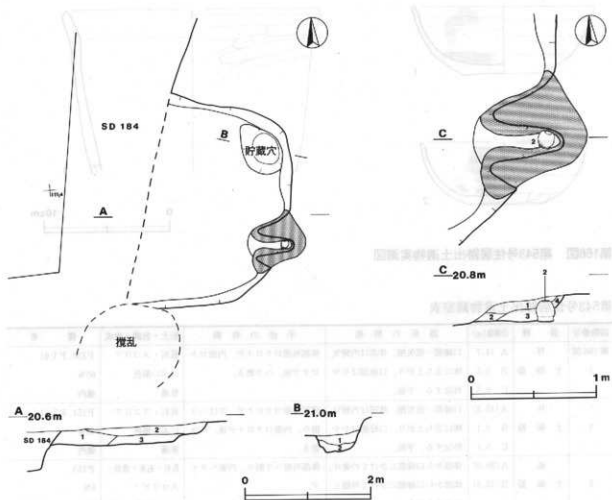
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，炭化物微量

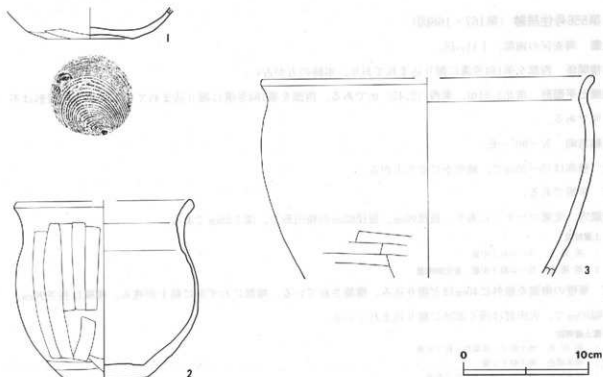
竈 東壁の南部を壁外に40cmほど掘り込み，構築されている。袖部にわずかに粘土が残る。規模は長さ90cm，幅90cmで，火床部は浅く皿状に掘り込まれている。

#### 竈土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量



第167图 第556号住居跡実測図



第168图 第556号住居跡出土遺物実測図

覆土 3層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子極少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片約10点が出土している。第168図2の甕は、竈の火床部奥から逆位で出土しており、支脚の可能性はある。1の坏、3の甕は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代と考えられるが、詳細な時期を推察するのは困難である。

第556号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第168図 1	坏	B(2.2)	底部から体部にかけての破片。	体部内・外面ナデ。底部部転承	長石・石英・雲母・ スコリア	P211 5%
	土師器	C 6.9	体部は内唇しながら立ち上がる。 平底。	切り。	にぶい黄褐色、普通	覆土
2	甕	A(13.8)	口縁部一部欠損。体部は内唇して立ち上がり、頸部でくびれ、	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	長石・石英・雲母・ スコリア	P209, P L 63 85%, 全面被熱痕
	土師器	B 14.3			にぶい橙色、普通	壺内
		C 6.6	口縁部は外反する。平底。			
3	甕	A(26.6)	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部から体部上位にかけて、	長石・石英・雲母・ スコリア	P210 10%
	土師器	B(16.1)	体部は内唇欠味に外傾して立ち上がる。口縁部は外反する。	内・外面横ナデ。体部中位以下はヘラ削り。	にぶい橙色、普通	覆土

第557号住居跡（第169図）

位置 調査区の南部、J11f6区。

規模と平面形 傾斜地に位置し、掘り込みも浅いために覆土は流出し、南部と西部の壁、南部の床面は検出できなかった。東部は調査区域外であり、南北(3.72)m、東西(4.36)mであるが、平面形は不明である。

壁 壁高は20cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦であると思われる。

覆土 5層からなる。ブロック状の堆積を示していることから人為堆積と思われる。

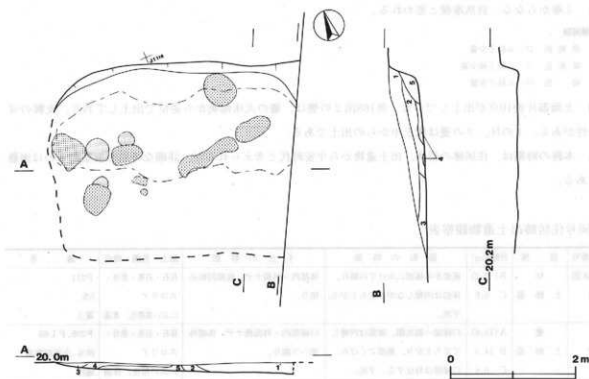
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物・炭化物少量

遺物 土師器片約10点、混入した縄文土器細片少量が出土している。なお、覆土中及び床面から多量の炭化物・焼土が検出された。

所見 本跡は、多量の炭化物・焼土が検出されたことから、焼失家屋と考えられる。時期は、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。





第169図 第557号住居跡実測図

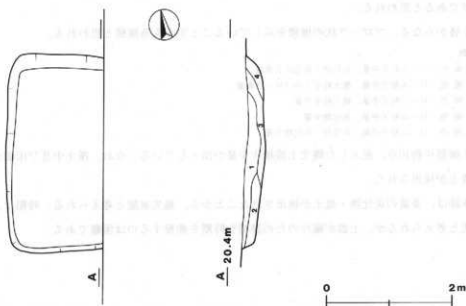
第558号住居跡 (第170図)

位置 調査区の南部, 110d区。

規模と平面形 東部は調査区域外のため, 平面形は不明である。調査した範囲では, 南北3.22m, 東西(1.53)mである。

壁 壁高は21~29cmで, 緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。



第170図 第558号住居跡実測図

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片約20点、混入した縄文土器細片少量が出土している。

所見 本跡の時期は、住居跡の形状、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。

大塚遺跡出土遺物調査報告書

第559号住居跡 (第171・172図)

位置 調査区の南部, I11j区。

重複関係 北壁を第3392号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 傾斜地に位置し、掘り込みも浅いために、南部の覆土は流出している。南北 (3.40) m, 東西 (3.00) mである。明確な平面形は不明である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は10cmほどで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。南壁際から北壁際にかけて、踏み固められている。

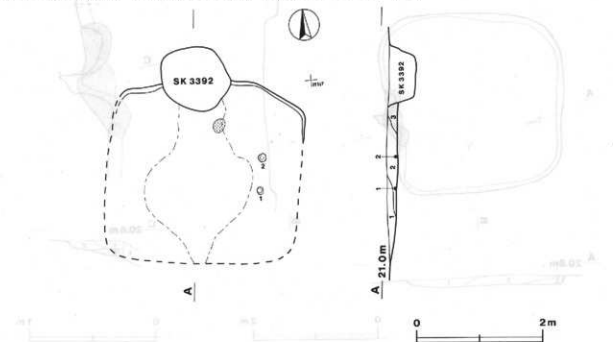
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

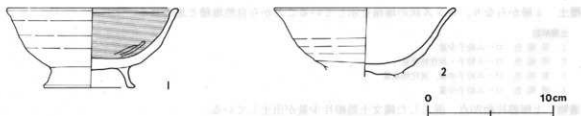
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片約50点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第172図1・2の高台付坪は中央部から東部にかけての床面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代 (10世紀中葉) と考えられる。



第171図 第559号住居跡実測図



第172図 第559号住居跡出土遺物実測図

第559号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	高台付 土器	A 13.7	口縁部一部欠損。体部は梗を持ちながら内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。高台は「ハ」の字状に開く。	口縁部、体部外面ロクロナデ。体部内面ロクロナデ後、ヘラ磨き。内面黒色処理。	長石 にふい曇色 普通	P212, P L63 85% 東部床面
		B 6.6				
		D 7.4				
		E 1.8				
第2	高台付 土器	A 14.4	口縁部および高台一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 にふい曇色 普通	P213, P L63 75% 東部床面
		B (5.8)				

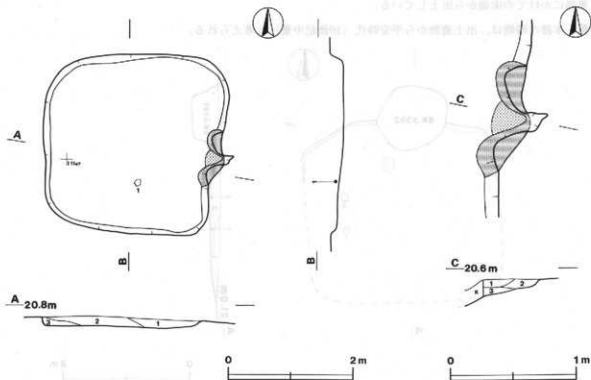
第561号住居跡 (第173・174図)

位置 調査区の南部, Ille区。

規模と平面形 長軸2.95m, 短軸2.90mの隅丸方形である。

主軸方向 N-95°-E

壁 壁高は10~22cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第173図 第561号住居跡実測図

床 平坦である。

竪 東壁の中央部を壁外に20cmほど掘り込み、粘土を使用し構築されている。規模は長さ48cm、幅83cmで、火床部は浅く掘り込まれており、わずかに焼土が確認できる。

竪土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、灰褐色粘土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量

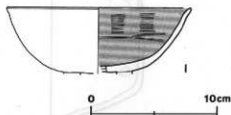
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 2 黒色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片約30点が出土している。第174図1の高台付坏は南部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考えられる。



第174図 第561号住居跡出土遺物実測図

第561号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第174図 1	高台付坏 土師器	A 14.6 B (5.3)	口縁部および高台一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面ロクロナデ。体部内面ロクロナデ後、ヘラ磨き。内面黒色処理。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P221, P.L62 80% 南部覆土下層

第562号住居跡（第175・176図）

位置 調査区の南部，I11h区。

規模と平面形 調査した範囲では、南北3.49m、東西（1.57）mである。東部は調査区域外であるため、平面形は不明である。

壁 壁高は25～32cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。

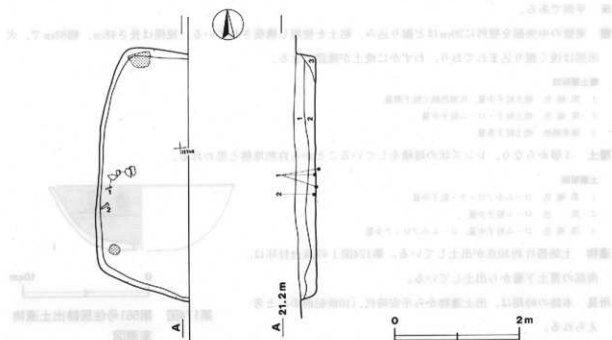
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

土層解説

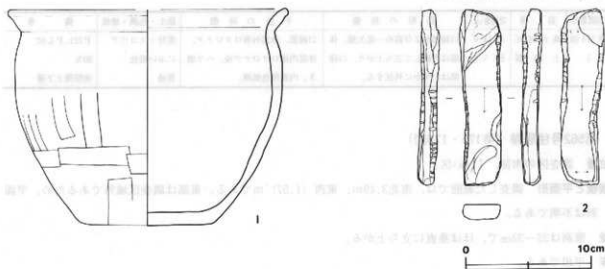
- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片約30点、石製品1点（砥石）、混入した縄文土器細片少量が出土している。第176図1の甕、2の砥石は西壁際の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代と考えられるが、土器が細片のため詳細な時期を推察するのは困難である。



第175図 第562号住居跡実測図



第176図 第562号住居跡出土遺物実測図

第562号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第176図 1	土師器	A 22.2	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。平底。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう割り肌、ナデ。内面へうナデ。	長石・スコリア 赤褐色	P222, P.L62 60%
		B 17.8			普通	西壁際床面
		C 10.7				

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第176図2	磁石	14.1	3.5	1.2	104.0	砂岩	Q13, P.L62, 西壁際床面

第563号住居跡 (第177・178図)

位置 調査区の南部, H1018区。

規模と平面形 長軸(3.04)m, 短軸3.26mで方形と推定される。

主軸方向 N-29°-E

壁 壁高は10cmほどで, 緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。耕作による攪乱が床面まで達する。

竈 2基確認したが, いずれも耕作による攪乱を受け, 遺存状態は不良である。竈1は北壁の東部を壁外に15cmほど掘り込み, 構築されている。規模は長さ70cm, 幅65cmで, 火床部は浅く皿状に掘り込まれており, 焼土が確認できた。竈2は東壁の中央部を壁外に90cmほど掘り込み構築され, 規模は長さ95cm, 幅60cmで, 焼土がわずかに確認できた。両者の新旧関係は, いずれも遺存状態が悪く, 確認できなかった。

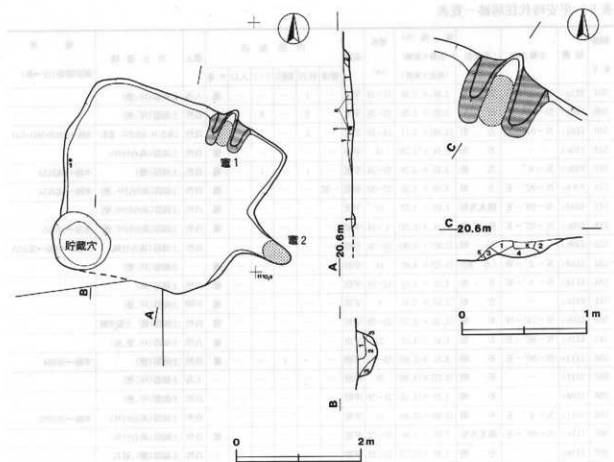
竈1土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量

貯蔵穴 南西コーナーに位置し, 長径100cm, 短径85cmの楕円形, 深さ35cmである。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量



第177図 第563号住居跡実測図

覆土 2層である。堆積状況は、不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

遺物 土師器片約10点、混入した縄文土器細片少量が出土している。第178図1の高台付坏は、西壁際の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（9世紀後半～10世紀前半）と考えられる。



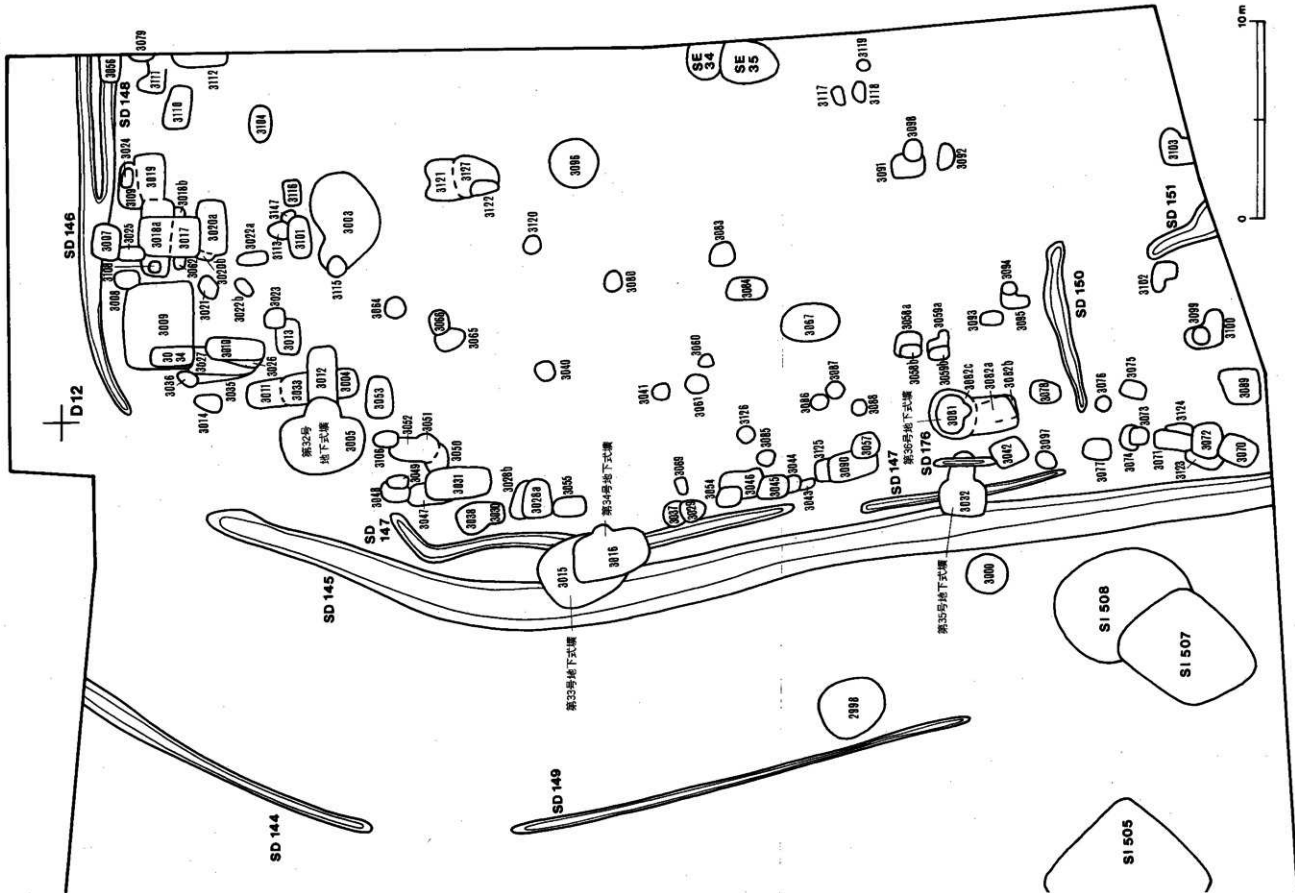
第178図 第563号住居跡出土遺物実測図

第563号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第178図 1	高台付坏	B(3.2)	高台部から底部にかけての破片。	体部内・外面ロクロナデ。底部	長石・石英・雲母	P223.P.L60
	土師器	D 7.6	高台は短く「ハ」の字状に開く。	回転ヘラ削り。	にぶい褐色	50%
		E 1.5			普通	西壁覆土中層
2	高台付坏	B(4.3)	高台部から底部にかけての破片。	体部外面ロクロナデ、内面ロク	長石・石英・雲母	P254
	土師器	D(8.2)	高台は短く「ハ」の字状に開く。	ロナデ後、ヘラ磨き。底部回転	にぶい褐色	15%
		E 1.4		ヘラ削り。	普通	覆土

表5 平安時代住居跡一覧表

図版番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸) (南北×東西)	壁高 (cm)	床面	内部施設						覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
							礎溝	柱穴	若殿穴	ピット	入口	扉			
504	D11g	N-92°-E	隅丸方形	2.86 × 2.85	17-19	平組	—	1	—	—	—	覆	人為	土師器(坏, 甕)	
509	F10b	N-0°	長方形	2.95 × 1.39	23-26	平組	—	2	—	3	—	覆	自然	土師器(坏, 甕)	
510	E10j	N-94°-E	方形	(3.18) × 3.11	14-19	平組	—	2	—	1	—	覆	自然	土師器(坏, 高台付坏・土甕)	本跡→SK328-3340-3344
512	F10e	—	不明	3.74 × (1.23)	14	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(高台付坏)	
515	F10e	N-0°	方形	3.45 × 3.79	23-24	平組	—	1	—	1	—	覆	自然	土師器(甕)	本跡→SK3153
516	F9ha	N-92°-E	方形	3.50 × 3.26	22-32	平組	一部	—	—	2	—	覆	自然	土師器(高台付坏, 甕)	本跡→SK3154
517	G10d	N-93°-E	隅丸方形	1.63 × 1.53	10	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(高台付坏, 甕)	
518	G10c	N-92°-E	長方形	4.14 × (4.24)	4-14	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(高台付坏, 甕)	本跡→SD155
522	G10h	—	不明	(2.80) × (3.00)	20-35	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(高台付坏)	S1523→本跡→SK3155
533	G12d	N-2°-W	[方形]	(3.72) × 4.00	16	平組	—	—	—	—	—	覆	—	土師器(坏, 甕)	
534	G11d	N-3°-W	方形	4.53 × 4.52	13-24	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(甕)	
541	G11b	—	方形	3.10 × 3.10	8	平組	—	—	—	—	—	覆	不明	土師器(坏, 甕)	
542	G10b	N-14°-W	不明	(2.35) × (3.27)	33-39	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(甕, 土製支脚)	
543	G11b	N-86°-E	方形	4.45 × 4.30	25	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(坏, 甕, 甕)	
556	I11j	N-90°-E	不明	3.31 × (2.45)	15-20	平組	—	—	—	1	—	覆	自然	土師器(甕)	本跡→SD184
557	J11f	—	不明	(3.72) × (4.36)	20	平組	—	—	—	—	—	覆	人為	土師器(坏, 甕)	
558	I10d	—	不明	3.22 × (1.53)	21-29	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(坏, 甕)	
559	I11j	N-4°-E	不明	(3.40) × (3.00)	10	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(高台付坏)	本跡→SK3392
561	I11e	N-95°-E	隅丸方形	2.95 × 2.90	10-22	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(高台付坏)	
562	I11h	—	不明	3.49 × (1.57)	25-32	平組	—	—	—	—	—	覆	自然	土師器(甕), 砥石	
568	I10i	N-29°-E	方形	(3.04) × 3.26	10	平組	—	—	1	—	—	覆	不明	土師器(高台付坏)	



第179图 第4 建群分布图



#### 4 中世の遺構と遺物

Ⅰ区において、検出された中・近世の遺構は、多種多様である。ここでは、墓塚・火葬土坑・土坑・地下式墳・井戸・溝・方形竪穴状遺構と分類した。分類の基準は、以下に示した。Ⅰ区では、これらの遺構が大きなまとまり（第4・5・6号遺構群）となって検出された。これらの遺構は何らかの関連があるものと考えられるため、遺構群ごとに記述する。

**墓塚** 土坑の中に人骨が遺存し、土葬により直葬されたと考えられるもの。  
**火葬土坑** 土坑の中に、人骨（骨片、歯）・焼土・炭化物が遺存するもの。T字形火葬施設を含む。長方形で多量の炭化材・焼土を検出した土坑は、人骨等が確認されなくとも火葬土坑とした。火葬施設と火葬後そのまま埋葬されたと思われる遺構との区別がつきにくいものがあることから、両者を含めて火葬土坑という名称を使う。

**土坑** 遺物が出土したものについて解説を加え、その他の土坑については一覧表に記載する。この中には形状や覆土から、墓塚の可能性が考えられる遺構が多数存在する。

**地下式墳** 天井部の残存部（崩落）を確認でき、主室と竪坑が明確に区別できるもの。

**方形竪穴状遺構** 平面形は、一辺が1～2m程度の方形、または長方形を呈し、底面にピットや踏み締まり等があるもの。出入り口施設のようなスロープが突出する形も含める。

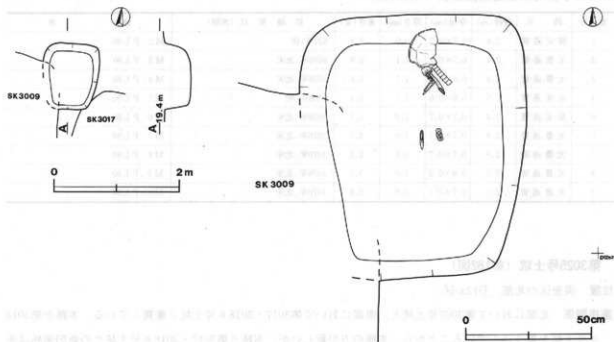
##### (1) 第4号遺構群

##### ア 墓塚

##### 第3008号土坑（第180・181図）

位置 調査区の北部、D12a区。

重複関係 西部において第3009号土坑、南東コーナー部において第3017号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。



第180図 第3008号土坑実測図

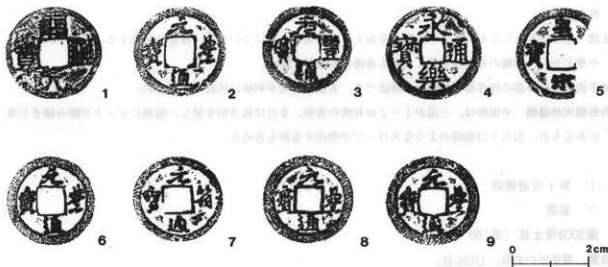
規模と形状 長軸1.05m、短軸0.8mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-0°

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

遺物 北壁際底面から、人骨（頭蓋骨、脊椎）、古銭9枚が出土している。人骨は頭部を北に、顔を西に向けている。遺存状態は悪く、骨片の状態では取り上げることができなかった。第181図1-9の古銭は、互いに貼り付いた状態で出土している。また、人骨と古銭の間から漆片と思われる遺物を検出した。本跡は、人骨の出土から墓塚と考えられる。時期は、遺構の形状と出土遺物から中世と考えられる。



第181図 第3008号土坑出土遺物実測図

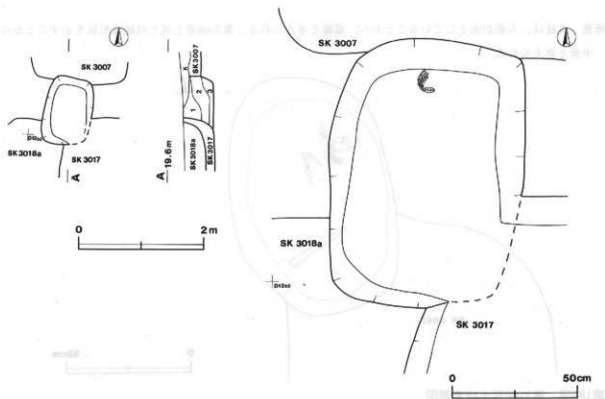
第3008号土坑出土遺物観察表（第181図）

番号	銭名	銭径(cm)	穿径(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	初鋳年代(西暦)	備考
1	開元通寶	2.4	0.7×0.7	0.9	2.3	621年.唐	M2, P.L90
2	元豊通寶	2.4	0.7×0.7	1.1	2.9	1076年.北宋	M3, P.L90
3	元豊通寶	2.4	0.6×0.6	1.1	2.8	1076年.北宋	M4, P.L90
4	永樂通寶	2.5	0.6×0.6	1.5	3.4	1408年.明	M5, P.L90
5	皇宋通寶	2.4	0.7×0.7	1.0	1.7	1038年.北宋	M6, P.L90
6	元豊通寶	2.4	0.7×0.7	1.0	2.5	1076年.北宋	M7, P.L90
7	元豊通寶	2.3	0.7×0.7	0.9	2.2	1076年.北宋	M8, P.L90
8	元豊通寶	2.4	0.6×0.6	1.0	3.3	1076年.北宋	M9, P.L90
9	元豊通寶	2.5	0.7×0.7	0.9	2.8	1076年.北宋	M10, P.L90

### 第3025号土坑（第182図）

位置 調査区の北部、D12a区。

重複関係 北部において第3007号土坑と、南部において第3017・3018a号土坑と重複している。本跡が第3018a号土坑を掘り込んでいることから、本跡の方が新しいが、本跡と第3017・3018a号土坑との新旧関係は不明である。



第182図 第3025号土坑実測図

規模と形状 長軸1.06m, 短軸0.80mの隅丸長方形である。

長軸方向  $N-0^\circ$

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる。粘土粒子・ブロックを含み、埋め戻された層である。

土層解説

- 1 暗褐色 灰白色粘土ブロック・粒子中量
- 2 黒褐色 灰白色粘土ブロック・粒子多量
- 3 黒褐色 灰白色粘土ブロック・粒子少量

遺物 北壁際の底面から、骨片と歯が出土している。

所見 本跡は、出土遺物から墓塚と考えられる。第3008号土坑と同様の形状を示すことから、時期は中世と考えられる。

第3106号土坑 (第183図)

位置 調査区の北部, D11da区。

重複関係 南西部において第3052号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸1.00m, 短軸0.65mほどの隅丸長方形である。

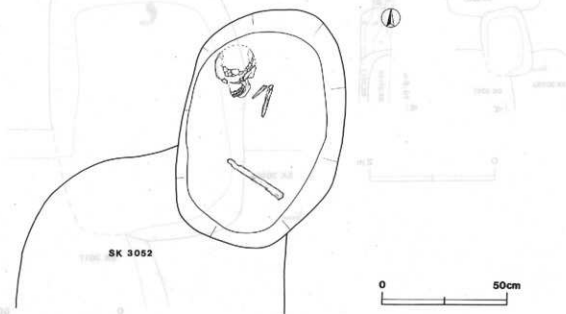
長軸方向  $N-0^\circ$

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 皿状である。

遺物 北壁際の底面から、人骨(頭蓋骨, 大腿骨?)が出土している。人骨は頭部を北に、顔を西に向けている。遺存状態は不良で、骨片の状態では取り上げることはできなかった。

所見 本跡は、人骨が出土していることから、墓塚と考えられる。第3008号土坑と同様な形状を示すことから、中世と考えられる。



第183図 第3106号土坑実測図

### イ 火葬土坑

#### 第3084号土坑 (第184・185図)

位置 調査区の北部、D12i区。

規模と形状 長軸2.00m、短軸1.00mの長方形である。

主軸方向 N-1°-E

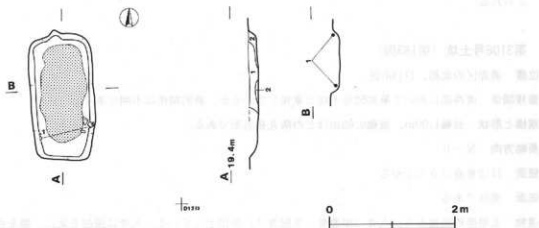
壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。被熱により、赤変している。

覆土 2層からなる。1・2層が明確に分層されることから、人為堆積と思われる。

#### 土層解説

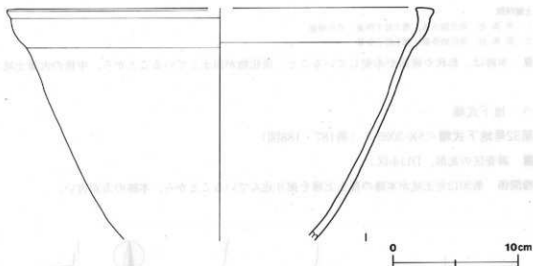
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒色 炭化物多量、骨片・焼土粒子微量



第184図 第3084号土坑実測図

遺物 第185図1の内耳鍋は、南東壁際・南西壁際の覆土中層から出土している。底面から焼土・炭化物・骨片が少量出土している。

所見 本跡は、底面が赤変していること、骨片・焼土・炭化物が出土していることから、火葬土坑とした。時期は、出土遺物から15世紀後半と考えられる。



第185図 第3084号土坑出土遺物実測図

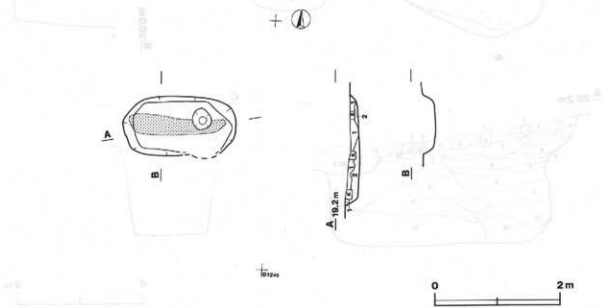
第3084号土坑出土遺物観察表 (第185図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	(34.2)	(18.7)	—	10%	灰石・雲母 にぶい藍色	体部から口縁部に至る破片。口縁部 内外面ナデ。	P 251, P L 87 体部外面保存着

第3104号土坑 (第186図) <付草参照>

位置 調査区の北部, D12c区。

規模と形状 長軸1.81m, 短軸0.96mの長方形である。



第186図 第3104号土坑実測図

主軸方向 N-90°

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。被熱により、赤変している。

覆土 2層からなる。1・2層が明確に分層されることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、焼土粒子微量、骨片微量
- 2 黒褐色 炭化物多量、焼土粒子少量

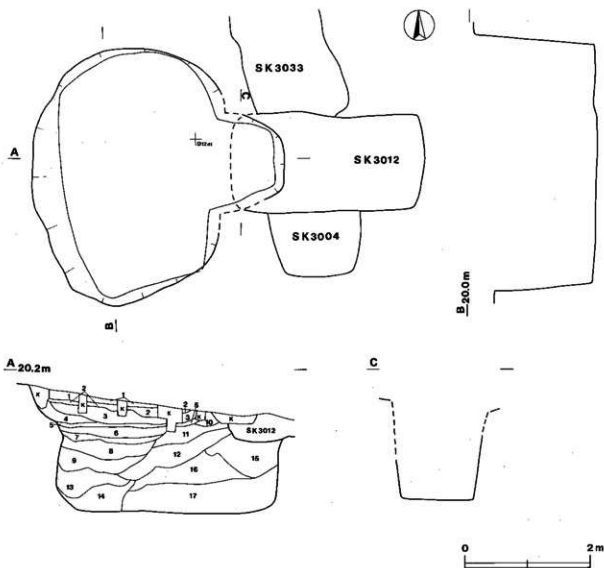
所見 本跡は、形状や底面が赤変していること、炭化物が出土していることから、中世の火葬土坑とした。

ウ 地下式塚

第32号地下式塚<SK-3005> (第187・188図)

位置 調査区の北部、D11d区。

重複関係 第3012号土坑が本跡の覆土上層を掘り込んでいることから、本跡の方が古い。



第187図 第32号地下式塚実測図

主軸方向 N-90°-W

**竪坑** 竪坑と主室は上部が崩落しているために、明確に区別することはできない。上面は、長軸(1.55)m、短軸(1.20)mで長方形と思われる。深さ1.50mである。底面は、長軸1.20m、短軸1.00mの長方形で、平坦である。

**主室** 底面は、長軸3.85m、短軸2.30mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは、1.80mである。竪坑に向かって、緩やかなスロープ状になっている。

**壁** 竪坑、主室ともにほぼ垂直に立ち上がる。

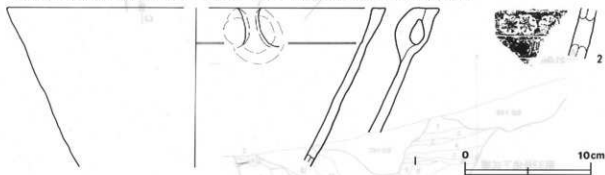
**覆土** 17層からなる。竪坑から主室へ流れ込むような堆積状況を示している。下層はロームブロックが主体となっていることから、天井部が崩落したものと考えられる。

土層解説

- |       |                        |        |                         |
|-------|------------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量                | 10 褐色  | ローム粒子・小ブロック中量           |
| 2 褐色  | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量     | 11 暗褐色 | ローム粒子少量                 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物少量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量      |
| 4 褐色  | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量     | 13 褐色  | ローム小ブロック・灰白色粘土ブロック多量    |
| 5 褐色  | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量     | 14 暗褐色 | ローム小ブロック・灰白色粘土ブロック少量    |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量     | 15 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子中量           |
| 7 褐色  | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量     | 16 褐色  | ローム小ブロック・粒子多量           |
| 8 褐色  | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量     | 17 褐色  | ローム小ブロック・粒子・灰白色粘土ブロック多量 |
| 9 褐色  | ローム粒子・小ブロック多量          |        |                         |

**遺物** 第188図1の内耳鍋片は、覆土上層から出土している。2は火舎の破片と思われ、覆土中から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から、15世紀以前と考えられる。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。



第188図 第32号地下式墳出土遺物実測図

第32号地下式墳<SK-3005>出土遺物観察表(第188図)

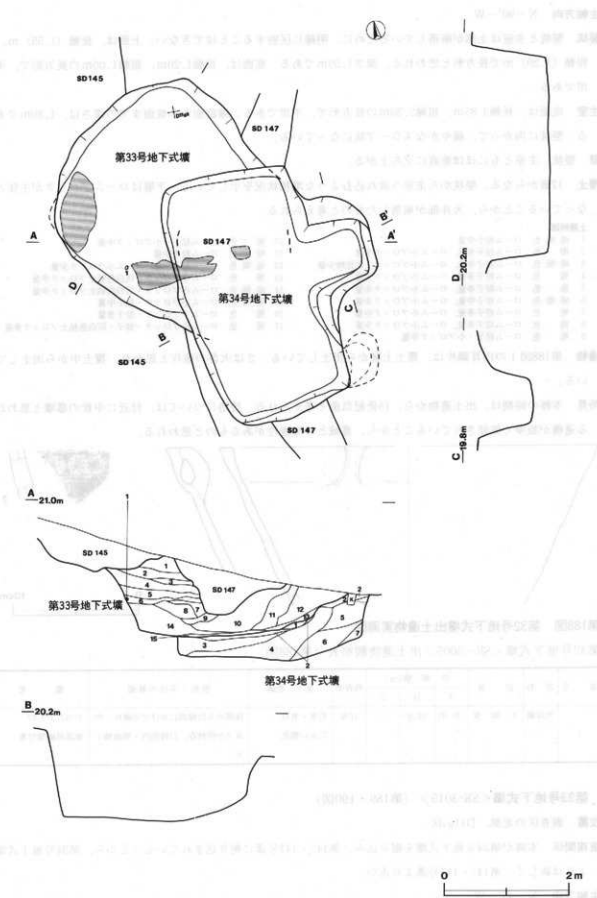
番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	[30.4]	(12.8)	—	10%	石英・雲母にふい褐色	体部から口縁部にかけての破片。内耳2か所残存。口縁部内・外面積ナデ。	P241, P L 87 体部外面僅存

第33号地下式墳<SK-3015> (第189・190図)

位置 調査区の北部, D11g9区。

重複関係 本跡が第34号地下式墳を掘り込み、第145・147号溝に掘り込まれていることから、第34号地下式墳よりは新しく、第145・147号溝より古い。

主軸方向 N-45°-W



第189图 第33·34号地下式墳实测图



**竪坑** 崩落のため、明確な規模や平面形はとらえられないが、第34号地下式竪坑の底面に竪坑の跡と見られる踏み締められた部分が認められる。

**主室** 第34号地下式竪と重複する部分の底面は貼床で、最大厚10cmほど粘土混じりの土で貼っている。底面は長方形と思われ長軸(4.18)m、短軸3.45mで平坦である。確認面から底面までの深さは、1.40mである。竪坑に向かって、緩やかなスロープ状になっている。底面全面から炭化したワラ状のものともミギラ状のものが検出されている。特に、奥壁際によく分布している。ワラ状のものは不規則に堆積しており、まとまった状況では認められない。

**壁** 竪坑、主室ともにはほぼ垂直に立ち上がる。

**覆土** 15層からなる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 7 黒色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子中量
- 9 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 11 黒褐色 ローム粒子少量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 13 暗褐色 ローム粒子中量
- 14 褐色 ローム大ブロック・粘土多量
- 15 黒褐色 炭化物多量、ローム粒子中量



第190図 第33号地下式竪  
出土遺物実測図

**遺物** 第190図1の土師質土器皿は覆土6層から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から、15世紀以前と考えられる。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

第33号地下式竪<SK-3015>出土遺物観察表(第190図)

番 号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備 考
			A	B	C				
1	皿	土師質	7.2	2.4	3.9	100%	長石・スコリア 明赤褐色	体部内・外面口コナデ。底部面転 糸切り。口縁部内・外面タール付着。	P245, P.L.89 灯明皿

第34号地下式竪<SK-3016>(第189図)

**位置** 調査区の北部, D11g区。

**重複関係** 本跡は、第33号地下式竪、第145・147号溝に掘り込まれており、いずれよりも古い。

**主軸方向** N-90°-W

**竪坑** 上面は一辺が1.10mほどの方形である。底面は長軸0.95m、短軸0.67mの長方形である。確認面からの深さは、86cmである。

**主室** 底面は長軸3.71m、短軸1.97mの長方形である。確認面からの深さは、127cmである。竪坑に向かって、緩やかなスロープ状になっている。

**壁** 竪坑、主室ともにはほぼ垂直に立ち上がる。

**覆土** 7層からなる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期は、遺構の種類から中世と考えられるが、詳細は不明である。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

第35号地下式墳<SK-3032> (第191図)

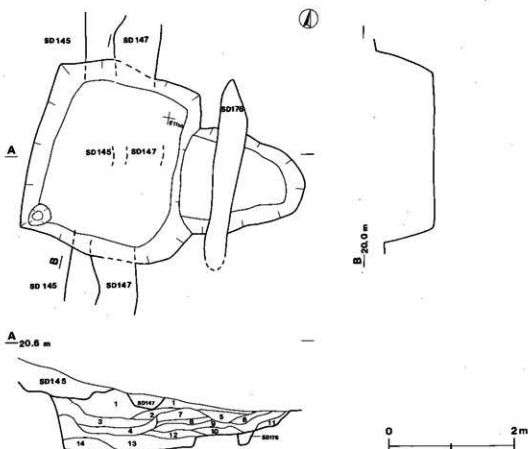
位置 調査区の北部, E11b<sub>9</sub>区。

重複関係 本跡が、第176号溝を掘り込み、第145・147号溝に掘り込まれていることから、第145・147号溝より古く、第176号溝より新しい。

主軸方向 N-90°-W

竪坑 上面は長径(2.00)m、短径1.60m、底面は長径(1.60)m、短径1.20mでいずれも半円形のような形である。底面は主室に向かって緩やかなスロープ状になっており、確認面からの深さは、20~54cmである。

主室 底面は長軸2.47m、短軸2.00mの長方形で、平坦である。確認面からの深さは、90cmである。竪坑との間にはおよそ20cmほどの段差がある。



第191図 第35号地下式墳実測図

壁 壁坑は緩やかに立ち上がる。主室はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 14層からなる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	8	暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
2	黒色	ローム粒子少量、炭化物微量	9	褐色	ローム小ブロック・粒子少量
3	黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	10	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
4	黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物微量	11	黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
5	黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量	12	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
6	黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物少量	13	褐色	ローム粒子・ローム小ブロック多量
7	暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量	14	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量が出土している。

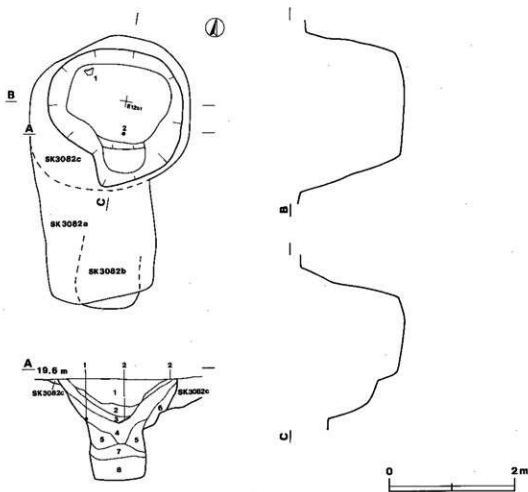
所見 時期は、遺構の種類から中世と考えられるが、詳細については不明である。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

### 第36号地下式墳<SK-3081> (第192~194図)

位置 調査区の北部, E12b1区。

重複関係 本跡が第3082c号土坑を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

主軸方向 N-10°-W



第192図 第36号地下式墳実測図

**竪坑** 上面は長径1.10m、短径(0.52)m、底面は長径0.68m、短径0.37mでいずれも半円形のような形である。底面は主室に向かって緩やかにスロープ状になっている。確認面からの深さは120cmである。

**主室** 底面は長軸1.63m、短軸1.22mの隅丸長方形で、わずかに皿状になっている。確認面からの深さは167cmである。竪坑との間にはおよそ30cmほどの段差がある。

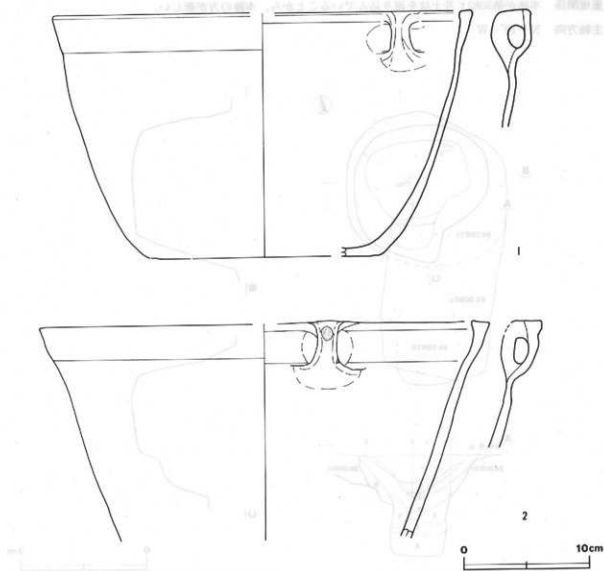
**壁** 竪坑は緩やかに立ち上がる。主室はほぼ垂直に立ち上がる。

**覆土** 8層からなる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・灰化物少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・灰白色粘土ブロック中量
- 8 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・灰白色粘土ブロック少量

**遺物** 第193・194図1・2の内耳銅片は、中央部の覆土中層から出土している。3の古銭は、覆土中からの出土である。



第193図 第36号地下式墳出土遺物実測図(1)

所見 本跡の時期は、出土遺物から15世紀以前と考えられる。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。



3



第194図 第36号地下式墳  
出土遺物実測図(2)

第36号地下式墳<SK-3081>出土遺物観察表 (第193図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	粘土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	[33.5]	19.5	[18.5]	20%	長石・雲母 明赤褐色	底部から口縁部にかけての破片。内耳1か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P250, P.L.88 体部外面塚付着
2	内耳鍋	土師質	[36.2]	(17.3)	—	15%	長石・雲母 明赤褐色	底部から口縁部にかけての破片。内耳1か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P249, P.L.88 体部外面塚付着

第36号地下式墳<SK-3081>出土遺物観察表 (第194図)

番号	銭名	銭径(cm)	穿径(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	初鑄年代(西暦)	備考
3	大観通寶	2.4	0.6×0.6	1.1	2.2	1107年・北宋	M12, P.L.90

## エ 井戸跡

### 第34号井戸跡 (第195・196図)

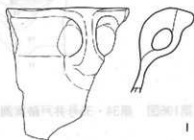
位置 調査区の北部, D12is区。

重複関係 南側において第35号井戸跡と接している。東部は調査区域外である。

規模と形状 上面は長軸2.00m, 短軸(1.80)mで, 方形に近い形をしている。50cmほど掘り込んだ付近からは一辺が80~90cmほどの方形になる。断面形は上半は漏斗状を呈し, 50cmほどの位置からは角柱状になる。約1.80mまで掘り下げたが, 湧き水のため底面まで調査することはできなかった。

遺物 土師質土器内耳鍋片少量が出土している。第195図1の内耳の部分は覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土した遺物や遺構の形状から中世とみられるが, 遺物が細片のため詳細な時期については不明である。



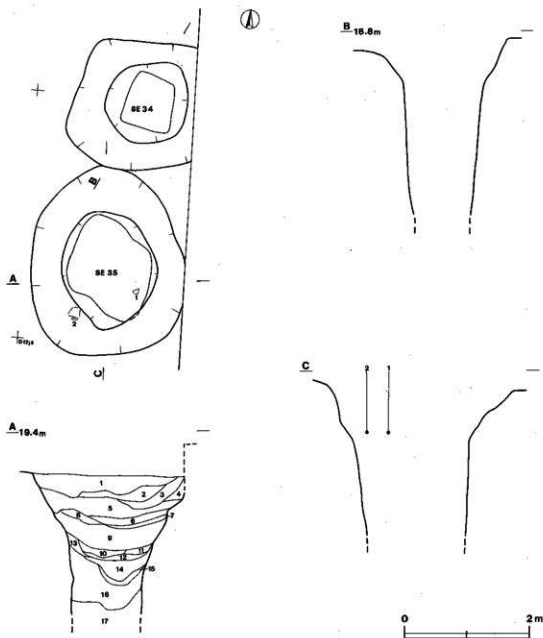
1



第195図 第34号井戸跡出土  
遺物実測図

第34号井戸跡出土遺物観察表 (第195図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	粘土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	—	(10.6)	—	5%	長石・雲母 にぶい褐色	体部から口縁部にかけての破片。内耳1か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P279, P.L.88 体部外面塚付着



第196図 第34・35号井戸跡実測図

第35号井戸跡 (第196・197図)

位置 調査区の北部, D12is区。北部において第34号井戸跡と接している。

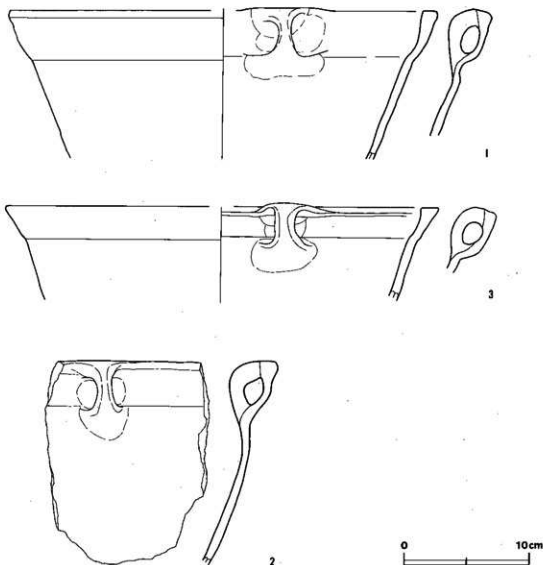
規模と形状 上面は長径3.10m, 短径2.50mの楕円形, 中位から下位は長径1.80m, 短径1.40mの楕円形を呈している。断面形は上面から1.20mほど掘り込んだ位置までは漏斗状を呈し, 以下は楕円の筒状を呈する。2.00mまで掘り下げたが, 湧き水のため底面まで調査することはできなかった。

覆土 17層からなる。ブロック状の堆積を示しており, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- |       |                           |       |                                |
|-------|---------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 4 暗褐色 | 軟土ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 2 褐色  | ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量      |       |                                |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量           |

- 6 黄褐色 砂粒  
 7 暗褐色 ローム粒子少量  
 8 褐色 粘土ブロック・粒子中量, ローム粒子中量  
 9 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 炭化粒子微量  
 10 暗褐色 ローム粒子・粘土大ブロック少量  
 11 暗褐色 ローム粒子少量  
 12 暗褐色 粘土粒子少量, ローム粒子微量  
 13 明褐色 粘土粒子多量, 粘土大ブロック中量  
 14 褐色 粘土ブロック・粒子中量  
 15 明褐色 粘土ブロック少量  
 16 明褐色 粘土ブロック・粒子多量  
 17 褐色 粘土ブロック微量



第197図 第35号井戸跡出土遺物実測図

第35号井戸跡出土遺物観察表 (第197図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	(34.2)	(12.1)	—	10%	灰石・雲母 明赤褐色	底部から口縁部にかけての破片。内 耳1か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P280, P L 88 体部外面塚付着
2	内耳鍋	土師質	—	(16.2)	—	10%	灰石・雲母 明赤褐色	底部から口縁部にかけての破片。内 耳1か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P281, P L 88 体部外面塚付着
3	内耳鍋	土師質	(34.5)	(7.5)	—	10%	灰石・雲母 褐色	底部から口縁部にかけての破片。内 耳1か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P282, P L 88 体部外面塚付着

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量と、土師質土器内耳鍋片が出土している。第197図1～3は内耳鍋片で覆土上層から出土している。

所見 時期を推定する遺物が出土していないため、本跡の詳細な時期については不明である。

## オ 溝

### 第145号溝 (第198図・付図)

位置 調査区の北部、D11bからElles区。

重複関係 第33～35号地下式塋を掘り込んでおり、いずれよりも新しい。

規模と形状 D11b区から南西方向へ約20mほど延び、第33号地下式塋と重複する位置で南に方向を変えてElles区で調査区域外に至る。第4遺構群を西側から取り囲むように緩やかに湾曲している。検出した部分の規模は、全長(54)m、上幅1.2～2.2m、下幅0.6～1.5m、深さ50～60cmである。断面形は緩やかな「V」字状を呈する。

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、ロームブロック微量

所見 本跡の時期は、地下式塋を掘り込んでいることから中世以降と考えられる。第4遺構群を取り囲むように走ることから何らかの関連が考えられるが、詳細は不明である。

### 第146号溝 (第198図・付図)

位置 調査区の北部、D12a1からD12a2区。

重複関係 第3007号土坑を掘り込んでおり、第3007号土坑より新しい。

規模と形状 D12a1区から東方向へ湾曲しながら延び、D12a2区で調査区域外に至る。第4遺構群を北側から取り囲むように緩やかに湾曲している。検出した部分の規模は、全長(17)m、上幅0.4～1.2m、下幅0.3～0.8m、深さ15cmである。断面形はゆるやかな「V」字状を呈する。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量

所見 本跡の時期は、第3007号土坑を掘り込んでいることから中世以降と思われる。性格については、第4遺構群を取り囲むように走ることから何らかの関連が考えられるが、詳細は不明である。

### 第147号溝 (第198・199図・付図)

位置 調査区の北部、D11dからE11c区。

重複関係 第34・35号地下式塋を掘り込んでおり、いずれよりも新しい。

規模と形状 D11d区から南方向へ緩やかに蛇行しながら延び、E11c区に至る。第145号溝と並行して走り、第4遺構群を西側から取り囲むように緩やかに湾曲している。検出した部分の規模は、全長(37)m、上幅



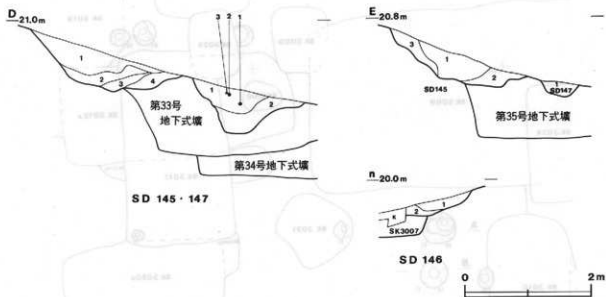
0.5~1.8m, 下幅0.2~0.4m, 深さ20~70cmである。断面形は緩やかな「V」字状を呈する。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と思われる。

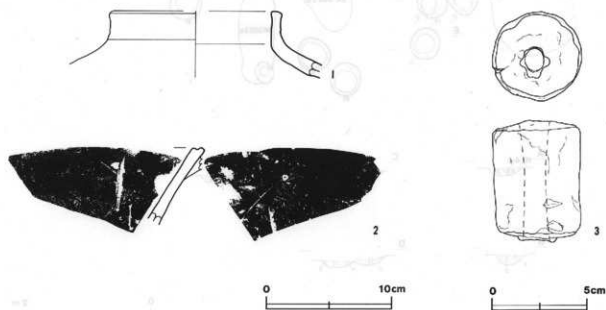
- 土層解説
- 1 黒褐色 ローム粒子微量
  - 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

遺物 第199図1の常滑の瓦片, 2の片口鉢片, 3の管状土鍾はD11g<sub>9</sub>区の覆土中から出土している。

所見 本跡は, 第145号溝の東部を並行して走ることから, 第145号溝と同様の時期・性格が考えられるが, 詳細は不明である。



第198図 第145・146・147号溝土層断面図

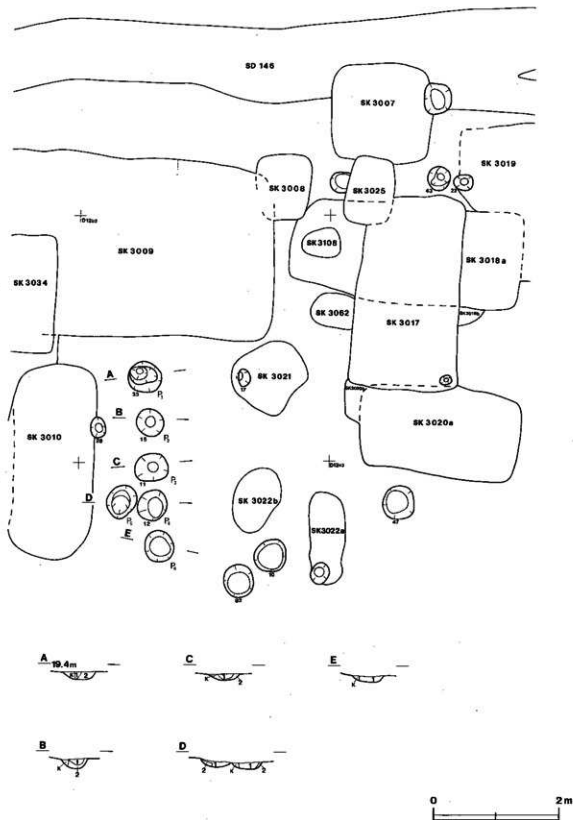


第199図 第147号溝出土遺物実測図

カ. ビット群

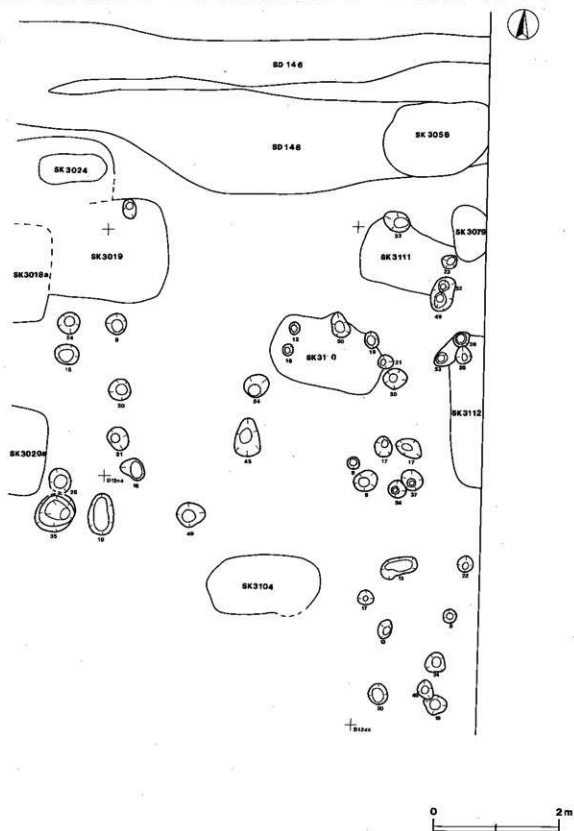
第1号ビット群 (第200・201図)

ここで述べるビット群は、第4遺構群の北部に位置する。ビット群は、中世の土坑と複雑に重複し、覆土も



第200図 第1号ビット群実測図(1)

周辺の土坑と同様であることから、中世の遺構として扱う。ピットは多方向に配列されるわけではなく、一方  
向、または二方向に配列される。ピット間の距離も厳密な規則性は認められない。性格等は不明である。



第201図 第1号ピット群実測図(2)

第147号溝出土遺物観察表 (第199図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	葉	土師質	[13.8]	(5.3)	—	5%	灰石・石英・雲母 赤褐色	体部から口縁部にかけての破片。口 縁部内・外面ナデ。	PS11, P L 88 D11g, 覆土
2	片口鉢	土師質	—	(6.5)	—	5%	灰石 にぶい黄褐色	口縁部片。体部内・外面へうろり痕 有り。口縁部上位横ナデ。	PS10 D11g, 覆土

番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	径	孔径				
3	管状土鉢	6.5	4.7	1.5	173.0	100	円筒状。	DP11, P L 88, D11g, 覆土

キ 土坑

第3003号土坑 (第202図)

位置 調査区の北部, D12d区。

重複関係 西部において第3115号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

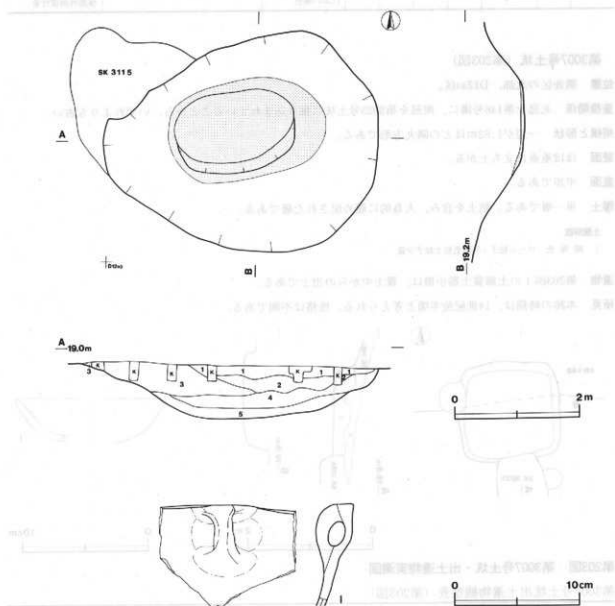
規模と形状 長径4.40m, 短径3.53mの楕円形である。

長径方向 N-0°

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 5層からなる。ブロック状の堆積をしていることから, 人為堆積と思われる。



第202図 第3003号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・灰白色粘土粒了中量
- 5 灰黄褐色 褐灰色粘土粒子多量

遺物 覆土中から、土師質土器片少量が出土している。第202図1は内耳鍋片で、覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から中世と考えられる。性格は不明である。

第3003号土坑出土遺物観察表（第202図）

番 号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備 考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	—	(8.2)	—	5%	石英・雲母・スコリア にぶい褐色	内耳残存。体部内・外面ナデ。	P240, P L87 体部外面露付着

第3007号土坑（第203図）

位置 調査区の北部、D12a3区。

重複関係 北部を第146号溝に、南部を第3025号土坑に掘り込まれていることから、いずれよりも古い。

規模と形状 一辺が1.62mほどの隅丸方形である。

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

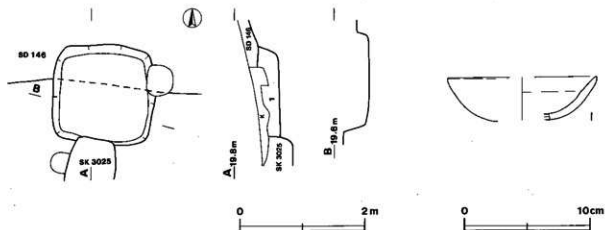
覆土 単一層である。粘土を含み、人為的に埋め戻された層である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・灰白色粘土粒子少量

遺物 第203図1の土師質土器小皿は、覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、14世紀後半頃と考えられる。性格は不明である。



第203図 第3007号土坑・出土遺物実測図

第3007号土坑出土遺物観察表（第203図）

番 号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備 考
			A	B	C				
1	皿	土師質	[11.8]	(3.4)	—	50%	雲母・スコリア 褐色	底部から口縁部に至る破片。丸底。 体部内・外面ロクロナデ。	P242

第3012号土坑 (第204図)

位置 調査区の北部, D12d区。

重複関係 西部において第32号地下式墳, 北部において第3033号土坑, 南部において第3004号土坑と重複する。

いずれをも掘り込んでいることから本跡の方が新しい。

規模と形状 長軸 (2.66 m), 短軸1.53mの長方形である。

長軸方向 N-90°

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

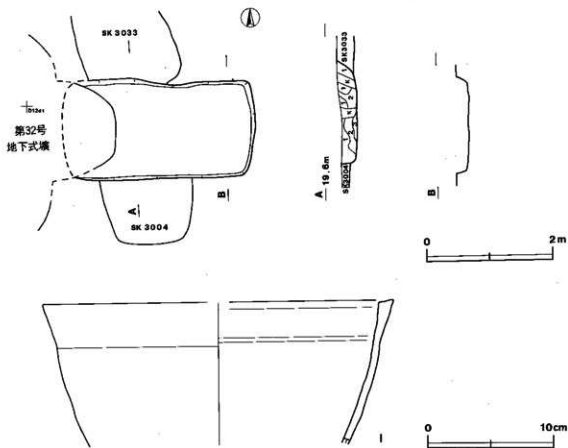
覆土 3層からなる。堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 層 色 ローム小ブロック・粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 層 色 ローム中ブロック・粒子・粘土中ブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 層 色 粘土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒微量

遺物 第204図1の内耳竈は, 覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は, 15世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第204図 第3012号土坑・出土遺物実測図

第3012号土坑出土遺物観察表 (第204図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	(28.2)	(11.5)	—	5%	石英・炭母 褐色	体部から口縁部に至る破片。口縁部 内・外面横ナデ。	P 243, P L 87 体部外面塚付着

第3014号土坑 (第205・206図)

位置 調査区の北部, D12b1区。

規模と形状 長径1.97m, 短径1.23mほどの楕円形である。

長径方向 N-5°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

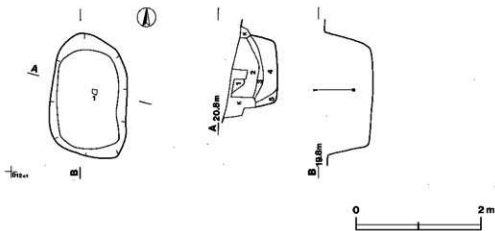
覆土 5層からなる。ロームブロック・炭化物を多く含むことから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量
- 4 黒褐色 灰白色粘土ブロック・粒子少量
- 5 黒褐色 灰白色粘土粒子少量

遺物 第206図1の大甕(常滑)は、覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、14世紀前半と考えられる。性格は不明である。



第205図 第3014号土坑実測図



第206図 第3014号土坑出土遺物実測図



第3014号土坑出土遺物観察表 (第206図)

番号	器形	器質	計測値 (cm)				残存率	胎土色	絵付・軸乘	文様・特徴	産地・年代	備考
			A	B	C	D						
1	大 壺	陶 器	(48.3)	(8.1)	—	—	5%	こげ茶色 に白緑色	全面鉄粒	口縁部内面ナデ	常滑 14C前半	P244, P L87

第3058 a号土坑 (第207図)

位置 調査区の北部, E12a1区。

重複関係 第3058 b号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸1.43m, 短軸1.25mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-83°-E

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

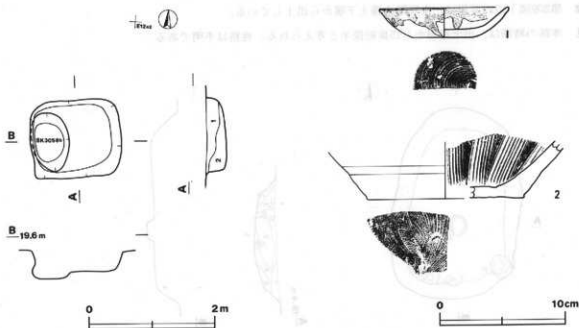
覆土 2層からなる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量

遺物 第207図1の陶器小皿, 2の陶器播鉢は, 覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は, 中世と考えられるが, 詳細な時期については特定できない。性格は不明である。



第207図 第3058 a号土坑・出土遺物実測図

第3058 a 号土坑出土遺物観察表 (第207図)

番号	器形	器質	計測値 (cm)				残存率	胎土色	拾付・軸差	文様・特徴	産地・年代	備考
			A	B	C	D						
1	小皿	陶器	[10.4]	2.4	[5.2]	—	55%	にひい黄褐色 黒色	縁部鉄軸	体部内・外面口 タロナデ。	瀬戸・美濃系	P246, P L87
2	椀鉢	陶器	—	(4.5)	[11.6]	—	5%	にひい黄褐色 暗赤褐色	鉄軸	7条1單位の縞 り目。	瀬戸・美濃系	P247, P L87

第3067号土坑 (第208・209図)

位置 調査区の北部, D12j区。

規模と形状 長径3.07m, 短径2.05mの楕円形である。

長径方向 N-0°

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。それぞれ底面中央部から南側にあり, P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は壁際に位置する。それぞれ径25cm, 深さ13cmほどである。性格は不明である。

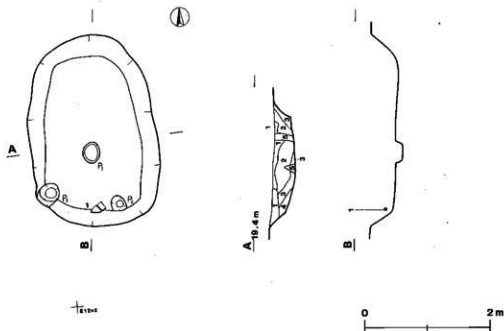
覆土 5層からなる。

土層解説

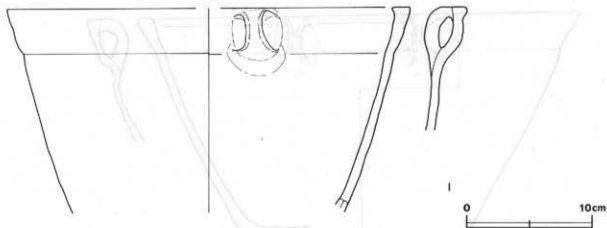
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 4 暗褐色 粘土粒子中量, ローム小ブロック・粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子極少量

遺物 第209図1の内耳飾は, 南壁際の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から15世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第208図 第3067号土坑実測図



第209図 第3067号土坑出土遺物実測図

第3067号土坑出土遺物観察表 (第209図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土加質	(32.4)	(16.5)	—	10%	灰石・石英・雲母 棕色	体部から口縁部に至る破片。口縁部 内外面ナデ。	P 248, P L 87 体部外面渾付着

第3089 a号土坑 (第210～212図)

位置 調査区の北部, E12e1区。

重複関係 北部において第3089 b号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 一辺が1.30mほどの隅丸方形である。

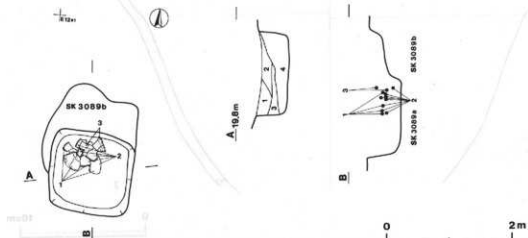
壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

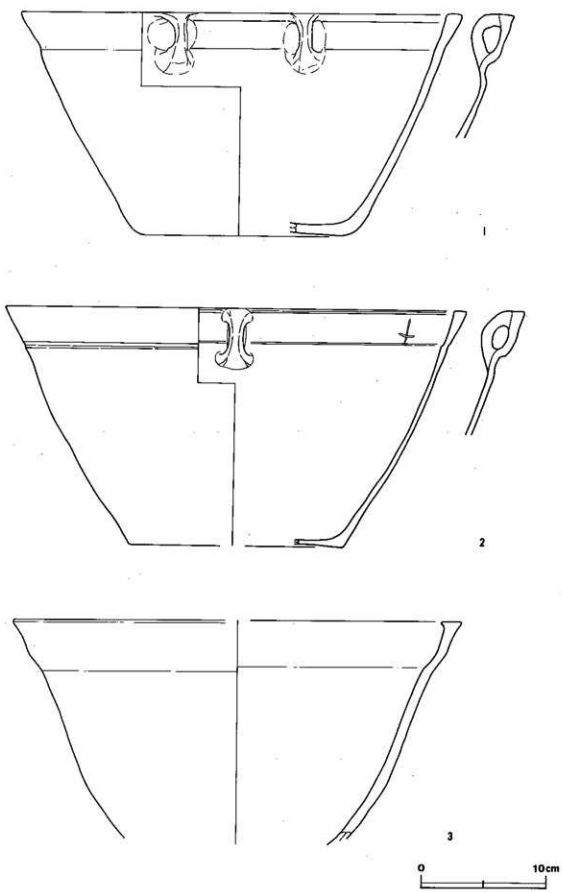
覆土 4層からなる。ロームブロックを多く含むことから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量



第210図 第3089 a号土坑実測図

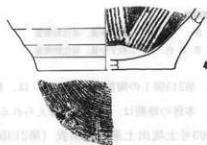


第211图 第3089 a号土坑出土遗物实测图(1)

遺物 土師質土器・陶器片が少量出土している。第211・212図

1～3の内耳鍋は、北部の覆土中層から割れた状態で出土している。4の播鉢は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、15世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第212図 第3089a号土坑出土遺物実測図(2)

第3089a号土坑出土遺物観察表(第211図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	内耳鍋	土師質	34.5	18.0	[16.3]	85%	長石・雲母にふい橙色	体部一部欠損。内耳3か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P252, P.L87 体部外面煤付着
2	内耳鍋	土師質	37.0	19.1	[17.0]	70%	長石・雲母 明赤褐色	体部一部欠損。内耳1か所残存。口縁部内・外面ナデ。	P253, P.L89 体部外面煤付着
3	内耳鍋	土師質	[36.0]	(18.0)	—	30%	長石・雲母・スコリア 明赤褐色	体部から口縁部にかけての破片。口縁部内・外面ナデ。体部外面指頭押圧。	P254, P.L89 体部外面煤付着

第3089a号土坑出土遺物観察表(第212図)

番号	器形	器質	計測値(cm)				残存率	胎土・色調	絵付・軸葉	文様・特徴	産地・年代	備考
			A	B	C	D						
4	播鉢	陶器	—	(5.0)	[11.0]	—	5%	にじみ藍色 暗赤褐色	鉄 釉	7条1単位の探り目。	瀬戸・美濃系	P255, P.L89

第3093号土坑(第213図)

位置 調査区の北部, E12b区。

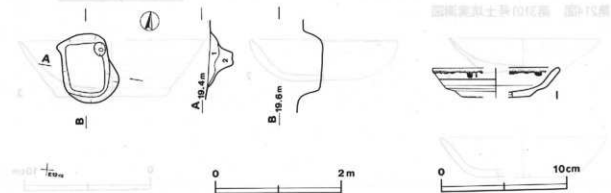
規模と形状 長軸1.13m, 短軸0.78mほどの不定形である。

長軸方向 N-12°-W

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。



第213図 第3093号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量,炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量,炭化物微量

遺物 第213図1の陶器小皿(瀬戸)は、覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、16世紀と考えられる。性格は不明である。

第3093号土坑出土遺物観察表(第213図)

番号	器形	器質	計測値(cm)				残存率	胎土色	胎土質	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
			A	B	C	D							
1	皿	陶器	[10.2]	2.4	[5.6]	—	25%	灰白色	灰オリブ	口縁部内・外面灰釉	貫入が目立つ。	瀬戸・美濃系	P.256, P.189

第3101号土坑(第214・215図)

位置 調査区の北部, D12es区。

重複関係 北東部において第3147号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

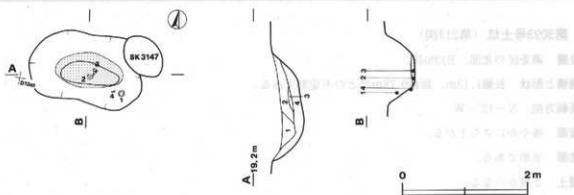
規模と形状 長径1.83m, 短径1.17mの楕円形である。

長径方向 N-79°-W

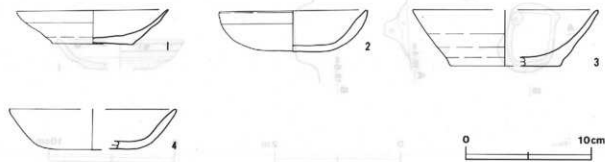
壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなる。ブロック状の堆積をしており、人為堆積と思われる。



第214図 第3101号土坑実測図



第215図 第3101号土坑出土遺物実測図

土層解説

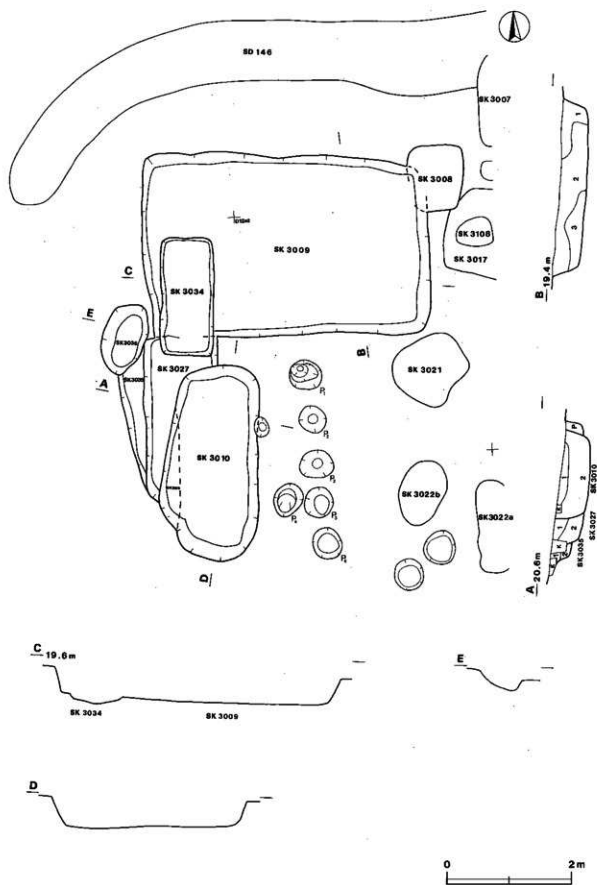
- 1 黒褐色 灰白色粘土粒子中量, 炭化物少量
- 2 暗褐色 灰白色粘土粒子多量, 炭化物微量
- 3 暗褐色 灰白色粘土粒子中量, 炭化物少量
- 4 黄褐色 灰白色粘土ブロック・粒子多量

遺物 土師質土器が少量出土している。第215図1～4は皿である。1は、南東壁際の覆土中層から出土している。2・3は底面から、4は覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から12～13世紀と考えられる。性格は不明である。

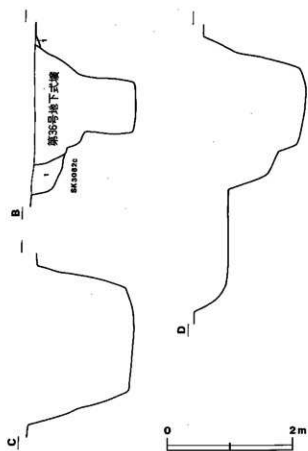
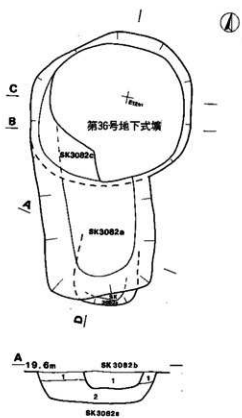
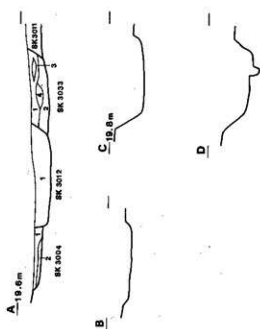
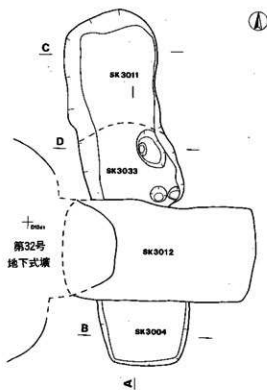
第3101号土坑出土遺物観察表 (第215図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	皿	土師質	12.1	2.8	6.5	95%	灰石・雲母・スコリア 褐色	口縁部一部欠損。体部内・外面ロクロナデ。平底、回転未切り。	P257, P L 89
2	皿	土師質	18.6	3.3	5.0	70%	スコリア にぶい褐色	口縁部一部欠損。体部内・外面ナデ。底部外面ナデ調整。	P258, P L 89
3	皿	土師質	[14.9]	4.5	[8.9]	25%	スコリア 褐色	底部から口縁部にかけての破片。体部外断ロクロナデ。	P259
4	皿	土師質	[13.3]	3.1	[6.4]	20%	灰石・雲母・スコリア 褐色	底部から口縁部にかけての破片。体部外面ナデ。	P260

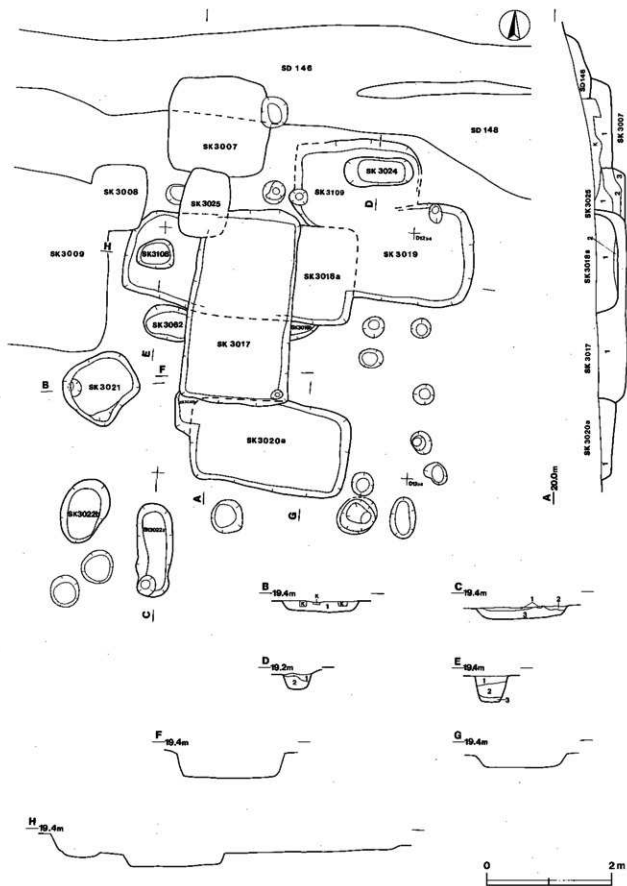


第216図 土坑実測図(1)

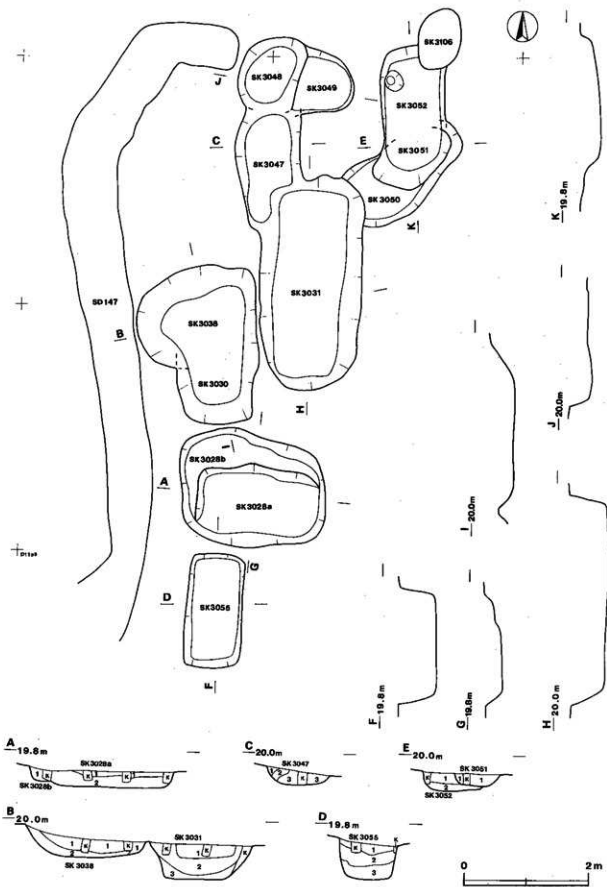




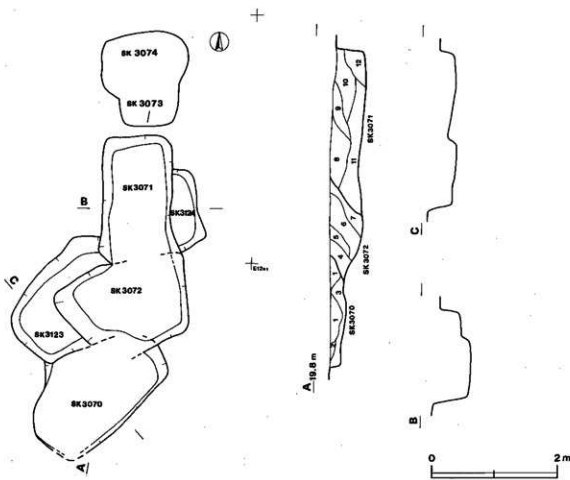
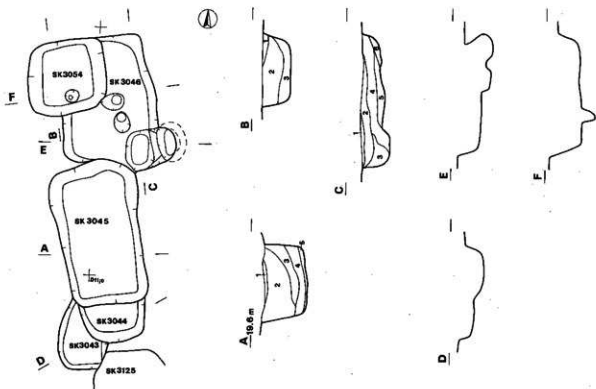
第217图 土坑实测图(2)



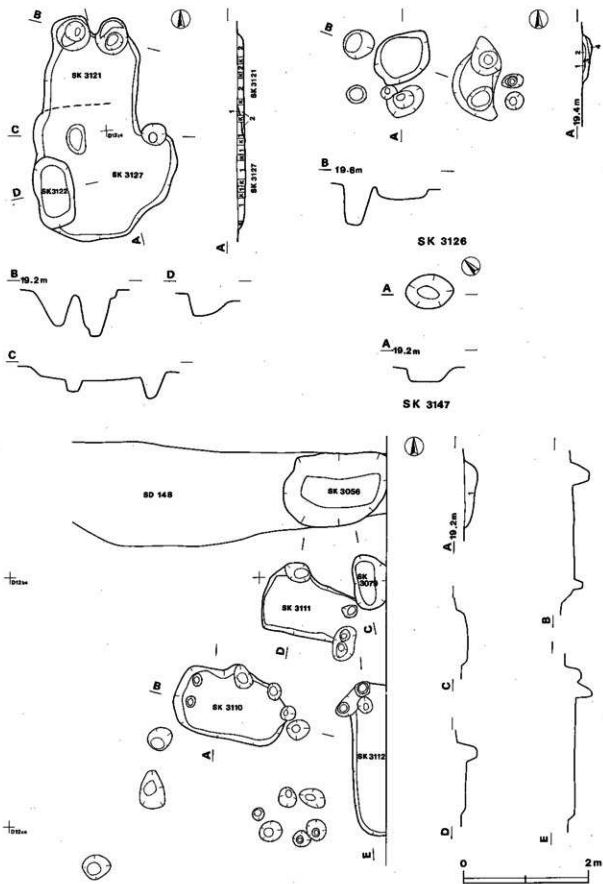
第218図 土坑実測図(3)



第219图 土坑实测图(4)



第220图 土坑实测图(5)



第221图 土坑实测图(6)

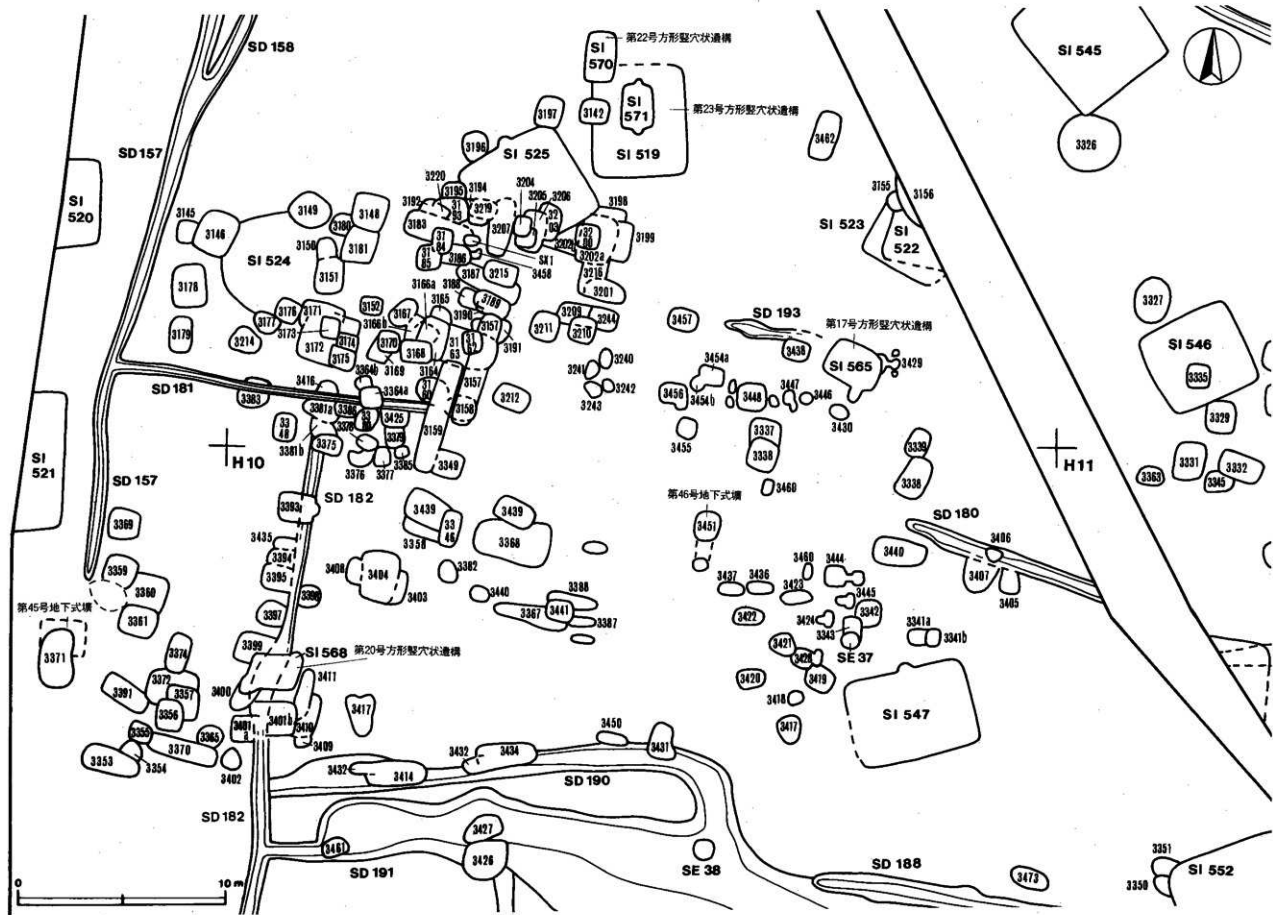
表6 土坑一覽表(第4遺構群)

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				距離×距離(m)	深さ(m)					
3004	D12b <sub>1</sub>	—	不 明	1.47×(1.05)	10	緩斜	平坦	人為		本誌→SK3012
3009	D12b <sub>2</sub>	N-90°-E	長 方 形	4.60×2.90	43	緩斜	平坦	人為		不明
3010	D12b <sub>1</sub>	N-0°	(長 方 形)	3.15×(1.23)	46	緩斜	平坦	人為		SK3027→本誌
3011	D12c <sub>1</sub>	N-5°-W	不 明	(1.85)×1.50	32	緩斜	平坦	不明		
3013	D12c <sub>2</sub>	N-68°-W	楕 円 形	1.74×1.25	9	緩斜	平坦	不明		
3017	D12b <sub>2</sub>	N-3°-E	長 方 形	8.10×1.70	50	緩斜	平坦	人為		SK3025→本誌→SK3018a
3018a	D12b <sub>2</sub>	—	不 明	(3.75)×(1.55)	33	緩斜	平坦	人為		SK3017→本誌
3018b	D12b <sub>2</sub>	—	不 明	—	—	—	—	不明		
3019	D12b <sub>2</sub>	N-90°-E	(長 方 形)	(1.90)×1.66	20	外傾	平坦	不明		
3020a	D12b <sub>2</sub>	N-70°-W	長 方 形	2.58×1.17	25	緩斜	平坦	人為		
3020b	D12b <sub>2</sub>	—	不 明	(0.56)×—	—	—	—	不明		
3021	D12b <sub>2</sub>	N-55°-E	長 方 形	1.16×0.94	18	緩斜	平坦	人為		
3022a	D12c <sub>1</sub>	N-0°	長 方 形	1.50×0.55	20	緩斜	平坦	人為		
3022b	D12c <sub>1</sub>	—	不 定 形	1.05×0.73	—	—	—	不明		
3023	D12c <sub>2</sub>	N-89°-E	長 方 形	1.64×1.28	40	外傾	平坦	人為		
3024	D12a <sub>3</sub>	N-70°-E	長 方 形	(1.10)×0.45	24	外傾	平坦	人為		
3025	D12b <sub>1</sub>	—	不 明	(1.90)×(0.45)	—	—	—	不明		不明
3027	D12b <sub>1</sub>	N-3°-E	長 方 形	2.55×1.18	46	緩斜	平坦	人為		SK3035→本誌
3028a	D111 <sub>1</sub>	—	隅丸長方形	2.05×1.35	25	緩斜	皿状	人為		SK3028bとの新旧不明
3028b	D11 <sub>1</sub>	N-8°-W	不 明	2.40×—	18	緩斜	皿状	人為		SK3028aとの新旧不明
3029	D11b <sub>1</sub>	N-6°-W	円 形	(1.52)×1.47	50	外傾	平坦	人為		SK3037→本誌, SD147との新旧不明
3030	D11f <sub>1</sub>	N-6°-W	不 明	—×1.20	34	緩斜	平坦	人為		
3031	D11e <sub>1</sub>	N-4°-E	隅丸長方形	2.50×1.60	55	垂直	平坦	人為		
3033	D12c <sub>1</sub>	—	不 明	1.51×1.35	33	緩斜	平坦	人為		本誌→SK3012
3034	D12b <sub>1</sub>	N-1°-E	長 方 形	1.87×0.82	56	緩斜	平坦	不明		不明
3035	D12b <sub>1</sub>	—	不 明	(2.30)×(0.45)	30	緩斜	平坦	人為		SK3027, SK3036との新旧不明
3036	D12b <sub>1</sub>	N-20°-E	楕 円 形	1.16×0.67	—	外傾	平坦	不明		SK3035との新旧不明
3037	D11a <sub>1</sub>	N-6°-W	不 明	1.21×(0.73)	45	外傾	平坦	不明		本誌→SK3029, SD147との新旧不明
3038	D11f <sub>1</sub>	N-75°-E	小 明	2.15×—	35	緩斜	平坦	人為		
3040	D12g <sub>1</sub>	N-38°-W	円 形	1.16×1.10	26	緩斜	皿状	不明		
3041	D12h <sub>1</sub>	N-0°	円 形	1.08×1.07	34	垂直	皿状	人為		
3043	D11j <sub>1</sub>	—	不 明	(1.14)×(0.77)	22	外傾	平坦	不明		
3044	D11j <sub>1</sub>	—	不 明	(1.05)×(0.64)	32	緩斜	平坦	不明		
3045	D11i <sub>1</sub>	N-14°-W	長 方 形	2.35×1.42	67	外傾	平坦	人為		
3046	D11i <sub>1</sub>	N-11°-W	不定長方形	2.20×1.49	31	外傾	平坦	人為		
3047	D11e <sub>1</sub>	N-4°-W	不 明	—×1.00	25	緩斜	皿状	人為		
3048	D11e <sub>1</sub>	N-30°-E	不 明	—	30	緩斜	平坦	不明		
3049	D11e <sub>1</sub>	N-81°-W	不 明	—	5	—	皿状	不明		
3050	D11e <sub>1</sub>	N-56°-E	不 明	—×1.10	—	緩斜	平坦	不明		
3051	D11e <sub>1</sub>	N-25°-E	不 明	—	20	—	平坦	人為		
3052	D11e <sub>1</sub>	N-0°	隅丸長方形	2.00×1.00	35	緩斜	皿状	人為		
3053	D12d <sub>1</sub>	N-88°-E	長 方 形	2.50×1.00	17	緩斜	平坦	人為		
3054	D11i <sub>1</sub>	N-78°-E	方 形	1.27×1.18	49	外傾	平坦	不明		
3055	D11g <sub>1</sub>	N-2°-E	長 方 形	1.83×0.93	61	垂直	平坦	人為		
3056	D12a <sub>1</sub>	N-86°-E	楕 円 形	1.68×1.17	35	緩斜	皿状	人為		SD148との新旧不明

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		照面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				縦(幅)×横(深)×高	深さ(m)					
3057	D11j	N-75°-E	楕円形	1.32 × 1.05	58	緩斜	皿状	不明		
3058b	E12a	N-5°-W	楕円形	0.93 × 0.61	44	緩斜	平坦	不明		
3059a	E12a	N-82°-E	不整形	1.39 × 1.04	37	外傾	凹凸	不明		
3059b	E12a	N-4°-W	楕円形	1.05 × 0.61	40	外傾	平坦	不明		
3060	D12i	-	(楕円形)	(0.84) × (0.68)	23	垂直	起伏	不明		
3061	D12h	N-22°-W	不定形	1.27 × 1.03	38	外傾	平坦	不明		
3062	D12b	N-65°-W	楕円形	(0.68) × 0.50	40	外傾	平坦	人為		
3064	D12e	N-40°-W	円形	0.99 × 0.85	9	緩斜	平坦	人為		
3065	D12e	N-74°-E	不定形	2.17 × 1.23	27	緩斜	平坦	人為	SK3056→本跡	
3066	D12e	N-52°-E	楕円形	(0.97) × 0.79	55	外傾	平坦	不明	本跡→SK3065	
3069	D11h	N-80°-W	楕円長方形	1.10 × 0.43	11	緩斜	平坦	不明		
3070	E11e	N-43°-E	不定形	2.10 × 1.15	26	緩斜	平坦	人為	本跡→SK3071	
3071	E11d	N-1°-W	(長方形)	(2.20) × 1.10	50	緩斜	平坦	人為	本跡→SK3072	
3072	E11d	-	不定形	2.20 × 1.15	50	緩斜	平坦	人為	SK3071→本跡→SK3070	
3073	E11d	N-1°-W	楕円長方形	1.20 × 0.95	40	緩斜	平坦	人為	本跡→SK3074	
3074	E11d	N-85°-E	楕円形	1.35 × 0.90	15	緩斜	皿状	人為	SK3073→本跡	
3075	E11d	N-1°-E	楕円長方形	1.35 × 0.90	13	緩斜	平坦	人為		
3076	E11c	N-0°	円形	0.80 × 0.75	27	外傾	平坦	人為		
3077	E11c	N-3°-E	不定長方形	1.41 × (1.04)	47	外傾	平坦	人為		
3078	E12c	N-0°	楕円形	1.41 × 1.00	9	緩斜	平坦	不明		
3079	D12b	N-10°-W	楕円形	0.89 × (0.51)	15	外傾	平坦	不明		
3080	D12g	N-90°	円形	0.90 × (0.79)	24	外傾	平坦	不明		
3082b	E12b	N-0°	不明	4.18 × 2.55	51	緩斜	平坦	不明		
3082c	E12b	N-40°-E	円形	(2.75) × 2.41	46	外傾	平坦	不明		
3083	D12i	N-58°-W	不整形	1.28 × 1.09	10	緩斜	皿状	人為		
3085	D11i	N-6°-W	楕円形	1.01 × 0.83	50	垂直	平坦	人為		
3086	D12j	N-4°-E	楕円形	0.99 × 0.55	7	緩斜	平坦	人為		
3087	D12j	N-79°-E	楕円形	0.61 × 0.50	13	緩斜	皿状	不明		
3088	D12j	N-81°-E	楕円形	0.98 × 0.64	9	緩斜	皿状	人為		
3089a	E12e	N-0°	不整形	2.00 × 1.50	53	外傾	平坦	不明		
3090	D11j	N-13°-W	長方形	2.57 × 1.24	56	緩斜	平坦	人為		
3091	E12a	N-9°-W	長方形	1.58 × 1.06	16	外傾	平坦	不明	本跡→SK3098	
3092	E12a	N-88°-W	楕円形	1.12 × 0.80	32	外傾	平坦	人為		
3094	E12b	N-79°-W	楕円形	0.76 × 0.67	34	外傾	皿状	不明	SK3095との新旧不明	
3095	E12b	-	不定形	-	59	垂直	皿状	不明	SK3094との新旧不明	
3096	D12g	N-0°	楕円形	2.66 × 2.33	56	外傾	皿状	人為		
3097	E11c	N-37°-E	楕円形	1.20 × 0.88	19	外傾	平坦	不明		
3098	E12a	N-80°-E	楕円形	0.81 × 0.63	32	緩斜	皿状	人為	SK3091→本跡	
3099	E12e	-	不定形	1.00 × -	50	緩斜	凹凸	人為	SK3100との新旧不明	
3100	E12e	N-80°-W	長方形	1.80 × 0.90	25	垂直	平坦	人為	SK3099との新旧不明	
3102	E12d	N-78°-W	楕円形	1.20 × 0.79	10	緩斜	平坦	人為		
3103	E12d	-	不定形	-	14	緩斜	平坦	不明		
3108	D12b	N-70°-E	長方形	0.60 × 0.47	-	-	-	不明		
3109	D12a	-	不明	(2.00) × (1.35)	-	-	-	不明		
3110	D12b	N-73°-W	長方形	1.83 × 1.09	20	緩斜	平坦	人為		
3111	D12b	N-75°-W	長方形	- × 0.90	12	緩斜	平坦	不明		

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	概 構		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				距離×距離(間)	高さ(m)					
3112	D12b <sub>s</sub>	N-0°	不 明	2.44 × (0.52)	16	緩斜	平坦	不明		
3113	D12c <sub>s</sub>	N-18°-W	楕円形	1.00 × 0.60	14	緩斜	平坦	不明		
3115	D12d <sub>s</sub>	—	不 明	2.18 × (1.45)	16	緩斜	平坦	不明		
3116	D12e <sub>s</sub>	N-85°-W	隅丸長方形	1.19 × 0.80	18	外傾	平坦	人為		
3117	D12j <sub>s</sub>	N-61°-E	楕円形	0.88 × 0.50	60	外傾	皿状	人為		
3118	D12j <sub>s</sub>	N-59°-E	不 定 形	0.86 × 0.48	62	外傾	凹凸	人為		
3119	D12j <sub>s</sub>	—	円 形	0.64 × 0.60	20	緩斜	皿状	人為		
3120	D12f <sub>s</sub>	N-0°	楕円形	0.91 × 0.73	13	緩斜	平坦	人為		
3121	D12a <sub>s</sub>	—	不 明	1.50 × (1.17)	12	緩斜	平坦	不明		
3122	D12f <sub>s</sub>	N-8°-W	長 方 形	1.15 × 0.64	26	緩斜	皿状	不明		
3123	E11e <sub>s</sub>	—	(長 方 形)	(2.20) × 1.30	40	緩斜	凹凸	人為		SK3070, SK3072との新旧不明
3124	E11d <sub>s</sub>	—	不 明	—	30	緩斜	平坦	人為		SK3071との新旧不明
3125	D11j <sub>s</sub>	N-6°-W	長 方 形	1.81 × 1.24	29	外傾	皿状	不明		
3126	D11f <sub>s</sub>	N-40°-E	楕円形	1.02 × 0.76	18	外傾	皿状	人為		
3127	D12f <sub>s</sub>	N-90°	不 定 形	2.20 × (2.16)	21	緩斜	平坦	人為		
3147	D12b <sub>s</sub>	—	不 明	0.76 × (0.56)	21	緩斜	平坦	不明		





第222図 第5遺構群分布図

(2) 第5遺構群

A 方形竪穴状遺構

第17号方形竪穴状遺構<SI-565> (第223図)

位置 調査区の西部, G10j区。

重複関係 東部において第3429号土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長軸2.50m, 短軸1.95mの長方形である。

長軸方向 N-72°-W

出入り口 南壁の東部に張り出している。規模は長さ120cm, 幅70cmである。確認面から底面に向かって110cm

までは緩やかなスロープ状になっており, そこから20cmほどの段差をもって底面に至る。

壁 壁高は75cmで, ほほ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。南西コーナー付近から灰状の遺物を検出した。

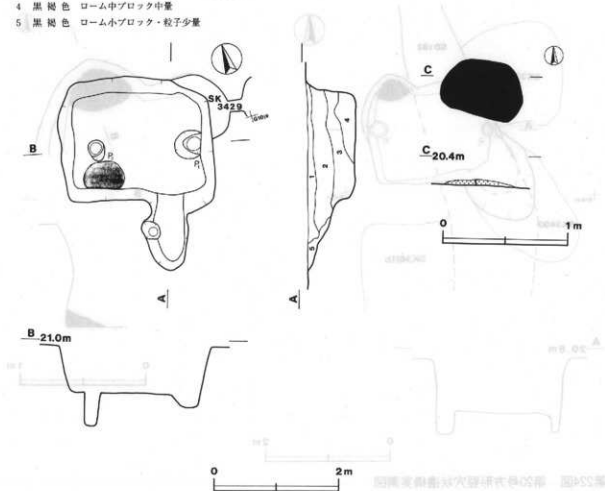
ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は東壁際にあり, 径45cmの半円形で深さ25cm, P<sub>2</sub>は西壁寄りにあり, 径25cm

の円形で深さ46cmである。柱穴と思われる。

覆土 5層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・粒子中量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・粒子中量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック中量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量



第223図 第17号方形竪穴状遺構実測図

遺物 混入した縄文土器細片が少量出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが、遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。

### 第20号方形竪穴状遺構<SI-568> (第224図)

位置 調査区の西部、H10e1区。

重複関係 第3399・3400号土坑、第182号溝と重複する。いずれも新旧関係は不明である。

規模と平面形 長軸2.05m、短軸1.60mの長方形である。

長軸方向 N-85°-W

出入り口 南西コーナー部に張り出している。規模は長さ115cm、幅110cmである。確認面から底面に向かって緩やかなスロープ状になっており、下方は段差をもって底面に至る。

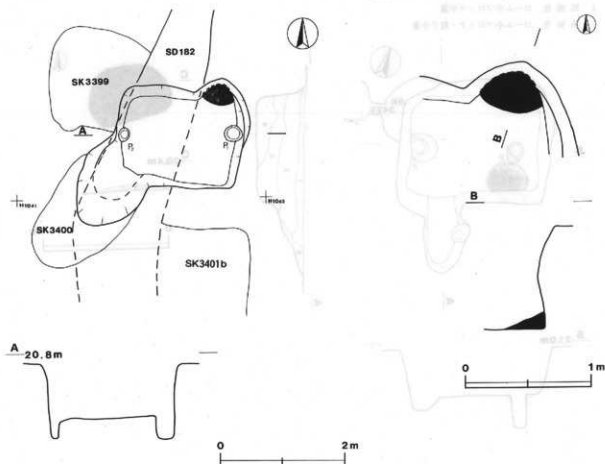
壁 壁高は95cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。北東コーナー付近から灰状の遺物が検出された。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は東壁際にあり、径28cmの円形で深さ37cm、P<sub>2</sub>は西壁際にあり、長径23cm短径15cmの楕円形で深さ35cmである。いずれも柱穴と思われる。

遺物 混入した縄文土器細片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが、遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。



第224図 第20号方形竪穴状遺構実測図

第22号方形竪穴状遺構<SI-570> (第225図)

位置 調査区の西部, G10bs区。  
重複関係 本跡が第519号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸2.60m, 短軸1.79mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-10°-W

壁 壁高は68~74cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。南西コーナー付近から焼土と炭化材が検出された。中央部は踏み締められている。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は北壁際であり, 径35cmの円形で深さ82cm, P<sub>2</sub>は南壁寄りであり, 径30cmの円形で深さ60cmである。柱穴と思われる。

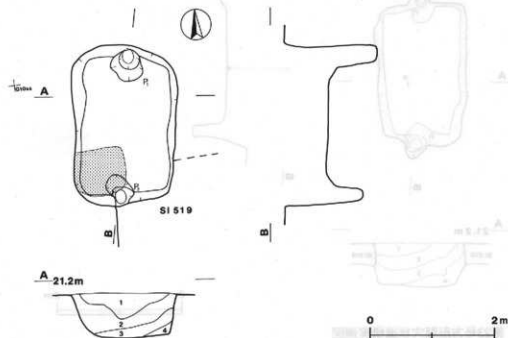
覆土 4層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量

遺物 混入した縄文土器細片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが, 遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。



第225図 第22号方形竪穴状遺構実測図

第23号方形竪穴状遺構<SI-571> (第226・227図)

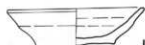
位置 調査区の西部, G10fs区。

重複関係 本跡が第519号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸2.30m, 短軸1.40mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-8°-E

壁 壁高は66~68cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。



0 5cm

第226図 第23号方形竪穴  
状遺構出土遺物実測図

床 平坦である。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は北壁を掘り込み、壁外に突出する。径22cmの円形で深さ54cmである。P<sub>2</sub>は南壁を掘り込み、壁外に突出する。径33cmの円形で深さ54cmである。柱穴と思われる。

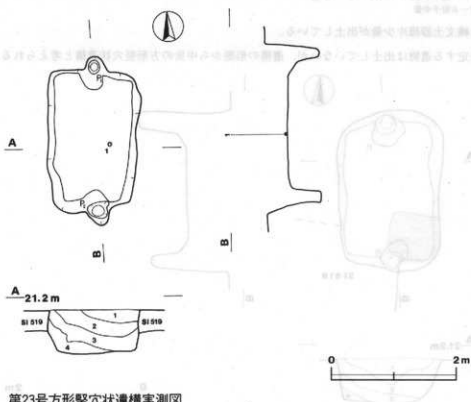
覆土 9層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・粒子中量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子多量
- 9 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

遺物 第226図1の土師質土器皿は、東側の底面から正位で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀前半頃と考えられる。



第227図 第23号方形竪穴状遺構実測図

第23号方形竪穴状遺構<SI-571>出土遺物観察表 (第226図)

番号	器形	器質	計測値(cm)			残存率	胎土・色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C				
1	皿	土師質	11.0	3.3	6.3	75%	長石・雲母・スクリア に多い棕色	口縁部一部欠損。体部内・外面ロク ロナア。底部回転糸切り。	P278, P.L.89 東部底面

## イ 火葬土坑

### 第3157号土坑 (第228図)

位置 調査区の西部, G10is区。

重複関係 本跡が第3162号土坑を掘り込み, 第3158・3163号土坑に掘り込まれていることから, 第3162号土坑より新しく, 第3158・3163号土坑より古い。

規模と形状 長軸5.86m, 短軸1.03mの長方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁面 深さ70cmで, はほぼ垂直に立ち上がる。

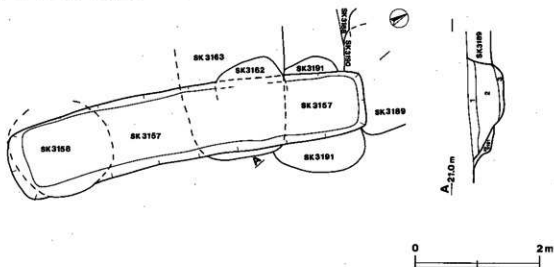
底面 平坦であり, 全体が被熱により赤変している。

覆土 3層からなり, 各層が明確に分層されることから, 人為堆積と思われる。

#### 土層解題

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 3 黒褐色 炭化物・焼土粒子多量

所見 本跡は, 中世の土坑群に掘り込まれ, また下層から, 焼土粒子・炭化物が多量に出土していることから, 中世またはそれ以前の火葬土坑とした。



第228図 第3157号土坑実測図

### 第3424号土坑 (第229図) <付章参照>

位置 調査区の西部, H10cs区。

規模と形状 西に開口部, 東に燃焼部, 中央に通気溝が位置する。燃焼部は長軸1.30m, 短軸1.00mの隅丸長方形, 開口部は径0.60mの円形である。通気溝は長さ1.30m, 幅0.35mである。

主軸方向 N-79°-W

壁面 燃焼部は深さ18cm, 開口部は深さ12cmであり, 緩やかに立ち上がる。通気溝の断面形は「U」字状である。

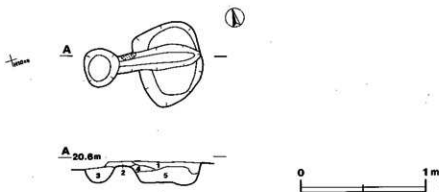
底面 燃焼部, 開口部ともに平坦である。燃焼部の通気溝付近は, 被熱により赤変している。通気溝は炭化物がわずかに付着し, 黒褐色を呈している。

覆土 5層に明確に分層される。人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 明赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子・骨片少量

所見 本跡は、骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から、中世の火葬土坑とした。



第229図 第3424号土坑実測図

第3428号土坑（第230図）〈付章参照〉

位置 調査区の西部，H10c7区。

重複関係 本跡が第3419号土坑を掘り込んでいることから，本跡の方が新しい。

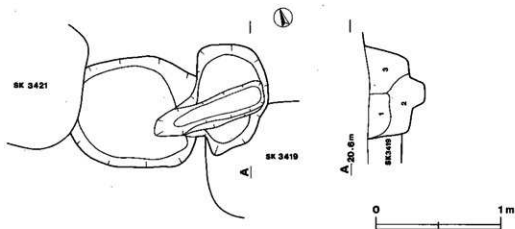
規模と形状 西に開口部，東に燃焼部，中央部に通気溝が位置する。燃焼部は長径〔1.00〕m，短径〔0.55〕mの楕円形，開口部は長軸〔0.90〕m，短軸0.80mの隅丸長方形である。通気溝は長さ〔1.00〕m，幅0.25mである。

主軸方向 N-90°-E

壁面 燃焼部は深さ33cmであり，緩やかに立ち上がる。通気溝は深さ43cm，断面形は「U」字状である。

底面 燃焼部，開口部ともに平坦である。通気溝付近は被熱により，赤変している。通気溝には炭化物が付着し，黒色を呈している。

覆土 3層からなる。各層が明確に分層されることから，人為堆積と思われる。



第230図 第3428号土坑実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒色 炭化物多量、骨片・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量

所見 本跡は、骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から、中世の火葬土坑とした。

第3429号土坑 (第231図) <付章参照>

位置 調査区の西部, G10j区。

重複関係 第17号方形竪穴状遺構と重複する。新旧関係は不明である。

規模と形状 西に開口部, 東に燃焼部, 中央に通気溝が位置する。開口部の一部は第17号方形竪穴状遺構と重複し, 遺存しない。燃焼部は長軸0.71m, 短軸0.52mの隅丸長方形, 開口部は長軸(1.20)m, 短軸(1.00)mほどの隅丸長方形, または楕円形と考えられる。通気溝はトンネル状で長さ0.90m, 幅0.18mである。燃焼部の南北に位置するP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が, 本跡にともなうかは不明である。

主軸方向 N-80°-W

壁面 燃焼部は深さ15cm, 開口部は深さ18cmで, ともに緩やかに立ち上がる。通気溝は深さ24cmで, 断面形は「U」字状である。

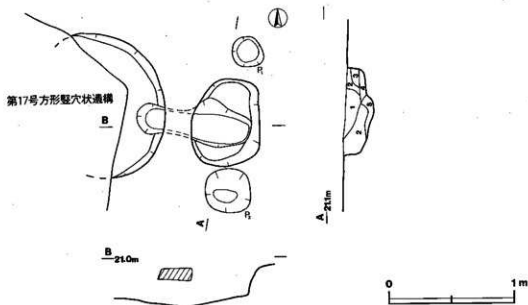
底面 燃焼部・開口部ともに平坦である。通気溝と燃焼部底面は, 被熱により変色している。

覆土 5層からなり, 各層が明確に分層されることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物微量
- 3 黒色 炭化物中量, 焼土粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 骨片多量, 焼土粒子・炭化粒子少量

所見 本跡は、骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から、中世の火葬土坑とした。



第231図 第3429号土坑実測図



第3444号土坑（第232図）〈付章参照〉

位置 調査区の西部，H10b区。

規模と形状 西に開口部，東に燃焼部，中央に通気溝が位置する。燃焼部は長軸 0.75 m，短軸 0.45 m の隅丸長方形，開口部は長軸 0.98 m，短軸 0.83 m の隅丸長方形である。通気溝は長さ 1.04 m，幅 0.15 m である。

主軸方向 N-75°-W

壁面 燃焼部・開口部ともにほぼ垂直に立ち上がる。通気溝は深さ 26 cm，断面形は「U」字状である。

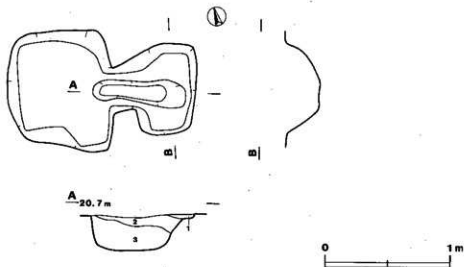
底面 燃焼部・開口部ともに平坦である。通気溝付近は，被熱により赤変している。

覆土 3層からなる。各層が明確に分層されることから，人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化材・炭化粒子多量，焼土粒子中量，ローム粒子・骨片少量

所見 本跡は，骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から，中世の火葬土坑とした。



第232図 第3444号土坑実測図

第3445号土坑（第233図）〈付章参照〉

位置 調査区の西部，H10b区。

規模と形状 燃焼部は長軸 0.81 m，短軸 0.33 m の隅丸長方形である。通気溝は長さ 0.98 m，幅 0.36 m である。

主軸方向 N-79°-W

壁面 燃焼部は緩やかに立ち上がる。通気溝は深さ 22 cm で，燃焼部に向かって緩やかなスロープ状になっている。断面形は「U」字状である。

底面 燃焼部は平坦である。通気溝付近は，被熱により赤変している。通気溝には炭化物が付着し，黒色を呈する。

覆土 4層からなり，明確に分層されることから，人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・骨片微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量

所見 本跡は、骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から、中世の火葬土坑とした。



第233図 第3445号土坑実測図

### 第3450号土坑 (第234図)

位置 調査区の西部, H10ds区。

重複関係 第190号溝が掘り込んでいることから、本跡の方が古い。

規模と形状 東に燃焼部, 西に通気溝が位置する。燃焼部の一部は第190号溝に掘り込まれ遺存しない。燃焼部は長軸(0.63)m, 短軸0.44mの隅丸長方形である。通気溝は長さ1.70m, 幅0.40mである。

主軸方向 N-77°-W

壁面 燃焼部は、緩やかに立ち上がる。通気溝は深さ20cmで、燃焼部に向かって緩やかにスロープ状になっている。断面形は「U」字状である。

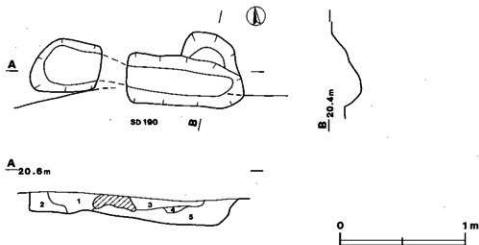
底面 燃焼部は、平坦である。通気溝と燃焼部の底面は、被熱により変色している。

覆土 5層からなり、各層が明確に分層されることから、人為堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化物中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化物・骨片少量
- 5 黒色 炭化物多量, 骨片少量

所見 本跡は、骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から、中世の火葬土坑とした。



第234図 第3450号土坑実測図

第3458号土坑 (第235図)

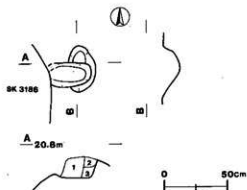
位置 調査区の西部, H10h3区。

重複関係 本跡は, 第3186号土坑に掘り込まれており, 本跡の方が古い。

規模と形状 東に燃焼部, 西に通気溝が位置する。通気溝の一部は第3186号に掘り込まれ遺存しない。燃焼部は長軸0.38m, 短軸0.25mの隅丸長方形である。通気溝は長さ(0.40)m, 幅0.20mである。

主軸方向 N-77°-W

壁面 燃焼部の断面形はカマボコ状である。通気溝は深さ20cmで断面形は「U」字状である。



第235図 第3458号土坑実測図

底面 燃焼部は, 平坦である。通気溝と燃焼部の底面は, 被熱により赤変している。

覆土 3層からなり, 各層が明確に分層されることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒色 炭化物中量, 骨片・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 炭化物・焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 炭化物・焼土粒子少量

所見 本跡は, 骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から, 中世の火葬土坑とした。

ウ 地下式塚

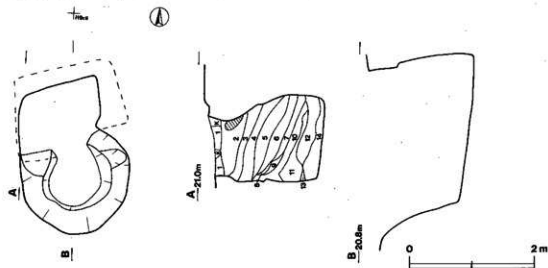
第45号地下式塚<SK-3371> (第236図)

位置 調査区の西部, H9c9区。

主軸方向 N-15°-W

竪坑 上面は, 径1.10-1.15mの円形である。確認面からの深さは1.26mである。底面は径1.00mの円形で, 平坦である。

主室 底面は, 長軸1.80m, 短軸1.10mの長方形で, 平坦である。確認面から底面までの深さは, 1.68mである。竪坑に向かって, 緩やかなスロープ状になっている。



第236図 第45号地下式塚実測図

壁 堅坑は、緩やかに立ち上がる。主室は、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 14層からなる。堅坑から主室へ流れ込むような堆積状況を示している。12層はロームブロックが主体となっていることから、天井部が崩落したものと考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量、ローム粒子少量	8 暗褐色 ローム粒子多量
2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量	9 黒褐色 ローム粒子微量
3 黒褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子少量	10 黒褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子少量
4 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量	11 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
5 黒褐色 ローム中ブロック・粒子多量	12 褐色 ローム中ブロック多量
6 黒褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子少量	13 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量
7 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量	14 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

第46号地下式墳<SK-3451> (第237図)

位置 調査区の西部, H10b\*区。

主軸方向 N-0°

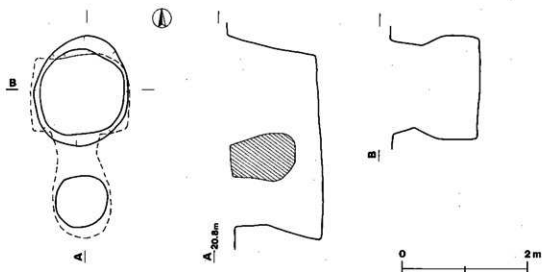
堅坑 堅坑と主室の間は天井部が残存しており、長さ70cmほどのトンネルでつながっている。トンネル部の底面は、緩やかなスロープ状になっている。堅坑上面は、径85cmほどの円形である。確認面からの深さは1.40mである。底面まで円柱状に掘り込まれている。底面は平坦である。

主室 底面は、長軸1.50m、短軸1.35mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは、1.40mである。

壁 堅坑・主室ともにほぼ垂直に立ち上がる。

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。



第237図 第46号地下式墳実測図

エ 井戸跡

第37号井戸跡 (第238図)

位置 調査区の西部, H10ca区。

重複関係 第3343号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 径0.80mの円筒状の井戸跡である。1.60mまで掘り下げたが, 崩落の危険があり, 底面まで調査することはできなかった。

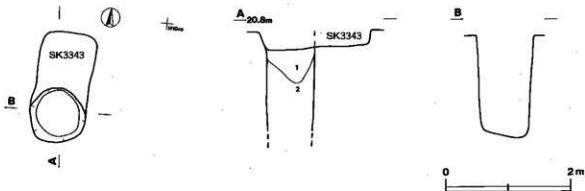
覆土 2層からなる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

遺物 流れ込みと思われる土師器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物が出土していないため, 本跡の詳細な時期については不明である。



第238図 第37号井戸跡実測図

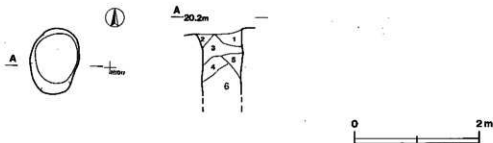
第38号井戸跡 (第239図)

位置 調査区の西部, H10ca区。

重複関係 第191号溝と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 上面は長径1.00m, 短径0.75mの楕円形, 中位から下は径0.90mの円筒状を呈している。1.50mまで掘り下げたが, 崩落の危険があり, 底面まで調査することはできなかった。

覆土 6層からなる。ブロック状の堆積を示しており, 人為堆積と考えられる。



第239図 第38号井戸跡実測図

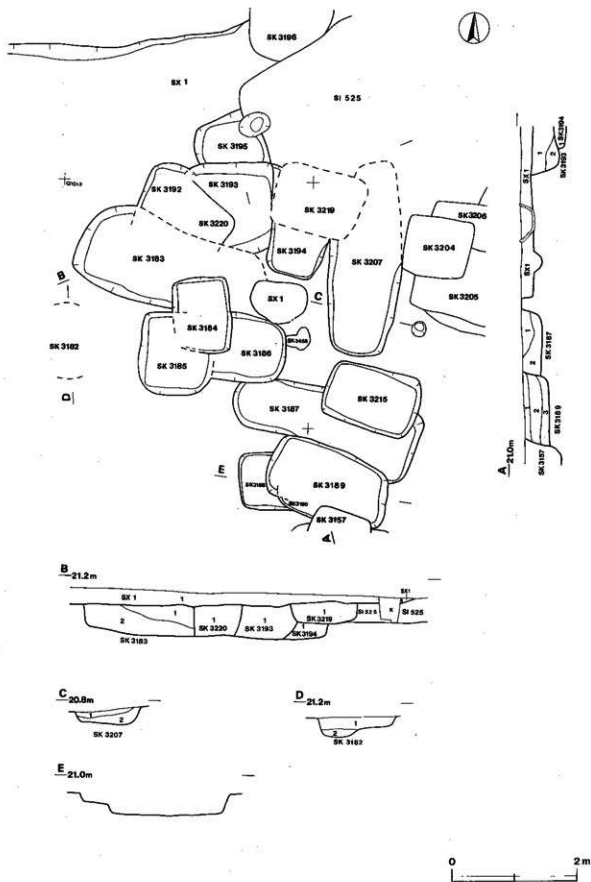
土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量
- 2 褐 色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 5 褐 色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 6 褐 色 ローム小ブロック・粒子少量

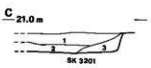
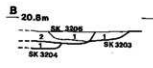
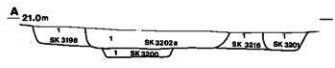
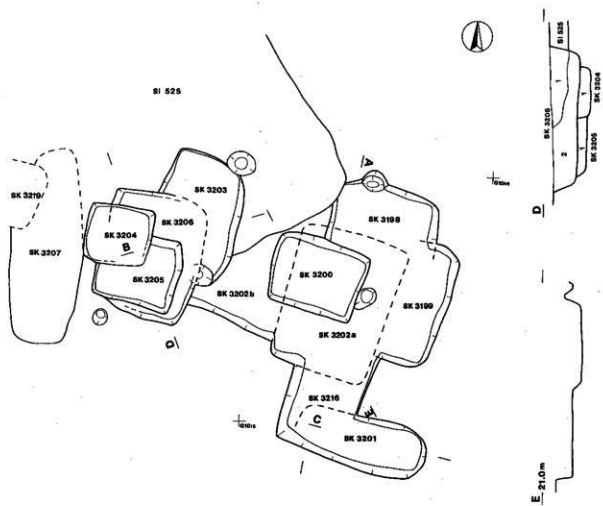
遺物 流れ込みと思われる土師器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物が出土していないため、本跡の詳細な時期については不明である。

才土坑

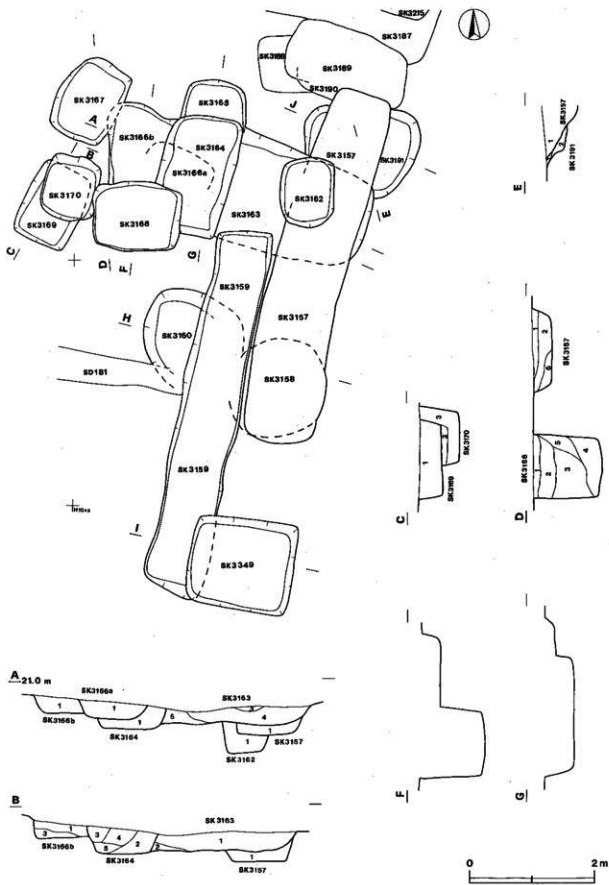


第240図 土坑実測図(7)

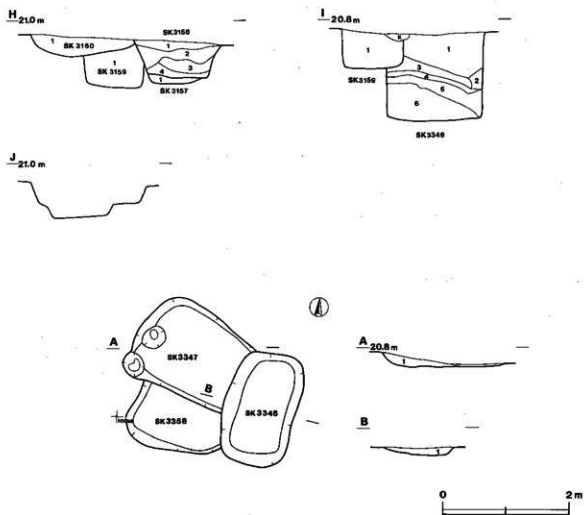


第241图 土坑实测图(8)

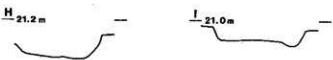
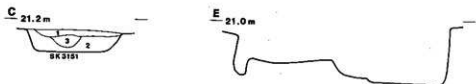
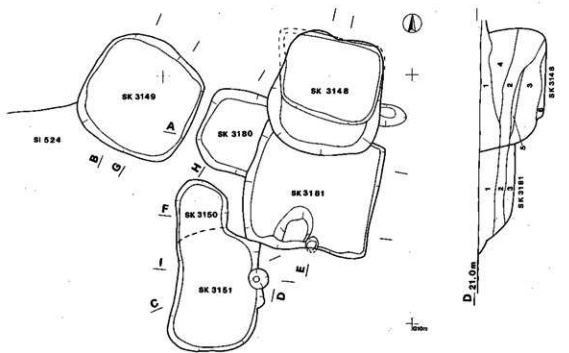




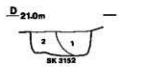
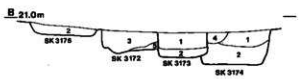
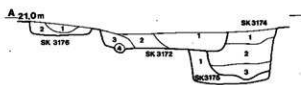
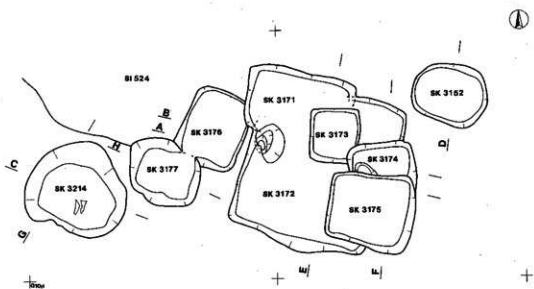
第242图 土坑实测图(9)



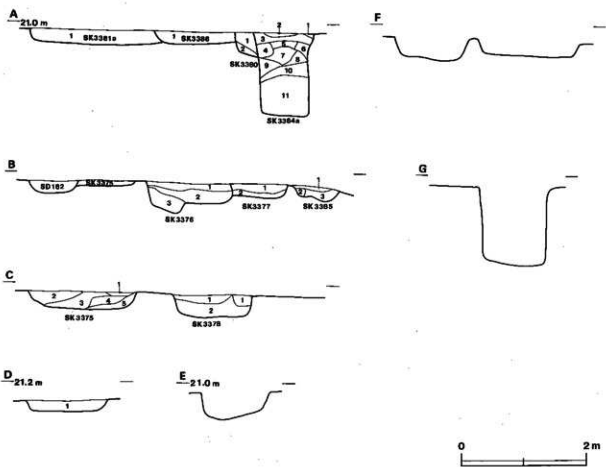
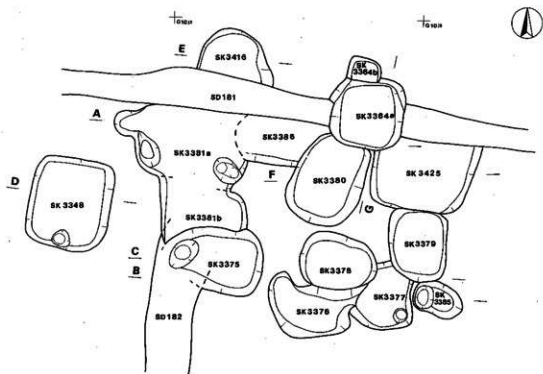
第243图 土坑实测图(10)



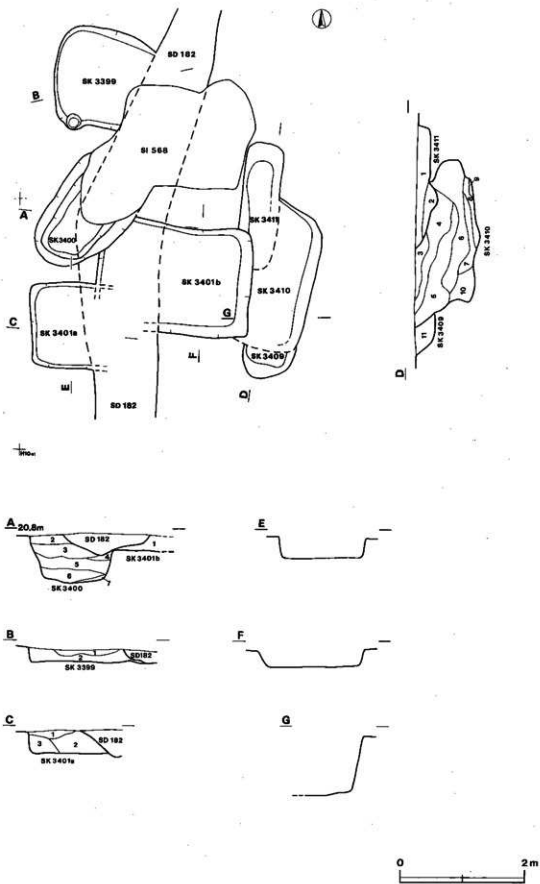
第244图 土坑实测图(1)



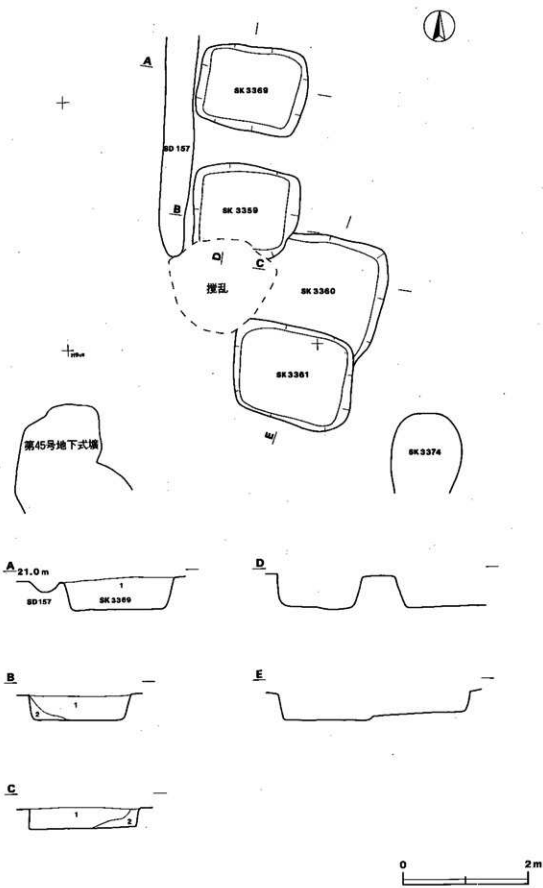
第245图 土坑实测图(12)



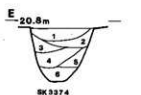
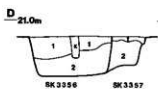
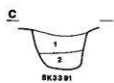
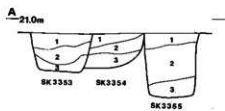
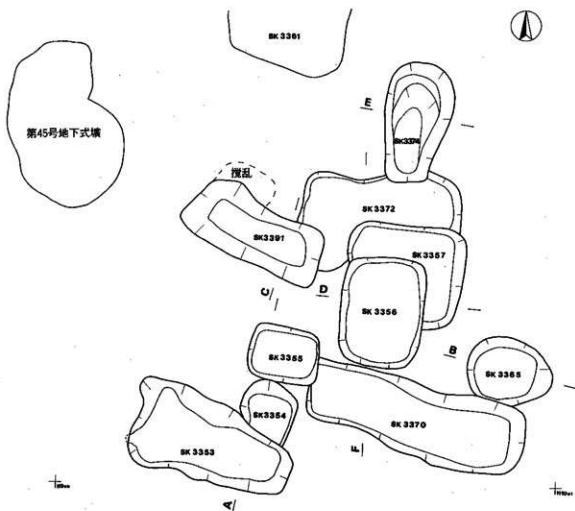
第246图 土坑实测区(13)



第247图 土坑实测图(14)

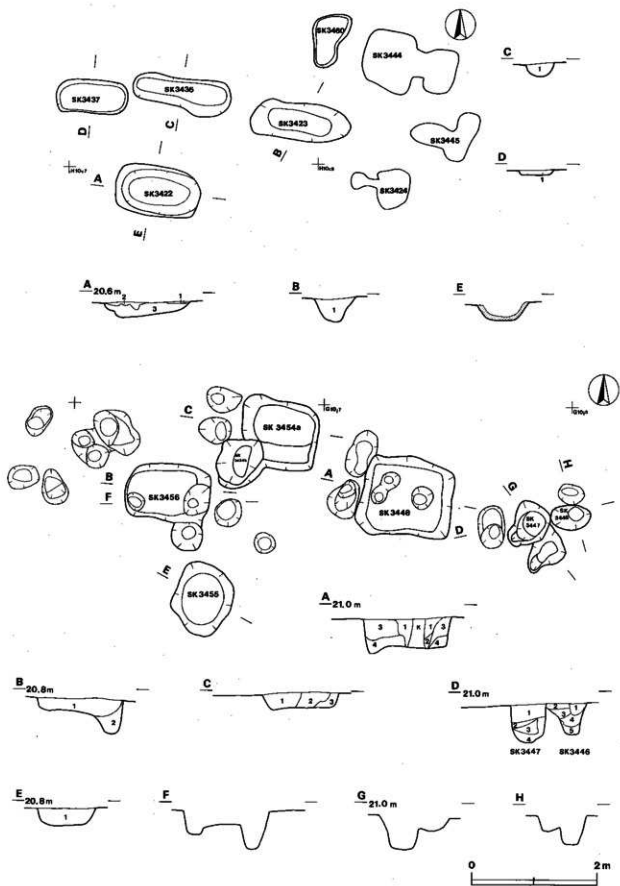


第248图 土坑实测图(15)

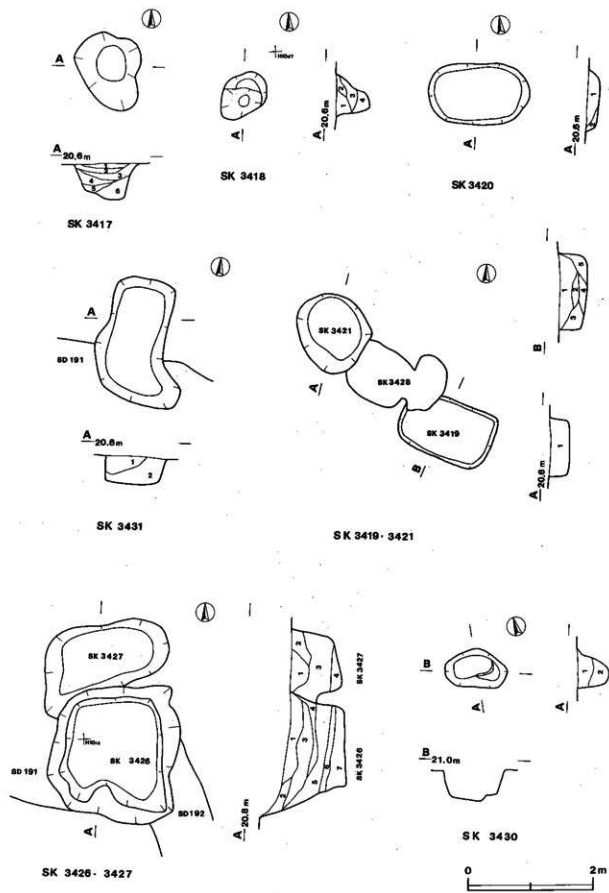


第249图 土坑实测图(16)





第250图 土坑实测图(17)



第251圖 土坑実測図(14)

表7 土坑一覧表(第5遺構群)

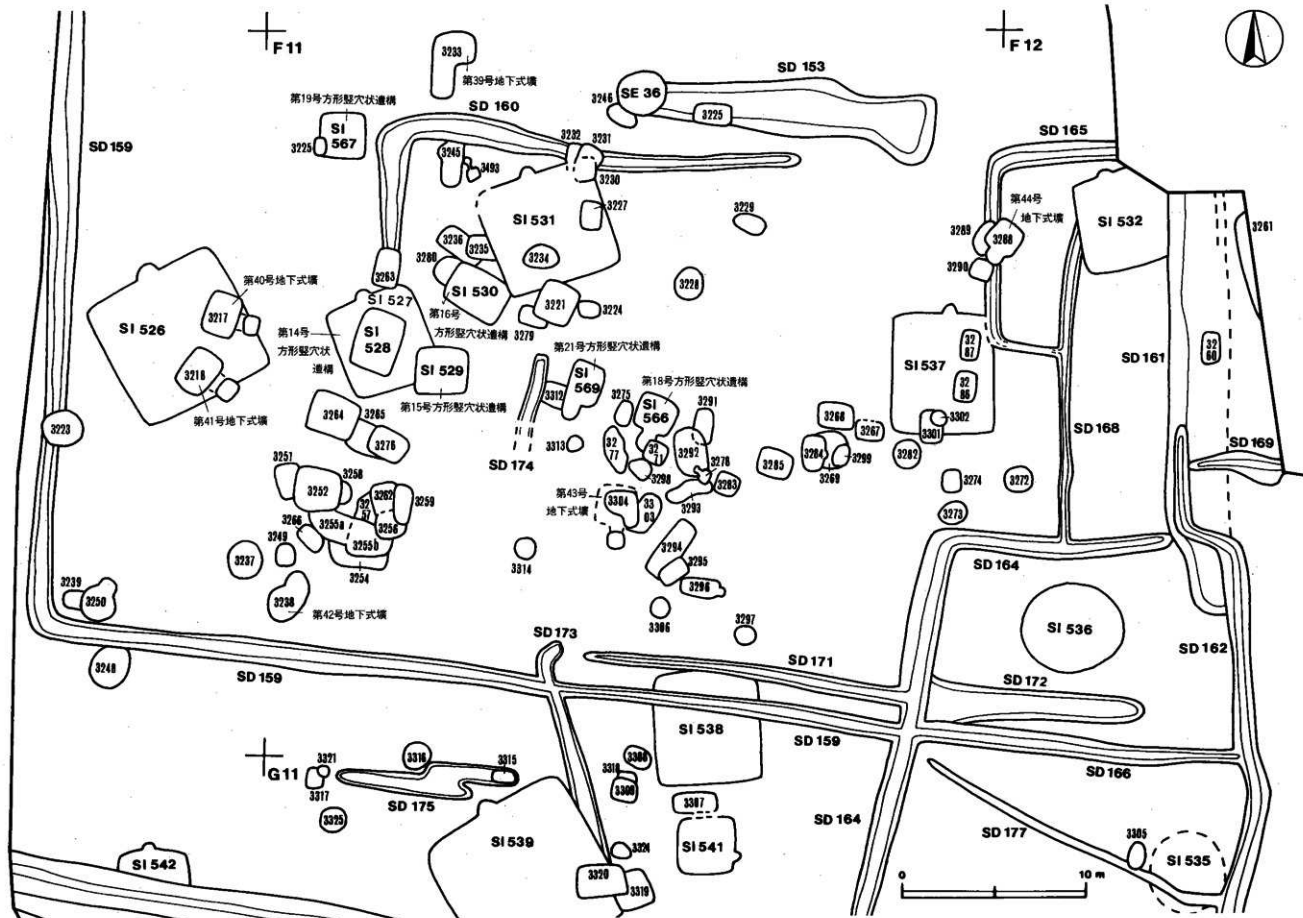
土坑番号	位置 (長軸方向)	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				縦溝×横溝(内)	深さ(m)					
3142	G101a	N-78°-W	長方形	1.42×1.17	37	外傾	平坦	不明		本跡→S1519
3145	G9ha	N-29°-E	楕円形	1.32×0.75	6	外傾	平坦	不明		
3146	G9ha	N-20°-E	隅丸方形	2.22×2.06	20	外傾	平坦	不明		
3148	G10ha	N-10°-E	隅丸方形	2.00×1.83	105	段状	屈状	不明		ピット1か所あり
3149	G10ha	N-28°-E	隅丸方形	(1.90)×(1.85)	25	垂直	平坦	人為		
3150	G10ha	N-0°	不明	-	-	-	-	不明		
3151	G10ha	N-6°-E	不定形	(1.95)×1.43	19	外傾	平坦	人為		ピット1か所あり
3152	G101a	N-75°-E	楕円形	1.24×0.98	37	垂直	平坦	人為		
3155	G10ha	N-17°-W	[円形]	0.82×(0.51)	135	垂直	平坦	不明		本跡→SK3156
3156	G10ha	-	不明	(1.81)×(0.29)	-	-	-	不明		S1522, SK3155→本跡
3158	G101a	-	不明	(1.60)×(1.50)	56	傾斜	平坦	人為		SK3157, SK3160, SK3162→本跡
3159	G101a	N-17°-E	長方形	6.00×1.00	80	傾斜	平坦	人為		本跡→SK3160
3160	G101a	-	不明	(1.60)×(1.50)	27	傾斜	屈状	人為		SK3159→本跡→SK3158
3162	G101a	N-1°-E	長方形	1.18×0.85	74	傾斜	平坦	人為		本跡→SK3157
3163	G101a	-	不明	2.30×-	19	傾斜	平坦	人為		SK3157→本跡→SK3164
3164	G101a	N-3°-E	長方形	1.95×1.17	35	傾斜	平坦	人為		SK3163→本跡→SK3166a
3165	G101a	-	不明	(1.00)×(0.65)	18	傾斜	平坦	人為		不明
3166a	G101a	-	不明	-	25	傾斜	平坦	人為		SK3164, SK3166b→本跡
3166b	G101a	N-5°-E	不明	(1.24)×(0.95)	22	傾斜	平坦	人為		本跡→SK3166
3167	G101a	N-32°-E	長方形	1.40×0.97	32	傾斜	平坦	人為		不明
3168	G101a	N-89°-W	長方形	1.40×1.10	100	垂直	平坦	人為		不明
3169	G101a	N-27°-E	長方形	1.30×0.94	37	垂直	平坦	人為		SK3170→本跡
3170	G101a	N-21°-E	隅丸長方形	1.06×0.85	64	垂直	平坦	人為		SK3169→本跡
3171	G101a	N-39°-E	不明	2.15×-	31	外傾	平坦	不明		
3172	G101a	N-39°-E	不明	2.28×-	57	外傾	平坦	人為		
3173	G101a	N-10°-E	方形	0.56×0.82	45	外傾	平坦	不明		
3174	G101a	N-10°-W	不明	1.08×(0.57)	60	垂直	平坦	人為		
3175	G101a	N-12°-E	方形	1.43×1.27	91	垂直	平坦	人為		骨片
3176	G101a	N-30°-E	長方形	1.28×1.03	15	外傾	平坦	人為		
3177	G101a	N-65°-W	楕円形	1.20×0.98	25	外傾	平坦	不明		
3178	G101a	N-12°-E	隅丸長方形	2.05×1.51	36	傾斜	平坦	不明		
3179	G101a	N-0°	長方形	1.43×1.04	37	傾斜	平坦	不明		
3180	G10ha	N-21°-E	不明	1.36×(0.95)	35	傾斜	凹凸	人為		
3181	G10ha	N-9°-E	方形	2.15×1.87	36	垂直	平坦	人為		
3182	G10ha	-	不明	-×(1.23)	32	傾斜	屈状	不明		
3183	G10ha	N-67°-W	(長方形)	-×1.46	48	垂直	平坦	人為		本跡→SK3193
3184	G10ha	N-3°-W	長方形	1.25×0.92	-	傾斜	平坦	不明		不明
3185	G10ha	N-1°-W	長方形	1.34×(1.16)	-	傾斜	平坦	不明		不明
3186	G10ha	N-85°-W	長方形	(1.25)×1.10	-	傾斜	平坦	不明		不明
3187	G10ha	N-71°-W	長方形	3.05×0.96	30	傾斜	平坦	人為		本跡→SK3189
3188	G101a	-	不明	0.95×(0.43)	15	傾斜	屈状	人為		不明
3189	G101a	N-70°-W	長方形	2.00×0.95	40	傾斜	平坦	人為		SK3187→本跡→SK3157, SK3190
3190	G101a	-	不明	(0.55)×-	-	-	平坦	不明		SK3189→本跡
3191	G101a	N-74°-W	隅丸長方形	1.85×1.50	33	傾斜	屈状	人為		本跡→SK3157
3192	G10ha	-	不明	0.95×-	-	傾斜	平坦	不明		

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				縦(幅)×横(深)(m)	深さ(m)					
3193	G10h3	—	(方 形)	(1.40)×(1.40)	48	緩斜	平坦	人為		SK3183, SK3194→本誌→SK3219
3194	G10h3	N-68°-W	(長方形)	(1.80)×(1.50)	55	緩斜	平坦	人為		本誌→SK3193
3195	G10g3	—	不 定 形	1.20×(0.75)	—	—	—	不明		不明
3196	G10g3	—	隅丸方形	1.40×1.35	34	—	崖状	人為		S1525→本誌
3197	G10f4	N-16°-E	隅丸長方形	1.55×1.34	56	緩斜	平坦	人為		S1525→本誌
3198	G10h3	—	不 明	1.73×(0.76)	30	緩斜	平坦	人為		本誌→SK3202a
3199	G10h3	—	不 明	2.05×(1.70)	—	緩斜	平坦	不明		不明
3200	G10h3	N-73°-W	長 方 形	1.45×1.20	43	垂直	平坦	人為		本誌→SK3202a
3201	G10i3	N-76°-W	楕 円 形	(2.12)×0.91	33	垂直	平坦	人為		SK3216→本誌
3202a	G10h3	N-20°-E	(長方形)	(2.35)×(1.66)	24	緩斜	平坦	人為		SK3198→本誌
3202b	G10h3	—	不 明	(2.40)×(1.45)	—	緩斜	平坦	不明		不明
3203	G10h3	N-14°-E	隅丸長方形	— × 1.30	12	緩斜	崖状	人為		SK3205→本誌
3204	G10h3	N-83°-W	長 方 形	1.07×0.95	38	緩斜	平坦	人為		SK3205→本誌→SK3206
3205	G10h3	N-85°-W	長 方 形	1.42×1.12	55	緩斜	平坦	人為		本誌→SK3204
3206	G10h3	N-12°-E	長 方 形	2.00×1.66	60	緩斜	平坦	人為		SK3204→本誌→SK3203
3207	G10h3	N-74°-W	不 定 形	3.15×1.17	25	緩斜	崖状	人為		本誌→SK3219
3209	G10i3	N-74°-W	不 定 形	1.04×1.00	20	緩斜	平坦	不明		SK3210→本誌 SK3211, SK3244との新旧不明
3210	G10i3	N-14°-E	長 方 形	(1.51)×1.00	50	外傾	平坦	不明		本誌→SK3209
3211	G10i4	N-81°-W	長 方 形	1.51×1.29	56	外傾	平坦	不明		SK3209との新旧不明
3212	G10j4	N-52°-W	長 方 形	1.72×1.13	81	垂直	起伏	不明		
3214	G10i3	N-60°-W	不 定 形	1.62×1.41	32	緩斜	崖状	人為		
3215	G10h3	N-70°-W	長 方 形	1.55×1.00	—	—	平坦	不明		不明
3216	G10i3	—	不 明	— × 1.05	27	緩斜	平坦	人為		本誌→SK3201
3219	G10h3	N-69°-W	長 方 形	1.41×1.10	33	緩斜	平坦	人為		SK3193→本誌
3220	G10h3	—	不 明	—	46	—	平坦	人為		不明
3240	G10i3	N-15°-W	楕 円 形	1.29×0.75	34	緩斜	崖状	不明		
3241	G10j3	N-4°-W	不 定 形	1.04×0.71	34	外傾	崖状	不明		
3242	G10j3	N-66°-W	楕 円 形	0.72×0.60	18	緩斜	崖状	不明		
3243	G10j3	N-40°-W	楕 円 形	0.91×0.54	32	緩斜	崖状	不明		
3244	G10i3	N-74°-W	長 方 形	(1.81)×1.04	32	外傾	平坦	不明		SK3209, SK3210との新旧不明
3336	H10a7	N-10°-E	隅丸長方形	1.57×1.30	74	外傾	平坦	不明		本誌→SK3337
3337	H10a7	N-10°-E	隅丸長方形	2.45×1.52	82	外傾	平坦	人為		SK3336→本誌
3338	H10a7	N-24°-E	隅丸長方形	2.12×1.28	21	外傾	平坦	不明		SK3339との新旧不明
3339	H10a7	N-17°-E	長 方 形	1.15×0.89	11	緩斜	崖状	不明		SK3338との新旧不明
3340	H10b7	N-75°-W	楕 円 形	1.92×1.10	13	緩斜	平坦	不明		
3341a	H10c7	N-87°-E	長 方 形	1.77×0.90	81	外傾	平坦	不明		
3341b	H10c7	N-87°-E	円 形	0.77×0.72	72	外傾	崖状	不明		本誌→SK3343
3342	H10c7	N-15°-E	楕 円 形	1.54×0.98	10	緩斜	平坦	不明		SE30, SK3342→本誌
3343	H10c7	N-0°	隅丸長方形	(1.19)×0.90	26	外傾	平坦	不明		
3344	H10a7	N-10°-E	不 定 形	0.72×0.68	17	緩斜	崖状	人為		SK3347, SK3358との新旧不明
3346	H10a7	N-14°-E	長 方 形	1.82×1.14	13	緩斜	平坦	人為		SK3346, SK3358との新旧不明
3347	H10a7	N-55°-W	(長方形)	(1.68)×1.46	16	緩斜	平坦	人為		
3348	H10j3	N-3°-E	長 方 形	1.50×1.25	15	緩斜	平坦	人為		本誌→SK3159
3349	H10a7	N-82°-E	長 方 形	1.70×1.48	140	垂直	平坦	人為		
3350	H11f3	N-37°-E	楕 円 形	1.22×1.06	29	緩斜	平坦	不明		
3351	H11f3	N-19°-E	楕 円 形	10.74×(1.08)	24	緩斜	平坦	不明		

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				距離×距離(四)	長さ(m)					
3353	H9d <sub>1</sub>	N-70°-W	長方形	2.60 × 1.20	62	緩斜	皿状	人為		SK3354→本誌
3354	H9d <sub>1</sub>	N-20°-W	不定形	0.93 × (0.80)	56	緩斜	皿状	人為		本誌→SK3353
3355	H9d <sub>1</sub>	N-80°-W	長方形	1.15 × 0.90	105	垂直	平垣	人為		不明
3356	H9d <sub>1</sub>	N-85°-W	長方形	1.92 × 1.65	65	緩斜	平垣	人為		SK3357→本誌
3357	H9d <sub>1</sub>	N-1°-E	長方形	1.81 × 1.30	50	緩斜	平垣	人為		本誌→SK3356
3358	H10b <sub>1</sub>	—	不明	(1.43) × (0.98)	—	—	—	不明		SK3346, SK3347との新旧不明
3359	H9b <sub>1</sub>	N-80°-W	長方形	1.73 × 1.42	38	垂直	平垣	人為		
3360	H9b <sub>1</sub>	N-80°-W	(長方形)	(1.65) × (1.55)	35	垂直	平垣	人為		
3361	H9c <sub>1</sub>	N-80°-W	長方形	1.95 × 1.50	42	垂直	平垣	人為		
3364a	G10j <sub>1</sub>	N-1°-E	方形	1.17 × 1.12	135	垂直	平垣	人為		SK3380→本誌
3364b	G10j <sub>1</sub>	N-70°-W	(長方形)	(0.52) × (0.41)	—	—	—	不明		
3365	H9d <sub>1</sub>	N-76°-W	楕円形	1.38 × (1.08)	76	垂直	平垣	人為		
3367	H10b <sub>1</sub>	N-75°-W	楕円形	3.95 × 1.27	36	緩斜	皿状	不明		
3368	H10b <sub>1</sub>	N-75°-W	隅丸長方形	3.58 × 2.57	36	外傾	平垣	不明		
3369	H9b <sub>1</sub>	N-80°-W	長方形	1.72 × 1.38	50	垂直	平垣	人為		
3370	H9d <sub>1</sub>	N-76°-W	長方形	(3.60) × 1.12	30	垂直	平垣	人為		
3372	H9c <sub>1</sub>	N-90°	不定形	2.52 × 1.60	34	緩斜	皿状	人為		不明
3374	H9c <sub>1</sub>	N-5°-E	不定形	2.05 × 0.95	85	垂直	平垣	人為		不明
3375	G10j <sub>1</sub>	N-80°-W	不明	(1.50) × 1.00	—	—	—	不明		
3376	H10a <sub>1</sub>	N-50°-W	不定形	1.45 × 0.80	48	緩斜	凹凸	人為		不明
3377	H10a <sub>1</sub>	—	不定形	1.10 × (0.75)	—	—	—	不明		不明
3378	G10j <sub>1</sub>	N-80°-W	楕円形	1.25 × 1.10	35	緩斜	平垣	人為		不明
3379	G10j <sub>1</sub>	N-0°	長方形	1.16 × 0.94	—	—	—	不明		
3380	G10j <sub>1</sub>	N-20°-E	長方形	(1.50) × 1.10	40	緩斜	皿状	人為		SK3386→本誌→SK3364
3381a	G10j <sub>1</sub>	—	不明	—	22	緩斜	平垣	人為		本誌→SK3386
3381b	G10j <sub>1</sub>	—	不明	—	—	—	—	不明		
3382	H10b <sub>1</sub>	N-0°	楕円形	1.25 × 0.93	7	緩斜	平垣	不明		
3383	G10j <sub>1</sub>	N-8°-E	長方形	2.45 × 2.10	24	垂直	平垣	不明		
3385	H10a <sub>1</sub>	N-75°-W	楕円形	0.80 × 0.50	22	外傾	皿状	人為		
3386	G10j <sub>1</sub>	—	不明	—	20	緩斜	平垣	人為		SK3381a→本誌→SK3380
3387	H10c <sub>1</sub>	N-78°-W	楕円形	1.81 × 0.55	22	外傾	平垣	不明		
3388	H10b <sub>1</sub>	N-85°-W	楕円形	2.67 × 0.58	18	外傾	平垣	不明		
3391	H9d <sub>1</sub>	N-60°-W	長方形	2.30 × 0.95	65	垂直	皿状	人為		
3393	H10a <sub>1</sub>	N-81°-W	不定形	2.48 × 1.63	75	垂直	垂直	人為		本誌→SD182
3394	H10b <sub>1</sub>	—	不明	—	—	—	—	不明		
3395	H10b <sub>1</sub>	—	不明	(1.57) × (1.40)	22	緩斜	平垣	不明		
3397	H10c <sub>1</sub>	N-77°-W	楕円形	(1.52) × 1.14	7	緩斜	平垣	人為		
3398	H10b <sub>1</sub>	—	不明	(1.16) × 1.02	15	緩斜	平垣	人為		
3399	H10c <sub>1</sub>	—	不明	— × 1.58	22	垂直	平垣	不明		本誌→SD182
3400	H10a <sub>1</sub>	—	不明	(1.48) × 1.28	78	垂直	起伏	不明		本誌→SD182
3401a	H10d <sub>1</sub>	—	不明	— × 1.38	32	垂直	平垣	不明		本誌→SD182
3402	H10d <sub>1</sub>	N-14°-E	不整楕円形	1.29 × 0.85	27	緩斜	皿状	不明		SD190→本誌
3403	H10b <sub>1</sub>	N-75°-W	長方形	1.77 × 1.35	26	外傾	平垣	人為		本誌→SK3404 音片
3404	H10b <sub>1</sub>	N-16°-E	長方形	— × 1.54	29	緩斜	平垣	人為		SK3403→本誌→SK3408
3405	H10b <sub>1</sub>	—	不明	—	31	緩斜	皿状	人為		本誌→SD180
3406	H10b <sub>1</sub>	N-34°-E	不定形	0.78 × 0.55	52	緩斜	起伏	人為		本誌→SK3407

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	概 模		埋西	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				縦横×縦横(㎝)	深さ(m)					
3407	H10b <sub>1</sub>	N-90°	楕円形	(1.57)×1.31	88	緩斜	直状	人為		SK3406→本跡→SD180
3408	H10b <sub>2</sub>	N-8°-E	長方形	1.11×(0.73)	27	外傾	平坦	不明		SK3404→本跡
3409	H10a <sub>2</sub>	—	不明	—×0.82	33	緩斜	平坦	不明		本跡→SK3410
3410	H10d <sub>1</sub>	N-13°-E	不明	2.32×(0.96)	104	緩斜	起伏	不明		SK3409→本跡→SK3411
3411	H10d <sub>2</sub>	N-6°-E	楕円形	2.20×0.68	34	緩斜	平坦	不明		SK3410→本跡
3413	H10d <sub>3</sub>	N-18°-W	不定形	1.90×1.35	110	外傾	平坦	人為		
3414	H10e <sub>2</sub>	N-83°-E	長方形	(1.71)×(1.00)	—	不明	不明	不明		SD190, SK3432との新旧不明
3416	G10j <sub>2</sub>	—	不定形	1.25×(0.81)	45	外傾	直状	不明		本跡→SD181
3417	H10d <sub>4</sub>	N-21°-W	不定形	1.34×0.78	58	外傾	平坦	不明		
3418	H10d <sub>5</sub>	N-48°-E	楕円形	0.88×0.63	53	垂直	直状	不明		
3419	H10c <sub>1</sub>	N-69°-W	長方形	1.54×0.94	30	垂直	平坦	不明		本跡→SK3426b 骨片
3420	H10c <sub>2</sub>	N-84°-W	楕円形	1.63×0.99	20	外傾	平坦	不明		
3421	H10c <sub>3</sub>	N-43°-W	円形	1.22×1.12	43	垂直	平坦	不明		
3422	H10c <sub>4</sub>	N-83°-W	楕円形	1.37×0.82	23	緩斜	平坦	不明		
3423	H10b <sub>3</sub>	N-83°-W	楕円形	1.61×0.61	35	緩斜	直状	不明		
3425	G10j <sub>3</sub>	N-13°-E	不明	1.62×1.25	24	緩斜	平坦	人為		本跡→SD181
3426	H10e <sub>1</sub>	N-0°	不定形	2.26×2.03	118	外傾	平坦	人為		
3427	H10e <sub>3</sub>	N-83°-E	楕円形	2.00×1.05	95	垂直	平坦	不明		
3430	G10j <sub>4</sub>	N-62°-W	楕円形	1.00×0.62	47	外傾	平坦	人為		
3431	H10d <sub>6</sub>	N-13°-E	不定形	1.89×1.09	44	垂直	平坦	不明		SD191との新旧不明
3432	H10d <sub>7</sub>	N-72°-W (隅丸長方形)	—	—×0.69	—	—	—	不明		SD190, SK3414, SK3432との新旧不明
3433	H10d <sub>8</sub>	—	不明	—	—	—	—	不明		SD190, SK3434との新旧不明
3434	H10d <sub>9</sub>	N-84°-E	隅丸長方形	(2.95)×(1.13)	—	—	—	不明		SD190, SK3433との新旧不明
3435	H10b <sub>4</sub>	—	不明	(1.08)×(0.52)	30	緩斜	平坦	不明		
3436	H10b <sub>5</sub>	N-80°-W	楕円形	1.57×0.58	20	外傾	直状	不明		
3437	H10b <sub>6</sub>	N-88°-W	楕円形	1.16×0.54	7	外傾	平坦	不明		
3438	G10i <sub>1</sub>	N-78°-W	長方形	1.72×1.16	46	外傾	平坦	不明		SD193→本跡
3439	H10a <sub>1</sub>	N-75°-W	長方形	1.73×1.15	91	外傾	平坦	不明		
3440	H10b <sub>7</sub>	N-0°	円形	1.25×1.16	—	—	—	不明		
3441	H10c <sub>5</sub>	N-72°-W	長方形	1.31×1.19	—	—	—	不明		
3446	G10j <sub>1</sub>	N-16°-W	不定形	0.74×0.39	50	外傾	直状	人為		
3447	G10j <sub>2</sub>	N-38°-W	不定形	1.11×0.40	60	垂直	凹凸	人為		
3448	G10j <sub>3</sub>	N-88°-W	不整形	1.43×1.24	55	外傾	凹凸	人為		
344a	G10j <sub>4</sub>	N-83°-W	不整形	1.21×1.00	27	外傾	平坦	不明		
345b	G10j <sub>5</sub>	N-39°-W	不整形楕円形	0.92×0.71	(55)	不明	不明	不明		
3455	G10j <sub>6</sub>	N-9°-W	不整形楕円形	1.20×0.99	29	緩斜	直状	人為		
3456	G10j <sub>7</sub>	N-86°-W	不定形	1.36×0.91	55	外傾	不明	不明		
3457	G10i <sub>2</sub>	N-77°-W	隅丸長方形	1.70×0.98	14	緩斜	直状	人為		
3458	G10b <sub>3</sub>	N-0°	不定形	0.37×0.36	15	緩斜	凹凸	不明		
3460	H10b <sub>8</sub>	N-27°-E	不定形	1.04×0.55	—	不明	不明	不明		
3461	H10e <sub>2</sub>	N-34°-E	不整形	1.37×1.22	—	不明	不明	不明		SD191との新旧不明
3462	G10g <sub>2</sub>	N-15°-E	長方形	2.55×1.04	20	緩斜	平坦	不明		
3473	H10f <sub>1</sub>	N-69°-W	楕円形	1.71×1.12	116	垂直	平坦	人為		





第252图 第6 建構群分布图



(3) 第6遺構群

ア 方形竪穴状遺構

第14号方形竪穴状遺構<SI-528> (第253図)

位置 調査区の中央部, F11e区。

重複関係 本跡が第527号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.06m, 短軸2.28mの長方形で, 南壁中央部は内側に半円形に張り出している。

長軸方向 N-15°-E

壁 壁高は50cmで, はほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は中央からやや北側にあり, 長径20cm, 短径15cmの楕円形で, 深さ25cm,

P<sub>2</sub>は中央からやや南側にあり, 長径28cm, 短径20cmの楕円形で, 深さ26cmである。柱穴と思われる。

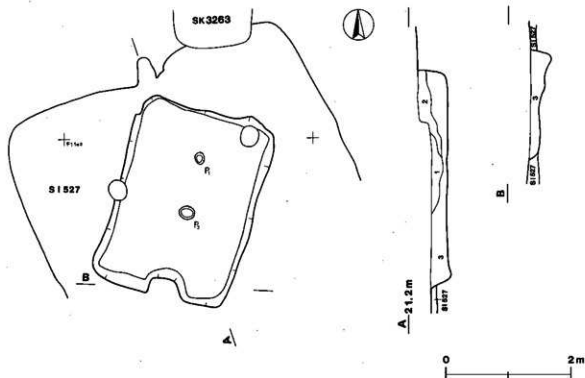
覆土 3層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒色 ローム粒子少量・炭化物微量

遺物 混入と思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが, 遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。



第253図 第14号方形竪穴状遺構実測図

第15号方形竪穴状遺構<SI-529> (第254図)

位置 調査区の中央部, Files区。

重複関係 本跡が第527号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.07m, 短軸3.01mの方形で, 北西コーナーは突出している。

長軸方向 N-81°-W

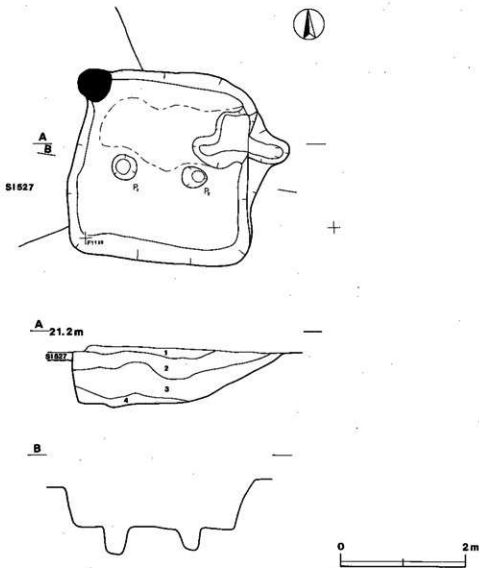
出入り口 東壁の北部に張り出している。規模は長さ155cm, 幅60cmである。確認面から底面に向かって150cmまで緩やかなスロープ状になっている。

壁 壁高は85cmで, ほほ垂直に立ち上がる。

床 平坦で, 北部に硬化面がある。北東側は出入り口に向かって, 緩やかに傾斜している。突出部から灰状の遺物が検出された。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は中央からやや西側にあり, 径43cmの円形で, 深さ45cm, P<sub>2</sub>は中央からやや東側にあり, 長径43cm, 短径35cmの楕円形で, 深さ40cmである。いずれも柱穴と思われる。

覆土 4層からなる。自然堆積と思われる。



第254図 第15号方形竪穴状遺構実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 炭化物微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化物微量

遺物 混入と思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが、遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。

第16号方形竪穴状遺構<SI-530> (第255図)

位置 調査区の中央部, F11d区。

重複関係 第3280号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長軸2.84m, 短軸2.50mの長方形を呈し, 南コーナー部は突出している。

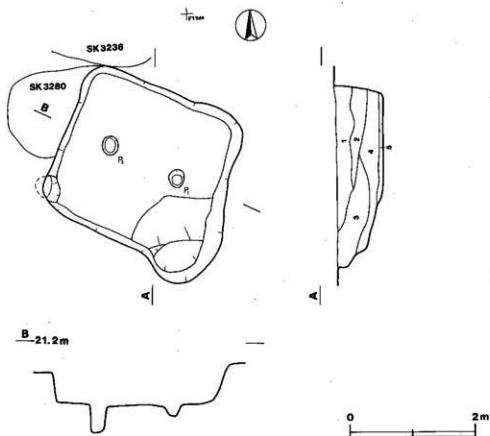
長軸方向 N-63°-W

出入口 南コーナー部に張り出している。確認面から底面に向かって緩やかなスロープ状になっている。

壁 壁高は75cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、出入口部に向かって緩やかに傾斜しており、硬化している。西コーナー付近から、灰状の遺物が検出された。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は中央からやや東側にあり、径25cmの円形で、深さ18cm、P<sub>2</sub>は中央からやや西側にあり、径25cmの円形で、深さ42cmである。いずれも柱穴と思われる。



第255図 第16号方形竪穴状遺構実測図

覆土 5層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・粒子中量

遺物 混入と思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが、遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。

第18号方形竪穴状遺構<SI-566> (第256図)

位置 調査区の中央部, F11f6区。

重複関係 本跡が第3271号土坑を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

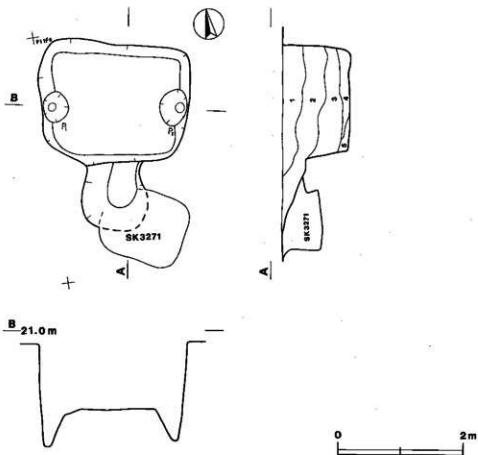
規模と平面形 長軸2.42m, 短軸1.97mの長方形である。

長軸方向 N-21°-E

出入り口 南壁の中央部に張り出している。規模は長さ110cm, 幅100cmである。確認面から底面に向かって壁際まで緩やかなスロープ状になっており、そこからほぼ垂直に65cmの段差をもって底面に至る。

壁 壁高は110cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。



第256図 第18号方形竪穴状遺構実測図

ビット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は西壁際にあり、径40cmの円形で、深さ66cm、P<sub>2</sub>は東壁際にあり、長径60cm、短径43cmの楕円形で、深さ55cmである。いずれも柱穴と思われる。

覆土 5層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子・小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 混入と思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが、遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。

第19号方形竪穴状遺構<SI-567> (第257図)

位置 調査区の中央部、F11b区。

重複関係 南西コーナー部において第3225号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長軸2.48m、短軸2.15mの長方形である。

長軸方向 N-82°-W

壁 壁高は10cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平坦である。

ビット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は東側にあり、径34cmの円形で、深さ38cm、P<sub>2</sub>は西側にあり、径35cmの円形で、深さ54cmである。いずれも柱穴と思われる。

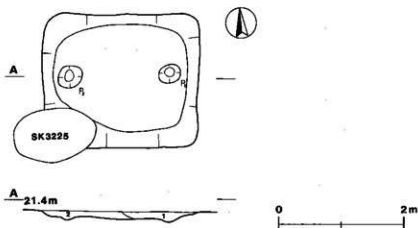
覆土 2層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量

遺物 混入と思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが、遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。



第257図 第19号方形竪穴状遺構実測図

第21号方形竪穴状遺構<SI-569> (第258図)

位置 調査区の中央部, F11f<sub>3</sub>区。

重複関係 西部において第3312号土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長軸2.40m, 短軸1.81mの長方形である。

長軸方向 N-10°-E

出入り口 南壁の西側に張り出している。規模は長さ110cm, 幅90cmである。確認面から底面に向かって, 緩やかなスロープ状になっており, 下方は段差を持って底面に至る。

壁 壁高は100~105cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は北壁際にあり, 長径70cm, 短径45cmの楕円形で, 深さ45cm, P<sub>2</sub>は出入り口を避けるように南壁際中央からやや東側にあり, 長径68cm, 短径33cmの楕円形で, 深さ40cmである。いずれも内側に傾いている。柱穴と考えられる。

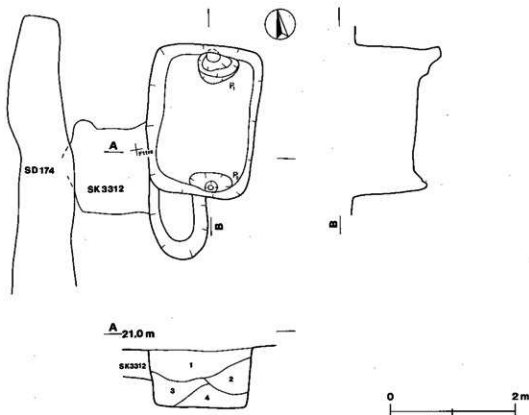
覆土 4層からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック・粒子中量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量

遺物 混入と思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物は出土していないが, 遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と考えられる。



第258図 第21号方形竪穴状遺構実測図

## イ 火葬土坑

### 第3261号土坑 (第259図)

位置 調査区の東部, F12d区。

規模と形状 長軸6.80m, 短軸(1.30)mで長方形である。底面の中央部には長軸方向に長さ3.40m, 幅40cm, 深さ10cmほどの溝がある。溝の端部にはピット状の掘り込みがある。

主軸方向 N-12°-W

壁面 深さ43cmで、やや外傾して立ち上がる。

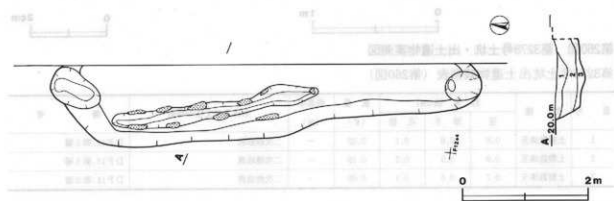
底面 平坦であり、中央部の溝は全体が被熱により、赤変している。

覆土 3層からなり、各層が明確に分層されることから、人為堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子多量, ローム粒子中量

所見 本跡は、下層から焼土粒子・炭化物が多量に出土していることから、中世またはそれ以前の火葬土坑とした。



第259図 第3261号土坑実測図

### 第3278号土坑 (第260図)

位置 調査区の中央部, F11g区。

重複関係 第3292・3293号土坑と重複する。第3292号土坑に掘り込まれているため、本跡の方が古い。

規模と形状 東に燃焼部, 西に通気溝が位置している。通気溝と燃焼部の一部は第3292号土坑と重複するため遠存しない。燃焼部は長軸(0.70)m, 短軸0.45mの隅丸長方形と思われる。通気溝は長さ(0.86)m, 幅0.46mである。土層に地山がブロック状に残ることから、通気溝はトンネル状だったと考えられる。

主軸方向 N-58°-W

壁面 燃焼部は深さ34cmほどでほぼ垂直に立ち上がり、西壁は赤変硬化している。通気溝の断面形は「U」字状である。

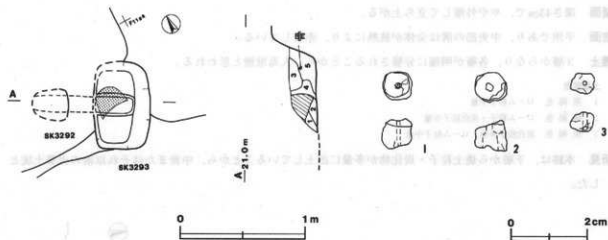
底面 燃焼部は平坦である。通気溝付近は、被熱により赤変している。

覆土 5層からなり、明確に分層されることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・小骨片少量, 炭化物微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化物・小骨片少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・焼骨片多量, 炭化物少量
- 5 黒色 炭化物・焼骨片多量

遺物 多量の骨片が4・5層から出土している。第260図1～3は土製数珠玉で、5層から出土している。  
 所見 本跡は、骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から、中世の火葬土坑とした。



第260図 第3278号土坑・出土遺物実測図

第3278号土坑出土遺物観察表 (第260図)

番号	種類	計測値(cm)			重量(g)	残存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
		径	厚さ	孔径				
1	土製数珠玉	0.8	0.8	0.1	0.02	—	二次焼成痕	DP12, 第5層
2	土製数珠玉	0.9	0.9	0.2	0.19	—	二次焼成痕	DP13, 第5層
3	土製数珠玉	0.7	0.6	0.1	0.09	—	二次焼成痕	DP14, 第5層

第3296号土坑 (第261図)

位置 調査区の中央部, F11h区。

規模と形状 長軸 [2.70] m, 短軸1.23mの長方形である。底面の中央部には長さ2.60m, 幅26cm, 深さ10cmほどの溝がある。長軸方向の端部にはビット状の掘り込みがある。

主軸方向 N-68°W

壁面 深さ45cm, ほは垂直に立ち上がる。

底面 平坦であり, 中央部の溝は, 全体が被熱により赤変している。

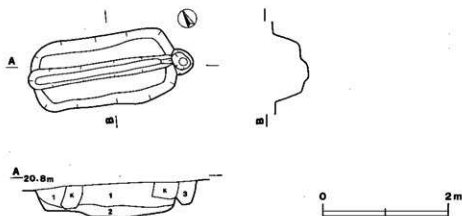
覆土 3層からなり, 各層が明確に分層されることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・粒子中量, 炭化物微量
- 2 暗赤褐色 炭化物多量, 焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量

所見 本跡は、底面の溝が被熱し, 下層から焼土粒子・炭化物が多量に出土していることから, 中世の火葬土坑とした。





第261図 第3296号土坑実測図

第3493号土坑（第262図）〈付章参照〉

位置 調査区の中央部，F11b区。

重複関係 本跡は，第3245号土坑に掘り込まれていることから，本跡の方が古い。

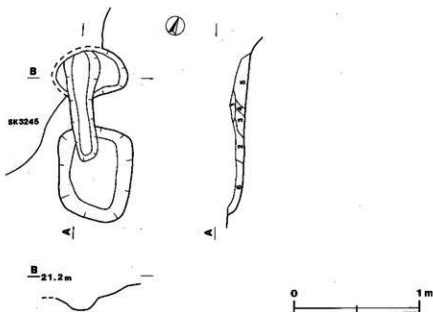
規模と形状 南に開口部，北に燃焼部，中央に通気溝が位置する。燃焼部の一部は第3245号土坑と重複するため遺存しない。燃焼部は長径〔0.60〕m，短径0.38mの楕円形と考えられる。開口部は長軸0.75m，短軸0.62mの隅丸長方形である。通気溝は長さ〔0.90〕m，幅0.12mである。土層に地山がブロック状に残ることから，通気溝はトンネル状だったと考えられる。

主軸方向 N-21°-W

壁面 燃焼部，開口部の深さは10cmほどで緩やかに立ち上がる。通気溝の深さは18cm，断面形は「U」字状である。

底面 燃焼部は皿状である。通気溝付近は，被熱により赤変している。

覆土 6層からなり，明確に分層されることから，人為堆積と思われる。



第262図 第3493号土坑実測図

土層解説

- 1 暗赤褐色 炭化物中量、焼土粒子・骨片少量
- 2 暗赤褐色 炭化物・焼土粒子中量
- 3 黒色 炭化物多量、焼土粒子・骨片微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 5 黒色 炭化物多量、焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

所見 本跡は、骨片・焼土・炭化物が出土していることや形状から、中世の火葬土坑とした。

ウ 地下式塚

第39号地下式塚<SK-3233> (第263図)

位置 調査区の中央部, F11a3区。

主軸方向 N-18°-E

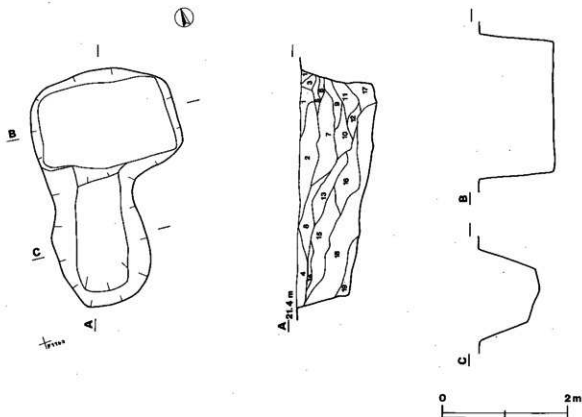
竪坑 竪坑、主室ともに崩落しているため、明確な区分はできない。竪坑の底面は長軸(1.10)m、短軸80cmほどの長方形と思われる。確認面からの深さは80~90cmで、ほぼ平坦である。

主室 底面は、長軸2.10m、短軸1.35mの長方形である。確認面から底面までの深さは、1.20mである。竪坑に向かって、緩やかなスロープ状になっている。

壁 竪坑・主室ともに緩やかに立ち上がる。

覆土 19層からなる。土が竪坑から主室へ流れ込んだ後、主室の天井が崩落したような堆積状況を示している。

9・10・16層はロームブロックが主体となっていることから、天井部が崩落したものと考えられる。



第263図 第39号地下式塚実測図

土層解説

- |        |                 |        |               |
|--------|-----------------|--------|---------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子微量         | 11 褐色  | ローム小ブロック・粒子多量 |
| 2 黒褐色  | ローム粒子少量         | 12 黒褐色 | ローム小ブロック少量    |
| 3 黒褐色  | ローム小ブロック・粒子少量   | 13 褐色  | ロームブロック・粒子中量  |
| 4 暗褐色  | ローム粒子少量         | 14 暗褐色 | ロームブロック・粒子少量  |
| 5 黒褐色  | ローム粒子微量         | 15 暗褐色 | ローム粒子少量       |
| 6 褐色   | ローム粒子多量         | 16 暗褐色 | ロームブロック多量     |
| 7 黒色   | ローム粒子・炭化物微量     | 17 褐色  | ロームブロック・粒子少量  |
| 8 黒褐色  | ローム粒子少量         | 18 暗褐色 | ロームブロック・粒子少量  |
| 9 褐色   | ロームブロック・ローム粒子多量 | 19 暗褐色 | ロームブロック・粒子中量  |
| 10 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子少量   |        |               |

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

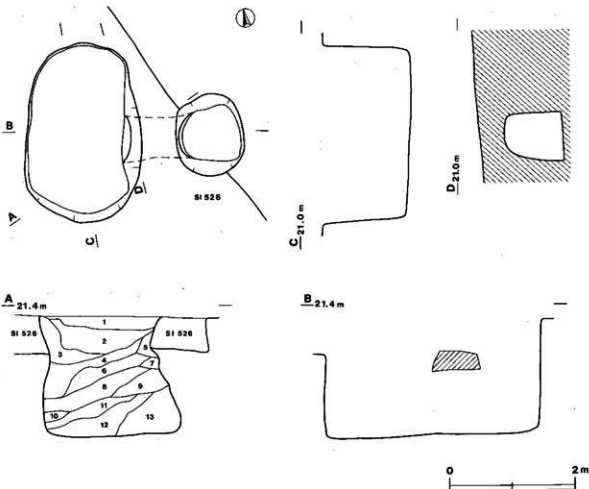
第40号地下式墳<SK-3217> (第264図)

位置 調査区の中央部, F10da区。

重複関係 本跡が第526号住居跡を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

主軸方向 N-79°-W

竪坑 竪坑と主室の間は天井部が残存しており、長さ50cmほどのトンネルでつながっている。トンネル部の底面は、緩やかなスロープ状になっている。上面は、長軸1.27m、短軸1.07mの長方形、底面は長軸1.07m、



第264図 第40号地下式墳実測図

短軸0.97mの長方形である。確認面からの深さは1.80mである。

主室 底面は、長軸2.65m、短軸1.51mの長方形である。確認面から底面までの深さは、1.90mである。

壁 堅坑・主室ともに、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 13層からなり、主室から堅坑へ流れ込むような堆積状況を示している。9・13層はロームブロックが主体となっていることから、天井部が崩落したものと考えられる。

土層解説

- |                    |                         |
|--------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化物微量  | 8 黒褐色 ローム粒子微量           |
| 2 暗褐色 ロームブロック・粒子少量 | 9 褐色 ロームブロック・粒子多量       |
| 3 黒褐色 ローム粒子微量      | 10 褐色 ロームブロック中量、ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・粒子少量 | 11 黒褐色 ロームブロック・粒子少量     |
| 5 暗褐色 ロームブロック・粒子中量 | 12 褐色 ロームブロック・粒子中量      |
| 6 黒褐色 ローム粒子中量      | 13 褐色 ロームブロック・粒子多量      |
| 7 暗褐色 ロームブロック・粒子中量 |                         |

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

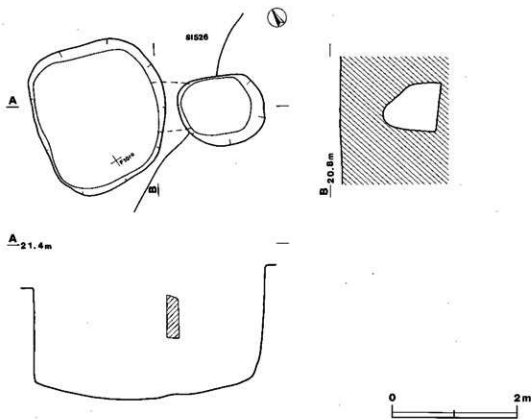
所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。また、第41号地下式墳と規模・長軸方向とも類似することから、関連が考えられる。

第41号地下式墳<SK-3218> (第265図)

位置 調査区の中央部、F10e区。

重複関係 本跡が第526号住居跡を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

主軸方向 N-66°-W



第265図 第41号地下式墳実測図

**竪坑** 竪坑と主室の間は天井が残存しており、長さ25cmほどのトンネルでつながっている。上面は、長軸1.35m、短軸1.13mの長方形、底面は、長軸1.10m、短軸0.90mの長方形である。確認面からの深さは1.80mである。平坦である。

**主室** 底面は、長軸2.04m、短軸1.98mの長方形で、中央部がわずかにくぼんでいる。確認面から底面までの深さは、1.86~2.10mである。竪坑付近の底面は、竪坑に向かって緩やかなスロープ状になっている。

**壁** 竪坑・主室ともに、ほぼ垂直に立ち上がる。

**遺物** 流れ込みと思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

**所見** 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

#### 第42号地下式墳<SK-3238> (第266図)

**位置** 調査区の中央部、F11h1区。

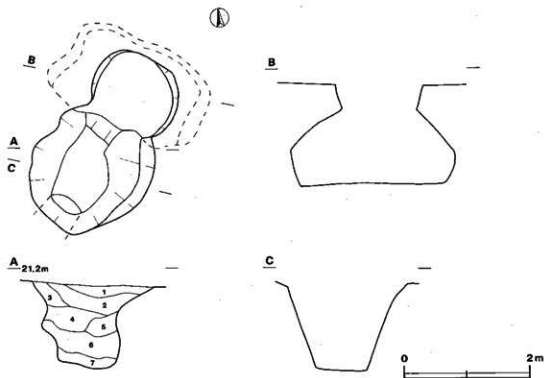
**主軸方向** N-39°-E

**竪坑** 崩落のため、上面の本米の形状は不明である。底面は長径 [1.10] m、短径0.86mの楕円形で、平坦である。確認面からの深さは1.30mである。

**主室** 内部はドーム状である。底面は、長軸2.25m、短軸1.46mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは、1.58mである。竪坑との間には10cmほどの段差を持つ。

**壁** 竪坑は、緩やかに立ち上がる。

**覆土** 7層からなる。自然堆積である。



第266図 第42号地下式墳実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓域との関連性があるものと思われる。

第43号地下式墳<SK-3304> (第267図)

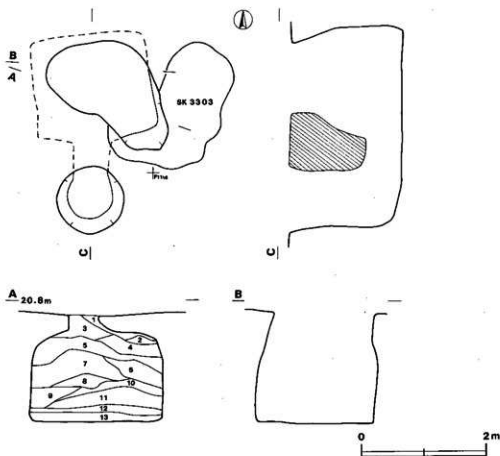
位置 調査区の東部, F11g5区。

主軸方向 N-0°

竪坑 上面は、径1.10mの円形である。底面は径0.75mの円形で、平坦である。確認面からの深さは、1.70mである。

主室 底面は、長軸1.86m、短軸1.63mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは、1.78mである。

壁 竪坑・主室ともに、ほぼ垂直に立ち上がる。



第267図 第43号地下式墳実測図

覆土 13層からなる。12・13層はロームブロックが主体となっていることから、天井部が崩落したものと考えられる。堆積状況から、天井部の崩落后、自然堆積していったと考えられる。

土層解説

- |       |               |        |                    |
|-------|---------------|--------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子少量 | 8 褐色   | ローム中ブロック・粒子多量      |
| 2 褐色  | ロームブロック多量     | 9 暗褐色  | ローム粒子中量            |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子中量 | 10 黒褐色 | ローム粒子少量            |
| 4 暗褐色 | ローム中ブロック・粒子中量 | 11 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ローム中ブロック・粒子少量 | 12 褐色  | ローム小ブロック・粒子多量      |
| 6 褐色  | ローム中ブロック・粒子多量 | 13 褐色  | ローム中ブロック・粒子多量      |
| 7 暗褐色 | ローム中ブロック・粒子少量 |        |                    |

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

第44号地下式墳<SK-3288> (第268図)

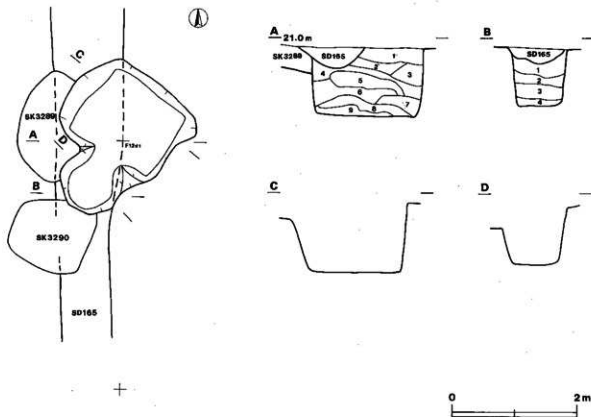
位置 調査区の中央部、F12d区。

重複関係 本跡が第3289号土坑を掘り込み、第165号溝に掘り込まれていることから、第3289号土坑より新しく、第165号溝より古い。

主軸方向 N-38°-E

竪坑 上面は、径1.00mほどの円形である。底面は、長径0.90m、短径0.72mの楕円形で、平坦である。確認面からの深さは0.90mである。

主室 底面は、長軸1.46m、短軸1.26mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは、1.10mである。



第268図 第44号地下式墳実測図

壁 竪坑・主室ともに、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 9層からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 7 黒褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 9 黒色 ローム粒子微量

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

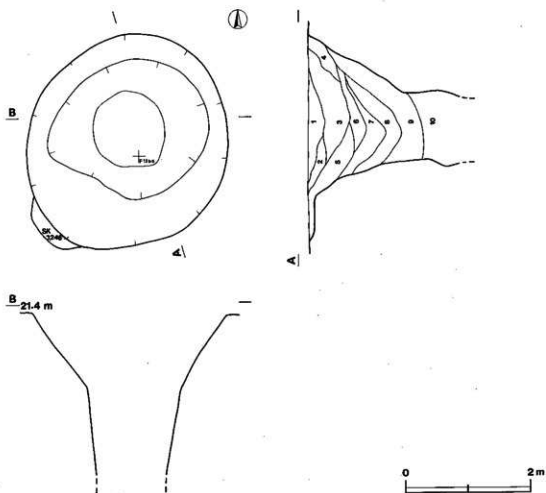
所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

エ 井戸跡

第36号井戸跡 (第269図)

位置 調査区の中央部, F11a区。

重複関係 西南部において第324号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。



第269図 第36号井戸跡実測図



規模と形状 上面は長径3.55m、短径3.20mの楕円形、中位から下は径1.00mの円形を呈している。断面形は上面から1.50mほど掘り込んだ位置までは漏斗状を呈し、以下は円筒状を呈する。2.00mまで掘り下げたが、湧き水のため底面まで調査することはできなかった。

覆土 10層からなる。レンズ状の堆積を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- |       |               |       |                 |
|-------|---------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化物微量   | 6 黒褐色 | ローム粒子・灰白色粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量       | 7 暗褐色 | ローム粒子中量         |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量  | 8 暗褐色 | ローム粒子多量         |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子中量 | 9 褐色  | ローム粒子多量         |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量       | 10 褐色 | ローム粒子中量         |

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量が出土している。

所見 時期を推定する遺物が出土していないため、本跡の時期については不明である。

オ 土 坑

第3221号土坑 (第270・271図)

位置 調査区の中央部、F11d区。

重複関係 西南部において第3279号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸2.35m、短軸2.21mほどの隅丸方形である。

長軸方向 N-25°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

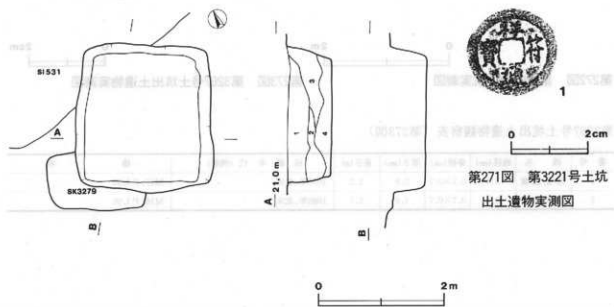
覆土 4層からなる。ブロック状の堆積をしていることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- |       |               |        |                    |
|-------|---------------|--------|--------------------|
| 1 褐色  | ローム中ブロック・粒子中量 | 3 暗褐色  | ローム中ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック・粒子中量 | 4 黒暗褐色 | ローム中ブロック・粒子中量      |

遺物 第271図1の古銭は、覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から中世と考えられる。性格は不明である。



第271図 第3221号土坑  
出土遺物実測図

第270図 第3221号土坑実測図

第3221号土坑出土遺物観察表（第271図）

番号	銭名	銭径(cm)	穿径(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	初鑄年代(西暦)	備考
1	祥符元寶	2.5	0.6×0.6	1.0	2.3	1009年,北宋	M14, P. L90

第3267号土坑（第272・273図）

位置 調査区の中央部, F11f区。

重複関係 西部において第3268号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸1.71m, 短軸1.05mほどの隅丸長方形である。

長軸方向 N-85°-W

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

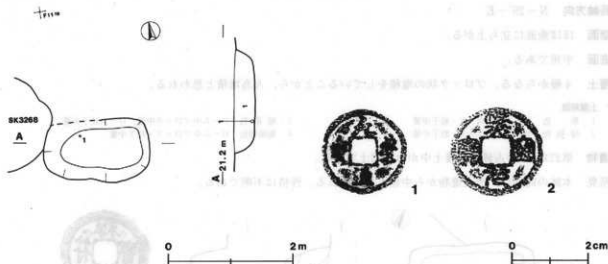
覆土 単一層である。一度に埋め戻された層であることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子少量

遺物 第273図1・2は古銭である。1は南西コーナー部の覆土下層から, 2は覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から中世と考えられる。性格は不明である。

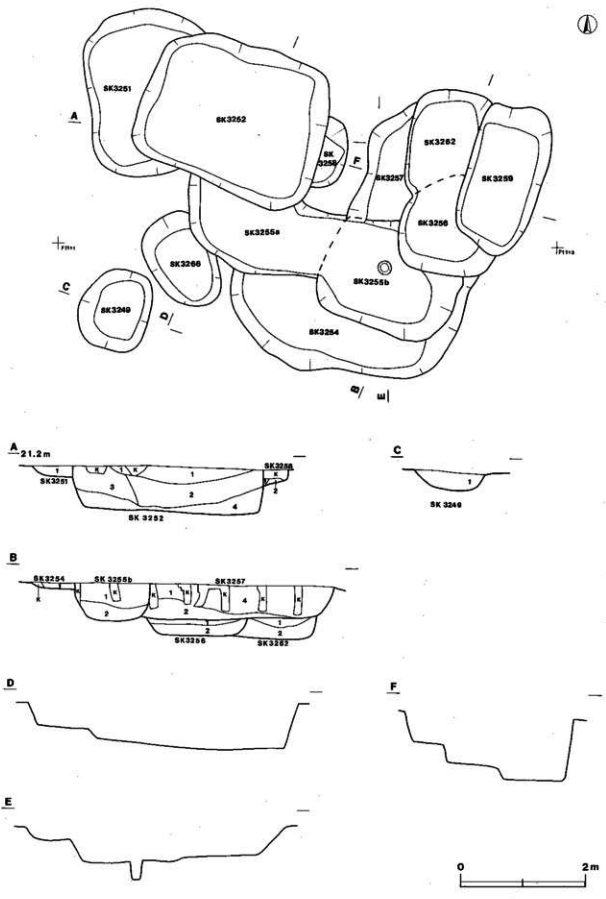


第272図 第3267号土坑実測図

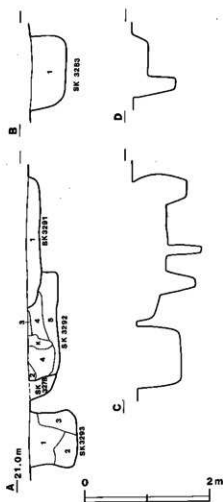
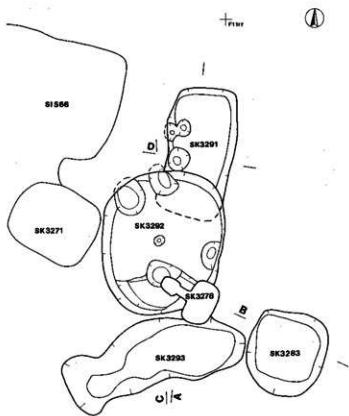
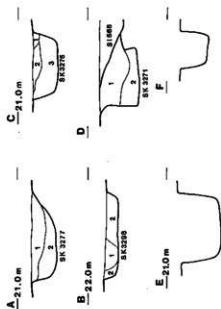
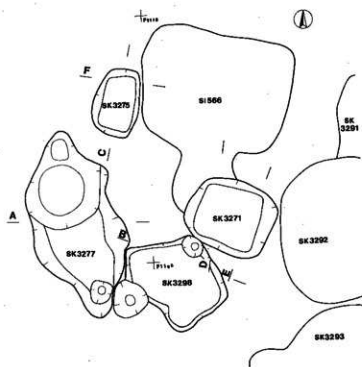
第273図 第3267号土坑出土遺物実測図

第3267号土坑出土遺物観察表（第273図）

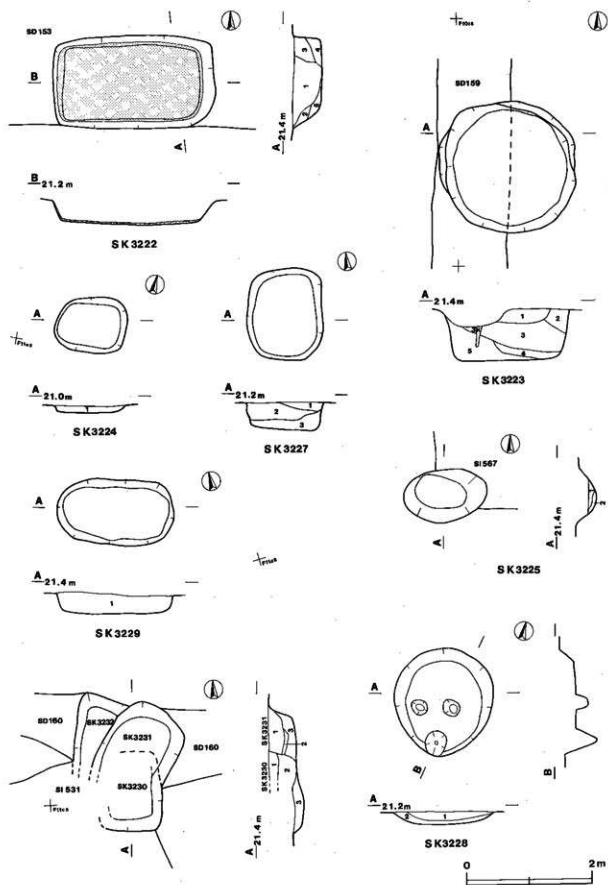
番号	銭名	銭径(cm)	穿径(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	初鑄年代(西暦)	備考
1	元豊通寶	2.4	0.7×0.7	0.9	2.2	1076年,北宋	M15, P. L90
2	無寧元寶	2.5	0.7×0.7	1.0	2.7	1068年,北宋	M16, P. L90



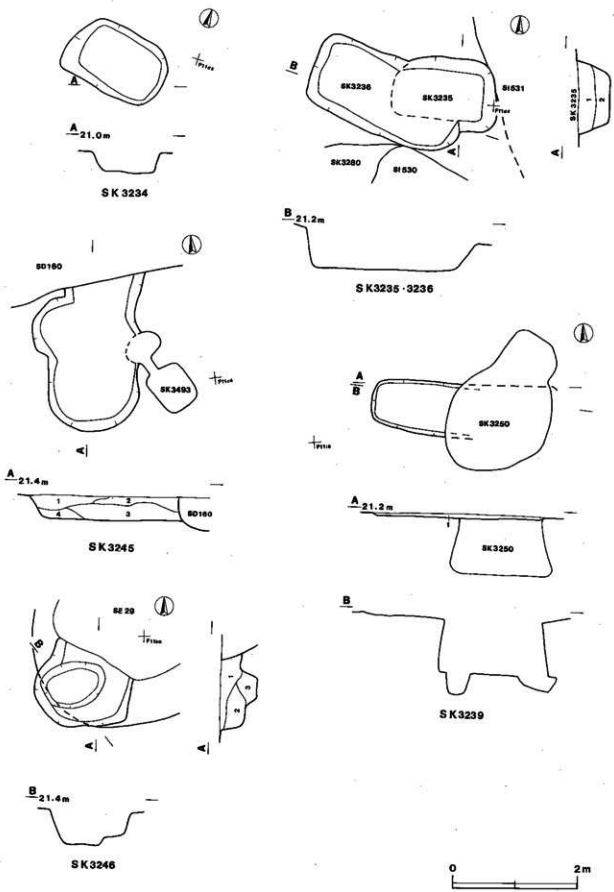
第274图 土坑实测图(19)



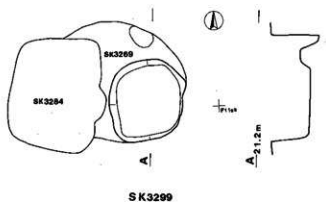
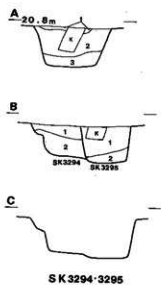
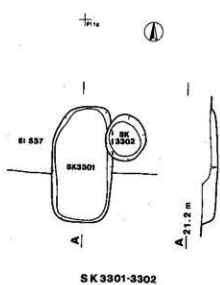
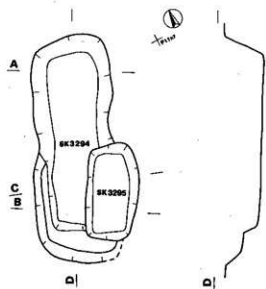
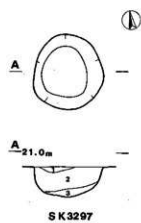
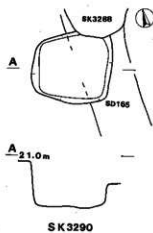
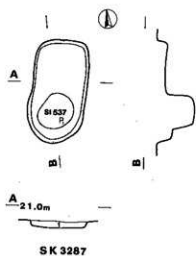
第275图 土坑实测图(20)



第276圖 土坑実測図(2)



第277图 土坑实测图(2)



第278图 土坑实测图(2)

表8 土坑一覽表(第6遺構群)

土坑 番号	位置	長任方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				距離×距離(間)	深さ(m)					
3222	F11b7	N-86°-W	長方形	2.61×1.49	35	傾斜	平坦	人為		
3223	F10f8	N-0°	円形	2.17×2.11	83	外傾	平坦	人為		
3224	F11d5	N-85°-E	長方形	1.12×0.90	12	傾斜	平坦	不明		
3225	F11b5	N-90°	楕円形	1.32×0.85	31	傾斜	缸状	不明	S1567→本跡	
3227	F11c5	N-8°-E	長方形	1.47×1.19	46	外傾	平坦	人為		
3228	F11d6	N-2°-W	楕円形	1.75×1.61	21	傾斜	平坦	人為		
3229	F11c7	N-69°-W	楕円形	1.86×1.65	31	外傾	平坦	人為		
3230	F11b5	N-0°	不明	-	46	外傾	平坦	不明	SK3231→本跡, S1531との新旧不明	
3231	F11b5	N-24°-E	不明	-×1.18	45	外傾	平坦	不明	本跡→SK3230	
3232	F11b5	N-15°-E	不明	-	-	-	-	不明		
3234	F11d4	N-75°-W	長方形	1.64×1.08	33	外傾	平坦	不明		
3235	F11c3	N-90°	長方形	1.61×(1.19)	47	傾斜	平坦	不明		
3236	F11c3	N-70°-W	長方形	2.61×1.29	67	外傾	平坦	不明		
3239	F10h8	N-80°-W	[長方形]	(2.48)×(3.08)	6	傾斜	平坦	不明	SK3250→本跡	
3245	F11b5	N-12°-E	不明	(2.42)×1.44	39	傾斜	平坦	不明	本跡→SD160	
3246	F11b5	-	不明	1.56×(1.25)	54	外傾	平坦	不明	骨片	
3249	F11h1	N-22°-E	楕円形	1.35×1.15	30	傾斜	缸状	人為		
3251	F11g1	N-11°-W	隅丸長方形	2.65×(0.70)	18	傾斜	平坦	人為	本跡→SK3252	
3252	F11g1	-	不明	-	75	垂直	平坦	人為	SK3251, SK3258→本跡	
3254	F11h1	-	不明	3.60×-	10	傾斜	平坦	人為	不明	
3255a	F11g1	-	不明	-	-	-	-	不明		
3255b	F11h1	-	[隅丸長方形]	(2.10)×(1.10)	60	傾斜	平坦	人為	SK3257→本跡	
3256	F11g1	-	不定形	1.65×-	85	垂直	平坦	人為	SK3262→本跡→SK3257	
3257	F11g1	-	不定形	3.06×-	50	傾斜	平坦	人為	SK3256→本跡→SK3255b	
3258	F11g1	-	不明	1.20×-	30	傾斜	缸状	人為	本跡→SK3252	
3259	F11g1	N-18°-E	隅丸長方形	2.35×1.22	105	垂直	平坦	人為	不明	
3260	F12e2	N-1°-W	隅丸長方形	2.01×1.00	67	外傾	缸状	不明	本跡→SD161	
3262	F11g1	N-2°-E	[長方形]	-×1.10	90	傾斜	平坦	人為	本跡→SK3256	
3263	F11d7	N-16°-E	長方形	1.97×1.19	176	袋状	平坦	不明	本跡→SD160, S1527との新旧不明	
3264	F11g1	N-70°-W	長方形	3.03×2.13	128	外傾	平坦	不明		
3265	F11f1	N-18°-E	不明	1.74×(0.94)	51	垂直	平坦	不明	SK3276→本跡, SK3264との新旧不明	
3266	F11h1	N-30°-W	隅丸長方形	1.60×(1.10)	41	傾斜	平坦	人為	不明	
3268	F11f1	N-90°	隅丸長方形	2.09×1.61	60	外傾	平坦	不明		
3271	F11f4	N-70°-W	長方形	1.40×1.15	65	垂直	平坦	人為	本跡→SK3270	
3274	F11g5	N-4°-W	長方形	1.74×1.15	28	傾斜	缸状	不明		
3275	F11f1	N-13°-E	隅丸長方形	1.10×0.80	40	傾斜	平坦	人為	骨片	
3276	F11f1	N-61°-W	長方形	2.17×1.54	126	垂直	平坦	不明	本跡→SK3265	
3277	F11f1	-	不定形	3.10×1.50	40	傾斜	平坦	人為		
3279	F11d4	N-68°-W	長方形	1.55×0.92	12	傾斜	平坦	不明		
3280	F11d1	N-90°	不明	1.39×(1.14)	25	傾斜	平坦	不明		
3282	F11g8	N-31°-E	楕円形	1.63×1.47	29	傾斜	起伏	不明		
3283	F11g7	N-17°-E	長方形	1.45×1.25	55	傾斜	缸状	人為		
3284	F11f9	N-90°	不定形	1.70×1.53	93	外傾	平坦	不明		
3285	F11g8	N-76°-W	隅丸長方形	1.89×1.52	72	外傾	平坦	不明		
3286	F11f6	N-5°-E	長方形	-	-	-	-	不明		



土坑 番号	位 置	長短方向 (長軸方向)	平面形	縦 横		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				距離×距離(㎡)	高さ(m)					
3287	F11ee	N-11°-E	不 明	1.65 × 0.96	22	垂直	平坦	不明		
3289	F11de	N-74°-W	方 形	1.25 × 1.12	71	垂直	平坦	不明		SD165, SK3288との新旧不明
3291	F11fe	N-9°-E	長 方 形	2.05 × 1.05	20	垂直	皿状	人為		SK3092→本跡
3292	F11fe	N-27°-E	楕 円 形	2.40 × 2.00	48	垂直	平坦	自然		
3293	F11ge	-	不 定 形	-	80	垂直	凹凸	人為		本跡→SK3278
3294	F11he	N-25°-E	長 方 形	3.64 × 1.27	56	外傾	平坦	不明		
3295	F11he	N-30°-E	長 方 形	1.58 × 0.94	64	垂直	平坦	不明		
3297	F11ie	N-0°	不 明	12.1 × 11.2	49	垂直	皿状	不明		
3298	F11ge	-	不 定 形	-	20	緩斜	平坦	人為		
3299	F11ge	N-21°-E	円 形	1.00 × 0.94	63	外傾	平坦	不明		
3301	F11fe	N-5°-E	楕 円 形	1.85 × 1.00	23	外傾	平坦	不明		
3303	F11ge	N-62°-E	楕 円 形	2.08 × 1.12	50	外傾	平坦	不明		
3306	F11ie	N-14°-E	円 形	0.98 × 0.89	31	外傾	平坦	不明		
3312	F11fe	-	不 明	1.39 × (1.26)	42	緩斜	平坦	不明		本跡→S1569, SD174との新旧不明
3313	F11he	N-0°	円 形	0.90 × 0.83	15	緩斜	平坦	不明		
3314	F11ie	N-15°-E	楕 円 形	1.27 × 1.02	26	外傾	平坦	不明		
3494	F11cs	N-15°-W	隅丸長方形	0.74 × 0.59	13	緩斜	平坦	不明		SK3493との新旧不明

#### (4) その他の遺構

ここでは、遺構群として取り扱わなかった遺構の中で、時期が中世と考えられる遺構と遺物について記述する。

##### ア 地下式墳

##### 第37号地下式墳<SK-3128> (第279図)

位置 調査区の西部, E10ie区。

主軸方向 N-90°-E

竪坑 上面は、長軸0.99m, 短軸0.92mの方形, 底面は、長軸 [1.02] m, 短軸0.94mの方形である。確認面からの深さは1.88mである。

主室 底面は、長軸2.00m, 短軸1.38mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは、2.20mである。竪坑に向かって、緩やかなスロープ状になっており、壁際には10cmほどの段差を持つ。竪坑と主室は長さ50cmほどのトンネルでつながっている。

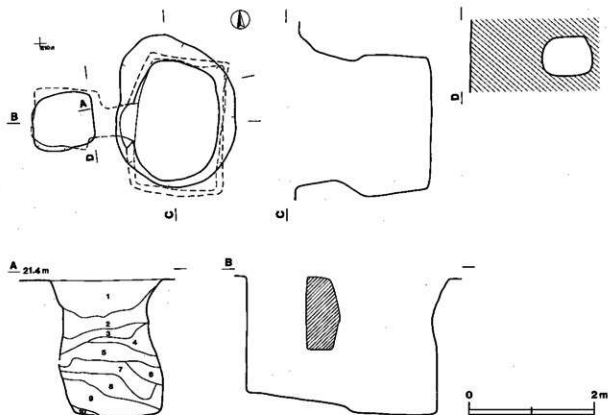
壁 竪坑・主室ともに、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 10層からなる。自然堆積と考えられる。

##### 土層解説

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量       | 6 褐色 ローム中ブロック・粒子多量 |
| 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量 | 7 褐色 ローム小ブロック・粒子多量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量   | 8 暗褐色 ロームブロック・粒子多量 |
| 4 褐色 ロームブロック・粒子多量   | 9 褐色 ロームブロック・粒子多量  |
| 5 暗褐色 ロームブロック・粒子中量  | 10 黒褐色 ローム粒子少量     |

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。



第279図 第37号地下式墳実測図

所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

第38号地下式墳<SK-3137> (第280図)

位置 調査区の西部, F10d区。

主軸方向 N-3°-E

竪坑 崩落のため、竪坑の平面形は明確ではない。竪坑の底面は、長軸1.10m, 短軸 [0.60] mである。確認面からの深さは1.90mである。

主室 底面は、長軸1.40m, 短軸 (1.20) mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは、1.90mである。竪坑に向かって、緩やかなスロープ状になっている。

壁 竪坑・主室ともに、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 12層からなる。10層はロームブロックが主体となっていることから、天井部が崩落したものと考えられる。自然堆積である。

土層解説

1 褐色 ローム粒子少量・炭化物微量

2 暗褐色 ローム粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子中量

4 暗褐色 ローム粒子微量

5 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

6 暗褐色 ローム粒子少量

7 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

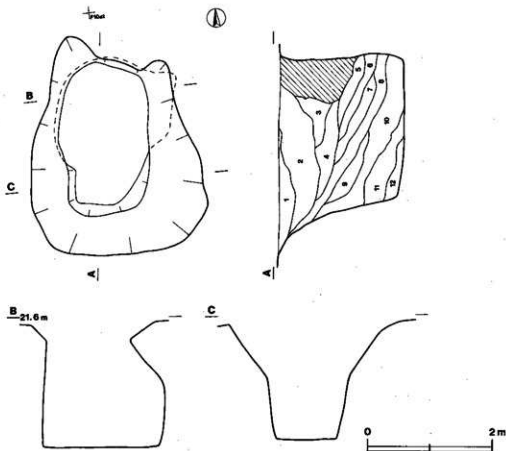
8 暗褐色 ローム粒子少量

9 黒褐色 ローム粒子少量

10 黒褐色 ローム大・中ブロック・粒子多量

11 暗褐色 ローム粒子少量

12 褐色 ローム粒子多量



第280図 第38号地下式墳実測図

遺物 流れ込みと思われる縄文土器片少量と土師器片少量が出土している。

所見 時期を推察する遺物は出土していない。性格については、付近に中世の墓塚と思われる遺構が数多く確認されていることから、墓塚との関連性があるものと思われる。

## 5 時期不明の遺構

ここでは、時期や性格が不明であるもの、または先に述べた遺構群としてとらえることのできない遺構について記述する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第523号住居跡（第281図）

位置 調査区の中央部、G10h区。

重複関係 第522号住居跡、第3155・3156号土坑に掘り込まれていることから、いずれより本跡の方が古い。

規模と平面形 現存値は南北（4.30）m、東西（2.58）mである。東部は調査区域外であるため、平面形は不明である。

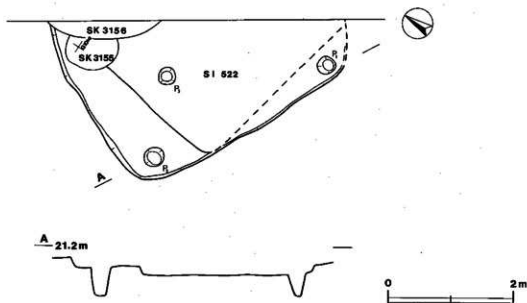
床 大部分を第522号住居跡に掘り込まれている。残存部は平坦である。

ピット 3か所（P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は径28～30cmの円形で、深さはP<sub>1</sub>が40cm、P<sub>3</sub>が43cmである。柱穴の可能性もあるが、いずれも性格は不明としておく。

覆土 不明である。

遺物 土師器細片、縄文土器細片が少量出土している。

所見 本跡は、住居の形状が不明であり、出土遺物との関連も不明であるため時期は不明である。



第281図 第523号住居跡実測図

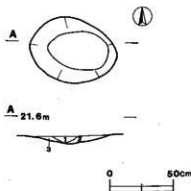
(2) 焼土遺構

第4号焼土遺構 (第282図)

位置 調査区の北部, D11j区。

規模と平面形 長径69cm, 短径50cmの楕円形で, ロームを6cmほど掘り込んでいる。全体に被熱し, 赤変硬化している。

長径方向 N-76°-W



第282図 第4号焼土遺構実測図

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化物微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化物微量

所見 本跡は, 時期・性格とも不明である。

(3) 溝

第154号溝 (第283・284図, 付図)

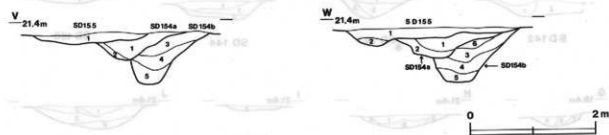
位置 調査区の中央部, G9a0からG11e0区。

重複関係 第155号溝に掘り込まれ, 第518・539・542号住居跡を掘り込んでいることから, 第155号溝より古く, 第518・539・542号住居跡より新しい。

規模と形状 G9a0区から東方向へ直線的に約80m延び, G11e0区付近で90°折れ南方向へ延びる。検出した部分の規模は, 上幅2.0m, 下幅0.4m, 深さ85cm, 全長(82)mである。断面形は葉研瓶状である。なお, 南

方向延長上には第184号溝が存在する。平面と断面の形状・覆土が同様であることから、同一の溝と考えられる。

覆土 6層からなる。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と思われる。



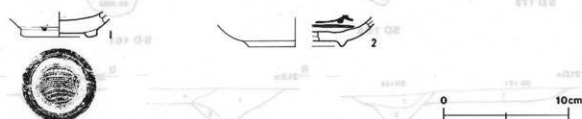
第283図 第154号溝土層断面図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

遺物 第284図1の椀、2の小皿はいずれも覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期・性格については、不明である。

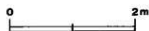
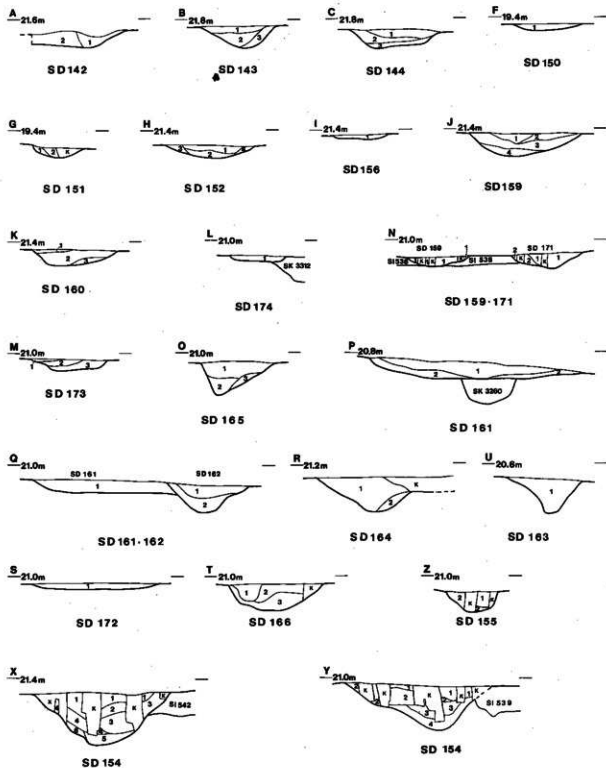


第284図 第154号溝出土遺物実測図

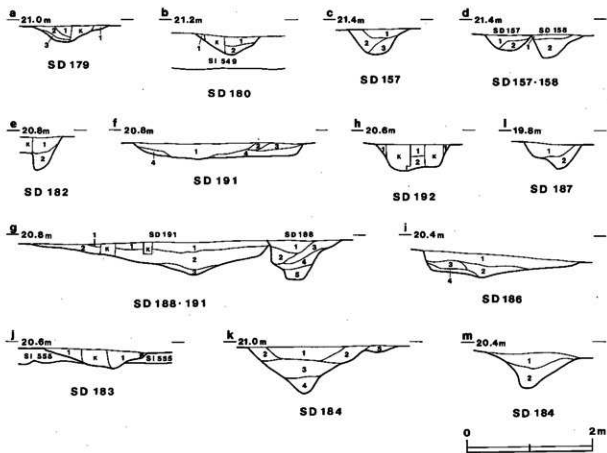
第154号溝出土遺物観察表 (第284図)

番号	器形	器質	計測値 (cm)				残存率	胎土色調	絵付・施画	文様・特徴	産地・年代	備考
			A	B	D	E						
1	椀	陶器	—	(2.0)	6.0	0.4	10%	こげ褐色 黄トリア色	内面灰釉 外面無釉	灰釉に貫入が目立つ。	瀬戸・美濃系	P314, P L88 覆土
2	小皿	磁器	—	(2.3)	(7.4)	0.4	5%	灰黄色 灰白色	染付	二葉團扇。	肥前系 18C中	P315, P L88 覆土

その他の溝



第285図 その他の溝土層断面図(1)

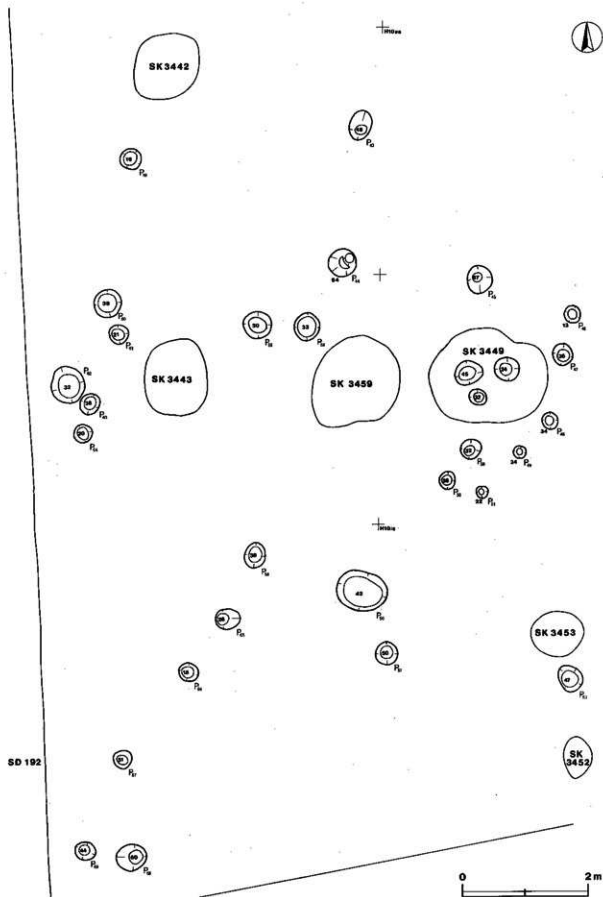


第286図 その他の溝土層断面図(2)

(4) ビット群

第2号ビット群 (第287図)

ここで述べるビット群は、第5遺構群の南に位置する。付近の遺構との関わりは不明である。また、ビットの配列等も規則性はない。時期・性格等は不明である。



第287図 第2号ピット群実測図



(5) 不明遺構

調査区の西部、第525号住居跡の西側に位置する。粘土質の土坑のような遺構であり、壁や床等掘り込みは確認されない。また、遺構に伴うと考えられる遺物も出土していないことから、不明遺構としてその特徴を記載する。

第1号不明遺構<SX-1> (第288図)

位置 調査区の西部、H10h区。

重複関係 第3183号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長径0.90m、短径0.75mほどの楕円形である。中央部を除き、ほぼ全体が粘土によって構築されている。底面の東・西部には径10cmほどのわずかなくぼみがある。

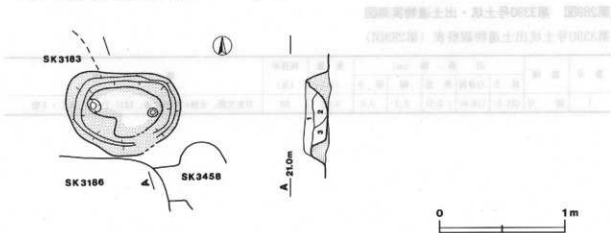
長径方向 N-90°

覆土 3層からなる。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 粘土ブロック・粒子多量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

所見 本跡の時期は、付近の土坑との重複関係から判断すると、中世の遺構よりは上層にあることから、中世以降の遺構と考えられる。性格については、不明である。



第288図 第1号不明遺構実測図

(6) 土坑

第3390号土坑 (第289図)

位置 調査区の南部、I11b区。

規模と形状 長径0.85m、短径(0.75)mほどの楕円形と思われる。西側は覆土が不明瞭であるため、壁を確認できなかった。

長径方向 N-90°

壁面 緩やかに立ち上がる。

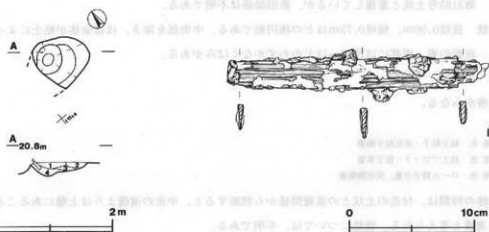
底面 平坦な底面があり、北側はさらに円形にくぼむ。

覆土 4層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量, 焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 第289図1は短刀で, 第1・4層付近から刃先を下にした状態で出土している。  
 所見 本跡の時期や性格については, 出土遺物から特定するのは困難である。



第289図 第3390号土坑・出土遺物実測図

第3390号土坑出土遺物観察表 (第289図)

番号	器種	計測値 (cm)					重量 (g)	残存率 (%)	備考
		長さ	刀身長	茎長	幅	厚さ			
1	短刀	(21.1)	(18.6)	(2.5)	2.3	0.5	0.02	80	刃先欠損。全体に木片付着。M17, P.L.90, 第1・4層

表9 その他の土坑一覧表

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		深 さ (cm)	壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係 (古→新)
				短径	短径						
2987	D10c	N-86°-W	楕円形	(1.54) × 1.15	21	緩斜	平坦	自然			
3132	E10i	N-14°-E	長方形	1.89 × 1.14	53	外傾	平坦	人為			
3134	E10i	N-80°-W	長方形	1.59 × 1.18	34	外傾	平坦	人為			
3136	F10b	N-62°-W	隅丸長方形	1.30 × 0.90	21	緩斜	平坦	人為			
3138	E10j	N-3°-W	方 形	(2.00) × 1.86	60	垂直	平坦	不明			
3139	E10i	N-28°-W	円 形	1.57 × 1.49	27	緩斜	平坦	自然			
3143	E10j	N-11°-W	楕円形	1.15 × 0.81	40	緩斜	皿状	自然			
3153	F10e	N-33°-E	楕円形	0.93 × 0.73	—	—	—	—		S1515→本跡	
3154	F9h	N-19°-W	楕円形	0.82 × 0.71	45	外傾	平坦	不明			
3305	G12b	N-13°-E	楕円形	1.76 × 1.19	—	—	—	—			
3307	G11a	N-90°	長方形	2.74 × 1.35	25	外傾	平坦	不明			
3308	G11a	N-65°-W	楕円形	1.60 × 1.14	29	垂直	平坦	自然			
3309	G11b	N-82°-W	不定形	1.36 × 1.33	33	外傾	平坦	不明			
3315	G11a	N-0°	円 形	0.58 × 0.56	—	—	—	—			
3317	G11a	N-6°-E	長方形	1.33 × 1.03	32	外傾	平坦	人為			
3318	G11b	—	不 明	0.91 × (0.60)	8	緩斜	平坦	人為			
3319	G11b	N-0°	(長方形)	2.23 × (1.95)	59	外傾	平坦	不明			
3320	G11b	N-81°-E	長方形	2.28 × 1.80	80	外傾	平坦	不明			
3321	G11a	N-45°-W	楕円形	0.70 × 0.50	34	緩斜	皿状	人為			
3322	G11f	N-13°-W	楕円形	2.53 × 2.40	43	緩斜	平坦	人為			
3324	G11b	N-84°-W	楕円形	1.35 × 1.00	9	緩斜	平坦	不明			
3327	G11i	N-1°-E	楕円形	2.03 × 1.67	60	外傾	平坦	人為			
3328	G11i	N-75°-W	楕円形	1.93 × 1.59	47	緩斜	平坦	不明			
3329	G11j	N-0°	隅丸長方形	1.65 × 1.48	40	外傾	平坦	不明			
3330	G11j	N-3°-E	楕円形	1.78 × 1.05	29	緩斜	平坦	不明			
3331	H11a	N-5°-E	長方形	1.71 × 1.29	55	外傾	平坦	不明			
3332	H11a	N-78°-W	長方形	2.35 × 1.36	40	外傾	平坦	不明		SK3345→本跡	
3333	H11b	N-61°-E	円 形	1.35 × 1.30	43	外傾	平坦	人為			
3334	G11e	N-83°-W	楕円形	1.49 × 0.78	36	緩斜	平坦	不明			
3335	G11j	N-22°-E	方 形	1.05 × 0.99	26	緩斜	平坦	不明			
3345	H11a	N-82°-W	不 明	1.77 × (0.73)	23	緩斜	平坦	不明		本跡→SK3332	
3352	H11j	N-32°-E	楕円形	1.16 × 0.79	62	緩斜	皿状	人為		本跡→SK3353	
3362	G11i	N-30°-E	楕円形	1.20 × 0.95	30	外傾	平坦	人為			
3363	H11a	N-70°-W	隅丸長方形	1.41 × 1.15	11	緩斜	平坦	不明			
3384	H11h	N-5°-E	不 明	(1.00) × 0.96	23	緩斜	平坦	不明			
3390	I11b	—	不 明	0.85 × (0.77)	22	—	皿状	—			
3392	I11i	N-61°-W	円 形	1.17 × 1.02	43	緩斜	平坦	—		本跡→S1559	
3415	H10j	N-19°-W	不定形	1.17 × 1.15	117	外傾	平坦	人為			
3442	H10g	N-41°-E	方 形	0.63 × 0.53	32	垂直	平坦	不明			
3443	H10h	N-19°-E	楕円形	0.64 × 0.52	30	垂直	平坦	人為			
3449	H10h	N-88°-W	不定形	0.96 × 0.76	21	緩斜	平坦	不明			
3452	H10i	N-90°	楕円形	0.53 × 0.23	28	外傾	皿状	不明			
3453	H10i	N-7°-W	円 形	0.43 × 0.37	32	垂直	凹凸	不明			
3459	H10h	N-36°-E	円 形	1.58 × 1.38	—	—	—	—			

## 6 遺構外出土遺物

J区からは、直接遺構に伴わない土器や土製品、石器・石製品、古銭等が出土している。それらについて、実測図（第290～298図）及び観察表等で記述する。

### 第1群 縄文時代前期の土器（第295図 44・45）

44・45は、ともに深鉢形土器の胴部片である。44は半截竹管による平行沈線が施され、45は貝殻腹線による波状文が施されている。いずれも浮島式土器と考えられる。

### 第2群 縄文時代中期の土器（第295～297図 46～87）

#### 第1類 阿玉台式土器

46～49は、深鉢形土器の口縁部片である。46・49は、半截竹管による結節平行沈線が施されている。47・48・50は、隆帯に沿って結節平行沈線が施されている。いずれも阿玉台I b式と考えられる。

#### 第2類 中鉢式土器

51は、口縁部を無文としている。沈線間には、刺突文を組み合わせ、コの字状のような施文がなされている。51・52は隆帯上にキザミが施されている。

#### 第3類 勝板式土器

54は胴部片で、半截竹管による平行沈線、および刺突文が施されている。他の土器と違い、黒褐色を呈している。

#### 第4類 加曾利E式土器

55・56は、深鉢の口縁部片である。58・59は、隆帯により区画した後、区画内に沈線を施している。60～62は深鉢の胴部片、64・65は口縁部および把手である。いずれも加曾利E式土器である。

66～86は、加曾利EⅡ式土器である。66～75は深鉢の口縁部片である。66～69は、口縁部における隆帯の端部が、渦巻状となっている。76～86は深鉢の胴部片である。いずれも単節縄文RLを地文に、垂下する沈線間に磨り消しがみられる。

87は深鉢の口縁部片で、加曾利EⅢ式の特徴を持つ土器である。複節縄文を地文とし、口縁部は沈線をもなう隆帯により、楕円形に区画されている。胴部には、垂下する沈線間に磨り消しがみられる。

### 第3群 縄文時代後期の土器（第297・298図 88～96）

#### 第1類 堀之内式土器

88～90は深鉢の口縁部片、91～93は胴部片である。88は波状口縁で波頂部に刺突文が施されている。89は波状口縁を呈し、波頂部と直下に縦2単位の刺突文が施されている。90は、単節縄文RLを地文としている。91は単節縄文LRを地文に沈線が施され、92・93は条線文が施されている。

#### 第2類 加曾利B式土器

94は深鉢の口縁部片で、小波状を呈し、Rの無節縄文を地文に平行沈線が施されている。95は鉢の口縁部片、96は深鉢の胴部片である。

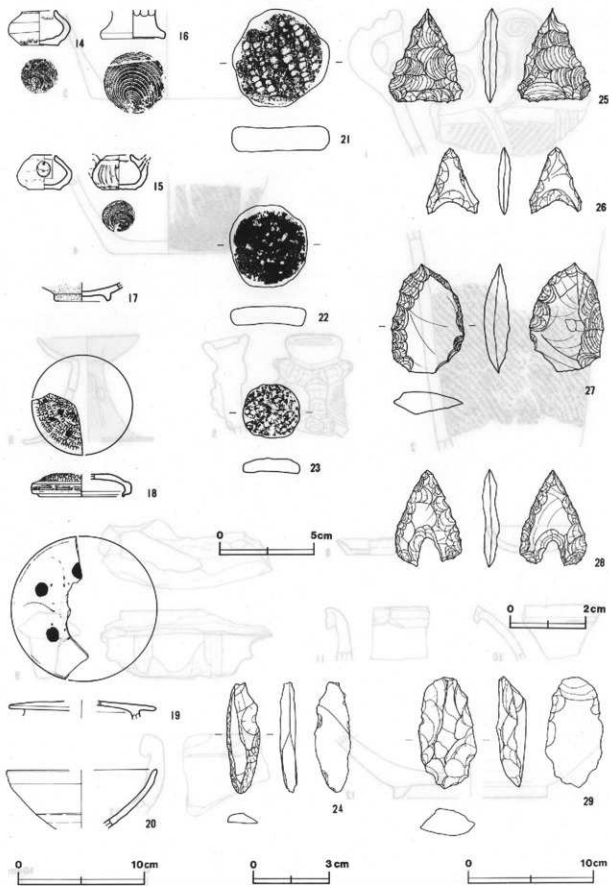
### 第4群 中世の土器（第298図 97・98）

97・98は、瓦質土器火鉢の体部片と思われる。97は上位に花文、下位に三つ巴の刻印が横位に帯状に施されている。98は、大小の花文の刻印が施されている。



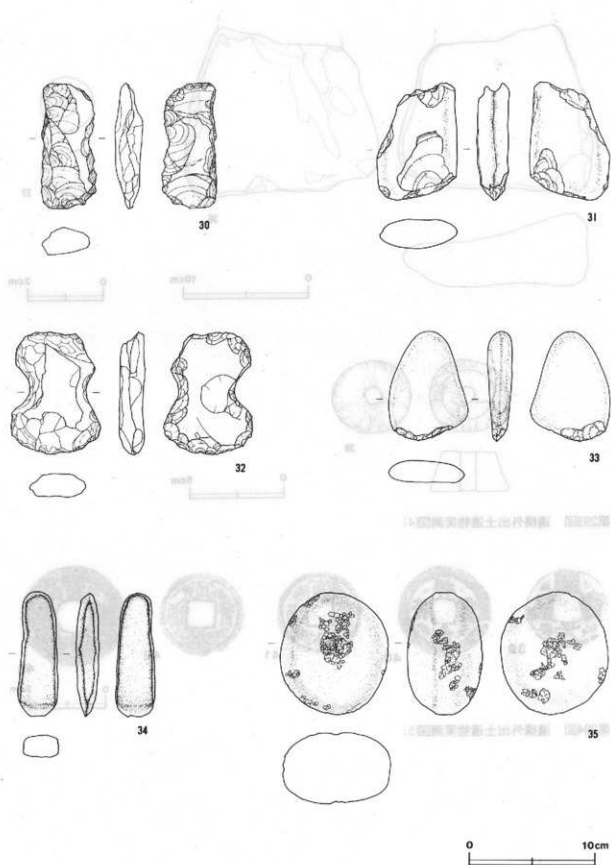
第290图 遺構外出土遺物実測図(1)

5. 國史実跡出土資料集 図105(原)

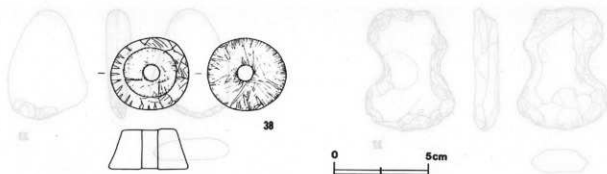
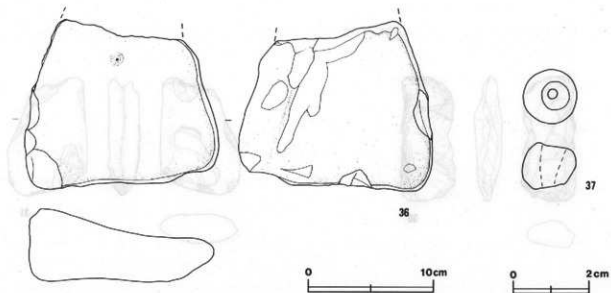


第291图 遺構外出土遺物実測图(2)

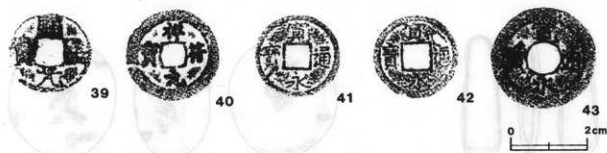
1: 昭和55年度出土遺物実測图 2: 昭和56年度



第292図 遺構外出土遺物実測図(3)



第293図 遺構外出土遺物実測図(4)



第294図 遺構外出土遺物実測図(5)

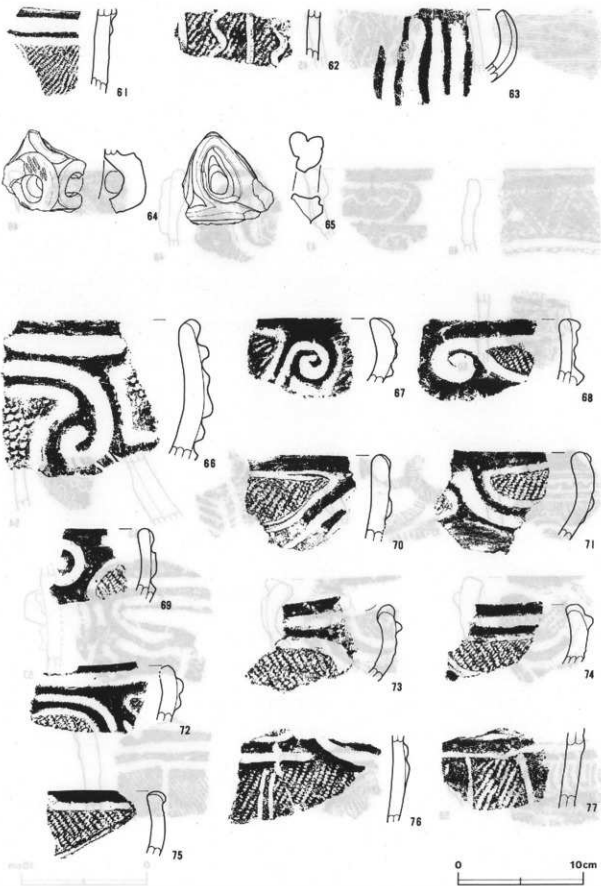






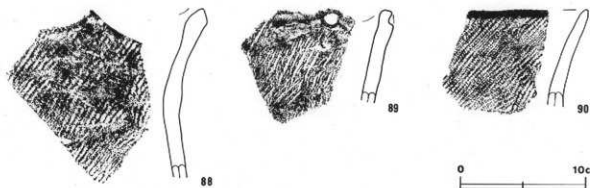
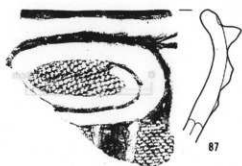
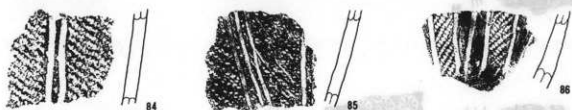
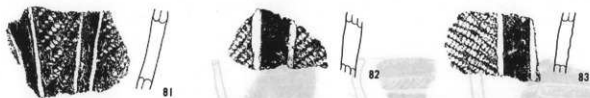
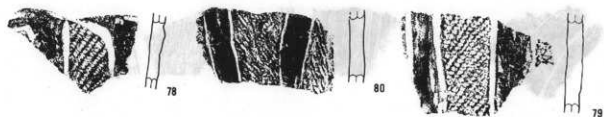
第295图 遺構外出土遺物実測図(6)

\* 国海実跡出土の遺物 図295

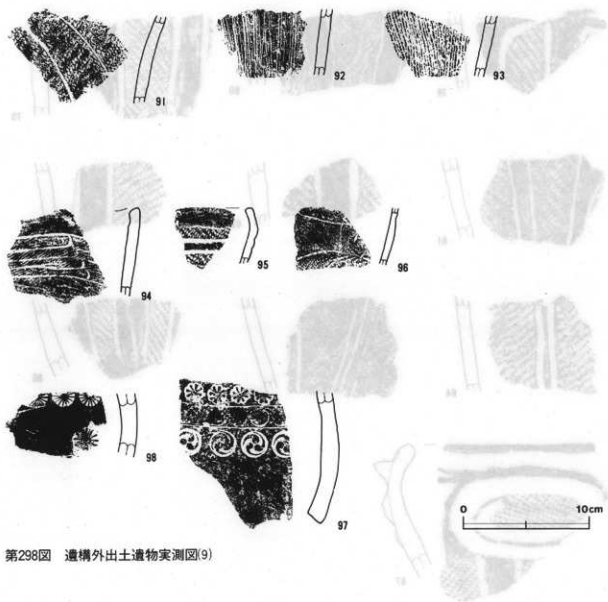


第296图 遺構外出土遺物実測図(7)

京都府京都市出土の遺物。昭和55年。



第297图 遺構外出土遺物実測図(8)



第298図 遺構外出土遺物実測図(9)



⑧ 国史館東京府立考古学研究所蔵

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 ビ 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第290図 1	深鉢 縄文土器	B(11.7)	胴部および把手部。把手部は沈線により、円形・渦巻き状に加飾される。口縁部は沈線により輪郭形に区画される。胴部は単筋縄文LRを地文とし、垂下する沈線間に磨り消しが施されている。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色、普通	P283, 5% 表採 加曽利EⅡ式
2	深鉢 縄文土器	B(17.8)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部には単筋縄文LRが施されている。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	P284, 20% 表採
3	深鉢 縄文土器	B(6.9) C 12.0	胴部一底部片。胴部は外傾しながら立ち上がる。胴部は無文である。底部平底。	砂粒・石英・スコリア 明赤褐色、普通	P285, 10% 表採
4	深鉢 縄文土器	B(6.5) C 9.0	胴部一底部片。胴部は外傾しながら立ち上がる。胴部には単筋縄文LRが施され、下位には磨り消しが見られる。	砂粒・石英・スコリア 明赤褐色、普通	P286, 5% 表採
5	深鉢 縄文土器	B(8.1)	口縁部および把手部。口縁部は波状を呈し、波頂部に円筒状の把手を持ち、直下にキザミを持つ隆帯が巡る。口縁部はRの単筋縄文を地文とし、縦位にキザミを持つ隆帯が貼付されている。	砂粒・石英・スコリア、にぶい赤褐色 普通	P287, P L93, 5% 表採 安行Ⅱ式

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第290図 6	器台 土師器	A 8.0 B 8.5 C(10.3)	胴部一部欠損。胴部はハの字状に開く。胴部に3孔。	胴部外面へラ磨き。器受部外面へラ削りの後、ナデ。外面赤彩。	長石・石英・スコリア 明赤褐色、普通	P288, P L91 75% G11a区、表採

図版番号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)			残存率	胎土・色調	器 形 ・ 手 法 の 特 徴	備 考
			A	B	C				
第290図 7	皿	土師質	7.3	2.2	—	90%	長石・雲母・スコリア、褐色	口縁部一部欠損。体部内・外面ナデ。丸底。口縁部内・外面にケール付着。	P298, P L91 表採
8	皿	土師質	5.1	1.4	3.3	70%	長石 にぶい褐色	口縁部一部欠損。体部内・外面口ロナデ。底部回転未切り。	P299, P L91 表採
9	火鉢	瓦質	—	(5.5)	—	5%	長石・雲母・スコリア、灰黄色	胴部片。内面へラ調整痕、外面ナデ。	P312 表採

図版番号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)				残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備 考
			A	B	C	D						
第290図 10	広口壺	陶器	—	(4.4)	—	—	5%	にぶい褐色 褐灰色	内・外面鉄釉	口縁部に沈線が巡る。	常滑系 中世	P306, P L91 表採
11	広口壺	陶器	—	(4.2)	—	—	5%	灰褐色 灰オリーブ色	内・外面鉄釉	口縁部に幅広の沈線が巡る。	常滑系 13-14C	P308, P L91 表採
12	片口鉢	陶器	—	(4.5)	—	[12.4]	5%	暗灰黄色 暗灰黄色	内・外面鉄釉	外面へラ削り後ナデ。内面ナデ。	瀬美系 13C以前	P305, P L91 表採
13	甕	陶器	—	(6.6)	—	—	5%	暗灰黄色 黒オリーブ色	内・外面鉄釉	口縁部片。内・外面ナデ。	常滑系 15C前半	P307, P L91 表採
第291図 14	合子	陶器	2.7	2.8	3.0	—	95%	灰白色 オリーブ黄色	体部内・外面鉄釉	底部回転未切り	不明 近世	P300, P L91 表採
15	水清	陶器	(4.6)	2.8	2.6	—	90%	灰黄色 灰オリーブ色	体部内・外面鉄釉	注口、把手部欠損。	不明 近世	P301, P L91 表採
16	花瓶	陶器	—	(2.3)	5.1	—	5%	にぶい褐色 灰黄褐色	内・外面鉄釉	底部回転未切り	不明 近世	P304, P L91 表採

図版番号	器形	器質	計測値 (cm)				残存率	胎土 色	絵付・種画	文様・特徴	産地・年代	備考
			A	B	C	D						
第291図 17	碗	陶器	—	(1.5)	—	(4.5)	10%	灰黄褐色 黒褐色	内・外面軸	見込みに貫入が 目立つ。	瀬戸・美濃系 18C中葉	P318, P.L91 表採
18	蓋	磁器	[6.8]	(1.8)	—	—	30%	灰黄色 灰白色	外面染付	外面、見込みに 貫入。	肥前系 18C以前	P303, P.L91 表採
19	壺	陶器	[11.7]	(1.5)	—	—	25%	淡黄褐色 淡黄色	灰軸	外面に植物文。 貫入。	笠間・益子 系?近世	P302, P.L91 表採
20	天目茶碗	陶器	[11.8]	(4.7)	—	—	15%	灰黄色 灰緑色	内・外面灰 軸	内・外面に貫 入。	瀬戸・美濃系	P309, P.L91 表採

図版番号	器種	計測値 (cm)		重量 (g)	残存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		径	高さ				
第291図21	土製円盤	5.3	1.3	42.0	—	表面に単筋縄文R.Lが施されている。	DP15, P.L92, 表採
22	土製円盤	4.3	1.1	23.2	—	表面に縄文が施されている。	DP16, P.L92, 表採
23	土製円盤	3.1	0.9	8.6	—	表面に単筋縄文R.Lが施されている。	DP17, P.L92, 表採

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第291図24	ナイフ形石器	4.4	1.3	0.5	3.30	頁岩	表採	Q16, P.L92, 旧石器
25	石鏃	2.5	2.0	0.4	1.34	黒曜石	表採	Q26, P.L92, 縄文
26	石鏃	1.8	1.4	0.3	0.53	チャート	表採	Q27, P.L92, 縄文
27	石鏃	3.0	1.9	0.7	3.10	チャート	表採	Q28, P.L92, 縄文, 未製品
28	石鏃	2.6	1.7	0.4	1.44	チャート	表採	Q38, P.L92, 縄文
29	打製石斧	9.0	4.4	2.2	96.00	凝灰岩	表採	Q15, P.L92, 縄文
第292図30	打製石斧	10.2	4.5	2.3	116.00	フォルンフェルス	表採	Q37, P.L92, 縄文
31	打製石斧	(9.5)	6.4	2.5	(224.00)	凝灰岩	表採	Q24, P.L92, 縄文
32	打製石斧	9.9	7.2	1.8	185.00	凝灰岩	表採	Q14, P.L92, 縄文
33	打製石斧	8.8	6.3	1.9	135.00	フォルンフェルス	表採	Q36, P.L92, 縄文
34	磨製石斧	4.9	1.6	0.9	9.60	凝灰岩	S1511	Q1, P.L92, 縄文
35	砥石	9.8	8.7	5.7	719.00	安山岩	表採	Q19, P.L92
36	板石	13.7	15.5	5.6	1560.00	砂岩	表採	Q25, P.L92
37	玉	1.4	1.5	1.3	3.26	ヒスイ	表採	Q30
38	紡錘車	径4.1	厚さ2.2	孔径0.9	51.00	滑石	表採	Q29, P.L92

図版番号	銭名	直径 (cm)	穿径 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	初铸年代 (西暦)	備考
第294図39	開元通寶	2.2	0.7×0.7	1.0	1.7	621年, 唐	M18
40	祥符元寶	2.5	0.6×0.6	1.0	2.3	1009年, 北宋	M19, P.L92
41	寛永通寶	2.3	0.6×0.6	1.0	2.4	1697年	M20, P.L92
42	寛永通寶	2.3	0.7×0.7	1.1	2.6	1697年	M21, P.L92
43	寛永通寶	2.8	0.8×0.8	1.1	5.4	1821年	M22, P.L92

## 7 まとめ

J区からは、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、平安時代、および中・近世にわたる遺構と遺物が検出された。ここでは、各時期の検出された遺構と出土遺物について概要を述べ、まとめる。

### 旧石器時代

J区からは、ナイフ形石器が1点表面採集されている。石質は頁岩である。他に旧石器時代の遺物は出土していないので詳細なことは言えないが、旧石器時代から人々の生活と何らかの関わりがあった場の可能性がある。

### 縄文時代

当調査区から、住居跡9軒が検出されている。時期が明確なのは、加曾利EⅠ式期1軒(第507号住居跡)、加曾利EⅡ式期3軒(第536・550・553号住居跡)である。その他、加曾利EⅡ～Ⅲ式期1軒(第503号住居跡)、中期3軒(第506・524・535号住居跡)である。検出された位置は、北部4軒、東部2軒、中央部3軒と分散しており、各住居跡ともルーム面からの掘り込みは浅い。屋内施設として、炉はすべての住居跡に付設されている。第503号住居跡は、2個体以上の深鉢の胴部片や口縁部片を巡らした土器片囲い炉、第535・536号住居跡は深鉢の上半部を埋設する土器埋設炉である。それ以外は、床面を掘りくぼめた地床炉である。出土遺物は、加曾利EⅠ・EⅡ式土器が圧倒的に多く、加曾利EⅢ式土器は少ない。第536号住居跡の覆土から器台が出土している。

土坑は30基検出され、その中で時期が明確なのは、加曾利EⅠ式期12基、加曾利EⅡ式期5基、加曾利EⅢ式期2基、その他、中期3基である。検出された位置は、北部・東部・中央部で住居跡の分布と類似している。袋状土坑は、11基検出した。時期が明確なのは、加曾利EⅠ式期7基(第2986・2994・2997・3001・3130・3237・3273号土坑)、加曾利EⅡ式期2基(第3248・3323号土坑)、その他、中期2基(第3135・3250号土坑)である。平面形は円形あるいは楕円形で、底面中央部や壁際にピットを有するものは4基である。特に、第3323号土坑は規模が大きく、底面中央部に1か所、壁際に3か所のピットを有する。特徴的な遺物としては、第3326号土坑の覆土中から出土した有孔銅付土器をあげることができる。第3389号土坑からヤマトシジミが出土しており、地点貝塚となっている。当時の生活を知る上で貴重な資料になると思われる。

### 古墳時代

J区の中心となる時期で、住居跡28軒が検出されている。ここでは、出土遺物により前期と後期に分け、各期ごとの集落の変遷について検討することにする。

#### ○前期

本期にあたる住居跡は、第513・519～521・538・540・545・546・548・549・551・552・554・555・560・564号住居跡の16軒で、時期は4世紀末と考えられる。これらの住居跡は、いずれも調査区中央部から南部にかけて検出されている。住居跡の主軸方向は、N-43°-W-N-60°-Eの広い範囲になっている。平面形は、隅丸方形または長方形で、床面積30㎡以上の大形住居跡が5軒、20㎡未満の小形の住居跡<sup>1)</sup>が9軒で、最小は、5㎡であった。また、炉が付設されている住居跡が6軒で、付設されていない住居跡の方が多い。柱穴は、9軒の住居跡で確認されなかった。小形の第548号住居跡は、大形の第552号住居跡の東側、約4mに位置する。

両住居跡は、ほぼ同じ主軸方向を示し、遺物も同時性が認められる。また、第548号住居跡は、第552号住居跡のような炉跡や床面の踏み跡、しっかりとした柱穴等が確認できないことから、倉庫的な役割を果たしていた可能性が考えられる。

出土遺物には、土師器の坏・高坏・登台・埴・壺・甕などがある。第519号住居跡からは、口縁部に棒状浮文が貼付された装飾壺が出土している。その他に、第520号住居跡からは、赤彩された中実柱状の高坏が出土している。

#### ○後期

本期にあたる住居跡は、第505・511・514・525-527・531・532・537・539・544・547号住居跡の12軒で、いずれも調査区北部から中央部にかけて検出されている。住居跡主軸方向は、1軒を除いて、 $N-19^{\circ}\sim 48^{\circ}-W$ の範囲にあり、規則性が認められる。平面形は、方形あるいは隅丸長方形がほとんどで、規模は第539号住居跡の69㎡が最大で、30㎡以上の大形住居跡が67%を占める。

出土遺物には、土師器の坏・壺・甕、須恵器の高坏、土製品では勾玉・管状土鏝などがある。土師器坏は、67%に黒色処理が施されている。これらの土師器は、ほぼ同時期のものと見られ、第514号住居跡の床面からは、TK-209窯式と同時期と考えられる須恵器高坏が出土している。このことから集落は、6世紀末葉から7世紀初頭に存在していたと考えられる。また、第505・514・525・531・532・544号住居跡の甕右袖部付近からは、坏・壺・甕等がまとまって出土しており、住居廃絶時に放棄されたことが考えられる。

#### 平安時代

調査区全域から21軒の住居跡が検出されている。時期が明確なのは、9世紀後半の第504・509号住居跡、9世紀後半-10世紀前半の第510・517・563号住居跡、10世紀前半の第512・516・518・543・561号住居跡、10世紀中葉の第522・559号住居跡である。住居跡の主軸方向は、 $N-14^{\circ}-W$ ～ $N-95^{\circ}-E$ の範囲で、半数以上が東寄りに主軸を持っている。特に、 $N-86^{\circ}\sim 95^{\circ}-E$ の範囲に8軒の住居跡が主軸を持っていることから、若干の規則性が認められる。平面形は方形がやや多いものの、隅丸方形や長方形と変化に富んでいる。規模は、第534号住居跡の20㎡が最大で、古墳時代後期の住居跡に比べ小形化が目立つ。また、9世紀後半から住居の東部やコーナー部に竈を持つ住居跡が現れる。

出土遺物は、土師器の坏・高台付坏・高台付碗・壺などで、須恵器は見られない。第510号住居跡からは、体部に「得」と墨書された高台付坏が出土している。

#### 中世

中世の墓域と考えられる遺構が、三つのまとまり（第4-6遺構群）として確認された。

#### ○第4遺構群

調査区北部の南に開く谷津頭に位置し、土坑・地下式墳・火葬土坑・粘土貼り土坑・井戸・溝・ビット群から構成されている。石塔や板碑は出土していない。墓域は、斜面部に掘られた4条の溝によって区画され、溝に沿って遺構が密集している。

土坑を見てみると、平面形は、方形や長方形、楕円形とバラエティーに富み、規模も小形から大形まで様々である。第3008・3025・3106号土坑からは、屈葬で北枕西向きの頭位であると考えられる人骨が出土しており、墓域と確認できた。また、第3008号土坑からは、人骨の胸部にあたるどころから、銅銭9枚と漆器が出土している。銅銭の種類は、6枚が北宋銭で、「永樂通寶」が1枚含まれ、「寛永通寶」が全く含まれないことから、



この土坑は15世紀以降から17世紀の間に成立した可能性が高い。

地下式墳は5基確認され、3基は溝を掘り込み、2基は溝の内側に造られている。第33号地下式墳の底面からは、炭化したワラ状のものとモミガラ状のものが出土している。全体的に遺物は少なく、土師質土器の内耳鍋、かわらけが数点出土しているのみである。地下式墳には倉庫という説もあるが、ここでは、埋葬にかかわる施設と考えられる。

火葬土坑は、3基とも底面に火熱を受け、覆土の最下部には、多量の炭化物を含んだ層が堆積しているのが特徴である。

#### ○ 第5遺構群

調査区西部の平坦地に位置し、方形堅穴状遺構・土坑・地下式墳・火葬土坑・井戸・溝から構成されている。石塔や板碑は出土していない。

方形堅穴状遺構は、土坑群を囲むように4基確認され、平面形は長方形あるいは隅丸長方形で、規模は4㎡前後と小形である。4基とも柱穴と思われるピットを2か所持ち、第17・20号方形堅穴状遺構は、確認面から床面に到るまでスロープ状になっており、床面からは灰状の遺物が出土している。また、第22号方形堅穴状遺構からは、焼土と炭化材が出土している。

土坑は、第4遺構群と同様に、形状・規模は多種・多様であったが、人骨は検出されなかった。

火葬土坑は7基確認されている。第3157号土坑を除いて、6基は主軸方向がN-75°-90°-Wの範囲で、開口部が西側、燃焼部が東側に構築されている。また、いずれからも骨片、焼土、炭化物が共通して出土している。

#### ○ 第6遺構群

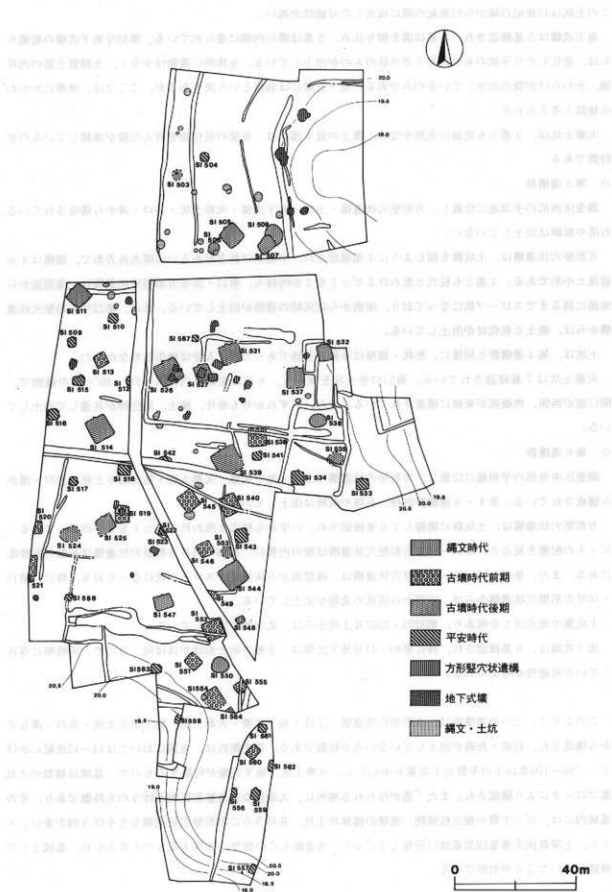
調査区中央部の平坦地に位置し、方形堅穴状遺構・土坑・地下式墳・火葬土坑・粘土貼り土坑・井戸・溝から構成されている。第4・5遺構群同様、石塔や板碑は出土していない。

方形堅穴状遺構は、土坑群に隣接して6基確認され、いずれも柱穴と思われるピットを2か所持っている。ピットの配置を見ると、第14-16号方形堅穴状遺構は壁の内側に、第18・21号方形堅穴状遺構は長軸方向壁際にある。また、第15・16・18・21号堅穴状遺構は、確認面から床面までスロープ状になっており、特に、第15・16号方形堅穴状遺構からは、床面から灰状の遺物が出土している。

土坑集中地点は2か所あり、第3221・3267号土坑からは、北宋銭が出土している。

地下式墳は、6基確認され、特に第40・41号地下式墳は、主軸方向と形状がほぼ同一なので、同時期に存在していた可能性が考えられる。

このように、三つの遺構群は、方形堅穴状遺構・土坑・地下式墳・火葬土坑・粘土貼り土坑・井戸・溝などから構成され、石塔・板碑が出土していない点の特徴である。菅生衛氏は、東国においては14-15世紀にかけて、「50-100基以上の多数の土坑墓を中心とし、火葬土坑、地下式墳が付随するもので、墓域は複数の土坑墓ブロックにより構成され」また「墓が作られる場所に、大規模な台地整形区画が伴うのも特徴であり、その墓域内には、ピット群や獨立柱建物、池状の播鉢状土坑、井戸さらに方形堅穴状遺構などを伴う例が多い」<sup>(2)</sup>とし、上層農民主導集団型墓域に分類している<sup>(2)</sup>。当遺跡もこの類型に該当するものと考えられ、墓域として機能していたことが判断できる。



第299図 集落変遷図

註

- (1) 住居跡の大・中・小は、30㎡以上を大形、30㎡未満20㎡までを中形、20㎡未満を小形とした。
- (2) 笹生 衛 「東国における中世墓地の諸相―房総の事例を中心に―」『研究紀要16―20周年記念論集』  
千葉県文化財センター 1995年1月

参考文献

- ・茨城県教育財団「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画事業地内埋蔵文化財調査報告書1 西ノ脇遺跡 前田村遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第87集』1994年3月
- ・茨城県教育財団「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画事業地内埋蔵文化財調査報告書2 前田村遺跡C・D・E区」『茨城県教育財団文化財調査報告第116集』1997年3月
- ・茨城県教育財団「(仮称)葛城地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書I」『茨城県教育財団文化財調査報告第121集』1997年3月
- ・茨城県教育財団「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画事業地内埋蔵文化財調査報告書3 高野台遺跡 前田村遺跡D・F区」『茨城県教育財団文化財調査報告第127集』1998年3月
- ・中・近世研究班「中世の堅穴遺構について」『研究ノート 創刊号』茨城県教育財団 1992年7月

茨城県教育財団文化財調査報告第147集

**伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 5**

**前田村遺跡 J・K区**

平成11 (1999) 年 3月16日印刷

平成11 (1999) 年 3月19日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社高野高速印刷  
水戸市東原2-8-1  
TEL 029-231-0989

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第147集

前田村遺跡 J・K区

前田村遺跡J区全体図

